



三沢南崎遺跡3

—小郡市三沢字南崎所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第242集



2009

小郡市教育委員会



三沢南崎遺跡3

小郡市文化財調査報告書第242集

2009

小郡市教育委員会

三沢南崎遺跡3

一小郡市三沢字南崎所在遺跡の調査報告一

小郡市文化財調査報告書第242集

2009

小郡市教育委員会





序

福岡県の中部に位置する小郡市は、九州自動車道と大分自動車道の交差する、九州内でも有数の交通の要衝であり、その地理的条件を活かして近年めざましい発展を遂げてきました。モータリゼーション化がますます進行する現在、交通網の整備は急務の課題であり、市内各地ではより安全で便利な交通・流通のために、道路の整備事業を進めています。

今回ここに報告いたします三沢南崎遺跡は、県道本郷基山線道路改良工事事業に伴って発掘調査を行ないました。ここでは、今から約1700年前の集落跡が発見され、弥生時代から古墳時代へと社会構造が大きく変化する時代に生きた人びとの様子がうかがえる資料が多数出土しています。遺跡そのものは、調査終了後に工事によって破壊されてしまっています。しかし、この報告を行なうことで、日常生活に使用する道路の下にこのような貴重な資料が眠っていたのだということを、広くみなさまに知りたいだけるよう、願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたり地元三沢区のみなさま、福岡県久留米土木事務所及び小郡市役所都市建設部道路建設課には多大なご協力をいただきありがとうございました。記して感謝申し上げる次第です。

平成21年3月13日

小郡市教育委員会
教育長 清武 郁

例 言

1. 本書は小郡市三沢字南崎に所在する埋蔵文化財包蔵地 三沢南崎遺跡地内に計画された「都市計画道路本郷基山線 街路緊急地方道路整備事業」に伴う発掘調査報告書である。本調査は福岡県久留米土木事務所から委託を受け、小郡市教育委員会文化財課が実施した。

調査参加者（敬称略、五十音順）

岩原春代 矢島信雄 小川真一 小野美代子 黒瀬明 黒瀬シゲ子 森原美恵子 稲文子 執行弘子 友田龍之介 田中安美子 田中賛二

田中フブ子 西脇代 原野照子 福田良子 福田康博 藤田ツヤ子 松田徳代 松木康弘 宮崎隆明 森下秀寿治 横田徹江 山内鉄男

山本朝子 山本睦子（以上小郡市在住）

井上やす子 古賀満子（以上筑紫野市在住）

有村栄 久野哲 中原麻英 杉本義徳 潤田樹夫（以上三井都大刀洗町在住）

平田和男 村山弘（以上佐賀県鳥栖市在住）

2. 本書に掲載した個別遺物図面は、調査担当者及び原野・西・横田・山本が作成した。図は調査担当者が行なった。遺構配図は作成は株式会社埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に依頼した。

3. 本書に掲載した個別構造写真は調査担当者が撮影し、調査区全般写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。

4. 遺物の復元・復元には土屋千美・斎藤知晶子・角田朋子・佐々木千子・田中悠美子・田剛毅子・尾野千代・白石八千代の協力を得た。

5. 遺物実測は土屋の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に、石器を国際軒業株式会社に委託した。その他は調査担当者と馬田妙子が行なった。図は馬田妙子、熊本啓子、吉田あや子が行なった。

6. 遺物写真撮影は有限会社文化財写真工房に委託した。

7. 本書の執筆・編集は調査担当者が行なった。

8. 本調査に関する出土遺物・図面・写真・カラースライド等については、全て小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は世界地図座標を基準としている。

2. 本書で用いた標高は東京平均海面（T.P.）を基準としている。

3. 本書の遺構配図においては下記の遺構略号を用いている。

聖穴代層：SC

溝状構造：SD

土壤墓：SR

土坑：SK

ピット：SP

その他・不明遺構：SX





本文目次

序　例言　凡例	
I. 調査の経緯と経過	1
(1) 調査の経緯	
(2) 調査の組織	
(3) 調査の経過	
II. 位置と環境	2
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III. I区の遺構・遺物	8
(1) 調査の概要	
(2) 遺構と遺物	
IV. II区の遺構・遺物	29
(1) 調査の概要	
(2) 遺構と遺物	
V. III区の遺構・遺物	50
(1) 調査の概要	
(2) 遺構と遺物	
VI. 調査成果のまとめと検討	159
(1) 三沢南崎遺跡における集落の変遷と住居の形状	
(2) 三沢南崎遺跡の環濠	
(3) 出土遺物の様相	
遺物観察表	
写真図版	
抄録　奥付	



挿図目次

第1図 小郡市地形図	2	第43図 25号住居 (S=1/40)	45
第2図 調査区位置図 (S=1/2500)	2	第44図 26号住居 (S=1/40)	45
第3図 周辺道路分布図 (S=1/50000)	4	第45図 25号住居出土土器 (S=1/4,1/5)	46
第4図 調査区全体図 (S=1/250)	5・6	第46図 10・11・13号土坑 (S=1/40)	48
第5図 I区遺構配置図 (S=1/150)	7	第47図 14号土坑	48
第6図 1号住居 (S=1/40)	8	第48図 III区遺構配置図 (S=1/250)	49
第7図 2号住居 (S=1/40)	9	第49図 19号住居 (S=1/40)	50
第8図 3号住居 (S=1/40)	9	第50図 27号住居 (S=1/60)	51
第9図 4号住居 (S=1/60)	11	第51図 25・27・29号住居出土土器 (S=1/4)	52
第10図 5号住居 (S=1/40)	12	第52図 28号住居 (S=1/60)	53・54
第11図 6号住居 (S=1/40)	13	第53図 23・24・27号住居出土石器・鉄器 (S=1/2,1/3)	55
第12図 7号住居 (S=1/60)	14	第54図 28号住居出土土器 (S=1/3,1/4)	56
第13図 1~5・7号住居出土土器 (S=1/4)	15	第55図 28号住居出土土器 (S=1/2,1/3,1/4)	57
第14図 1・2・3・5号住居出土石器 (S=1/2,1/3,1/4)	16	第56図 29号住居 (S=1/40)	59
第15図 8号住居 (S=1/40)	17	第57図 30号住居 (S=1/40)	60・61
第16図 9号住居 (S=1/40)	17	第58図 30号住居出土土器① (S=1/4)	62
第17図 10号住居 (S=1/60)	18	第59図 30号住居出土土器② (S=1/4)	63
第18図 7・8・10・号住居出土土器・石器 (S=1/2,1/3)	19	第60図 26・28・29・30・31号住居出土土器・石 器・鉄器 (S=1/1,1/2,1/3)	64
第19図 11号住居 (S=1/40)	19	第61図 31号住居 (S=1/60)	65
第20図 10・11号住居出土土器 (S=1/4)	20	第62図 32号住居 (S=1/60)	66
第21図 12号住居 (S=1/60)	21	第63図 32号住居出土石器・鉄器 (S=1/2,1/3,1/4)	67
第22図 13号住居 (S=1/40)	22	第64図 32号住居出土土器① (S=1/4)	68
第23図 12・13号住居出土土器 (S=1/4)	23	第65図 32号住居出土土器② (S=1/4)	69
第24図 1~5号土坑 (S=1/40,1/60)	26	第66図 33号住居 (S=1/60)	70
第25図 6~9・12号土坑 (S=1/40)	27	第67図 34号住居 (S=1/60)	71
第26図 II区遺構配置図 (S=1/150)	28	第68図 31・33・34号住居出土土器 (S=1/4)	72
第27図 14号住居 (S=1/40)	30	第69図 35号住居 (S=1/40)	73
第28図 14号住居出土土器① (S=1/4)	31	第70図 35号住居出土土器① (S=1/4)	74
第29図 14号住居出土土器② (S=1/4,1/5)	32	第71図 35号住居出土土器② (S=1/4)	75
第30図 15号住居 (S=1/40)	33	第72図 35号住居出土土器③ (S=1/4)	76
第31図 16号住居 (S=1/40)	33	第73図 34・35号住居出土石器 (S=1/2,1/3)	77
第32図 17号住居 (S=1/60)	35	第74図 36号住居 (S=1/40)	79
第33図 14・15・17号住居出土土器 (S=1/4)	36	第75図 37号住居 (S=1/40)	80
第34図 13・14・17号住居出土土器・石器 (S=1/2,1/3,1/4)	37	第76図 38号住居 (S=1/60)	81
第35図 17・20・22号住居出土石器・鉄器 (S=1/2,1/3,1/4,1/8)	38	第77図 39号住居 (S=1/40)	82
第36図 18号住居 (S=1/40)	39	第78図 36・37・38・39号住居出土土器・石器 (S=1/2,1/3,1/4)	82
第37図 20号住居 (S=1/60)	39	第79図 36・38・39号住居出土土器 (S=1/4)	83
第38図 20・22号住居出土土器 (S=1/4,1/5)	40	第80図 40号住居 (S=1/60)	84
第39図 20号住居出土土器 (S=1/4,1/5,1/8)	41	第81図 40号住居出土石器 (S=1/3)	85
第40図 23号住居 (S=1/40)	42	第82図 40・42・43号出土土器 (S=1/4)	86
第41図 24号住居 (S=1/40)	43	第83図 41号住居 (S=1/60)	87
第42図 20・23・24号住居出土土器 (S=1/4)	44		

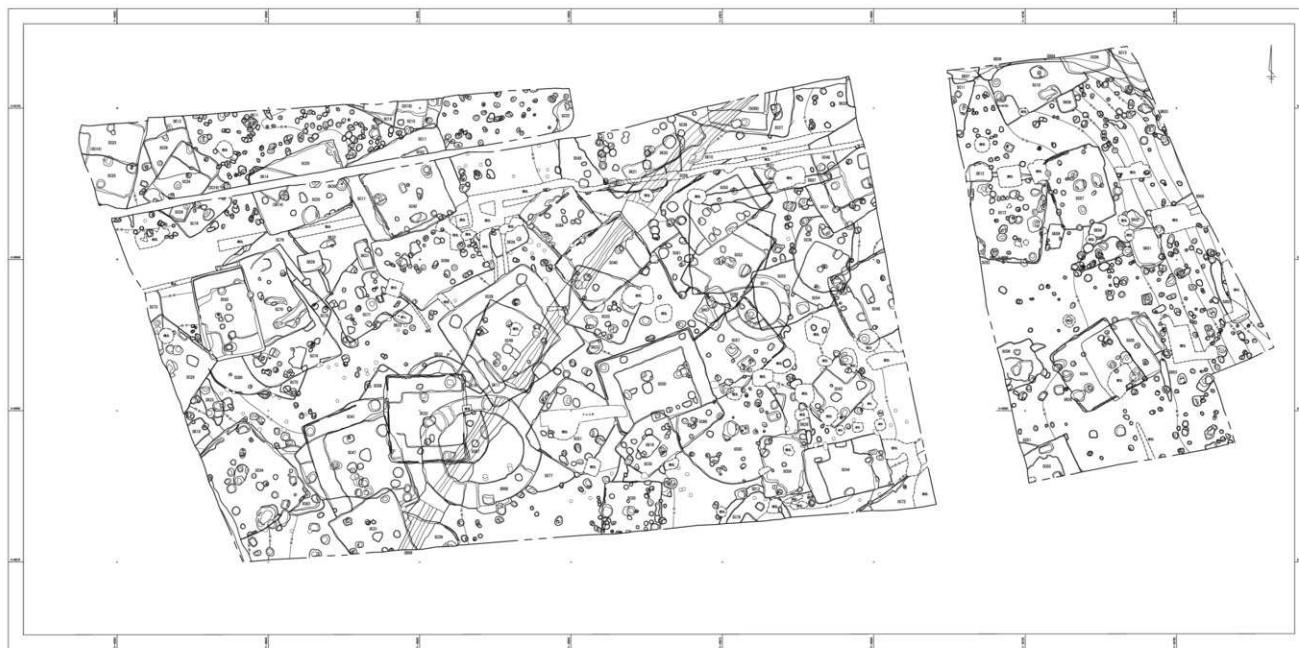
第84図	41号住居出土土器 (S=1/4)	88
第85図	42号住居 (S=1/60)	89
第86図	43号住居 (S=1/40)	90
第87図	41・42・43号住居出土石器 (S=1/3)	90
第88図	44号住居 (S=1/60)	91
第89図	44号住居出土土器① (S=1/4)	92
第90図	44号住居出土土器② (S=1/4,1/5)	93
第91図	44号住居出土土器③ (S=1/4)	94
第92図	44号住居出土土器④ (S=1/4,1/5,1/8)	95
第93図	44号住居出土土器⑤ (S=1/4)	96
第94図	41・43・44号住居出土製品・石器・鉄器 (S=1/2,1/3)	97
第95図	44・45号住居出土土器 (S=1/4,1/5)	98
第96図	45号住居 (S=1/60)	99
第97図	46号住居 (S=1/60)	99
第98図	47号住居 (S=1/60)	101
第99図	48号住居 (S=1/60)	102
第100図	49号住居 (S=1/60)	103
第101図	46・47・48・49・74号住居出土土器 (S=1/4,1/8)	104
第102図	46・47・48・49号住居出土石器・鉄器 (S=1/2,1/3,1/4)	105
第103図	50号住居 (S=1/60)	106
第104図	50号住居出土土器 (S=1/4)	107
第105図	51号住居 (S=1/60)	108
第106図	52号住居 (S=1/60)	109
第107図	50・51・52号住居出土石器・鉄器 (S=1/2)	109
第108図	53号住居 (S=1/60)	110
第109図	50・51・52・53号住居出土土器 (S=1/4)	111
第110図	54号住居 (S=1/40)	112
第111図	55号住居 (S=1/60)	113
第112図	56号住居 (S=1/60)	114
第113図	54・55・56号住居出土土器 (S=1/4)	115
第114図	57号住居 (S=1/60)	116
第115図	58号住居 (S=1/40)	116
第116図	57号住居出土土器 (S=1/4)	117
第117図	54・55・56・57号住居出土石器 (S=1/1,1/2,1/3,1/4)	118
第118図	59号住居 (S=1/40)	119
第119図	60号住居 (S=1/40)	120
第120図	61号住居 (S=1/40)	120
第121図	62号住居 (S=1/60)	122
第122図	62号住居出土土器 (S=1/4)	123
第123図	63・64号住居出土土器 (S=1/4)	124
第124図	63号住居 (S=1/40)	124
第125図	64号住居 (S=1/40)	125
第126図	65号住居 (S=1/60)	126
第127図	60・61・62・65号住居出土石器 (S=1/2,1/3,1/4)	127
第128図	66号住居 (S=1/40)	128
第129図	67号住居 (S=1/40)	129
第130図	68号住居 (S=1/60)	130
第131図	69号住居 (S=1/60)	132
第132図	67・68・69号住居出土土器 (S=1/4)	133
第133図	70号住居 (S=1/60)	134
第134図	71号住居 (S=1/60)	135
第135図	66・68・69・71・76号住居出土土器・石 器・鉄器 (S=1/1,1/2,1/3,1/4)	136
第136図	72号住居 (S=1/40)	137
第137図	73号住居 (S=1/40)	138
第138図	70・71・73号住居出土土器 (S=1/4,1/5)	138
第139図	74号住居 (S=1/60)	139
第140図	75・76・77号住居 (S=1/40,60)	140
第141図	74・75・76号住居出土土器 (S=1,2,1/4)	141
第142図	78・79・80号住居 (S=1/40)	143
第143図	15~19号土坑 (S=1/40)	144
第144図	20~25号土坑 (S=1/40)	146
第145図	26~32号土坑 (S=1/40)	148
第146図	土坑・土塁出土土器・石器 (S=1,3,1/4)	150
第147図	1号土塙墓・環濠土層 (S=1/40,1/60)	151
第148図	8号溝 (S=1/60)	153
第149図	10・11・12号溝 (S=1/60)	155
第150図	環濠・溝状遺構出土土器・石器・鉄器 (S=1/2,1/3,1/4)	156
第151図	ピット出土土器・土製品 (S=1,2,1/4)	157
第152図	環濠復元図 (S=1/600)	158
第153図	集落変遷図 (1) (S=1/1000,300)	161
第154図	集落変遷図 (2) (S=1/1000,300)	162
第155図	三沢廻原遺跡の住居分布と乙限天道町遺跡 の住居の変化	166
第156図	出土土器変遷案①	171
第157図	出土土器変遷案②	172



図版目次

- 図版1 三沢南崎遺跡2・3・4全景（合成写真、写真上方が北）
- 図版2
- ①三沢南崎遺跡3 Ⅰ区全景（写真上方が東）
②調査区及び周辺風景（南西から）
- 図版3
- ①1号住居 遺物出土状況（南西から）
②1・3号住居 完掘状況（南西から）
③2号住居屋内土坑 遺物出土状況（東から）
④4号住居 遺物出土状況（南から）
⑤5号住居 贼床検出状況（南から）
⑥5号住居 遺物出土状況（西から）
⑦5号住居 完掘状況（北から）
⑧6号住居 檢出状況（北から）
- 図版4
- ⑦7号住居 遺物出土状況（南から）
⑦7号住居 完掘状況（南から）
③8号住居 完掘状況（東から）
④9号住居 贊床検出状況（南から）
⑤10号住居 贊床検出状況（北から）
⑥11号住居 完掘状況（南から）
⑦12号住居屋内土坑 遺物出土状況（南から）
⑧12号住居 完掘状況（南東から）
- 図版5
- ①13号住居 遺物出土・完掘状況（北から）
②1号土坑 完掘状況（東から）
③2号土坑 完掘状況（北から）
④3号土坑 完掘状況（南から）
⑤4号土坑 完掘状況（北から）
⑥5号土坑 遺物出土・完掘状況（南西から）
- 図版6
- ①6号土坑 完掘状況（南から）
②7号土坑 完掘状況（南から）
③8号土坑 完掘状況（南東から）
④9号土坑 完掘状況（南東から）
⑤三沢南崎遺跡3 Ⅲ区全景（写真上方が東）
- 図版7
- ①15号住居 遺物出土・完掘状況（南から）
②16号住居 土層・完掘状況（南から）
③Ⅲ区17号住居 完掘状況（南東から）
④Ⅲ区17号住居 贊床検出状況（北東から）
⑤Ⅲ区20号住居 完掘状況（南から）
⑥Ⅲ区20号住居 贊床検出状況（北西から）
⑦Ⅲ区14号土坑 完掘状況（北から）
⑧Ⅲ区14号住居 完掘状況（南から）
- 図版8
- ①23号住居 遺物出土状況（北西から）
②25号住居 遺物出土状況（南西から）
③14・23・25号住居 完掘状況（西から）
④24号住居 完掘状況（南西から）
⑤26号住居 完掘状況（南東から）
⑥10号土坑 土層断面（南から）
⑦11号土坑 完掘状況（北東から）
⑧Ⅲ区調査風景（東から）
- 図版9 三沢南崎遺跡3 Ⅲ区全景（写真上方が北）
- 図版10
- ①27号住居 完掘状況（北西から）
- ②19号住居 完掘状況（南から）
③25号住居 ベード状遺構検出状況（南から）
④25号住居屋内土坑 遺物出土状況（北東から）
⑤25号住居 贊床検出状況（南東から）
⑥29号住居 完掘状況（北西から）
⑦30号住居 遺物出土状況（南から）
- 図版11
- ①30号住居 烟土・炭化物検出状況（南から）
②30号住居 完掘状況（南から）
③31号住居 贊床検出状況（東から）
④32号住居屋内土坑 遺物出土状況（北から）
⑤32号住居 贊床検出状況（東から）
⑥33号住居 完掘状況（西から）
⑦34号住居 贊床検出状況（北西から）
⑧35号住居 遺物出土状況（南東から）
- 図版12
- ①35号住居 贊床検出状況（北から）
②36号住居 完掘状況（東から）
③37号住居 贊床検出状況（南東から）
④38号住居 贊床検出状況（北西から）
⑤39号住居 贊床検出状況（南西から）
⑥40号住居 贊床検出状況（東から）
⑦41号住居内ビット 遺物出土状況（南から）
⑧41号住居 贊床検出状況（南から）
- 図版13
- ①42号住居 贊床検出状況（北から）
②43号住居 遺物出土状況（西から）
③43号住居 完掘状況（北西から）
④44号住居 遺物出土状況（南西から）
⑤44号住居 贊床検出状況（南から）
⑥45号住居 遺物出土状況（南西から）
⑦45号住居 贊床検出状況（北から）
⑧46号住居 遺物出土状況（1）（西から）
- 図版14
- ①46号住居 遺物出土状況（2）（東から）
②46号住居 完掘状況（東から）
③47号住居 完掘状況（東から）
④48号住居 遺物出土状況（西から）
⑤48号住居 贊床検出状況（東から）
⑥49号住居 完掘状況（北西から）
⑦50号住居内ビット 遺物出土状況（南から）
⑧50号住居 贊床検出状況（南から）
- 図版15
- ①51号住居 贊床検出状況（北東から）
②52号住居 贊床検出状況（北から）
③53号住居 贊床検出状況（東から）
④54号住居 贊床検出状況（東から）
⑤55号住居 贊床検出状況（南から）
⑥56号住居 贊床検出状況（北から）
⑦57号住居 遺物出土状況（西から）
⑧57号住居 完掘状況（西から）
- 図版16
- ①58号住居 完掘状況（南東から）
②59号住居 完掘状況（南から）
③60号住居 完掘状況（北から）
④61号住居 贊床検出状況（東から）
⑤62号住居 贊床検出状況（西から）

⑥63号住居	完掘状況 (西から)	図版28	出土土器⑥
⑦64号住居	完掘状況 (北から)	図版29	出土土器⑦
⑧65号住居	完掘状況 (北西から)	図版30	出土土器⑧
図版17		図版31	出土土器⑨
①66号住居	完掘状況 (北から)	図版32	出土土器⑩
②67号住居	完掘状況 (北西から)	図版33	出土土器⑪
③68号住居	貼床被出状況 (北西から)	図版34	
④69号住居	貼床被出状況 (北から)	①出土土器 (ミニチュア1)	
⑤70号住居	完掘状況 (北から)	②出土土器 (ミニチュア2)	
⑥71号住居	完掘状況 (北から)	図版35	
⑦72号住居	完掘状況 (南から)	①出土土器	
⑧73号住居	完掘状況 (北から)	②出土土製品	
図版18		図版36	
①74号住居	遺物出土状況 (東から)	①出土鉄器 (鉄鍔)	
②74号住居	完掘状況 (北から)	②出土鉄器 (摘鍔)	
③75号住居	完掘状況 (東北から)	図版37	
④76号住居	完掘状況 (北から)	①出土鉄器 (ヤリガンナ1)	
⑤77号住居	完掘状況 (北から)	②出土鉄器 (ヤリガンナ2)	
⑥78号住居	完掘状況 (南から)	図版38	
⑦16号土坑	完掘状況 (西から)	①出土鉄器	
⑧17号土坑	完掘状況 (南西から)	②出土石器 (砥石1)	
図版19		図版39	
①18号土坑	完掘状況 (南から)	①出土石器 (砥石2)	
②19号土坑	完掘状況 (西から)	②出土石器 (砥石3)	
③20号土坑	遺物出土状況 (北西から)	図版40	
④20号土坑	完掘状況 (北から)	①出土石器 (砥石4)	
⑤21号土坑	完掘状況 (北から)	②出土玉類	
⑥22号土坑	完掘状況 (南から)	③出土石器 (敲石・磨石)	
⑦23号土坑	完掘状況 (東北から)	図版41	
⑧24号土坑	完掘状況 (東から)	①出土石器 (スクレイバー)	
図版20		②出土石器 (打製)	
①25号土坑	完掘状況 (西から)	図版42	
②26号土坑	完掘状況 (西から)	①出土石器 (石鏃)	
③27号土坑	完掘状況 (南東から)	②出土石器 (石庖丁1)	
④28号土坑	完掘状況 (南から)	図版43	
⑤29号土坑	完掘状況 (南から)	①出土石器 (石庖丁2)	
⑥30号土坑	完掘状況 (東から)	②出土石器 (石庖丁3)	
⑦31号土坑	完掘状況 (東から)	図版44	
⑧32号土坑	完掘状況 (北から)	①出土石器 (石庖丁4)	
図版21		②出土石器・土製品	
①33号土坑	完掘状況 (北から)	図版45	
②15号土坑	完掘状況 (北西から)	①出土石器 (石斧等)	
③11号溝	土層・完掘状況 (南東から)	②出土石材	
④8号溝	完掘状況 (南西から)	図版46 出土石器	
⑤10号溝	完掘状況 (南西から)		
⑥11号溝	完掘状況 (北西から)		
⑦12号溝	完掘状況 (北から)		
図版22			
①9号溝	土層断面 (1) (南から)		
②9号溝	土層断面 (2) (南から)		
③9号溝	土層断面 (3) (南西から)		
④9号溝	土層断面 (4) (南西から)		
⑤9号溝	完掘状況 (北東から)		
⑥⑦1号土壙墓	土層断面 (南から)		
⑦1号土壙墓	完掘状況 (南から)		
図版23	出土土器①		
図版24	出土土器②		
図版25	出土土器③		
図版26	出土土器④		
図版27	出土土器⑤		



第4図 調査区全体図 (S=1/250)





I. 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

本遺跡の調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地三沢南崎遺跡地内（小都市三沢字南崎2929、2945-1・3・4・5、2946-4他）が「都市計画道路本郷基山線」街路緊急地方道路整備事業の対象地となり、平成18年6月5付で福岡県久留米土木事務所より埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号06032）が提出されたことに始まる。

これを受けて、小都市教育委員会文化財課で同年6月12日に対象地で発掘調査を行った結果、弥生～古墳時代の堅穴住居群及び土器類が確認されたことから、対象地の一部について開発に先立つ協議が必要である旨の回答を行った。その後、福岡県久留米土木事務所及び小都市都市建設部道路建設課との協議を行なった結果、小都市教育委員会が発掘調査の委託を受け、平成19年度事業として開発対象地を3遺跡（三沢南崎遺跡2・3・4）に分割して発掘調査を実施し、平成20年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。

(2) 調査の組織

本調査に関わる組織は以下の通りである。

<平成19年度>

【福岡県久留米土木事務所】	【小都市役所都市建設部】	【小都市教育委員会文化財課】
所長 横川知彦	部長 高木良郎	教育長 清武輝
副所長（技術）吉岡慶介	道路建設課長 佐藤吉生	教育部長 池田清己
副所長（事務）溝口正信	道路3係長 丸山義勝	課長 田篠千代太
都市市施設整備課長 梶島淳二	小中課一係長 中澤一	係長 重松正喜
副長 大隈徹浩	東園清隆	企画主査 片岡宏二
主任技師 稲富剛		技師 上田恵
		嘱託技師 沖田正大

（現宗像市教育委員会）

<平成20年度>

【福岡県久留米土木事務所】	【小都市役所都市建設部】	【小都市教育委員会文化財課】
所長 木原宗道	部長 池田清己	教育長 清武輝
副所長（技術）古澤輝吉	道路建設課長 佐藤吉生	教育部長 赤川芳春
副所長（事務）溝口正信	道路3係長 倉富義和	課長 田篠千代太
都市市施設整備課長 梶島淳二	津曲清隆	係長 重松正喜
副長 宮崎洋三	東園清隆	企画主査 片岡宏二
主任技師 松尾真司		技師 上田恵

(3) 調査の経過

発掘調査は平成19年7月5日から平成20年2月15日にかけて実施した。廃土処理と現行道路・私有地侵入路維持のため調査地を3分割して作業を行なっている。以下調査日誌より抜粋した調査経過を記す。

平成19年7月5日重機によるI・II区表層土除去開始 17日I区南半部より遺構検出開始、堅穴住居群・ピット群を確認。一部遺構掘削を開始 19日I区全面の遺構検出完了（堅穴住居群13軒、溝状遺構6条、土坑・ピット群）、遺構配置略図作成、以後人力による遺構掘削と個別遺構図・土層断面図・遺物出土状況図等を作成、遺構写真撮影を実施 8月20日発掘作業員増員 24日II区遺構検出実施（堅穴住居

群10軒、土坑・ピット群)、遺構配置略図作成、I区の掘削と並行して人力による遺構掘削を開始 9月27日発掘作業員増員 28日 I・II区全景写真撮影、個別遺構図・調査区全体図作成後、重機によるI・II区埋め戻し開始 10月6日III区全面の遺構検出完了、遺構配置略図作成、後世の擾乱部分から掘削開始18日III区人力による遺構掘削開始、以後個別遺構図・土層断面図・遺物出土状況図等を作成、遺構写真撮影を実施 12月14日遺構掘削と平行し、調査区全体図作成開始 平成20年2月16日III区全景写真撮影、機材撤収 17日個別遺構図作成、環濠ベルト掘削 20日埋め戻し作業開始 25日埋め戻し作業完了、道路建設課担当者立会いのもと現地引き渡し

II. 位置と環境

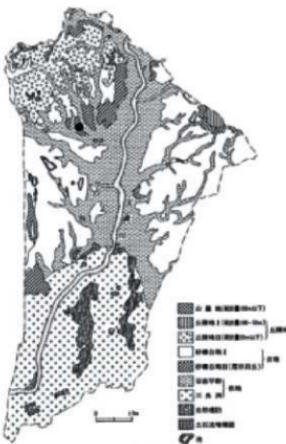
(1) 地理的環境

小都市域は北から南へ流れる宝満川によって二分され、右岸には北西部に背振山系から派生する丘陵(通称・三国丘陵)があり、これが南へ行くに従い緩やかに下って平坦な台地へ移行し、筑後平野へ達なっている。左岸は北東に所在する花立山(城山)を頂点として南へと下り、同じく筑後平野に至る台地が延びている。本書で報告する三沢南崎遺跡は、右岸の舌状に張り出す低位段丘の裾部に位置している。道路の東正面には左岸の花立山を、南東には力武区の水田地帯を、北西には弥生時代の遺跡の宝庫として著名な三国丘陵を臨む、非常に見晴らしの良い位置にある。

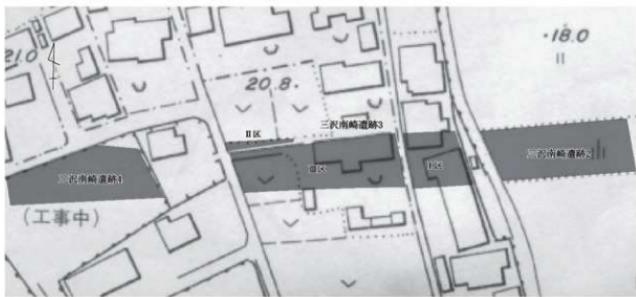
(2) 歴史的環境

小都市三沢は、中九州ニュータウン開発計画に伴って長期かつ大規模な発掘調査が実施された地区である。これまで弥生時代中期～古墳時代前期を中心とする多数の遺跡が確認されており、玄界灘を中心とする北部の文化と、有明海を中心とする南部の文化が融合した、独特の文化圏であったことが明らかにしてきた。

弥生時代前期は、初期農耕の技術面の問題から、湧水

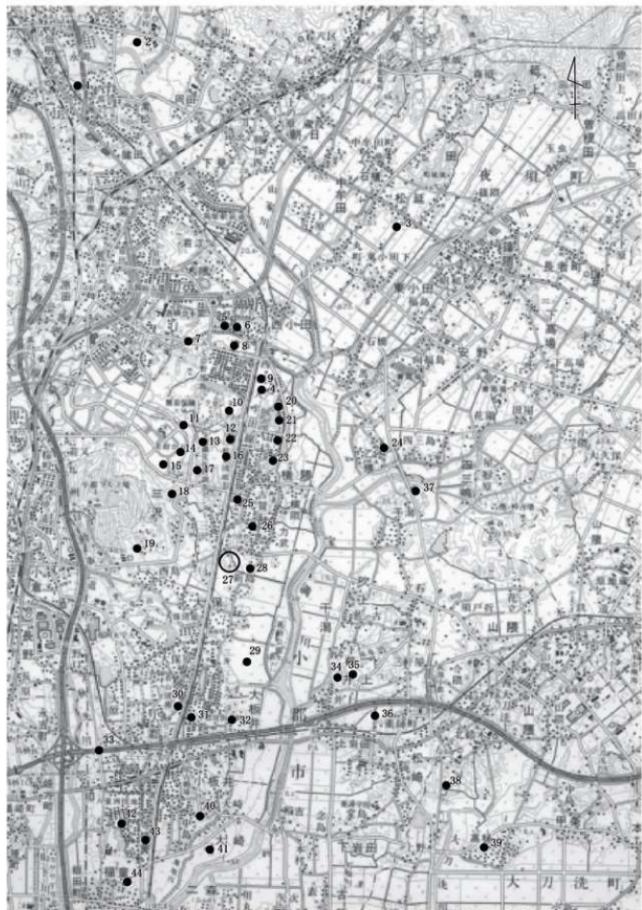


第1図 小都市地形図



第2図 調査区位置図 (S=1/2500)

を伴う谷部の湿地帯と乾燥した丘陵が接する位置に集落が經營される。三国丘陵上ではその傾向が顕著に現れており、津古東台遺跡（8）のような津古遺跡群や三沢の諸遺跡の分布状況がそれを反映している。津古土石取遺跡（9）は弥生時代前期前業の集落と墓域が並存する遺跡で、いわゆる松菊里型住居を含む堅穴住居群と貯蔵穴群、壠植墓・木棺墓からなる墓地が確認されている。津古内烟遺跡（6）では、前期後半の環濠を伴う貯蔵穴群が確認されている。この環濠は短期間しか使用されなかつたよう、前期末には埋没し、その上面に壠植墓・木棺墓からなる墓域が構築される。同じ様相を示す横隈北田遺跡（21）では、環濠と貯蔵穴群のみが関連し、住居がそれに伴わない。集落の存続を背かず敵が外部から侵入するのを阻むためではなく、貯蔵穴群の食糧を守るために、前期特有の環濠像を提示したと言える。同様の様相は、三沢北中尾遺跡（16）、横隈山遺跡（25）や平成20年度に発掘調査を実施した大保横枕遺跡（29）でも確認されている。弥生時代前期の生産域としては、木杭列を伴う谷水田を検出した三沢公家隣遺跡（13）や津古大林遺跡（7）、水田畦畔が確認されている力武内烟遺跡（28）がある。とりわけ力武内烟遺跡7は、集落域と共に水田と水利施設である井戸が併せて検出されており、当時の集落の在り方や水田経営の技術伝播を考える資料を提示した点で特筆に値する。また三沢蓬ヶ浦遺跡（12）では弥生時代前期の烟状造構が確認されている。この遺跡からは、近接する集落遺跡と立地関係から、当時の農耕集落の拡大してゆく状況や生業の主体、それに適した環境の問題などが論じられている。墓域としては北牟田遺跡（17）があり、前期から中期にかけての墓域が確認されている。ここでは南北方向に墓坑が並ぶ「列埋葬」の配置が明瞭に見られる。三国の鼻遺跡（20）は前期の墓地と集落域からなる。墓地は土壤墓・木棺墓・壠植墓から構成され、6号木棺墓からは賀玉が出土している。出土した特殊遺物と墓坑の配置や構築条件などから、当時の階層制度についての検討がなされている。その他、近接する墓地遺跡としては、前期の堅穴住居・貯蔵穴群を伴う集落と、中期の壠植墓群が検出された横隈孤塚遺跡（23）等が、同時期の大規模な墓域として福寺童遺跡5（42）がある。弥生時代中期に入ると、集落・墓域とともに前述の三国丘陵を中心とするグループと、小郡・大坂井を中心とするグループに二分されるようになる。小郡遺跡（31）は現在の官衙遺跡公園一帯に所在し、大型の円形住居や貯蔵穴群・環濠の可能性のある溝などが確認されている。同時期の集落遺跡においては珍しい大規模な住居が存在することから、この地域の拠点集落であった可能性が仄めかされている。大坂井遺跡（32）は壠植墓群を主体とし、集落である小郡遺跡と関連する墓域と想定される。この遺跡内の壠植墓からは中細形銅鏡7本が出土したことがあり、これらの遺跡と近接する小郡若山遺跡（30）では、平成5年に多鉢細文鏡が出土している。多鉢細文鏡については、その希少性や埋納状況もさることながら、階層制や集落の統一課程といった当時の政治的状況を反映したものとして注目される。平成16年度に中広形銅鏡9本を伴う埋納構造が確認された寺福童遺跡4（43）についても、この集落と関連する可能性が考えられる。三国丘陵の弥生時代後期の集落は、これと比較すると小規模であると言える。三国の鼻遺跡（20）の後期集落は一部を環濠に囲繞されている。この環濠の構築については、丘陵の自然地形を充分に考慮しており、当時の政治的状況を考えるための資料として興味深い。横隈山遺跡（25）では、本遺跡で多数検出されたものと同じ、後期後半のベッド状造構を伴う住居群が検出され、中でも14号住居内からは青銅の内行花文鏡が出土している。市内で始めて周溝状造構が確認されたあるみくに保所遺跡（26）は前期の貯蔵穴群と、後期中葉～後半の住居群からなる集落であり、住居内から方格構析鏡が出土している。この周溝状造構は、横隈山遺跡（25）、小郡若山遺跡（30）等でも確認されており、本遺跡においても4例検出している。祭祀に伴う造構と想定されているが、その用途については今後の検討課題として残る。三沢柴原遺跡（18）ではベッド状造構を伴う後期の堅穴住居群が確認されているが、出土遺物は石器から鉄器への道具の変化を示す例として意義深い。その他、後期の集落としては、横隈鍋倉遺跡（22）、三国の鼻遺跡（20）、宝満川の左岸にある乙隈天道町遺跡（24）等が挙げられる。その後、三国丘陵では津古辻掛古塚（4）をはじめとする前方後円墳の造成が始まり、津古辻掛古塚（4）をはじめとする前方後円墳の造成が始まり、津古辻掛古塚（4）をはじめとする前方後円墳の造成が始まり、津古辻掛古塚（4）をはじめとする前方後円墳の造成が始まる。本遺跡の主体は弥生時代後期であるが、出土遺物から集落そのものは前期段階から存在していたと考えられる。弥生時代全体を通して、様々な様相を示しながら人間生活が展開されていた三国丘陵、その南端にある本遺跡がこれらの歴史的経過の中でどのような役割を担っていたのかを検討することは、弥生時代末から古墳時代へと至る政治・社会の変質をとらえる上で、貴重な資料になり得ると言える。



1永岡 2永岡岸元 3切羽 4津吉生原 5津吉古前 6津古内浦 7津古大林 8津吉東台 9津吉土取 10三沢 11三沢ハサコの宮 12三沢釜ヶ淵 13三沢
公家畠 14-ノロ 15北松尾 16三沢北中尾 17北野田 18三沢要原 19西島 20三國の島 21横隈北田 22横隈畠倉 23横隈私塚 24乙曽天道
25横隈山 26みくに保育所内 27三沢南崎 28万武内塚 29大保畠 30小郡古山 31小郡 32大板井 33小郡正坂 34井上北内原・南内原
35井上小松山 36上若田 37千鳥 38鶴木横道 39高橋小道 40大崎中ノ前 41大崎中ノ前 42寺福童 43寺福童 44船童町

第3図 周辺距離分布図 (S=1/50000)





第5図 I区遺構配置図 (S=1/150)



III. I 区の遺構・遺物

(1) 調査の概要

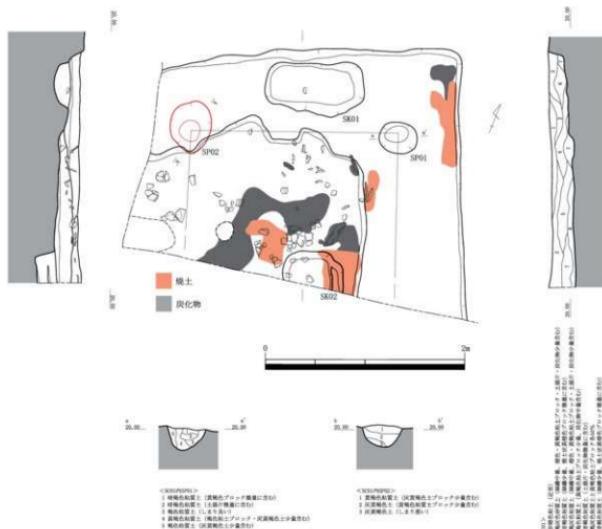
I 区は調査区の東端に当たり、本遺跡の東西にある谷部への地形の変換する際となる。遺構検出面の標高は19.50~20.25mで、東へ向かって緩やかに傾斜する。調査区内では堅穴住居13軒、土坑10基、溝4条を検出した。溝のうち、4号溝についてはⅢ区でも確認されている環濠（SD09）の一部であるため、V章にて別途報告する。表層土の厚みは調査区内の位置によって差があり、北東一帯は厚く、西は極めて薄い。そのため遺構の残存状況も非常に差がある。また、遺構配置図で擾乱としてあげているもののうち3ヶ所については、調査段階で太平洋戦争時の防空壕の可能性が高いことが判明しているが、調査期間の都合上、詳細な掘削はしていない。以下、個別遺構と出土遺物について述べる。

(2) 遺構と遺物

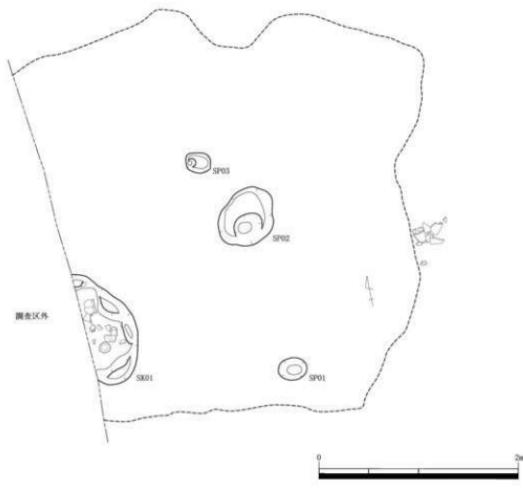
<堅穴住居>

1号住居（第6図/図版3）

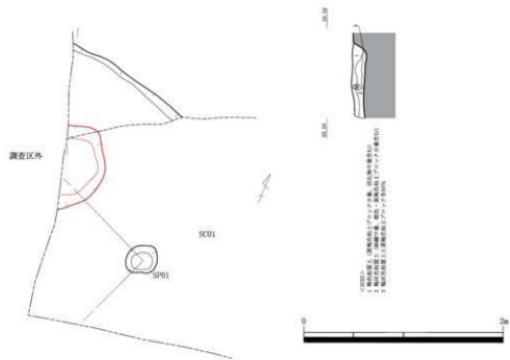
調査区南西隅に位置するが、大半は調査区外に延長し、北東の4分の1のみ検出している。3号住居を切



第6図 1号住居 (S=1/40)



第7図 2号住居 (S=1/40)



第8図 3号住居 (S=1/40)

る。整理段階で主柱を検討し、4柱として復元しているが、SP02を北主柱とする2柱の可能性もある。主軸は南北方向で、残存長2.65m、残存幅3.4m、検出面からの深さは0.2m、北及び東に幅0.9m、高さ0.1mのベッド状造構をめぐらす。ベッドの縁は不整なラインを描く。埋土からは、ベッド状造構と同じ高さで炭化物・焼土を伴ってまとまった量の遺物が出土している。住居施廻時を示すものと考えられる。また北東隅及びベッド状造構の北東線にも炭化物・焼土が分布し、特にベッド状造構の縁辺は被熱して硬化した部分も見られることから、明瞭な痕跡はないものの、焼失した住居の可能性がある。

出土遺物 (第13・14図/図版42・42)

検出段階で3号住居との先後関係が不明瞭であったため、明確に後出するものを1号住居出土遺物として扱った。遺構図に示した遺物を中心に土器が出土している。土器は甕・鉢類を主体とする。外面に粗略なタタキが目立ち、器壁の凹凸が激しい。いずれも小片で形状をとどめるものはわずかである。その他、黒曜石製の石器を含む、少量の石器が出土した。

2号住居 (第7図/図版3)

調査区中央西端に位置し、12号住居を切る。上面は後世の造成により大幅に削平されており、柱穴とSK01とした屋内土坑、貼床の一部がわずかに残存するのみである。SK01は住居の裏面沿いにあるタイプの土坑と考えられる。検出段階では1軒の住居としてのプランを確認出来なかつたため、整理段階で復元を行なった。南北方向を主軸とする2柱で、平面プランは長軸5.5×短軸5.0m程度と推測される。中央東寄りの床面直上でまとまった遺物が確認されている他、SK01内から一括した遺物が出土している。

出土遺物 (第13・14図/図版42・46)

黒曜石製石器を含む少量の石器と、SK01からまとまった量の土器が出土している。甕・鉢類が主体だが、いずれも小片である。比較的薄手で器面調整は工具ナデ・ハケによる。古墳時代の所産と考えられる。砥石は石英斑岩で、砥面はそれぞれ逆の向きから使用している。

3号住居 (第8図/図版3)

調査区南西隅に位置し、1号住居に切られる。大部分が調査区外へ延長している。4柱として復元しているが、貼床下層で検出したピットを北主柱とする2柱の可能性も考えられる。検出面からの深さは0.15m、その他の規模・構造とも不明である。

出土遺物 (第13・14図/図版42)

埋土より、甕・器台等少量の遺物が出土している。甕は口縁部がやや傾んだL字型となる、弥生時代中期末の所産である。その他、黒曜石製石器・頁岩質砂岩の石庖丁の小片を含む石器類が出土している。

4号住居 (第9図/図版3)

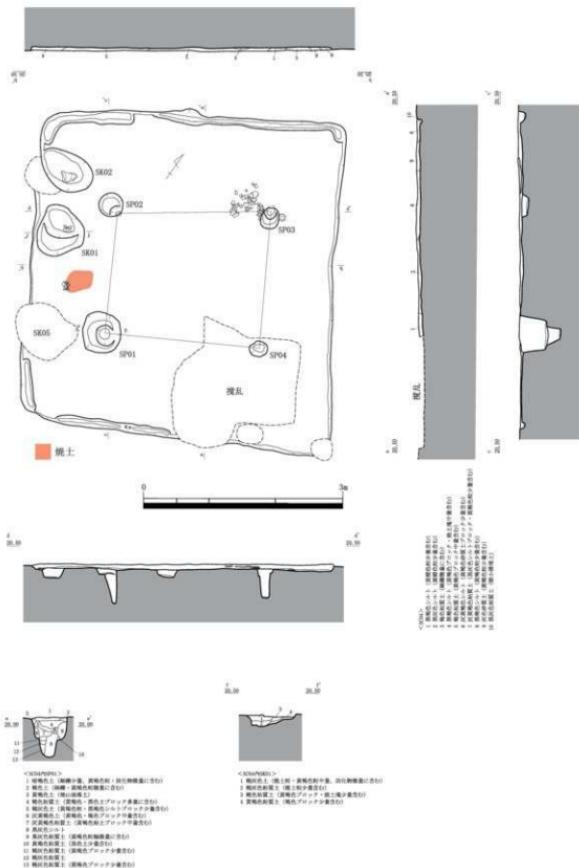
調査区中央南寄りに位置し、5号土坑に切られ、5号住居を切る。4柱で主軸は北西—南東、長軸5.0×短軸4.6m、検出面からの深さ0.1mを測り、南北の壁沿いに浅い細溝をめぐらす。柱間の壁沿いに土坑を持つ。SK01—SP01間にわずかに焼土の広がりが認められたが、焼失住居あるいはカマド痕跡とは考えられない。柱穴は上部の搅乱で削平されているSP04を除いていずれも2段掘り込みが認められ、しつかりとした造りとなっている。但し遺構上面が大幅に削平されており、残存状況は非常に悪い。

出土遺物 (第13図/図版23)

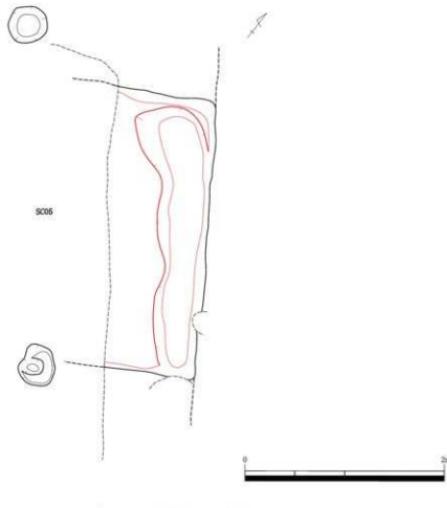
遺構図内に掲載したものを含め、甕・鉢を中心とした土器と少量の石器が出土している。甕は頸部がくの字型に屈曲するやや厚手のもの、外面ハケ・内面ケズリ調整。鉢類は外外面に指圧痕の目立つ、調整がやや粗雑なものが多い。小型壺は体部に1ヶ所穿孔を施し、外表面は丁寧にミガキを施す。古墳時代前期の所産と考えられる。

5号住居 (第10図/図版3)

西側3分の2を4号住居に切られる。2柱で主軸は北東—南西、長軸5.8×短軸6.0m、検出面からの深さ0.1mを測る。調査段階で西側に幅1.4mのベッド状造構を作りと判断した。東側へも同様の構造を有



第9図 4号居室 (S=1/60)



第11図 6号住居 (S=1/40)

していた可能性があるが、上部を大幅に削平されているため詳細は不明である。柱穴はいずれも片側2段掘りでしっかりした造りとなっている。住居中央部の土坑SK02は、埋土に炭化物・焼土の双方が認められないことから鉄跡ではないと考えられる。南壁沿いのSK01は、埋土にわずかながら炭化物が認められるが、こちらも鉄跡の可能性は極めて低い。

出土遺物（第13・14図/図版41・42）

SK01内から土器と大型の砥石が、床面直上から土器・石器が出土している。土器は甕を主体とし、いずれも小片だが、弥生時代中期の所産と考えられる。砥石は大型で3面を使用。その他、2次加工を施した黒曜石片が出土している。

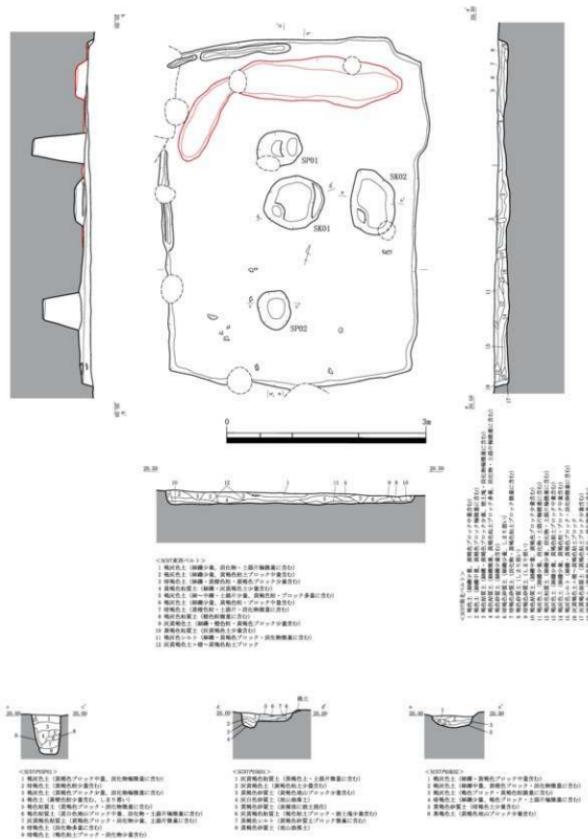
6号住居（第11図/図版3）

西側の大半を5号住居に切られ、上面を大幅に削平されている。2柱で主軸は北西—南東、南・北両辺にペッド状造構を伴うと判断したが、貼床痕跡の残存が中央部分のみであったため、詳細な構造・規模は不明である。東辺の貼床下に湿気抜きのためと思われる溝状の浅い掘り込みが見られる。その他、住居に伴う土坑・縫溝等の存在も不明である。8号住居と同じ構造とも想定される。

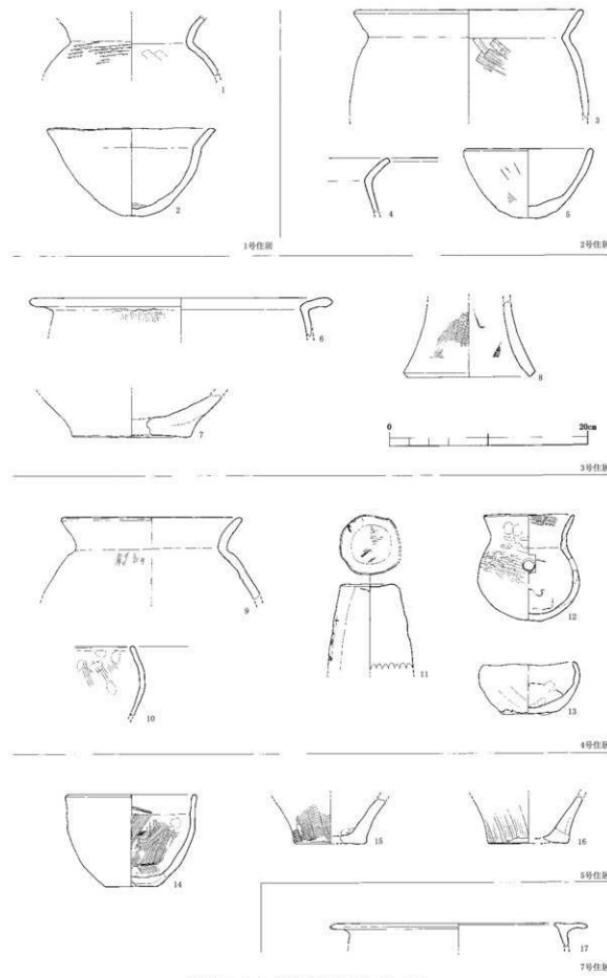
貼床粘質土内及び下層掘り込み内から少量の弥生土器片が出土しているが、細片のため図示は控えた。弥生時代中期の所産。

7号住居（第12図/図版4）

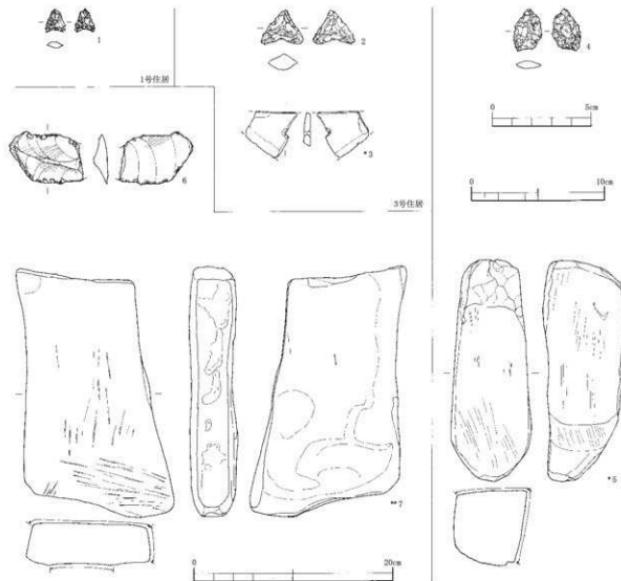
調査区中央北寄りに位置し、12号住居を切る。検出段階では2軒の住居が主軸を同じくして切り合うと考えたが、主柱の位置関係から、平面プランが長方形の1軒の住居と判断した。2柱で主軸は南北方向、



第12図 7号住居 (S=1/60)



第13図 1~5・7号住居出土土器 (S=1/4)



5号住居

第14図 1・2・3・5号住居出土土器 ($S=1/2$ 、*付は $S=1/3$ 、**付は $S=1/4$)

長軸5.3×短軸3.8m、検出面からの深さ0.2mを測る。柱間と東壁沿いにそれぞれ土坑を伴う。SK01の埋土には比較的焼土が含まれていることから、炉跡の可能性が高いと考えられる。北・東辺の一部に細溝を、北辺の床下下に湿気抜き用と思われる浅い溝を掘り込んでいる。

出土遺物 (第13-18図/図版41-42)

床面直上を中心に少量の土器・石器が出土している。土器は甄類を中心とするが、いずれも小片で、やや崩れた鶴形口縁を持つ、弥生時代中期後葉の所産。スクレイバーは非常に小型の安山岩製。石庖丁は赤紫色泥岩製で、刃部全体にわずかに磨ぎ直しが見られる完形品である。砥石は砂岩、2面を使用する。

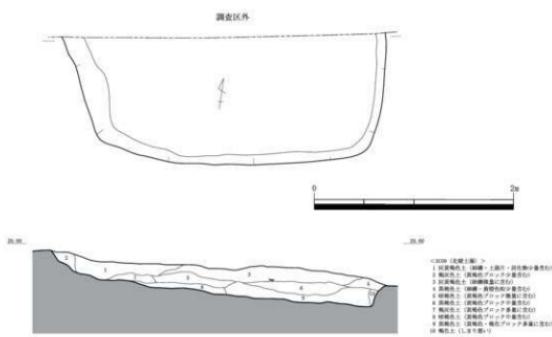
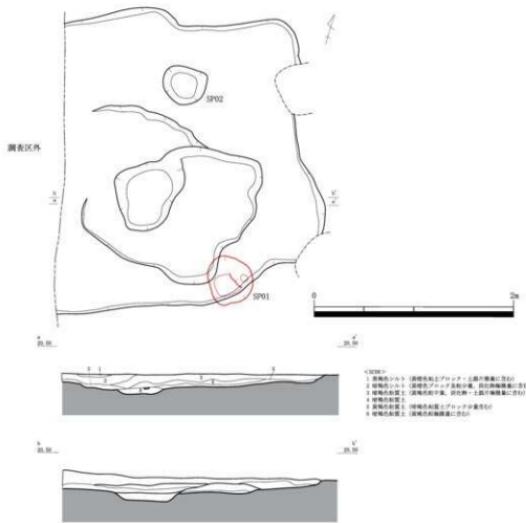
8号住居 (第15図/図版4)

調査区西側南寄りに位置し、一部調査区外へ延長する。2柱で主軸は北西-南東、残存幅2.6mを測る。検出段階では不明造構と想定したが、1区西側の造構残存状況が極めて不良であること、不整形ながらも方形のプランが認められること、主柱と考えられるピットを作うことなどから、住居と判断した。南・北辺にベッド状造構を持つと想定されるが、上面の削平が激しいため推測に過ぎない。6号住居と同じ構造とも考えられる。柱間に土坑を持つが、埋土に炭化物・焼土は含まれず、炉跡とは考えがない。

出土遺物 (第18図/図版35)

埋土より極少量の土器が出土している。いずれも小片のため図示は控えたが、弥生時代中期の所産であ





るが、遺構に伴うかは不明。その他、甕の副部片を転用した円盤状土器品が出土している。

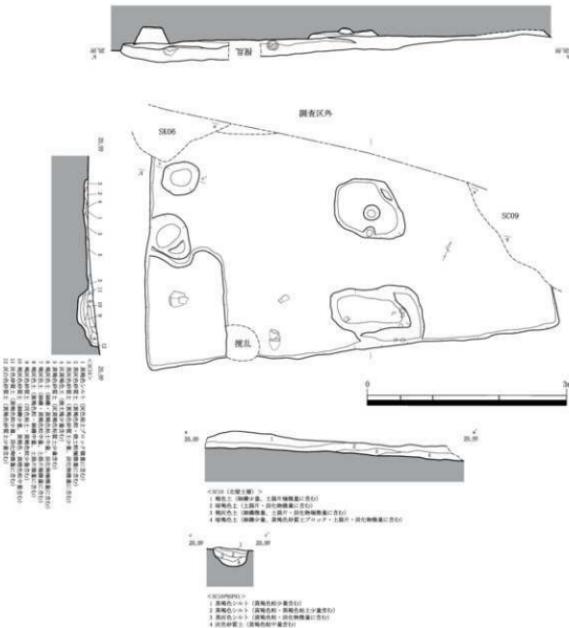
9号住居（第16図/図版4）

調査区北東隅に位置し、4号溝・10号住居を切る。表土削削時に誤って上部を削平しており、検出段階では黒色シルトを含む黄褐色粘質土の貼床痕跡が認められるのみであった。貼床痕跡の範囲と調査区壁面の土層図より、遺構の形状を復元している。遺構の大部分が調査区外に延びるため、主柱・規模共に不明である。平面プランは橢丸長方形あるいは楕円形を呈するとと思われるが、こちらも詳細は不明である。

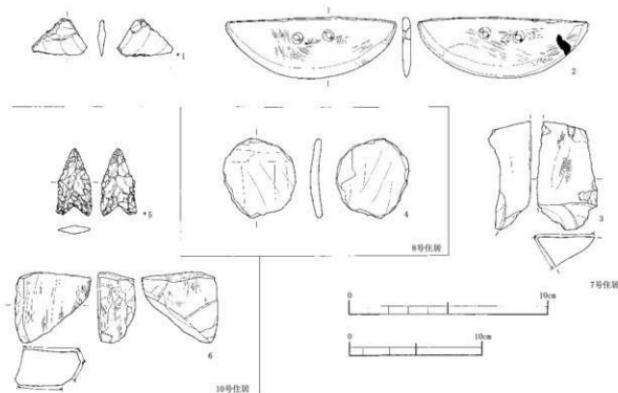
残存埋土・調査区北壁土層から少量の土器が出土しているが、いずれも小片のため図示は控えた。弥生時代後期の所産である。

10号住居（第17図/図版4）

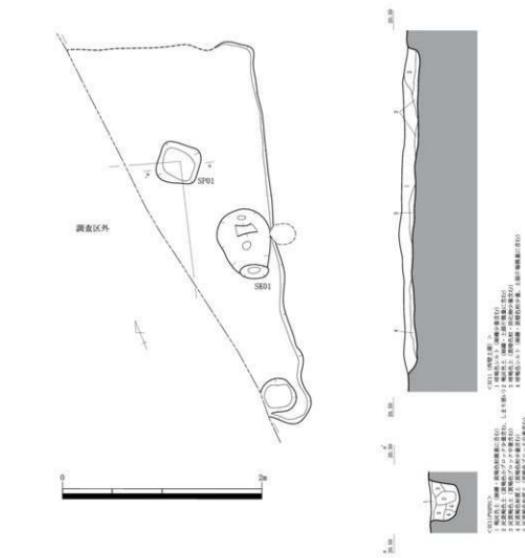
調査区北端中央に位置し、6号土坑・9号住居に切られ、4号溝を切る。北半分は調査区外へ延長する。2柱で主軸は北東—南西、長軸6.1m×短軸残存長3.6m、検出面からの深さ0.3m。柱間と南壁沿いに土坑



第17図 10号住居 (S=1/60)

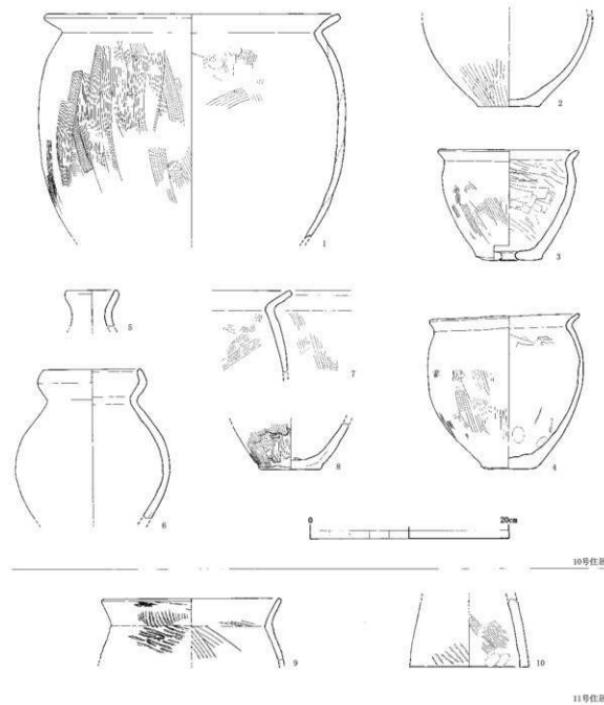


第18図 7・8・10号住居出土土製品・石器 (S=1/3, *付はS=1/2)



第19図 11号住居 (S=1/40)





第20図 10・11号住居出土土器 (S=1/4)

を持つが、いずれも埋土には炭化物・焼土を含まず、炉跡ではない。南西隅に幅1.2m、高さ0.1m、住居掘削時にベッドとして段差を残し、その上にさらに粘土を貼った、堅固な造りのベッド状造構を作う。全体に貼床を施す。

出土遺物 (第18・20図/図版23・42)

南壁沿い土坑内と床面直上を中心に、比較的残りの良い土器が少量出土している。1はベッド状造構の上から、3・4は造構南辺の床面直上から出土しており、造構の時期特定が可能である。大型甕は口縁部から頸部にかけての距離が短く、明瞭に屈曲する。内外面ともにハケ調整を施し、器壁は薄い。小型甕は底径が広く、頸部はくの字型に屈曲して肩部上方が張る。器壁はやや厚く、外面はハケ、内面はハケ状痕跡を残す工具ナデを施す。甕は口縁端部が内側へ屈曲を始める時期のもので、屈曲の度合いはまだ緩い。弥生時代中期終末から後期初頭の所産である。その他、黒色緻密質安山岩の石鑿、石英斑岩の砥石をはじめとする、少量の石器が出土している。



11号住居（第19図/図版4）

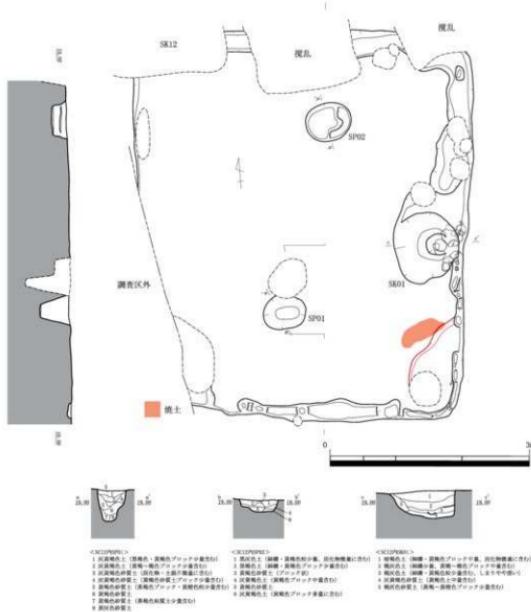
調査区北西隅に位置し、西側の大部分が調査区外へ延長する。7号住居に切られるため、北辺の掘り方は残存しておらず、貼床の状況から道構の範囲を確定した。4柱と想定しているが、SK01を東主柱とする2柱の可能性もある。主軸は南北方向と考えられる。長軸3.85×短軸残存長1.8m、検出面からの深さ0.55mを測る。東壁沿いに土坑を作り、形状・埋土は炉跡を示すものではない。

出土遺物（第20図）

埋土・ピットから少量の土器が出土している。甕は頭部が頗る屈曲し、体部外面に平行タタキ調整の痕跡が目立つ。器壁も外面に平行タタキ痕、内面に指圧痕を残す粗略な造りで器壁は厚い。いずれも弥生時代後期の所産である。

12号住居（第21図/図版4）

調査区中央西端に位置する。2・7号住居・12号土坑に切られる。主軸は南北方向で、2柱で天井部を支える構造を持つ。長軸5.8×短軸3.2mを測り、深さは全く不明である。主柱の深さに差があり、SP01=



第21図 12号住居 (S=1/60)

SP02の並びも悪いが、他に主柱と考えられるピットが存在しなかつたため、SP02も主柱であると判断した。北・北東壁沿いにやや幅広の溝、南東壁沿いに細溝がめぐる。南東隅には一部焼土の広がりが見られたが、住居本体の焼失を示唆するほどのものではない。東辺沿いに掘鉢形の土坑を伴い、内部からまとまった量の土器が出土している。

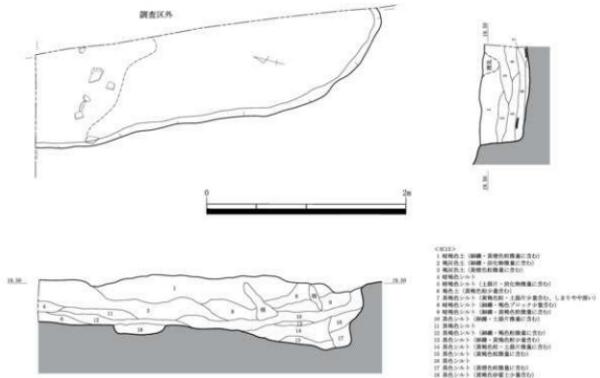
2号住居と切り合うが、前者は貼床のみ。本遺構は堀沿いの溝のみが残存する状況であった。本遺構と同一の1軒の住居と判断するには、2号住居の屋内土坑（SK01）の位置に問題があること、そして本遺構のSK01から出土した遺物と2号住出土遺物とは明確な時期差があることから、2軒の残存状況の不良な住居の切り合いや関係であると判断している。なお、2・12号住居内では多数のピットが検出されたが、2軒以上の住居の存在を示すものは確認出来なかつた。

出土遺物（第23図）

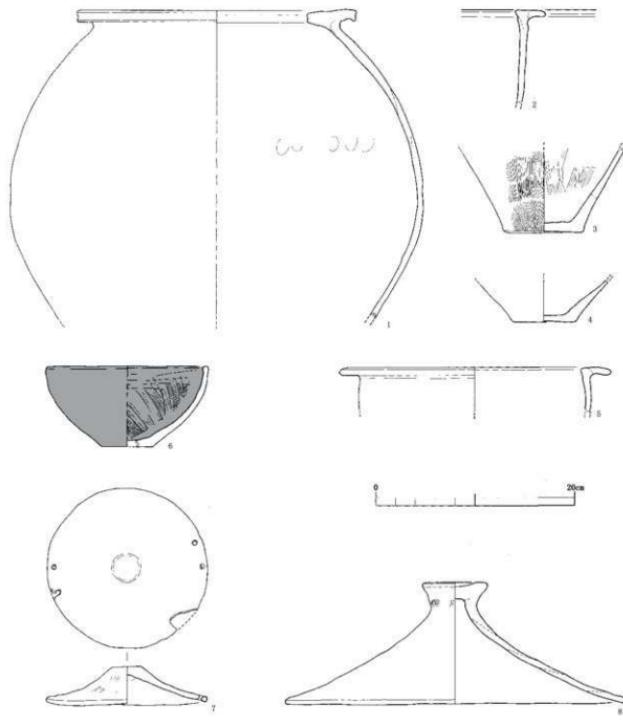
SK01からは一括資料が、その他堀沿いの溝理土から少量の土器が出土している。甕類は口縁がしっかりととしたL字型を呈する、弥生時代中期の典型的な様相を示す。器壁は薄く、内外面共に丁寧な調整で滑らかな面を持つ。Gのような丹塗土器も含まれており、日用品とは考えがたい極めて小型の甕なども見られる。全件に残りも良く、住居内で行なわれた祭祀的行為の存在を示す遺物であると思われる。

13号住居（第22図/図版5）

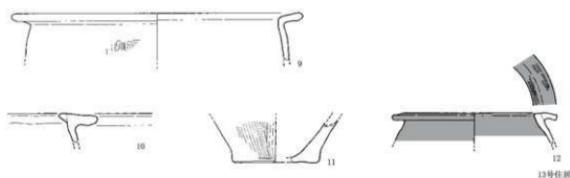
調査区北東隅に位置し、遺構の大半は調査区外へ延びる。深さ0.6mを測り、1区で検出した遺構の中では最も残りが良い。3号土坑・4号溝を切る。9号住居との先後関係は、調査区西面の土層観察からは確認出来なかつた。検出した部分のうち、北半分にのみ薄く黄褐色粘土質を使用した貼床状の痕跡が残る。平面プランは隅丸長方形もしくは梢円形を呈すると思われるが、構造・規模については一切不明である。主柱と考えられるピットや土坑は、床面上からは検出されなかつた。但し、調査区東側の土層から想定すれば、中央に土坑状のくぼみ、南端に柱穴を持つと考えることも出来よう。



第22図 13号住居 (S=1/40)



12号住居



13号住居

第23図 12・13号住居出土土器 (S=1/4)





出土遺物（第23・34図/図版42）

床面直上から少量ではあるが遺物が出土している。甕類を中心とした、いずれも小片である。口縁端部は崩れた彫形とし字が混在しており、器壁は薄く丁寧な調整を施す。一部丹塗磨研のものも含まれる。中期末の所産である。石庖丁は刃部にわずかに磨ぎ直しを施す、頁岩質砂岩。その他、先端の破損した黒曜石製石鏃が出土している。

＜溝＞

1号溝（第5図/図版2）

調査区中央東寄りに位置し、東西に流れる。検出断面では土坑と想定したが、立ち上がりが緩やかで埋土最下層に粗砂の堆積が認められたことから、溝と判断した。東は調査区外へ延長し、西は防空壕と見られる複雑に切られて消滅する。後世の造成による削平は考えられず、調査区内でのこれ以外の延長はないと思われる。幅0.9m、深さ0.6mを測り、断面は隅入の台形を呈する。近接して圓通が推測される遺構はなく、用途は不明である。区画施設の一部か。埋土から微量の土器が出土しているが、細片のため時期決定の根拠とはなり得ない。

2号溝（第5図/図版2）

調査区中央東寄りに位置する。南北に流れるが、両端とも途中で断続する。上部が造成による削平を受けており現存状況が不良であるため、双方向への延長も考えられる。南端は防空壕と見られる複雑に一部を削平されているが、東へ向かって緩やかに湾曲している。幅0.65m、深さ0.2m、全長4.5mを測り、断面は隅丸長方形を呈する。用途は不明だが、西側へのふくらみの状況から、調査区外の東へ圓通遺構を有する可能性がある。弥生時代中期の器台片が1点出土している他は、目立った遺物は認められない。

3号溝（第5図/図版2）

調査区中央南寄りに位置し、5号住居を切る。南北方向に流れるが、両端とも途中で断続する。上部が造成により著しく削平されているため、双方向への延長も考えられる。幅0.4m、深さ0.1m、全長2.9mを測り、断面は隅丸長方形を呈する。ほぼ正方位を向くため、田畠あるいは居住域の区画溝の可能性も想定出来る。遺物は一切出土していないため時期は不明である。

＜土坑＞

1号土坑（第24図/図版5）

調査区中央東寄りに位置する。検出面の緩やかな傾斜が始まる箇所にあるが、主軸は等高線と平行となる。南北1.8×東西1.35m、深さ0.35mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。埋土は上層が自然埋没によると思われる暗褐色砂質土、下層が人為的廃棄と考えられる灰黄褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種か。

出土遺物（第146図/図版41・45）

埋土内に少量の遺物が認められた。土器は弥生時代中期の所産だが、いずれも細片のため図示していない。図示した黒色緻密質凝灰岩のスクレイバーの他、叩き石・砥石の破片等、微量の石器が出土している。

2号土坑（第24図/図版5）

調査区中央に位置する。東西1.5×南北0.85m、深さ0.15mを測り、平面プランは不整長方形を呈する。埋土は単層で、上面は大きく削平を受けていると考えられる。廃棄土坑の一種か。埋土から微量の土器が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。弥生時代後期の所産。

3号土坑（第24図/図版5）

調査区北東に位置し、13号住居に切られる。東への傾斜部分にあり、主軸は等高線と平行になると思われる。南北2.15×東西残存幅0.4m、深さ0.2mを測る。平面プランは不整長方形を呈すると考えられる。



埋土は単層で、上面は大幅に削平されていると見られる。底面西端にピット状の掘り込みが認められるが、造構に伴うものかは不明である。廃棄土坑の一種か。埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため時期は不明である。

4号土坑（第24図/図版5）

調査区中央に位置し、7号住居を切る。東西1.1×南北1.05m、深さ0.5mを測り、平面プランは不整円形を呈する。埋土は黒褐色シルトと黄褐色粘質土を主体とし、水平堆積の様相を示す。古墳時代の廃棄土坑の一種と思われる。埋土から微量の遺物が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。土器は古墳時代中期の所産、石器は砥石片等が確認されている。

5号土坑（第24図/図版5）

調査区南西よりに位置し、4号住居の埋土上面より掘り込んでいる状況を検出した。検出段階では大型のピットと想定していたが、埋土の堆積状況・底面の様子から土坑と判断した。東西0.9×南北0.75m、深さ0.25mを測り、平面プランは不整円形を呈する。埋土内には焼土粒・炭化物粒が含まれ、底面近くには焼土塊を確認している。造構の縁辺部及び底面に被熱痕跡は見られなかつたが、焼成造構の可能性が考えられる。埋土上層から少量の土師器が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。古墳時代中期の所産。

6号土坑（第25図/図版6）

調査区北西端に位置し、7号土坑・10号住居・4号溝を切る。北半分は調査区外へ延長する。上面は大幅に削平されている。西側へ段落ちを持ち、東西2.2×南北残存長最大0.95m、深さ最大0.2mを測る。平面プランは不整長方形と思われる。ベッド状造構を伴う住居の可能性もあるが、底面に傾斜を持つこともあり、ここでは土坑として扱った。埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため時期は不明である。

7号土坑（第25図/図版6）

調査区北西隅に位置し、6号土坑に切られ、11号住居・4号溝を切る。北半分は調査区外へ延長し、上面は造成により削平されている。東西残存長2.8×南北残存長1.0m、深さ0.2mを測る。平面プランは不整形を呈する。残存状況の悪い住居の可能性もあるが、ここでは土坑として扱った。底面より、土師器高杯の小片・礫が出土しているが、細片のため図示はしていない。古墳時代中期の所産。

8号土坑（第25図/図版6）

調査区北寄りに位置し、10号住居に切られる。南北残存長1.2×東西1.25m、深さ0.25mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。埋土は灰色砂質土を主体とし、水平堆積に近い様相を示す。廃棄土坑の一種か。埋土から、弥生時代中期の所産と思われる土器の小片が微量に出土している。

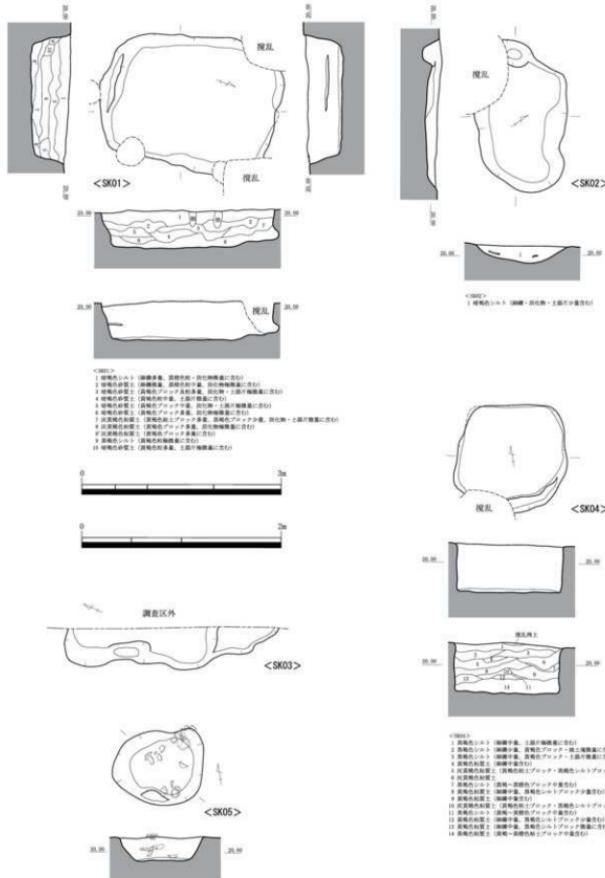
9号土坑（第25図）

調査区中央西寄りに位置し、7号住居に切られる。平面プランは長方形を呈し、南北1.6×東西1.0m、深さ0.5mを測る。底面には径15cm程度の小ピットが4基確認されている。埋土はしまりの良い黒色シルトを主体とし、水平堆積の様相を示す。形状からは貯藏穴と考えられる。埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため時期は不明である。

12号土坑（第25図）

調査区北東寄りに位置し、12号住居を切る。東西1.8×南北1.3m、深さ0.35mを測る。平面プランは縁辺部の崩落した隅丸長方形と判断した。埋土は褐色粘質土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種と考えられる。埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため時期は不明である。





第24図 1~5号土坑 (S=1/40, SK01は1/60)



第26図 II区造林記載図 (S-1/150)

IV. II区の遺構・遺物

(1) 調査の概要

II区は東西長32m、南北幅5.2mの狭域であり、北に隣接する民家への公道からの進入路確保のため設定した。遺構検出面は標高20.80~21.00mのほぼ平坦な褐色ローム層である。III区とはブロック塀を隔てて連続しており、堅穴住居跡5軒が同一の遺構であることが調査開始段階から明らかであったため、共通の遺構番号を付けている。II・III区双方にまたがる遺構については、17・20・24号住居の4軒と14号土坑は本章で、19・42・22-45号住居についてはV章で報告する。

(2) 遺構・遺物

<堅穴住居>

14号住居（第27図/図版8）

調査区西端部に位置し、北西・南西両隅が調査区外へ延長する。23・25号住居に切られる。検出段階では、23・25号住居それぞれに伴うベッド状遺構の段落ちであると考えていたが、上記2軒の住居と共にある東辺に向かって南・北辺が湾曲して接し、西邊にもベッド状遺構と思われる段落ちが確認されたことから、切り合ひ2軒の住居に破壊された下層の別住居と判断した。

主軸は南北方向で長軸7.35×短軸残存長6.5m。検出面からの深さ最大0.5mを測り、正方形を呈すると思われる。貼床は施されているが、東辺沿いの一部分のみである。2柱で遺構中央に浅い屋内土坑が認められる。理上には炭化木と焼土粒を含むことから、炉的な役割を果たしていたと思われる。南西隅から西辺沿いに、段掘りで構築したベッド状遺構を、東辺と北辺には貼床下に溝状の掘り込みを持つ。住居内の北半部床面上から、まとまった量の土器が出土している。

出土遺物（第28・29・33・34図/図版23）

調査段階では、23・25号住居の床面上でまとめて出土した遺物があり、分離が困難と思われたため、明らかに14号住居に伴うと判断できるレベルで出土した遺物のみをこの住居の出土遺物として扱った。床面上からまとめて出土しており、住居廃棄時を示すと考えられる。器種は壺類を中心とし、大型かつ形状を残すものが多い。壺は頸部のくの字状の屈曲が比較的明瞭なものと、非常に緩いものが混在している。胴部外面は平行タタキを施した後タテハケで消しているが、タテキ痕跡は残存している。底部はタテハケの後ケズリを施す。鉢は口縁部が外反して広がるものと、直立て小型壺的な様相を示すものとが混在する。弥生時代後期から古墳時代初頭の所産と思われる。その他、用途不明のつまみ付土製品が1点出土している。出土遺物内には微量の投弾を含むのみで、石器はほとんど見られない。

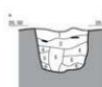
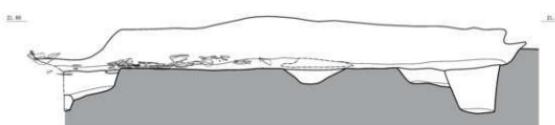
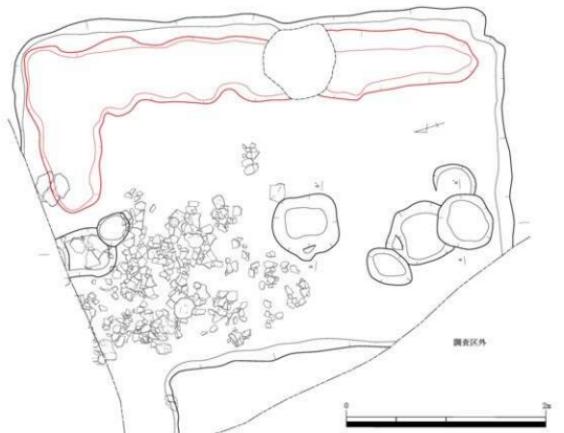
15号住居（第30図/図版7）

調査区北端東寄りに位置し、北半部が調査区外へ延長する。検出段階では2軒の住居が切り合うと想定していたが、掘削時に底面の段差が認められ、埋土の状況にも差異が確認出来たことから、3軒の遺構であると判断した。16・17・18号住居を切る。

主軸は北東一南西方向、4柱で一辺約2.8mの正方形を呈すると思われる。検出面からの深さ0.45m。東辺中央部にテラスを、南東隅に段掘りで構築したベッド状遺構を持つ。貼床状の痕跡は遺構床面からも土層断面からも認められなかった。

出土遺物（第33・34図/図版23・24）

埋土上層を中心に土器類が出土している。壺・壺類の小片が多く、形状を留めるものはわずかであった。壺は口縁端部が内側に屈曲するもの、壺は頸部の屈曲が緩やかで外面に平行タタキの痕跡を残すものと、頸部が外反して内外面にハケ調整を施すものが混在している。弥生時代後期の所産。その他、安山岩剥片等、極微量の石器が出土している。



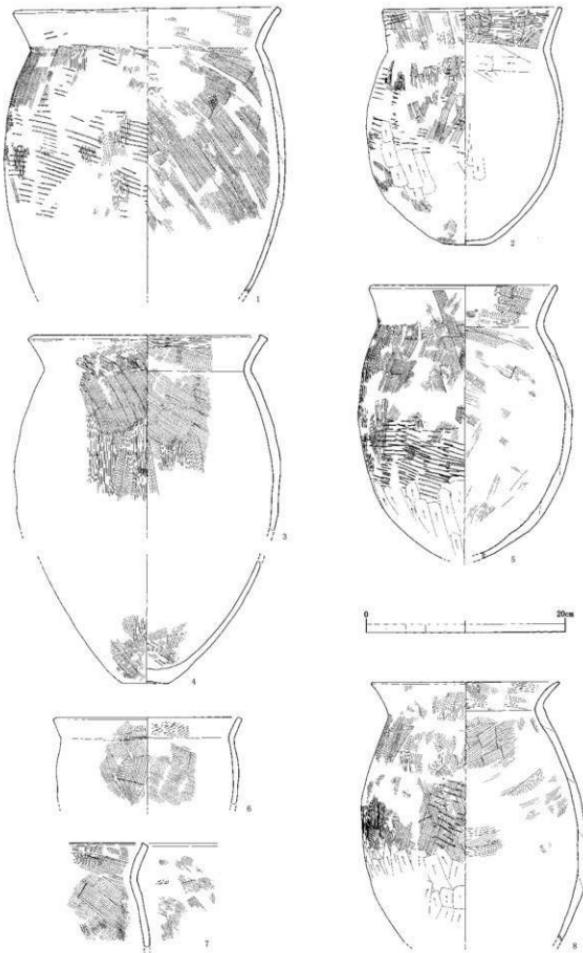
○(X)11(100):
1. 砂場地: (瓦床一階のブロックを量。)盛り高さ測量に合む。
2. 砂場地: (瓦床一階のブロックを量。)盛り高さ測量に合む。
3. 砂場地: (瓦床一階のブロックを量。)盛り高さ測量に合む。
4. 砂場地: (瓦床一階のブロックを量。)盛り高さ測量に合む。
5. 砂場地: (瓦床一階のブロックを量。)盛り高さ測量に合む。



○(X)14(100):
1. 砂場地: (瓦床一階のブロックを量。)盛り高さ測量に合む。
2. 砂場地: (瓦床一階のブロックを量。)盛り高さ測量に合む。
3. 砂場地: (瓦床一階のブロックを量。)盛り高さ測量に合む。

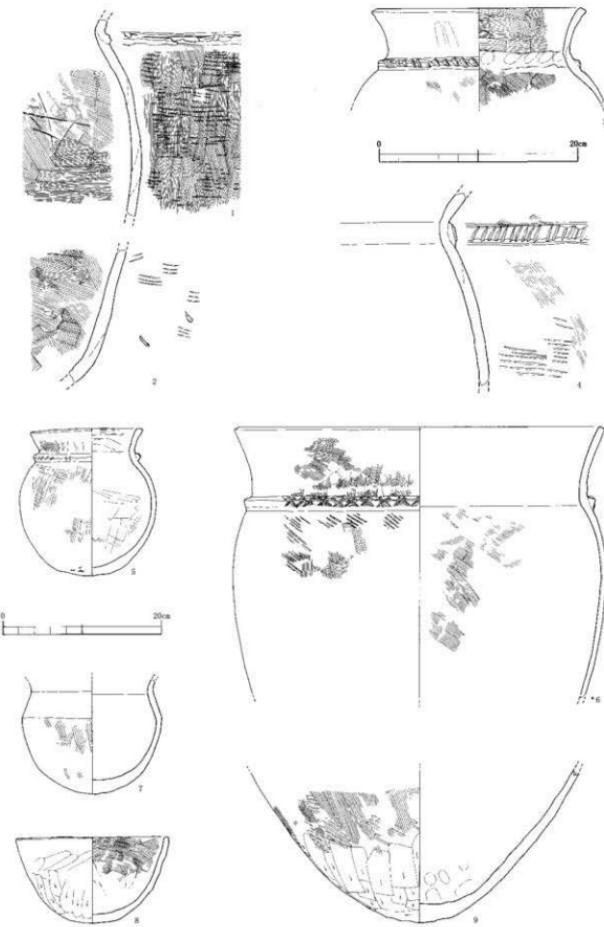
第27図 14号住居 (S=1/40)

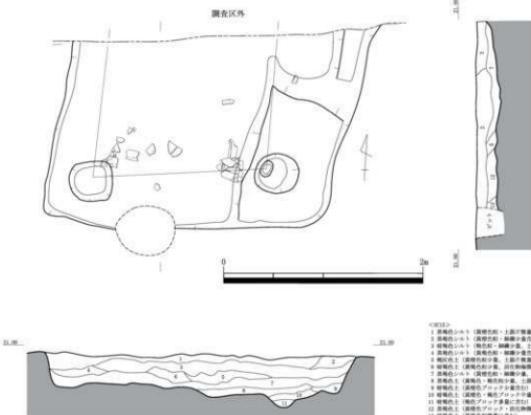




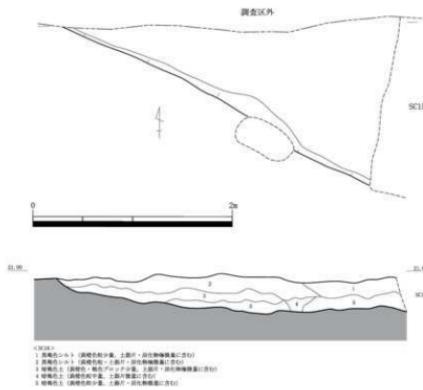
第28図 14号住居出土土器① (S=1/4)



第29図 14号住居出土土器② ($S=1/4$ 、*付は $S=1/5$)



第30図 15号住居 (S=1/40)



第31図 16号住居 (S=1/40)





16号住居 (第31図/図版7)

調査区北端中央部に位置し、大部分が調査区外へ延長する。15号住居に切られ18号住居を切る。掘り込みの立ち上がりは不明瞭である。検出面からの深さ0.3m。主軸方向、主柱数、平面プランとも不明である。調査区内に含まれる部分では、造構に伴うピット・土坑、ベッド状造構等の施設は確認されていない。また貼床も認められない。

埋土から微量の遺物が出土しているが、細片のため図示していない。

17号住居 (第32図/図版7)

調査区南端中央部に位置し、II・III区にまたがる。20・42・69号住居、30号土坑を切り、15号住居に切られる。平面プランは長方形。主軸は東西方向で長軸7.0×短軸3.2m、検出面からの深さ0.5mを測る。掘り方は明瞭な立ち上がりを見せず、残存状況は良好である。遺跡全体の中でも比較的大規模な住居である。II区での調査段階ではベッド状造構を有する住居と想定していたが、III区の調査時に造構の南辺の42号住居との切り合いの状況から、2軒の住居が存在すると判断した。

床面には全体に薄く黄褐色粘質土の貼床を施す。北辺に湿気抜きのためと見られる貼床下の溝状の掘り込みが認められる。2柱と想定されるが、明瞭な柱痕跡は確認出来なかつた。その他、土坑状の掘り込みも認められない。

出土遺物 (第33・34・35図/図版24・37・39・41・42・44)

埋土及び貼床内から遺物が出土している。鉢・甕類の小片で、鉢は小型のもののみが確認されている。底部は手持ちケズリ、外面に平行タタキの痕跡を残し、内面はヨコハケ調整を施す。甕は細片で全体の形状は留めない。弥生時代後半期の所産。石器類は石庖丁の小片、黒色緻密質安山岩のスクレイバーの他、磨製の石剣の鉗部分が出土している。石剣は表面の風化が激しく、刃部の状況は不明瞭である。その他、磁石2点、鐵製刀子を確認している。

18号住居 (第36図)

調査区北端東寄りに位置し、北側の大部分は調査区外へ延長する。15・16号住居に切られ、上部は大幅に削平されている。造構の立ち上がりは不明瞭で、特に東辺では非常に緩やかな傾斜となる。調査区内ではピット・土坑等の屋内施設の存在は確認出来ず、主軸方向、主柱数とも不明である。南辺の中央で不整なラインを描くが、平面プランは方形と推測される。東西4.2×南北残存長1.2mを測る。貼床及び床下の掘り込み等は認められない。

遺物は埋土内より極少量出土している。口縁が丸字型を呈する、弥生時代中期後葉の甕類を主体とする。

20号住居 (第37図/図版7)

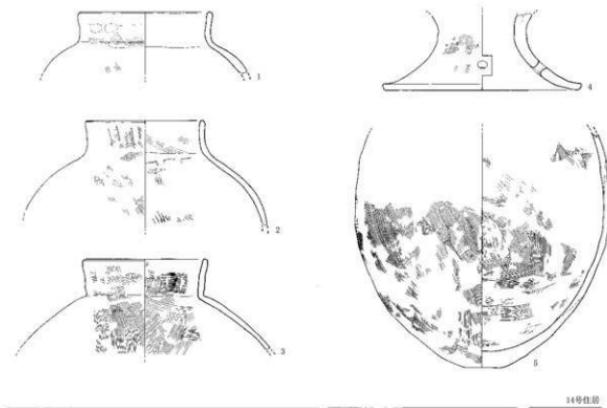
調査区南端中央に位置し、II・III区にまたがる。17号住居・14号土坑に切られ、30号土坑を切る。検出段階では2軒の住居が切り合うと想定したが、北辺のラインが真っ直ぐに通り、埋土の差異が認められなかったことから、1軒の住居と判断した。造構の残存状況は非常に良好である。主軸は東西方向で、長軸6.2m×短軸5.0m、検出面からの深さ0.5mを測る。

平面プランは長方形で2柱、柱間と南辺に土坑を持つ。柱穴は深くしっかりと掘りこまれているが、段掘りではない。土坑はいずれも埋土に乾土・炭化物を含まず、炉跡ではないと考えられる。北東隅に狭いテラスを持ち、南東隅の一部にのみ烟突が残る。全体に黄褐色粘質土の貼床を施し、貼床下には壁沿いに湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが全周する。構築時に粗く掘り込み、貼床を厚く広く貼り込むことで形状を整えたと思われる。

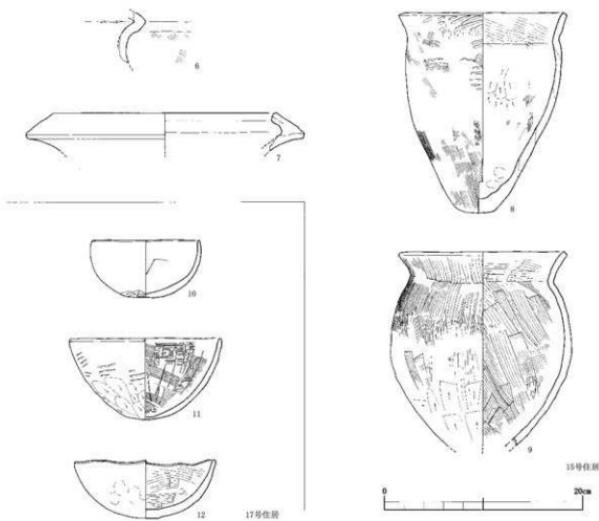
出土遺物 (第35・38・39・42図/図版24・43・45・46)

埋土上層を中心に多量の土器が出土している。同時期のまとまりを持った遺物であることから、住居廃棄時を示すものと考えられる。甕類を主体とし、比較的大型で形状を残すものが多い。甕の口縁部はL字型を呈し、内外面は摩滅が激しいがハケ痕跡が見られ、器皿は薄く丁寧なつくりである。弥生時代中期後葉の典型的な形状を示すものと、肩部に突帯をめぐらす大型のもの、やや内傾したもの等が混在している。



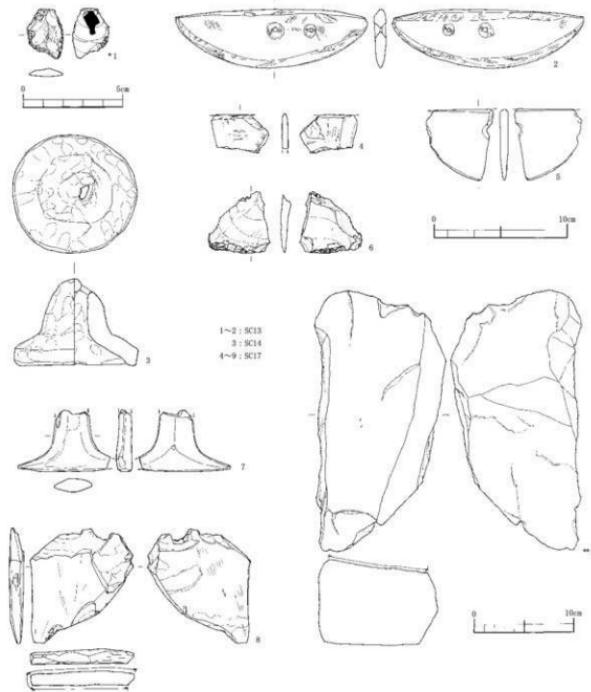


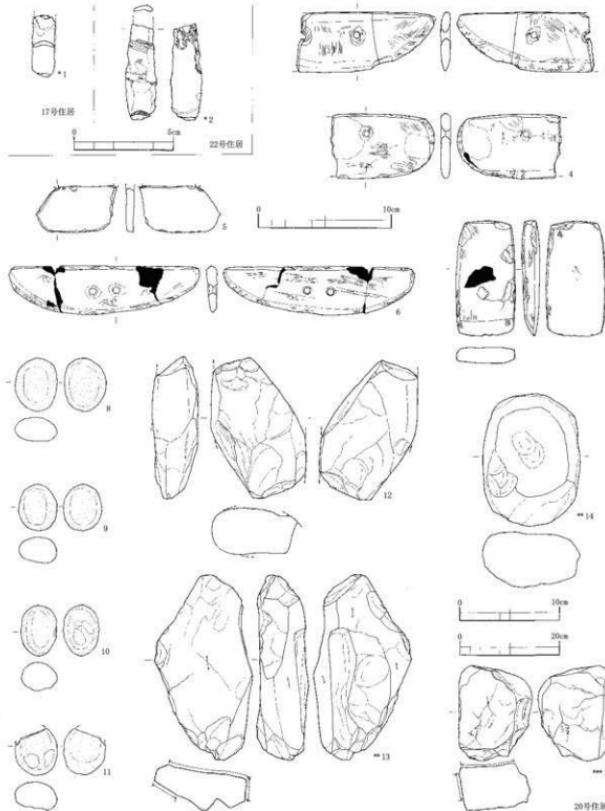
14号住居



15号住居

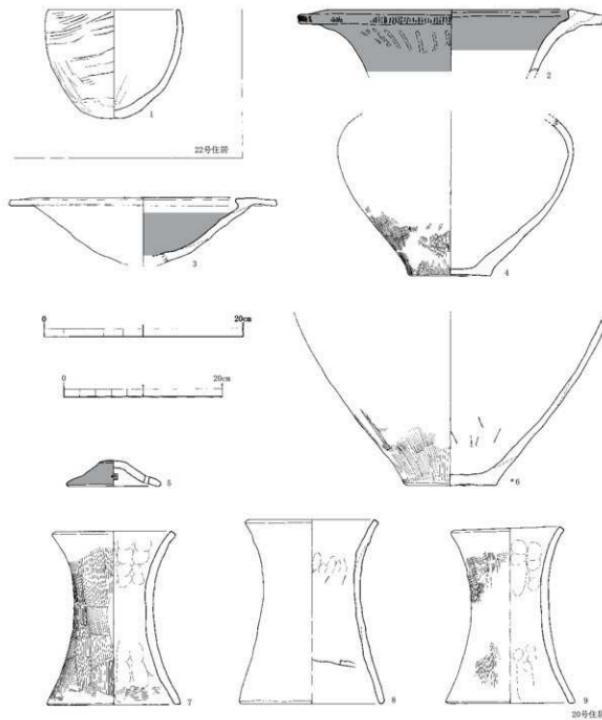
第33図 14・15・17号住居出土土器 (S=1/4)

第34図 13・14・17号住居出土土製品・石器 ($S=1/3$ 、*付は $S=1/2$ 、**付は $S=1/4$)



第35図 17・20・22号住居出土石器・鉄器
(S=1/3、＊付はS=1/2、＊＊付はS=1/4、＊＊＊付はS=1/8)

器台は鼓形で内面は指ナデ、外面はタテハケ調整、粘土帯の接合痕は残さない。この他に、壺口縁部片・高杯环部・小型蓋が出土しており、いずれも表面に円錐り痕跡を残す。器種はバリエーションを持ち、埋土の中でも高い位置から出土しているため、住居廃棄の際、何らかの祭祀的行為を行なった跡とも想定される。石器類は石庖丁4点、石斧、台石、砥石等多岐にわたる。石庖丁はいずれも刃部の研ぎ直しが認められる。石斧は玄武岩製の蛤刃石斧と蛇紋岩製の扁平片刃石斧。



第30図 20・22号住居出土土器 (S=1/4, *付は1/5)

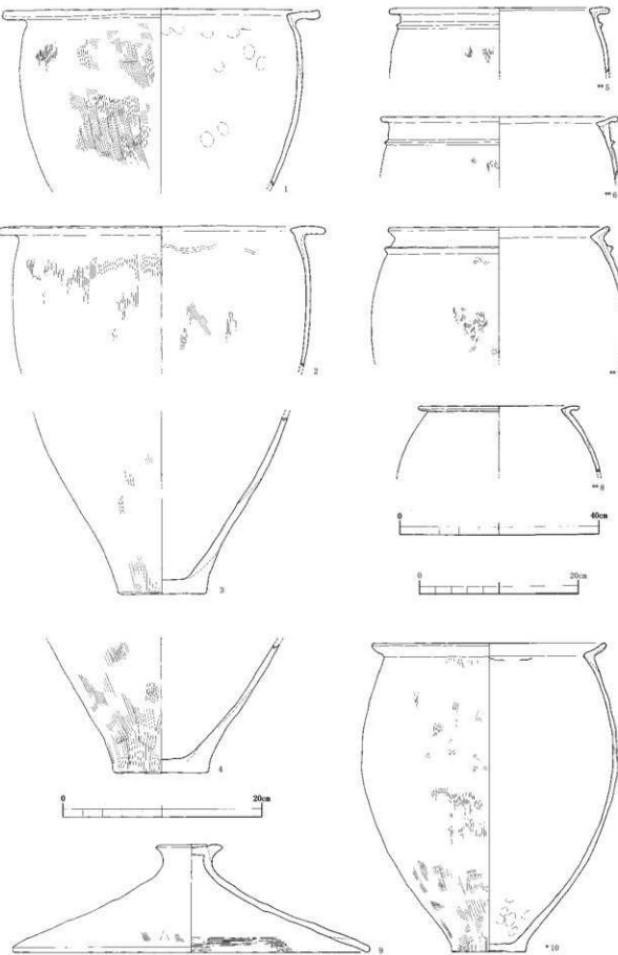
21号住居

II区での検出段階ではIII区での拡幅を想定して住居としたが、III区調査時に造構の広がりから土坑と判断し、14号土坑とした。そのため21号住居は欠番となっている。

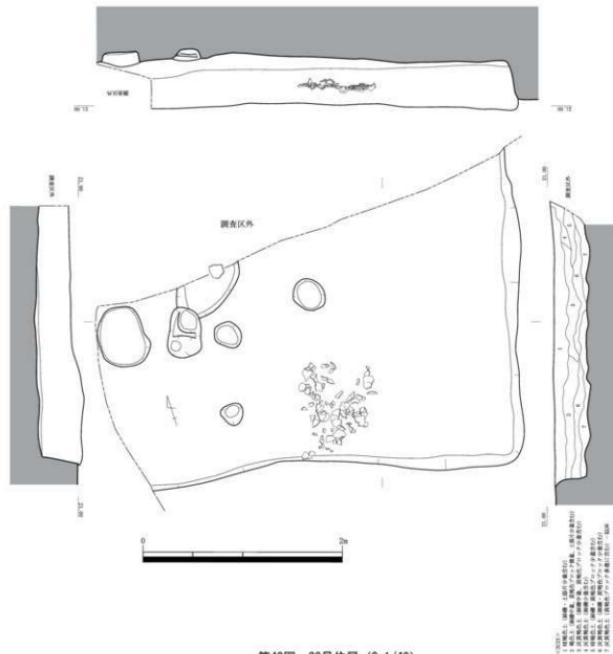
23号住居 (第40図/国版8)

調査区北西隅に位置し、北辺・西辺が調査区外へ延長する。14・25号住居を切る。住居に伴うと考えられるピットは確認出来ず、主軸方向、主柱数とも不明。北西隅の土坑状の掘り込みが、西辺沿いに設置されたものと想定出来るのみである。平面プランは方形と考えられる。上面の削平はそれほど及んでおらず、残存状況は比較的良好である。東西残存長4.25×南北残存長3.2m、検出面からの深さは0.38mを測る。ベッド状造構・細溝等の痕跡は認められない。また床席は施されておらず、埋土掘削が完了した段階で下層の14号住居プランが明瞭に認められた。南辺中央部でまとまった量の土器が出土しているが、造構





第39図 20号住居出土土器 (S=1/4、*付はS=1/5、**付はS=1/8)



第40図 23号住居 (S=1/40)

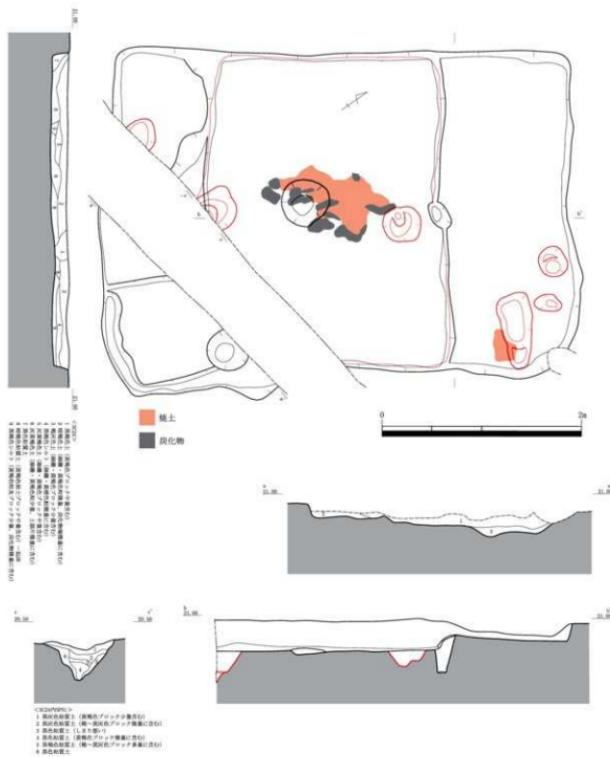
の使用時期を決定出来るものではない。

出土遺物 (第42・53図/図版43)

遺構図内に示したものを中心、埋土からまとまった量の遺物が出土している。いずれも小片であり、形状を留めるものは少ない。小型の甕・鉢類を主体とする。甕は頸部の屈曲が非常に緩やかな時期のもので、外面に平行タタキの痕跡を明瞭に残す。内面はハケ調整。鉢は体部が内溝する中型のものと、口縁が直立して小型甕の形狀を示すものが混在する。古墳時代初頭の所産と考えられる。その他、石庖丁1点を含む、極微量の石器が出土している。鐵製品は認められない。

24号住居 (第41図/図版8)

調査区南西寄りに位置し、II・III区にまたがる。19・26号住居に切られる。検出段階では北辺にのみベッド状遺構を有すると想定していたが、主柱の位置関係から南北にベッド状遺構を持つ、平面プランが長方形の住居と判断した。主軸は北東—南西で2柱、長軸4.7×短軸3.2m、検出面からの深さ最大0.3m



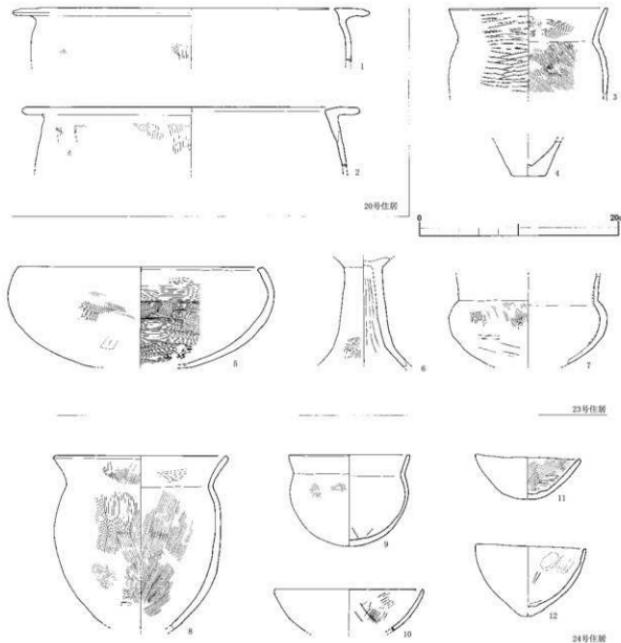
第41図 24号住居 (S=1/40)

を測る。主柱はベッド状造構の段差部分に掘り込まれたビットであると思われる。南北双方に幅1.2m、高さ0.1mの段掘りのベッド状造構を持つ。南東隅にのみ、壁沿いに細溝を掘り込む。ベッド状造構の上面を含め、全体に黄褐色粘質土の貼床を施す。柱間に併と思われる小型の浅い土坑を1基検出しており、その上面に焼土・炭化物が集中して分布している。炭化材の一部は木材の形状を留めていたが、焼失住居の根拠となり得るほどのまとまりではなかった。

出土遺物 (第42・53図/削脱24・25・43)

埋土から少量の遺物が出土している。小型の甕・鉢類を主体とする。甕は頭部がくの字形に屈曲し、外外面に丁寧なハケ調整を施す。薄手のもの。鉢類は底部が斜めに立ち上がるものの。平行タタキは見られない。その他、石庭丁1点を含む微量の石器と鉄製ヤリガンナが出土している。





第42図 20・23・24号住居出土土器 (S=1/4)

25号住居 (第43図/国版8)

調査区南西隅に位置し、南辺・西辺が調査区外へ延長する。23号住居に切れ、14号住居を切る。南北残存長 $3.2 \times$ 東西残存長 $0.36m$ 、検出面からの深さ $0.28m$ を測る。4主柱と想定したが、北東隅のピットは検出出来なかった。平面プランは正方形を呈すると思われる。南側を中心に黄褐色粘質土で薄く貼床を施す。貼床下は南東隅に不整形の土坑状掘り込みが認められる。北半部がやや高まるがしっかりと立ち上がりは認められず。下層の14号住居埋土を漂して掘削している可能性もあるため、ベッド状造構とは判断していない。その他、炉跡と考えられる土坑状の掘り込み等、住居に伴う遺構は認められない。

出土遺物 (第45・51図/国版24)

埋土からは層位を問わず多量の花崗岩礫、土器片が出土している。礫類は大型のものを含み、頭部外面にキサミを施した突帶をめぐらせる。内外面ともハケ調整で、平行タタキの痕跡は認められない。鉢は中型で体部が内済するものと、小型で斜めに立ち上がるものが混在している。小型鉢には外面に平行タタキが見られる。その他、舟形支脚がまとまって出土している。支脚上面が円形の平坦面を持つものと、砲弾形の形状を探るものがある。いずれも外面の調整は粗略で、平坦面を持つものには平行タタキの痕跡が顕著に残る。

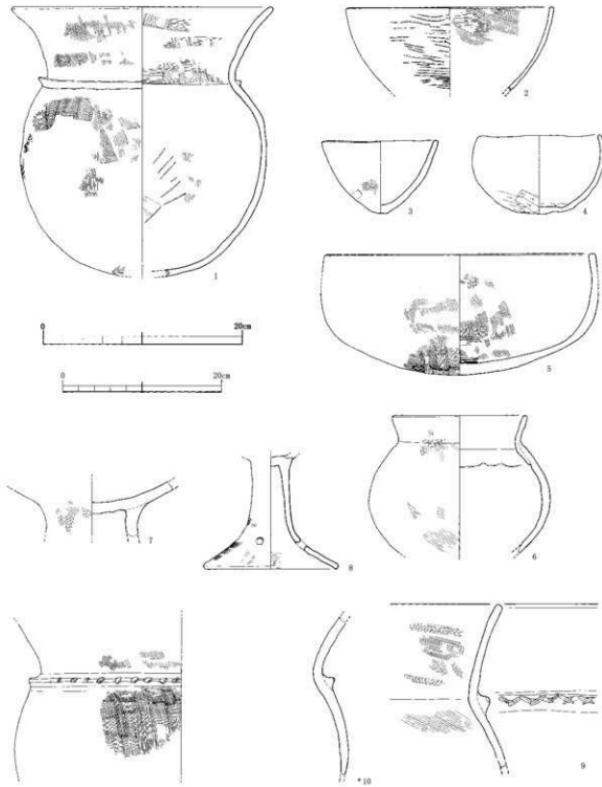


26号住居 (第44図/図版8)

調査区南端西寄りに位置し、24号住居を切る。19号住居との先後関係は不明である。上部が後世の造成により大幅に削平されており、南辺の立ち上がりは残存していない。主軸は北西—南東方向で長軸残存長2.95×短軸3.1mを測り、2主柱と考えられる。極めて薄いが全体に褐色粘質土の貼床を施す。中央東寄りの床面に炭化物が認められたが少量であり、明確に炉跡と判断できる掘り込みは認められない。

出土遺物 (第60図/図版40)

埋土から極微量だが、土器・石器類が出土している。土器類はいずれも小片で図示していないが、古墳



第45図 25号住居出土土器 (S=1/4、*付はS=1/5)



時代前期の所産。その他、グリーンタフの管玉が1点出土している。

<土坑>

10号土坑（第46図/図版8）

調査区中央に位置し、南北0.7×東西0.75m、深さ0.5mを測る。切り合い関係のない単独の遺構で、平面プランは不整円形を呈する。埋土は黒褐色シルトを主体とし、水平堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種と考えられる。

埋土からは微量の土器・石器が出土しているが、細片のため図示は控えた。いずれも古墳時代前期の所産である。

11号土坑（第46図/図版8）

調査区北辺沿いの西寄りに位置する。長軸1.0×短軸0.75m、深さ0.5mを測り、平面プランは不整形を呈する。埋土の堆積状況からは大型の柱穴とも考えられるが、これと関連する他のピットは確認出来ていないため、ここでは土坑として扱った。調査区外へ延長する掘立柱建物の一角を構成している可能性も考えられる。

出土遺物（第146図）

埋土から少量の土器が出土しているが、いずれも小片のため上点のみ図示している。口縁部が匁字型を呈する甕の口縁～体部片で、弥生時代中期後葉の所産。

13号土坑（第46図）

調査区北西に位置し、北半分は調査区外へ延長する。東西1.35×南北残存長0.85m、深さ0.15mを測り、26号住居に切られる。平面プランは長方形と思われる。上部は後世の造成によって削平されており、残存状態は悪い。廃棄土坑の一種か。

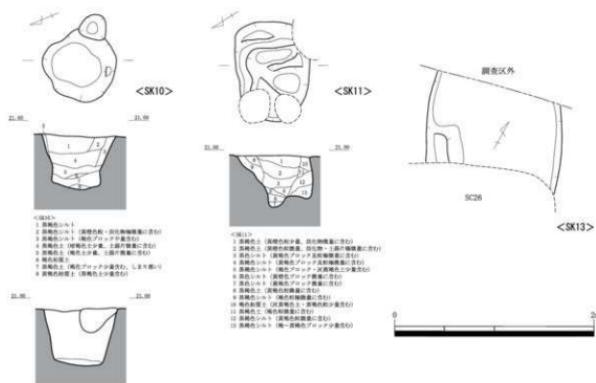
埋土から極微量の土器片・石器類が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。土器は古墳時代の所産。

14号土坑（第47図/図版7）

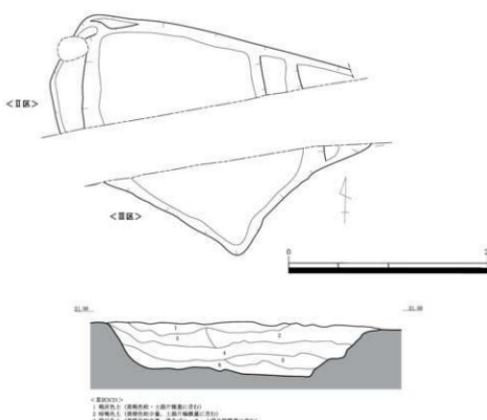
調査区南端中央部に位置し、II・III区にまたがる。20号住居の上面で検出したが、III区では明瞭な平面プランを確認出来ず、一部を調査区壁面の土層断面の状況から復元している。II区における検出段階では、III区に大部分を持つ堅穴住居と想定していたが、延長部は極めて狭域であったため土坑と判断した。東西2.7×南北1.9m、深さ0.45mを測り、平面プランは不整長方形を呈する。東西双方に浅いテラス状の段を持つ。その他、遺構に伴うピット等は確認されていない。埋土は褐灰～灰黄褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。

上層からまとまった量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものは認められなかった。いずれも弥生時代後期の所産で、この時期の廃棄土坑の一種と考えられる。





第46図 10・11・13号土坑 (S=1/40)



第47図 21号住居 (S=1/40)



第46図 Ⅲ区地界記測図 (S-1/250)





V. III区の遺構・遺物

(1) 調査の概要

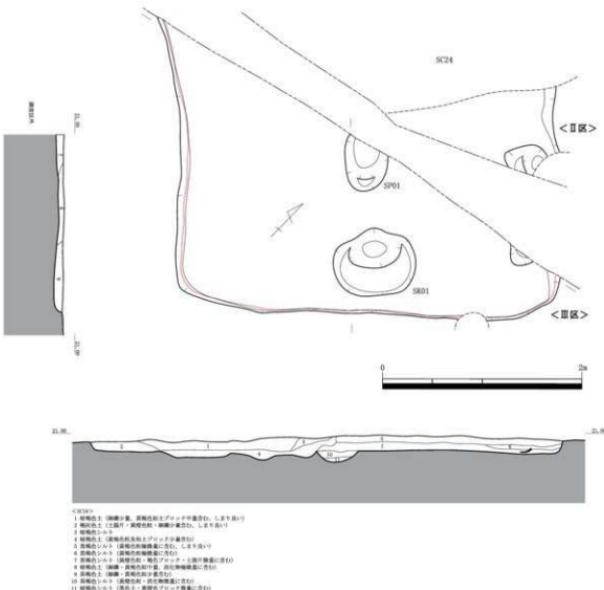
III区は本遺跡の主体となる部分である。遺構検出面は20.35~20.75mの褐色ローム層で、ほぼ平坦な地形となっている。遺構密度は非常に高く、同一箇所での住居同士の切り合いが極めて多いため、出土遺物については一部遺構の先後関係を優先して所属遺構を決定した。II区とはブロック断を隔てて連続しており、双方にまたがる遺構については検出段階で同一であることが明瞭なものに関しては、共通の遺構番号を付した。これらうち、19・42・22-45号住居については本章で報告する。

(2) 遺構と遺物

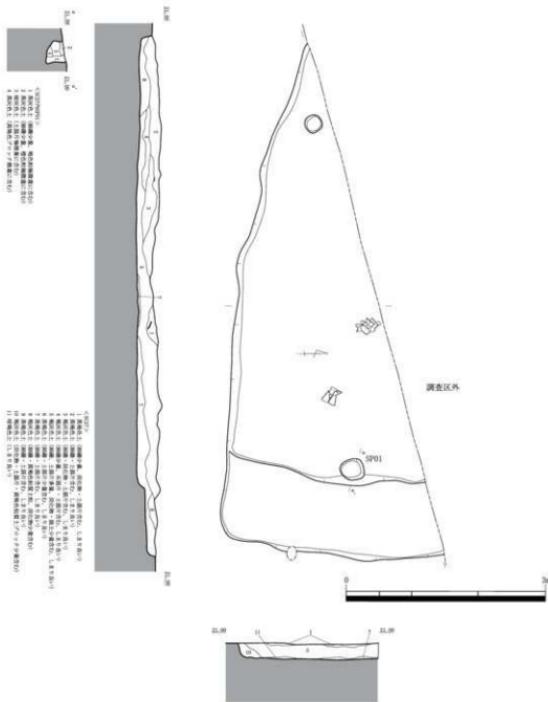
<竪穴住居>

19号住居（第49図/図版10）

調査区北西に位置し、II・III区にまたがる。24号住居を切る。II区での検出段階では明瞭な平面プラン



第49図 19号住居 (S=1/40)



第50図 27号住居 (S=1/60)

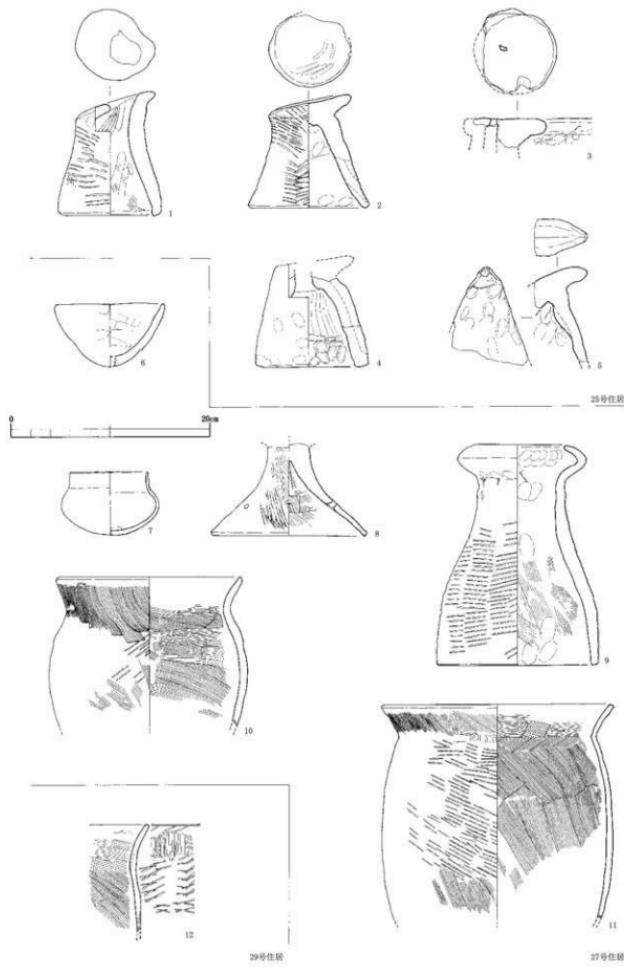
を確認することが出来ず、先後関係を無視して24号住居を先行して掘削している。Ⅲ区では平面プラン及び北壁面の土層観察から、24号住居が古い遺構であることを確認出来た。南北最大残存長2.8×東西4.0m、深さ0.1mを測り、主軸を北西—南東とする2柱の長方形住居と考えられる。但し、Ⅲ区において主柱と想定されるピットを検出しているものの、これと対になるものは確認出来ていない。南辺沿いに土坑状の掘り込みが認められるが、埋土内に炭化物・焼土等は含まず、炉跡ではないと思われる。

埋土から少量の遺物が出土しているが、細片のため図化は控えた。

27号住居（第50図/図版10）

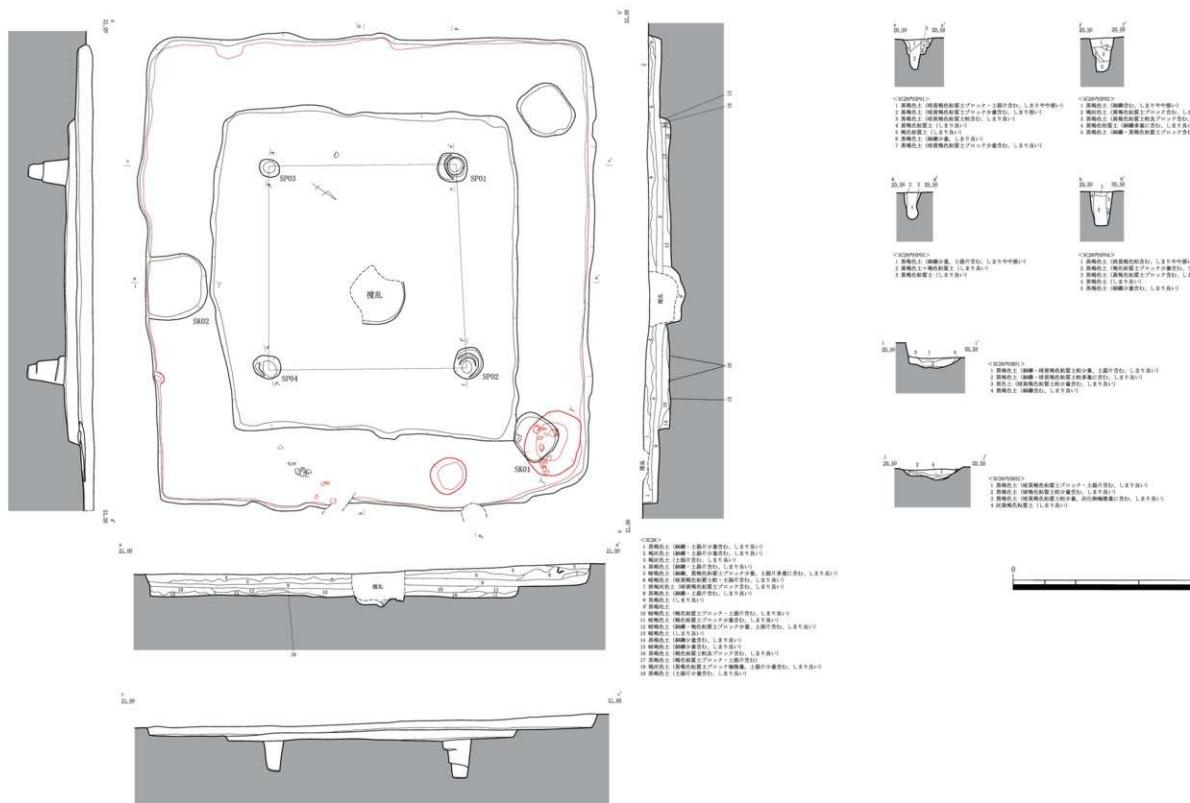
調査区北端東寄りに位置し、38・66号住居、9号溝を切る。北半部が調査区外へ延長する。上部は後



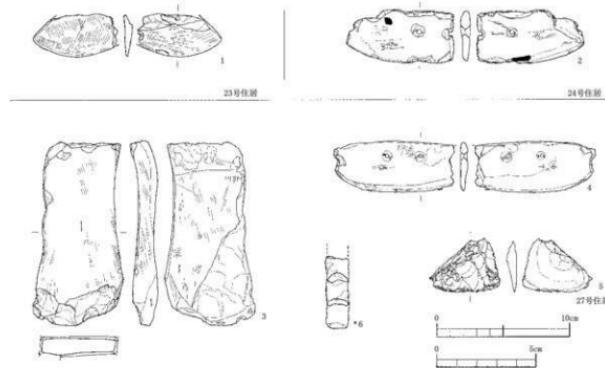


第51図 25・27・29号住居出土土器 (S=1/4)





第52図 28号住居 (S=1/60)



第53図 23・24・27号住居出土石器・鉄器 (S=1/3、*付はS=1/2)

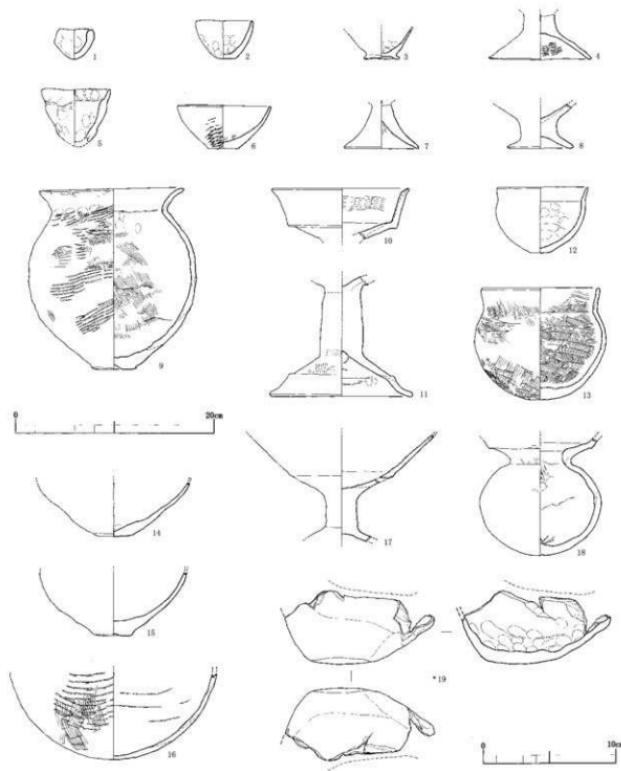
世の造成によって削平されており、残存状況は悪い。主軸は北西—南東方向で長軸残存長7.6m、短軸残存長3.3m。検出面からの深さは0.25mを測る。平面プランは長方形を呈すると考えられる。西側は不明であるが2主柱と見られ、東辺に幅1.0m、高さ0.15mのベッド状造構を伴う。ベッド状造構は段掘りで構築されている。住居全体にわたって貼床の痕跡は認められない。

出土遺物 (第51・53図/図版25・37・39・41・43)

埋土から少量の遺物が出土している。うち数点は造構図に図示したように床面直上からの出土で、造構の時期を示すと考えられる。甕は頭部が比較的明瞭に屈曲し、外面に平行タタキが残るもの、内外面ともハケ調整が目立つ時期のもの。器壁は薄くなりつつある。鉢には平行タタキが認められない。口縁部が直立し、内外面の調整によって器壁が非常に薄い小型甕が含まれている。高杯は脚部4カ所に穿孔を施し、外面はミガキ調整を施す。器台は上部が内側に屈曲し、外面には平行タタキが残る。古墳時代前期の早い段階のものと考えられる。その他、ミニチュア土器1点と、石臼丁、スクレイバー、扁平な砥石等、少量の石器類と鉄製ヤリカンナが出土している。

28号住居 (第52図/図版10)

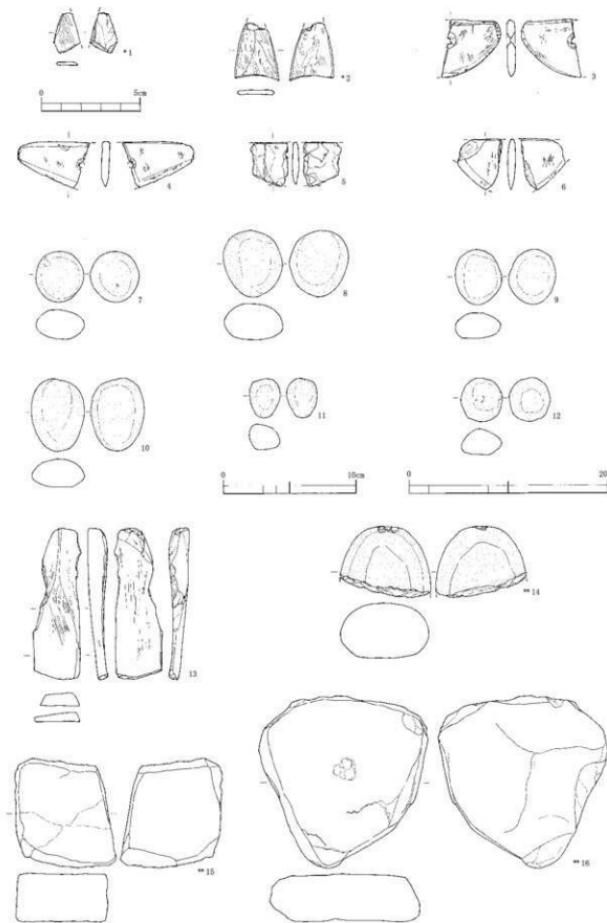
調査区中央に位置し、33号住居に切られ、49号住居、16・17号土坑、9・10号溝を切る。本遺跡の中では最も規模の大きい住居である。立地と規模、後述する出土遺物の様相などから、一般的な住居ではなく、集落内の中心的な役割を果たしたものと考えられる。主軸は北東—南西方向で、4柱の構造を探る。長軸7.4×短軸7.1m。検出面からの深さは最大0.5mを測る。柱穴は小規模だが深く掘り込んでおり、土層断面から柱痕跡が確認されている。平面プランは差異の少ない長方形で、周囲に幅1.2m、高さ0.15mのベッド状造構が巡る。ベッド状造構は東西及び北辺は浅い段掘りに厚く粘土を貼り付けており、南辺は住居掘削時に出たと見られる廃土を盛り上げて構築している。ベッド状造構の検出段階では、主軸と同じくする住居との切り合ひ関係も想定したが、南辺のベッド状造構にトレーナーを入れたところ、土盛りによる構造が見て取れ、ベッド状造構内から切り合ひ住居の存在を示すピット等の掘り込みが認められなかったことから、1軒の住居と判断した。床面にはベッド状造構上面を中心に、部分的に黄褐色粘質土による貼床を施す。中央に深い土坑を持つが、壊乱により大部分は破壊されていた。残存する埋土には炭化物・焼土等が含まれないことから、焼跡の可能性は低いと思われる。ベッド上にも、西・北側と南東中央部に土坑状の掘り込みが認められるが、それぞれの用途は不明である。



第54図 28号住居出土土器 (S=1/4, *付はS=1/3)

出土遺物 (第54・55・60図/図版25・34・35・37・38・40・43・44・46)

埋土及び土盛りによって構築されたベッド状遺構内からまとまった量の遺物が出土している。甕、高杯を主体とするが、形状を留めるものは少ない。甕は外面に平行タタキを残すものの、外形は頭部をくの字形に屈曲させ、胴部に張りを持つ古墳時代前期の外来系要素を持つ。その一方で小型甕は口縁部の直立がやや開き気味で、胴部の張りも頼い。出土遺物にはミニチュア土器が多く含まれ、その形状も甕・鉢・高杯と多岐にわたる。小型の二重口縁甕は焼成不良だが、胎土は極めて精良である。その他、鳥形と考えられる土製品の体部が1点出土している。胎土は砂粒を多量に含み、内面に黒斑の目立つ粗略な造りだが、

第55図 28号居出土石器 ($S=1/3$ 、*付は $S=1/2$ 、**付は $S=1/4$)



設置を意識した平坦面が底面にあり、尾と認識出来る形状を持つため、鳥形と判断した。市内では津古生掛古墳において鶴形土製品と二重口縁壺が出土しており、同様の組み合わせに注目出来よう。石器類は、花崗岩の台石、磨石、磨製石盤、石臼等の他、金属製品の研磨に使用したと考えられる磁石が出土している。まとまった量の投弾も出土しているが、図示は一部に留めた。

29号住居（第56図/国版10）

調査区西端に位置し、南西半部は調査区外へ延長する。62・73・80号住居、25号土坑を切る。上面は後世の造成によって大きく削平されており、残存状況は非常に悪い。主軸は北東—南西方向で長軸残存長4.25×短軸4.9mを測る。平面プランは南西に長い長方形で、2主柱と考えられる。SP01の埋土上層には多量の土器を含んでおり、住居施設の際、柱を抜き取って廃物を埋め込んだと思われる。柱間に土坑状の掘り込みを持つが、形状は不整であり炉跡とは考えがたい。北東に足場状の2段のテラスが見られるが、用途は不明である。低い方のテラスは黄褐色粘土質を盛り上げて構築されている。全体に薄く貼床を施し、南東側の貼床下には、保氣抜きのためと見られる構造の掘り込みがある。貼床下から小型のビットを検出しているが、住居に伴うものかは不明である。

出土遺物（第51・60図/国版40）

埋土及び住居内ビットより少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものは極わずかである。甕は頸部の屈曲が極めて緩く、体部に平行タタキの痕跡を明瞭に残す時代のもの。弥生時代後期の所産。その他、微量の石器・鉄器、焼土塊と碧玉製の管玉が1点出土している。

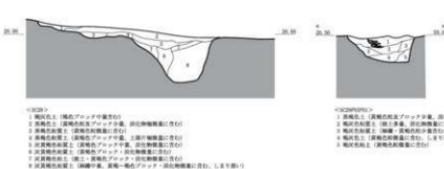
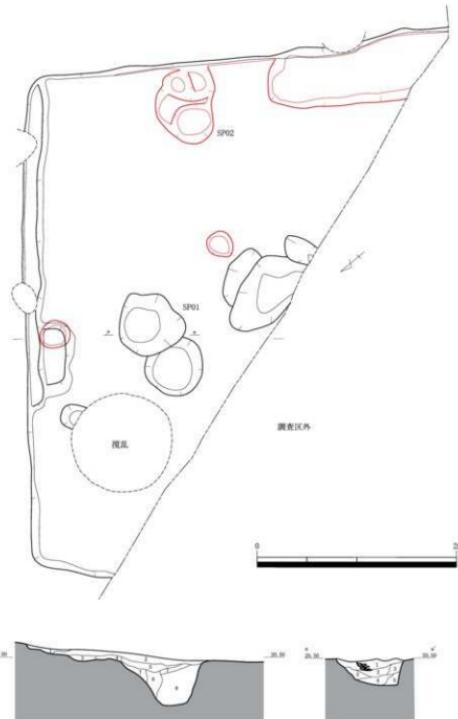
30号住居（第57図/国版10・11）

調査区南端中央部に位置し、南辺は調査区外へ延長する。主軸は南北方向で南北残存長3.6×東西3.8m、検出面からの深さは0.35mを測る。平面プランは正方形と考えられる。4主柱で南東部分は調査区外に所在すると想定したが、柱穴は極めて浅く、遺構縁辺のビットを柱穴とする、別の構造を探る可能性もある。西辺および北辺中央部に細溝が掘り込まれているが、形状にはそれぞれ差異がある。中央に炉状の浅い土坑を、西辺沿いにも用途は不明であるが同じ形状の土坑を確認している。床面は全体に褐色粘土質で極薄い貼床を施す。

埋土には遺物の他、花崗岩礫・炭化物・焼土が多量に含まれていた。土器類は炉跡上にまとまりが見られ、埋土の中層に位置する。原型を留めるものが多く、土器上に花崗岩礫が乗っている状況が認められる。意図的に礫で土器を破壊したと考えることも出来る。炭化物・焼土については、遺構検出段階からその存在が確認出来、埋土上層～下層までほぼまんべんなく含まれる。面的な広がりは下層～床面直上で認められ、炉跡と考えられるSK02上を中心として、遺構のは全面にいたっている。特に中央部と北端には硬く焼き締めたブロック状の焼土の盛り上がりを確認している。炭化物は焼土を取り巻くような位置で検出しており、材の形状を留めるものが多く見られた。その他、構築材としての単位をとらえることは出来なかったが、蓋状のまとまりを持つ炭化物も見られた。貼床上には、被熱の痕跡である硬化や赤化した部分は認められなかつたものの、焼失住居である可能性が高いと言えよう。土器類は焼失後の埋め戻しに伴うものと考えられ、何らかの祭祀的な行為の実施も想定される。

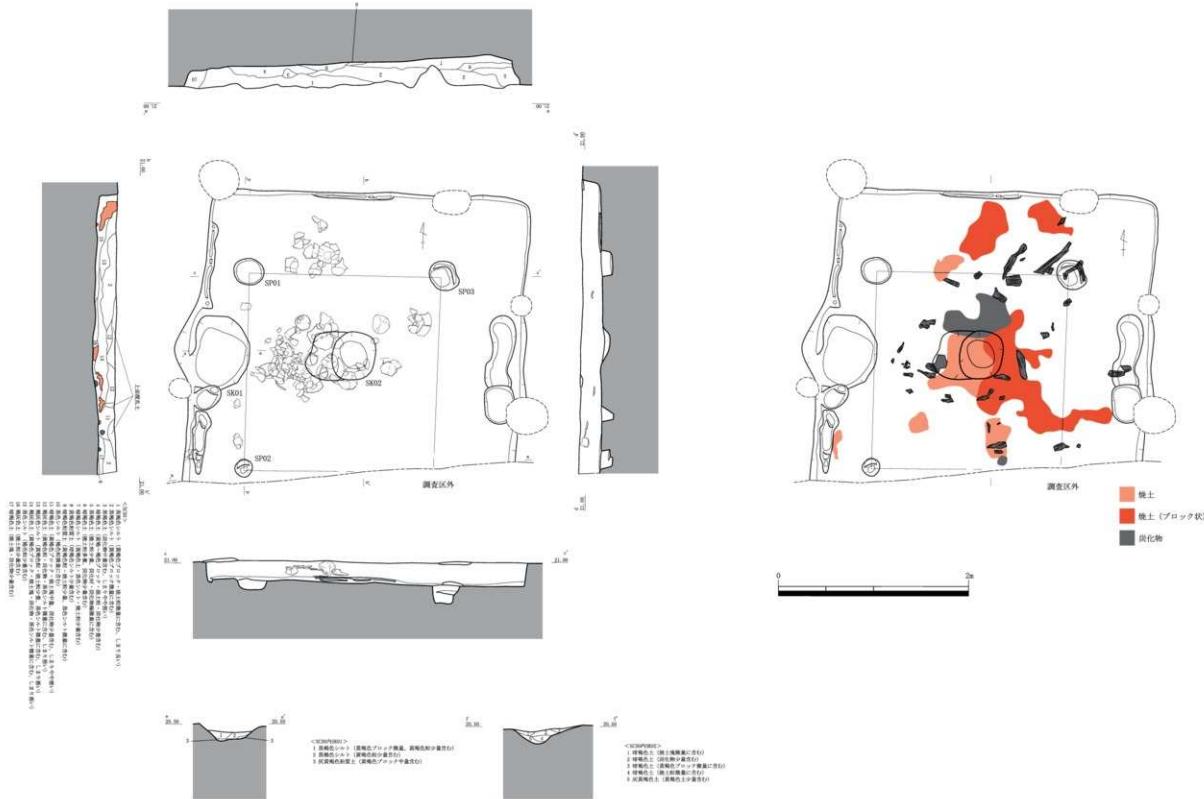
出土遺物（第58・59・60図/国版25・26・35・39・44）

遺物は遺構図に示したもののが大半を占める。器種は甕・小型壺・高杯等多岐にわたり、土製品・鉄製品も含まれる。甕は口縁部が直立に近く立ち上がり、胴部は長大化、頭部が屈曲しているもの。しかし胴部には、ハケで消されているものの平行タタキの痕跡が認められる。高杯は杯部内面に段を持ち、頸いS字型を探る。内外面ともハケ調整のもの、これと直行する放射状断面を施す。小型壺は口縁部が胴部から一連となって立ち上がるものの、外側に平行タタキを残し、口縁部が外反して立ち上がる鉢的な形状のもの、口縁部が直立して胴部が張る。古墳時代前期の典型的な形状を示すもの等。複数の種類が混在している。台付鉢は外面がケズリを作りハケ、内面が工具ナメによる調整を施す。その他、底部がV字形にすぼまり、への字の把手を持つ甕が出土している。出土状況から、住居が焼失し、その完全な廃棄に伴って意図的に配置され、破壊された一括資料と考えられる。古墳時代初頭の所産。



第56図 29号住居 (S=1/40)

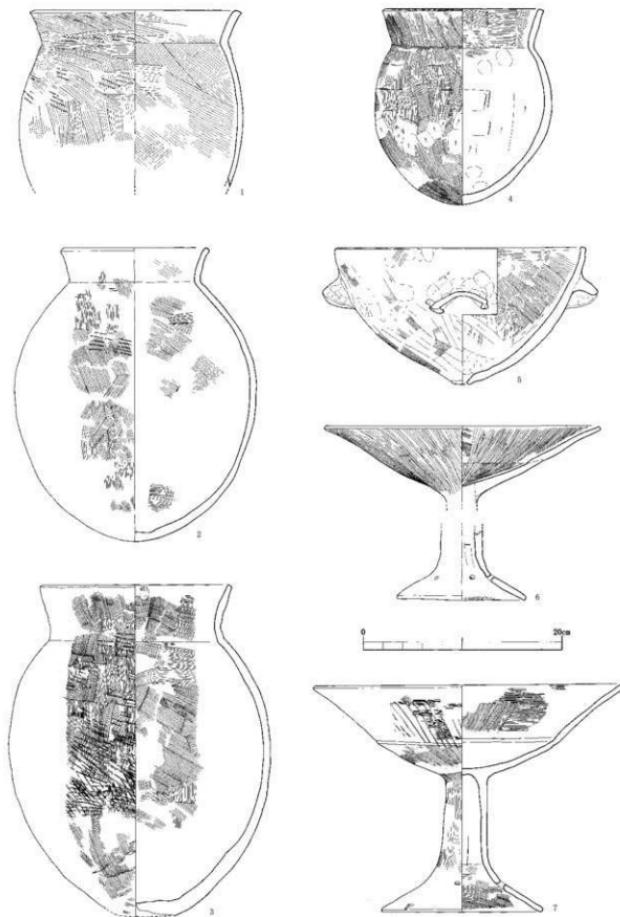
石器類は金属製品の研磨に使用したと思われる砥石が1点認められたのみである。但し、本遺構から鉄製品の出土は確認されていない。土製品は円形で外面に刺突紋を施した円形の鋤鍤車、アーモンド形の投弾が出土している。



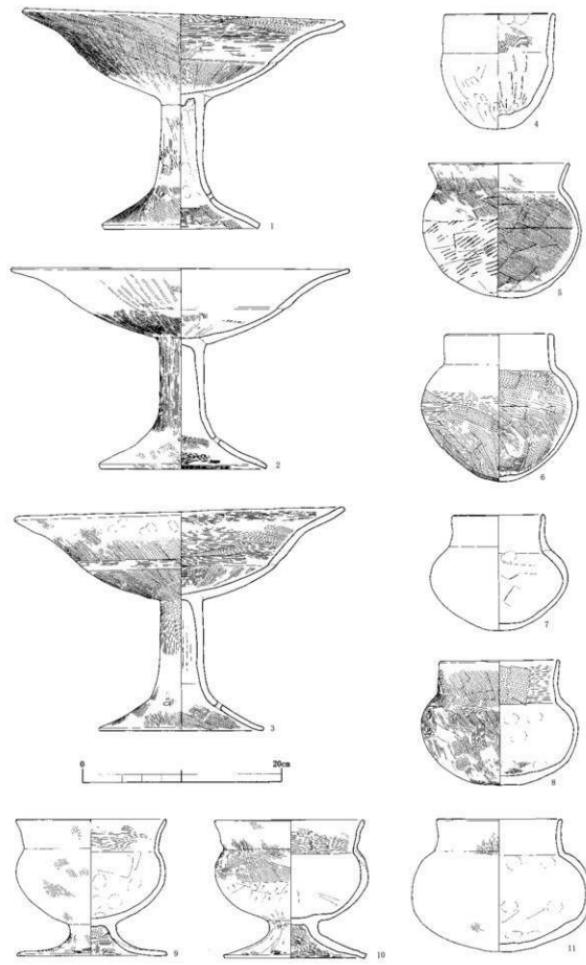
第57図 30号住居 (S=1/40)





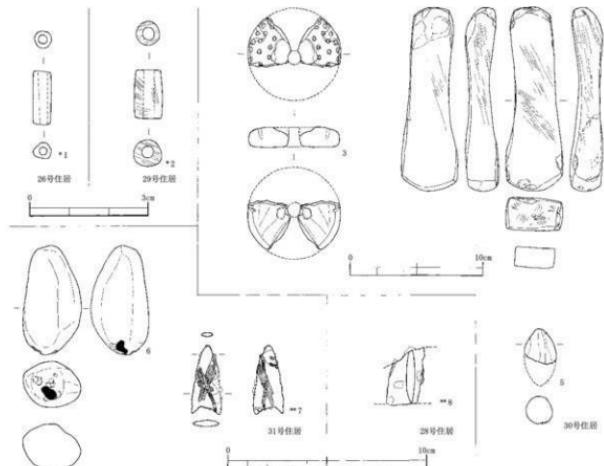


第58図 30号住居出土土器① (S=1/4)



第59図 30号住居出土土器② (S=1/4)





第60図 26・28・29・30・31号住居出土土器品・石器・鐵器 (S=1/4、*付はS=1/1、**付はS=1/2)

31号住居 (第61図/図版11)

調査区南端西寄りに位置し、39・41・47号住居、9号溝を切る。表土掘削時に上部を若干削平している。南辺は調査区外へ延長する。主軸は北西—南東方向で長軸残存長4.4×短軸4.7m、検出面からの深さは0.45mを測る。平面プランはややひずみがあるものの長方形と考えられる。2主柱で柱間に浅い土坑を、東辺中央にピットを作らう土坑を持つ。全面に黄褐色粘質土の貼床を施している。ベッド状造構や貼床下の掘り込み等は認められない。

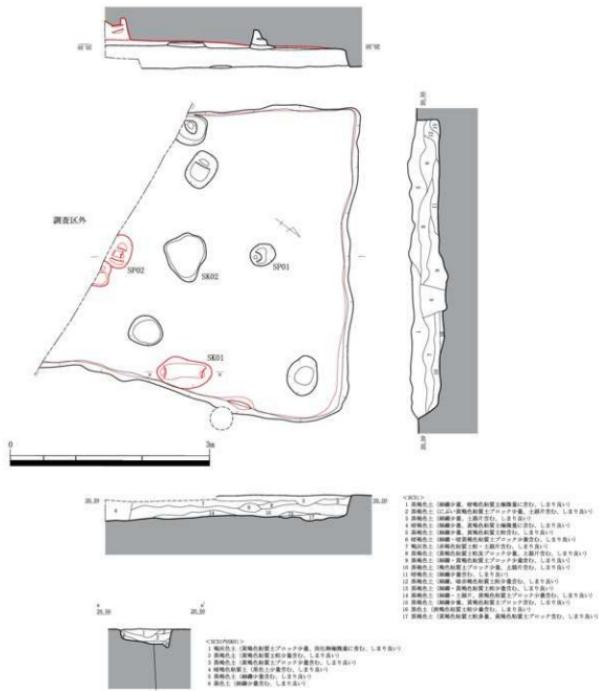
出土遺物 (第60・68図/図版36・45)

埋土から少量の土器、石器、鉄製品が出土している。甕は体部が長胴化し、頸部の屈曲がやや緩くなつた時期のもの。内面タテハケ、外面は体部がタテハケ、底部はケズリ調整を施す。甕は長頸甕が2点出土しているが、口縁部が直立するタテハケ調整で、頸部に二重の貼付突帯を持つ。胴部は肩から張りを持つて広がる。弥生時代末の所産。

石器類は磨石、叩石、投彈等が出土している。その他、X字型に植物繊維の痕跡が残る鉄鎌が1点確認されている。

32号住居 (第62図/図版11)

調査区中央部南西寄りに位置し、41・47・58・67号住居、16号土坑、8・9・10号溝を切る。主軸は南北方向で長軸5.8×短軸5.4m、検出面からの深さは最大0.53mを測る。残存状況は良好である。平面プランは長方形で、2主柱の構造をとる。主柱と近接して別ピットがそれぞれ掘り込まれており、補助的な役割を果たした可能性が考えられる。北・南辺から西辺へそれぞれL字形に延びる、幅0.9m、高さ0.1mのベッド状造構を持つ。ベッド状造構は西辺中央にのみ意図的な空白設定が見られることから、この部分が入口であったと考えられる。この部分に2基のピットを検出しているが、入口に開通する施設の痕跡か。柱間の中央に浅い土坑を、ベッド状造構の北東隅に深い土坑を持つ。中央の土坑は微量だが埋土に炭化物を含み、上面にも炭化

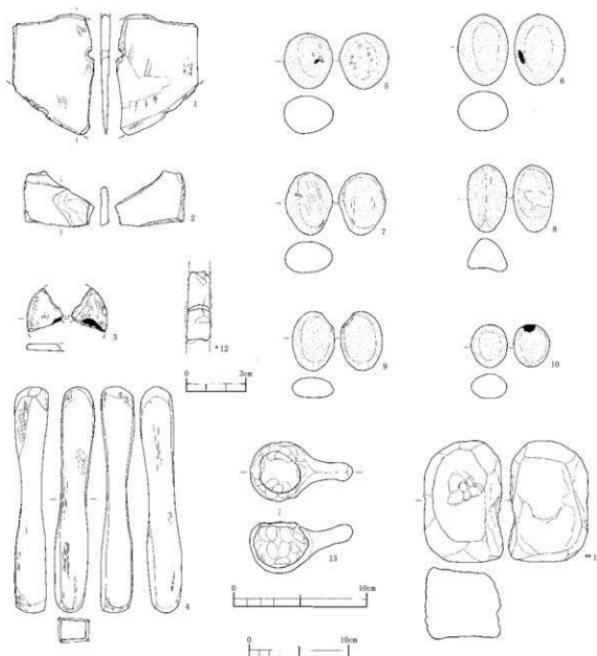


第61図 31号住居 (S=1/60)

物の広がりが見られることから、炉跡と思われる。ベッド状造構上も含めて四周ほぼ全体に細溝が認められる。炉跡と判断したSK02周辺以外にも、焼土・炭化物の広がりが認められたが、焼失住居であるとは考えがたい。

出土遺物 (第63・64・65図/図版26・27・37・39・43・44・45・46)

床面直上と埋土内、屋内土坑内から多量の土器、石器類が出土している。比較的形状を留めるものが多い。土器は甕・壺を主体とし、甕は口縁部がくの字形に屈曲し、長胴化した胴部が張りを持ってレンズ状の底部へ繋がる時期のもの。外面に平行タタキが残るものも含むが、タテハケ調整が優位である。頸部に貼り付け突帯を持つ大型のものも1点だけが出土している。小型壺は口縁部が直立するものと、外反するものとが混在している。壺は胴部が円形の短頭壺と、口縁部が屈曲するものの、頸部に貼付突帯を持つものと



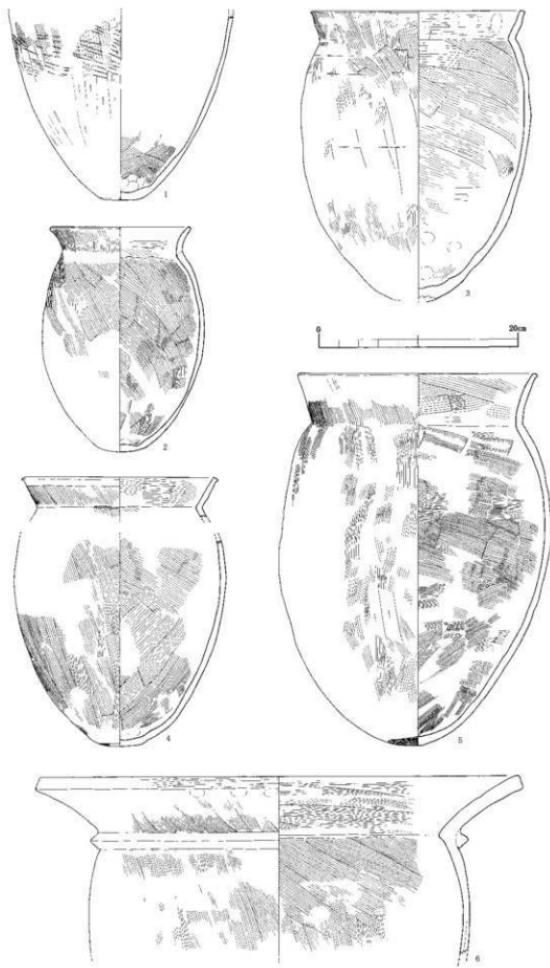
第63図 32号住居出土石器・鉄器 (S=1/3、*付はS=1/2、**付はS=1/4)

がある。鉢類は体部が内凹し、底面にケブリ調整を施す。口縁部が屈曲して外反し、短い脚部を持つ台付鉢は、大小の2点が出土している。器台は鼓形の上部が広く外反したものと舟形が混在する。高杯は杯部内面に段差を持ち、細いS字形を呈する。その他、柄杓型土器品、ミニチュア土器が出土している。

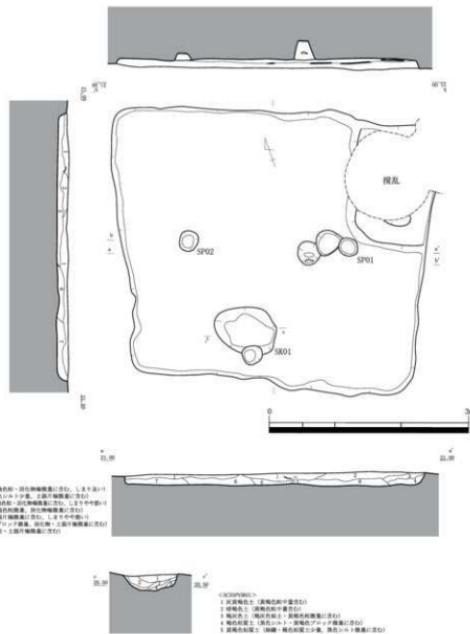
石器は未成品を含む石臼、砾石、台石、筋鍤車等が出土している。砾石はSK01からの出土だが、金属製品の研磨に使用するものと考えられる。出土遺物に鉄製ヤリガンナが含まれているが、関連するものか。投弾は6点のみ図示しているが、それ以外にも多数の出土が認められる。

33号住居 (第66図/図版II)

調査区中央部東寄りに位置し、28・40号住居、9号溝を切る。主軸は北西—南東方向で長軸4.6×短軸4.0m、横出面からの深さは0.18mを測る。平面プランはひずみのある長方形で、主柱は2本の構造を探る。北東隅に段掘りで構築した幅1.1m、高さ0.1mのベッド状遺構を持つが、近代の井戸によって大半が破壊されている。南辺中央にピットを伴う土坑を確認している。埋土内に炭化物・焼土は全く含まれないことから、炉跡とは判断しがたい。床面には貼床を施した痕跡は認められない。遺構底面は平坦で凹凸も



第64図 32号住居出土土器① (S=1/4)



第66図 33号住居 (S=1/60)

とほしく、構築時より丁寧な掘削が行なわれている。

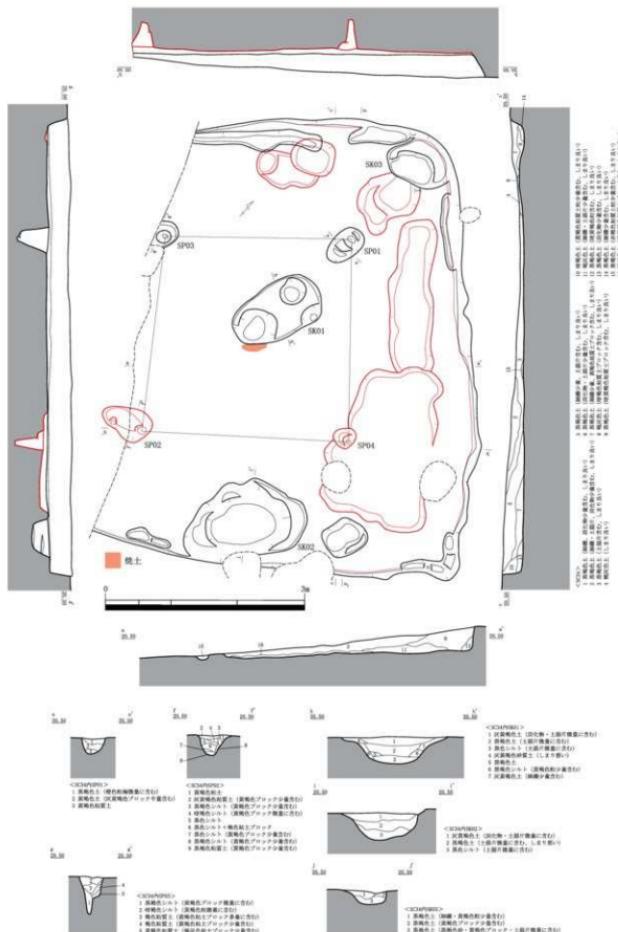
出土遺物 (第68図)

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めるものはない。甕は外面を工具ナデで調整した平底のもの。蓋は外反する長頸のもので、脇部に張りを持つ。内外面とも幅の広いハケ調整が施される。

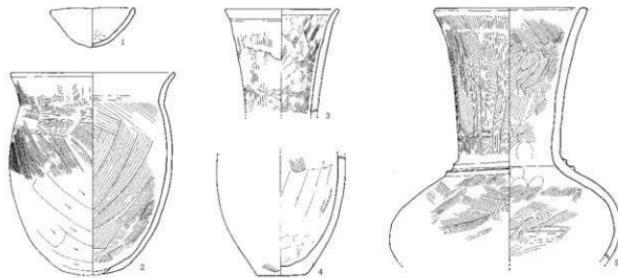
その他、図示は控えたが投弾・石斧片等、微量の石器類が出土している。

34号住居 (第67図/図版11)

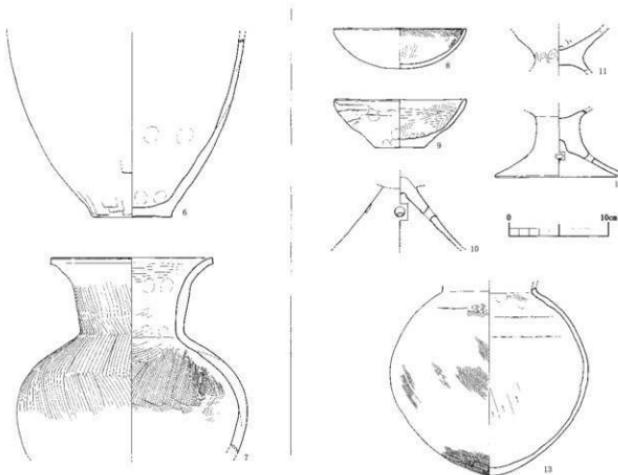
調査区南西隅に位置し、63号住居を切る。南西部約3分の1が調査区外へ延長する。後世の造成により上部が削平されており、残存状況は悪い。特に南西寄りが顕著である。主軸は北西—南東方向で東西6.8×南北残存長5.6m。検出面からの深さは最大0.46mを測る。平面プランは正方形を呈すると考えられる。4柱で中央にピットを伴う土坑を持つ。土坑脇に少量の焼土が認められ、埋土に炭化物を含むことから、炉跡と考えられる。柱穴はいずれも段掘りで深さを持ち、しっかりとした構造を探る。中央土坑の他、



第67図 34号住居 (S=1/60)



31号住居

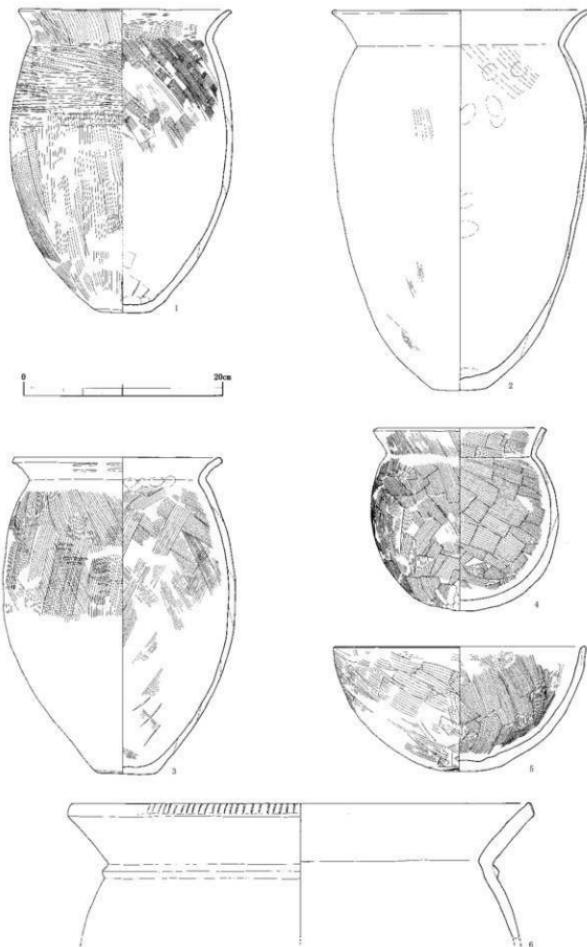


33号住居

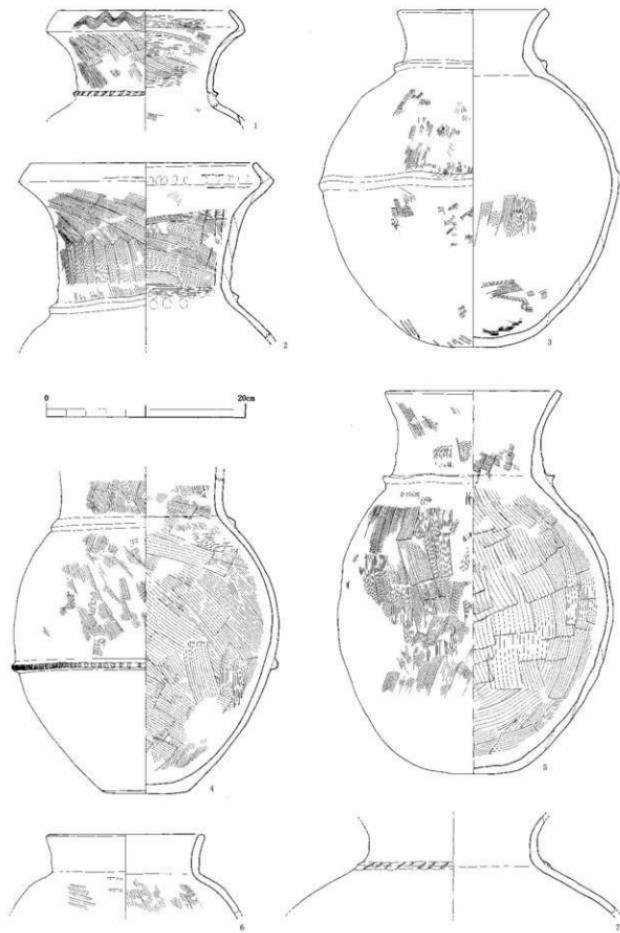
34号住居

第68図 31・33・34号住居出土土器 (S=1/4)

東辺中央、北西側にも土坑を持つが、それぞれの用途は不明である。周囲に断続的に細溝を掘り込んでいる。貼床は黄褐色粘質土を使用して部分的に施し、貼床下には北辺にのみ湿気抜きのためと見られる溝状の掘り込みが、北東・北西には不整形の土坑状の掘り込みが認められる。北西・南辺に一部高まりが確認出来るが、造構築時の掘り残し等と考えられ、ベッド状造構ではないと判断している。

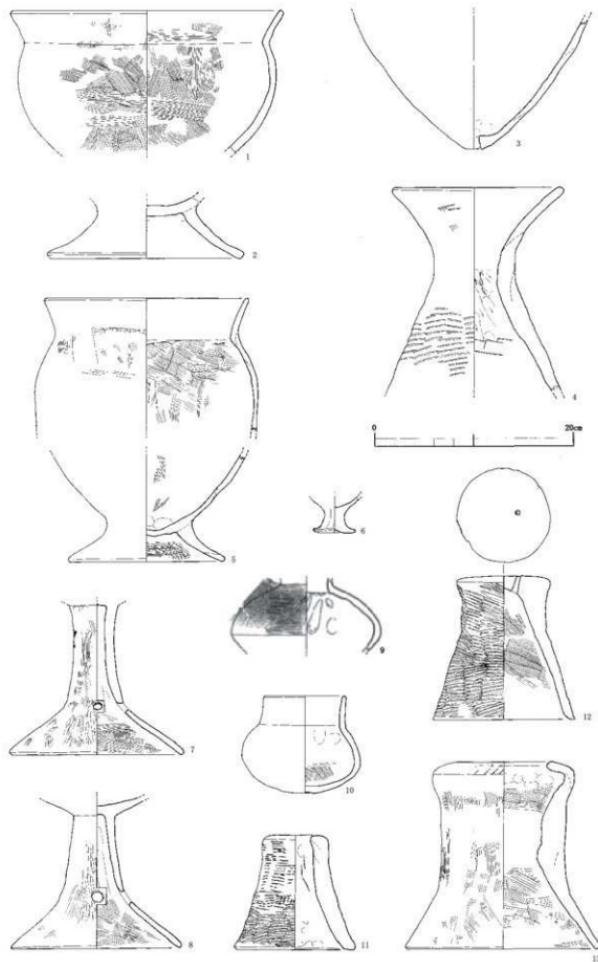


第70図 35号住居出土土器① (S=1/4)



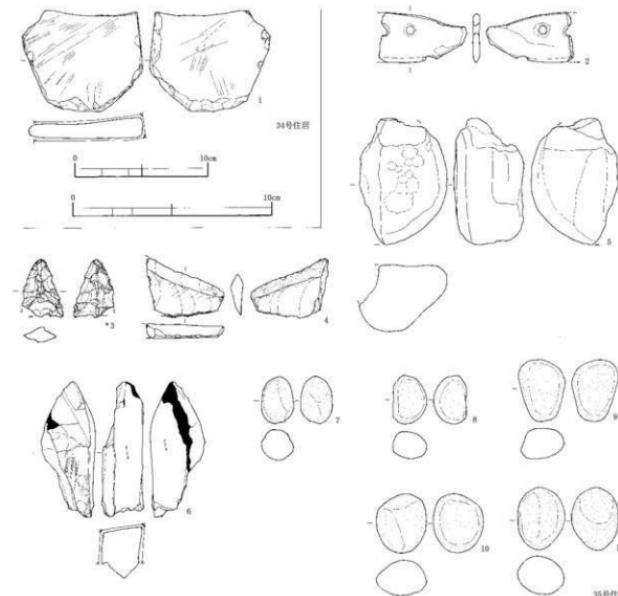
第71図 35号住居出土土器② (S=1/4)





第72図 35号住居出土土器③ (S=1/4)





第73図 34・35号住居出土石器 (S=1/3、*付はS=1/2)

込みは、ピットが2基認められるのみで、炉跡状の痕跡は見られない。ピットは主柱に接続しており、補助的な役割を果たしたものと考えられる。東西方向の土層断面図ではベッド状構を持つように見えるが、実際の造構底面は明瞭な段差を持たず、緩やかな傾斜が確認出来るのみである。褐色粘質土の貼床を施すが、造構中央部を中心とし、全面に広がるわけではない。

出土遺物 (第70・71・73図/図版27・28・38・41・42・43)

理上へ中層を中心に、廃棄時に混入したと思われるまとまった量の土器・花崗岩礫が出土している。甕・壺類を主体とし、比較的原型を留めるものが多い。甕は頸部がくの字形に屈曲し、胴部の長大化が認められるが、体部外面の平行タタキが明顯に認められる時期のもの。頸部に貼付突帯を持つ大型のものも1点出土している。また、底部に断面ハの字の脚部が付くものも見られる。甕は口縁部が内側に屈曲する古手のものと、口縁端部に向かって外反するものとが混在している。形状は甕であるが、多くは外面に被熱痕跡と煤の付着が認められ、要的な使用方法が保残されていたと思われる。鉢は体部が内済しながら立ち上がるもののあり、小型甕は口縁部が直立するものと、外反する甕的な様相を残すものが混在する。器台は上部が屈曲するが、外面に平行タタキは認められない。支脚は円形の平坦面を持つ、外面が平行タタキ調整を施すもの。弥生時代後期末の所産。

石器類は石庖丁・スクレイパー・石礫等の他、金屬製品の研磨に使用したと思われる砥石が出土している。但し鉄製品の出土はない。また図示したものを含め、多数の投弾が出土している。

36号住居 (第74図/図版11・12)

調査区西端中央に位置し、37号住居に切られ48・53・54号住居、24号土坑を切る。南北5.1×東西3.8m、検出面からの深さは0.29mを測る。北・西の立ち上がりは不明瞭である。平面プランはひずみのある梢円形を呈する。主柱は調査時点で明確に認識出来ていなかつたが、遺構床面に明瞭にそれと認められる掘り込みがなく、住居掘り込みとの位置関係・深さが適切であったことから、遺構の外に位置する東西2本と想定した。北東部分に浅い円形の土坑があり、上面に焼土の広がりが認められたことから、炉跡と判断した。北側にもビットを伴う土坑を検出しているが、用途は不明である。貼床は認められない。

出土遺物 (第78・79図/図版35・46)

埋土から極少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で形状を留めるものはない。図示したもののは、甕・壺が散見されるが、頭部に貼付突部を持つ、弥生時代後期末の所産。

その他、砥石・土玉等と黒曜石・安山岩の剥片が出土している。鉄製品の出土は認められない。

37号住居 (第75図/図版12)

調査区北西隅に位置し、7号溝に切られ36・46号住居を切る。北東部分の一部が調査区外へ延長する。上面は後世の造成によって削平されており、特に北東側で顕著である。主軸は北東—南西方向で長軸残存長4.75×短軸3.85m、検出面からの深さは0.2mを測る。平面プランは長方形と考えられる。柱穴のビットは散見されるものの、下層の46号住居で検出されたビットも含め、主柱を構成する組み合わせは認められなかつた。但し、埋土の状況からSPO2・03は37・46号住居いずれかの主柱であると思われる。南東辺中央に段掘りによって構築された、幅1.25m、高さ0.1m未溝のベッド状遺構が見られるが、他遺構のように明瞭な段差とはならない。床面では浅い土坑状の掘り込みが3基検出されたが、いずれも埋土・掘り込みの形状から炉跡ではないと思われる。遺構底面には全体に薄くではあるが黄褐色粘土質の貼床を施し、南辺のベッド状遺構上に溝状の掘り込みがある。

出土遺物 (第78図)

微量の遺物が出土しているが、土器類はいずれも細片のため図示していない。甕の口縁部の形状から、古墳時代前期の所産と思われる。

その他、図示した扁平で小型の砥石、投弾が少量出土している。鉄製品の出土は認められない。

38号住居 (第76図/図版12)

調査区北端東寄りに位置し、27号住居に切られ45・56号住居、20・21号土坑、9号溝を切る。北半部は調査区外へ延長するが、II区にはかからない。主軸は北東—南西方向で長軸7.35×短軸残存長4.9m、検出面からの深さ0.2mを測る。平面プランは方形、主柱は2本と考えられる。遺構床面には浅い土坑が複数認められるが、炉跡と判断するには至らない。また貼床も認められない。

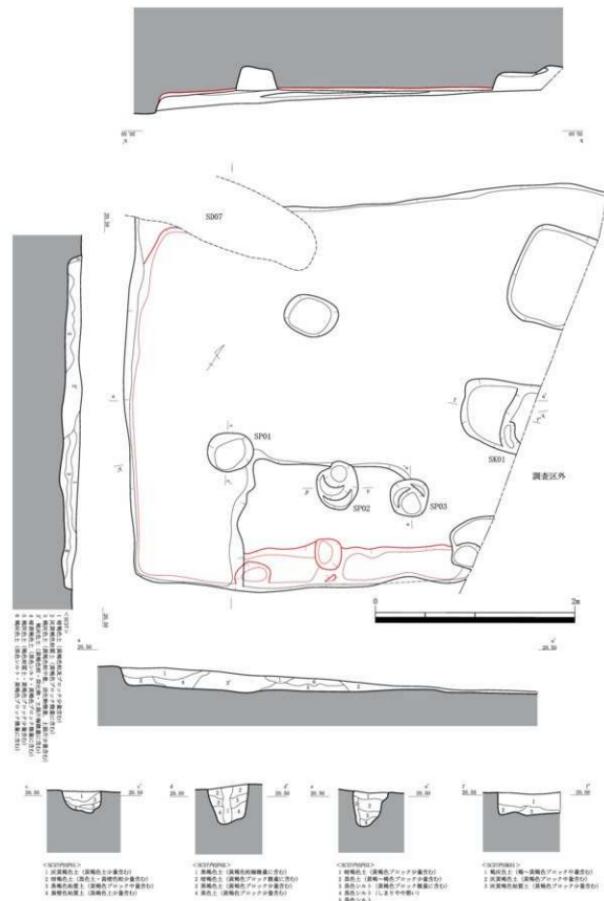
出土遺物 (第78・79図/図版28・43)

遺構内に示したもののみを含め、床面直上と埋土内から少量の遺物が出土している。住居の廐窓時を示すものと思われる。甕は口縁部がくの字形に屈曲し、胴部が長刷化した時期のもの。外面に平行タタキはなく、ハケのみの調整を施している。但し、頭部に貼付突部を持ち、外面に平行タタキの痕跡を持つものも残る。小型甕は底部が平坦で内面ヨコハケ、外表面タテハケ調整。杏形支脚は外面に若干平行タタキを残すが、調整はハケが優位である。高杯は杯部内面に段を持ち、S字形に湾曲する。内外面にハケ調整のうち放射状暗文を施す、胎土・調整とも良品。杯類は指ナデの調整が残る、粗略なつくりのもの。

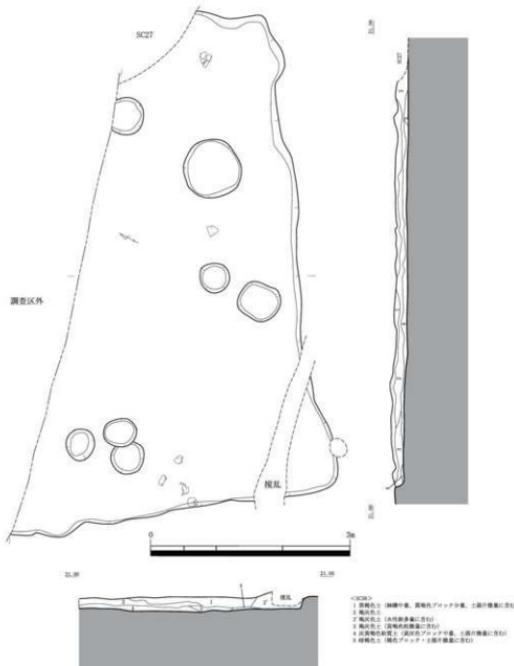
その他、石庖丁の破片が1点と投弾、用途不明の鉄製品が出土している。

39号住居 (第77図/図版12)

調査区南端西寄りに位置し、31号住居に切られ9号溝を切る。41号住居との先後関係は検出状況から不明である。南半部が調査区外へ延長する他、31号住居に大幅に削平されているため、遺構の全容は不明な点が多い。平面プランは梢円形を呈する。北東隅で検出したビットを主柱と想定し、2主柱と考えているが、これと対応する柱穴は31号住居の底面では確認出来ていない。南西隅にテラス状の段差があるが、



第75図 37号住居 (S=1/40)



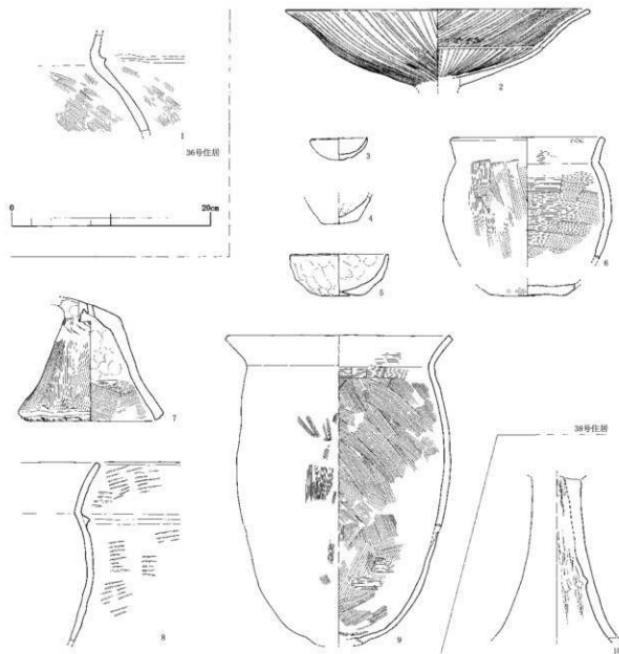
第76図 38号住居 (S=1/60)

住居に隣接する施設かどうかは不明である。北辺部に一部細溝が掘り込まれている他は、道構に伴う施設は認められない。また、道構床面全体に駆除は施されていない。

出土物 (第78・79図/図版44・45)

埋土内から極微量の遺物が出土しているが、いずれも小片である。図示した高杯脚部のみがある程度の形状を残していた。内面の絞込み痕跡以外は摩滅により調整が不明である。但し、外面に微量の赤色顔料が付着しており、丹塗土器であると思われる。弥生時代中期の所産。

その他、図示した石庖丁、ハンマー状石器、安山岩の剥片等、若干の石器類が出土している。



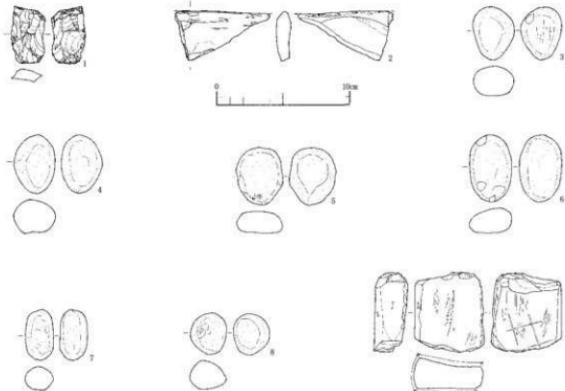
第79図 36・38・39号住居出土土器 (S=1/4)

39号住居

40号住居 (第80図/図版12)

調査区中央北東寄りに位置し、33号住居に切られ、64号住居、9号溝を切る。主軸は北東—南西方向で長軸5.7×短軸4.35m、検出面からの深さ0.41mを測る。平面プランは長方形で2主柱の構造を探る。柱穴は二段掘り込みだが浅い。東西両隅と南隅に幅1.1m、高さ0.1mのベッド状遺構が認められる。東隅のものは段掘りで地山を残す方法で構築されているが、西・南隅のものは遺構の床面を平坦に掘り込んだのち、厚く粘土を盛り上げて造成している。この造成土は黄褐色粘質土に黒色シルトが混入した比較的汚れた土を使用しており、南隅のベッド状遺構については調査時に遺構埋土と誤認して一部を掘削してしまっている。遺構の側面はその残存状況を示しており、本来は西隅と同じ程度のベッド状遺構が存在し、中央に出入口として空白部分を設けていたと思われる。周囲に断続的に細溝が掘り込まれ、北西には小規模なテラス状の段差を持つ。貼床は床面全体とベッド状遺構上面に施すが、黒色土混じりの汚れた黄褐色粘質土を使用している。貼床下には中央に炉跡と思われる浅い土坑が確認されている。その他、不整形の土坑状の掘り込み、溝状の掘り込みが確認されている。





第81図 40号住居出土石器 (S=1/3)

41号住居 (第83図/図版12)

調査区南西寄りに位置し、31・32号住居に切られ、47・58号住居、9号溝を切る。主軸は南北方向で長軸7.5×短軸5.8m。検出面からの深さ最大0.48mを測る。平面プランは長方形で2主柱の構造を探る。但しSP02が主柱で、対になるビットが32号住居内にあると判断したが、主柱としては掘り込みが浅い。南隅に位置するSP03も、主柱の補助的な役割を果たしていた可能性がある。主柱間からは若干北へずれるが、中央に深い不整形の土坑が認められる。埋土内に焼土粒・炭化物を含み、炉跡と考えられる。なおSP05はSP03と共に主柱となるような位置に掘り込まれているが、後述するように出土遺物の時期に明瞭な差異があるため、住居に伴うビットではないと判断した。

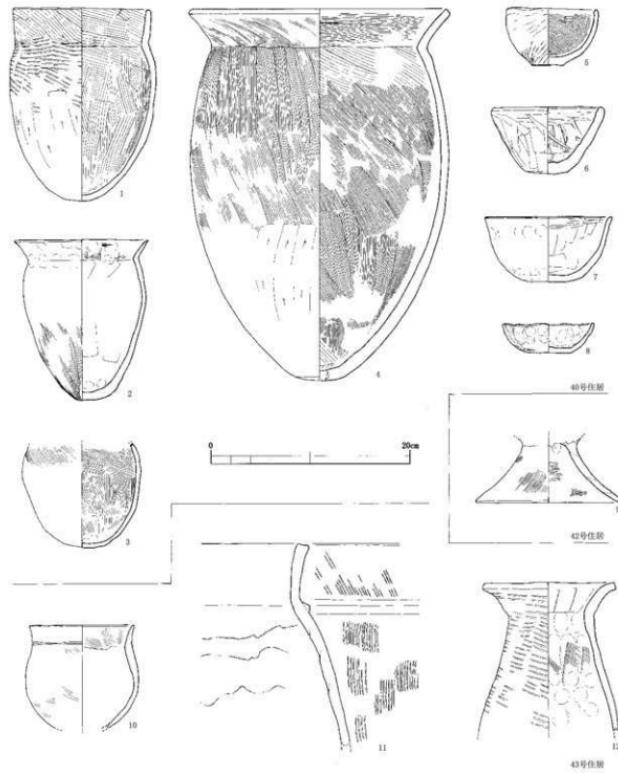
北・西辺に幅1.0m、高さ0.1mの段掘りで構築されたベッド状遺構を、北辺にはその上部にさらに幅の狭いテラス状の構造を持つ。南東側にもテラス状の構造が見られるが、大部分は31号住居によって破壊されているため、詳細は不明である。北東・北西側に深いビットが掘り込まれており、内部では遺物を確認している。また南東側にもビットの掘り込みが認められることから、上部構造を支えるための役割を果たしていた可能性も考えられる。北辺を中心部分に細溝を掘削している。貼床は遺構全面に黄褐色粘質土で薄く施されており、その下層には一部分のみ掘り込みが確認されている。

出土遺物 (第84・87・94図/図版29・44)

遺構に示したビット内及び床面直上を中心に遺物が出土している。甕・鉢類を主体とし、石器と鉄製品が共に一定量確認されている。甕は口縁部が外反して真直ぐに立ち上がり、体部はやや上で張りを持ち、といった底部へ繋がる形状のものが多い。弥生時代後期末の所産。

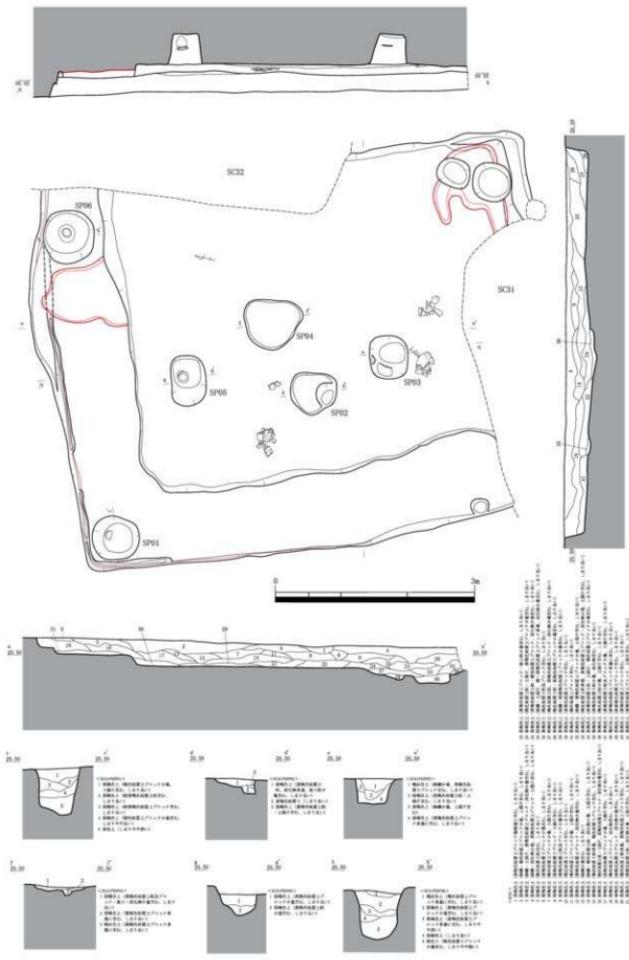
第84図-1はSP05 内から出土した遺物であるが、これのみ弥生時代中期の所産である。このビットは41号住居に伴うものではないが、掘立柱建物を構成するなどの関連を持つ遺構が近接して検出出来なかつたことから、やむを得ずこの頃を報告する。口縁部に計4カ所の穿孔を施し、外面は丹塗の上ミガキを行なう。小型の甕。内面は丹塗りの重ね落ちた痕跡が残る。

石器は図示した石臼丁・紡錘車の他、多数の投擲が出土している。鉄製品は摘鍬が2点とヤリガンナ1点を確認している。

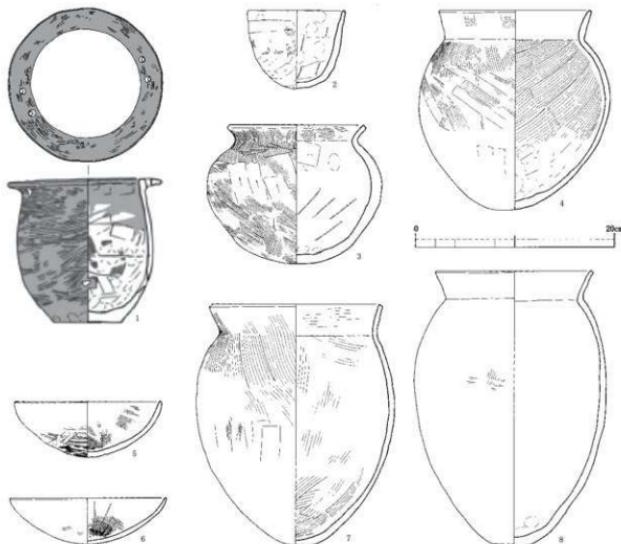


第82図 40・42・43号住居出土土器 (S=1/4)





第83図 41号住居 (S=1/60)



第84図 41号住居出土土器 (S=1/4)

42号住居 (第85図/図版13)

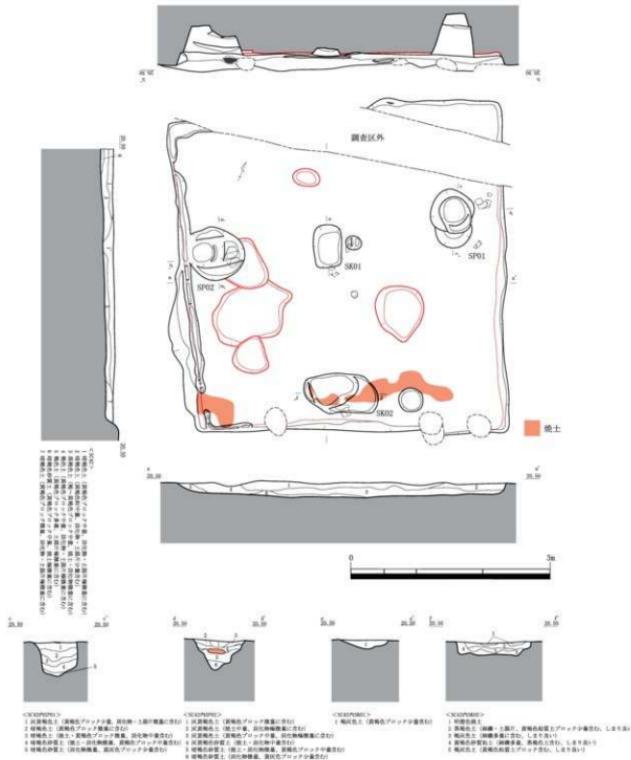
調査区北端西寄りに位置し、II・III区にまたがる。17号住居に切られ、69号住居を切る。主軸は北東—南西方向で長軸5.0×短軸4.7m、検出面からの深さ0.25mを測る。平面プランは長方形で2主柱の構造を探る。柱穴は比較的浅く、住居施設後に柱抜き取りが行なわれたと考えられる。柱間に隅丸長方形の浅い土坑が、南辺中央部に不整梢円形の土坑が掘り込まれている。位置と形状からはSK01が炉跡と思われたが、SK02は上面に焼成の広がりが確認されており、縁辺部が被熱により赤化している箇所が認められたことから、こちらを炉跡と判断した。西辺を中心に細溝が掘り込まれている。貼床は全面にしっかりと施されており、貼床下面には極一部に土状の浅い掘り込みが認められる。

出土遺物 (第82・87図)

遺構図に図示しているように、床面直上から少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めるものはない。図示した高杯脚部とその他の甕・壺片から、弥生時代終末期の所産と考えられる。石器は薄い小型の砥石片1点のみが出土しており、鉄製品の出土は認められない。

43号住居 (第86図/図版13)

調査区南東寄りに位置する、切り合い関係のない単独の遺構。但し上面に擾乱が集中しているため、遺構本体の残りは良くない。主軸は北東—南西方向で、長軸4.1×短軸3.2m、検出面からの深さ0.2mを測る。平面プランは長方形で、2主柱の構造を探る。主柱は遺構の中軸からやや北西にずれるが、他に適切

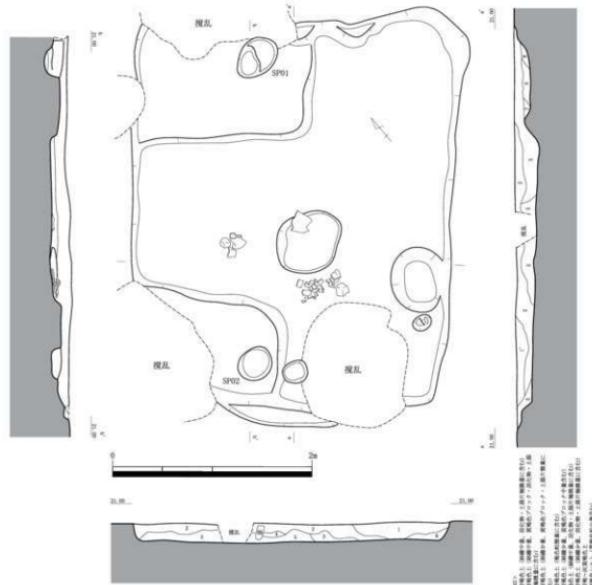


第85図 42号住居 (S=1/60)

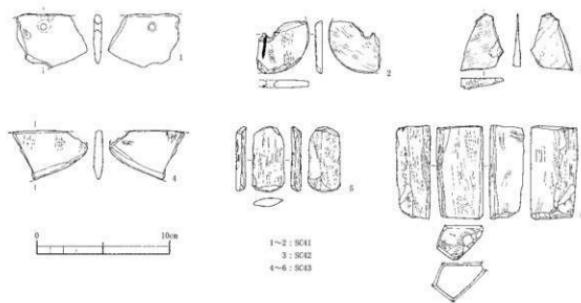
と思われるピットが検出出来なかつたため主柱と判断した。床面の中央に不整形の浅い掘り込みが、東辺に円形の土坑が認められる。いずれも理土の状況は不明であるが、位置から中央の掘り込みが炉跡と考えられる。北・西側に幅0.9m、高さ0.1mの段振りで構築したベッド状造構を持つ。貼床は認められないが床面はほぼ平坦で凹凸にとほしく、造構掘削段階から配慮がなされたと思われる。

出土遺物 (第82・87図/図版39・44)

遺構図に示したとおり、床面直上から少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めるものは少ない。甕は体部に平行タタキの痕跡を残し、頭部に突帶を持つ大型のものと、頭部の屈曲がいや緩く外面に平行タタキとハケによるナデ消しを施したもののが見られる。鉢は口縁部が直立しつつある、小型丸底壺への転換期と思われる形状を示す。器台は鼓形の系統で上部は外反して広がり、体部に平行タタキを

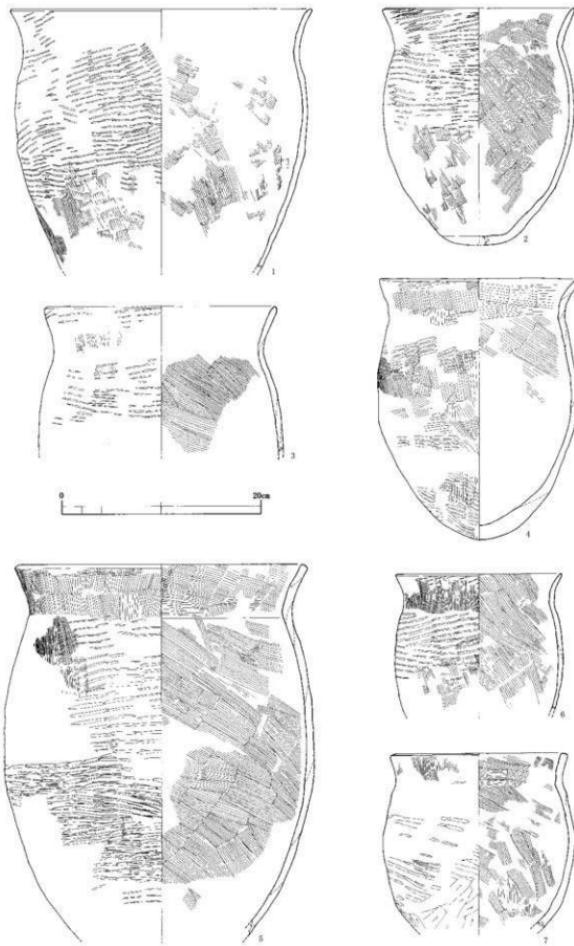


第86図 43号住居 (S=1/40)

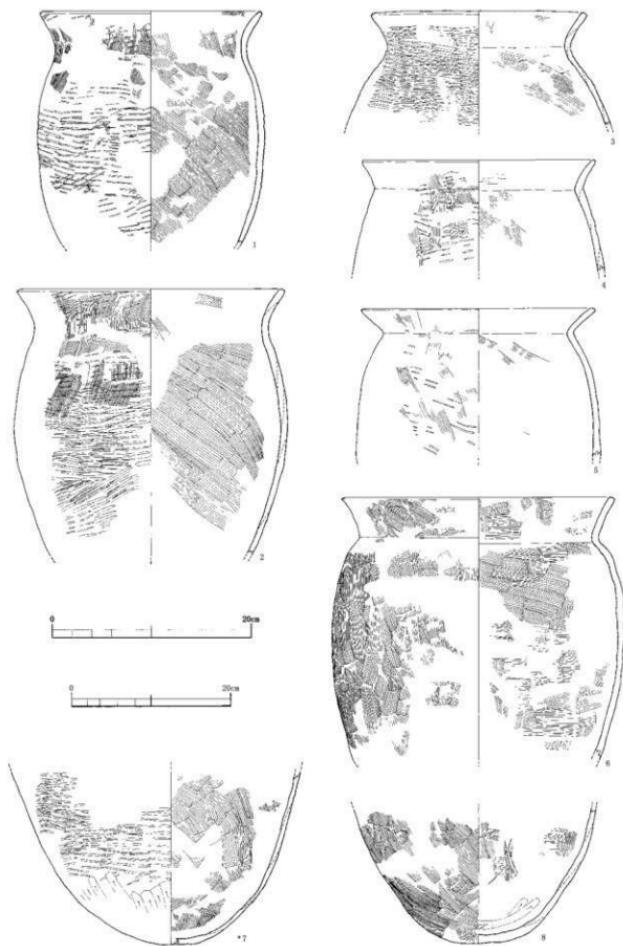


第87図 41・42・43号住居出土石器 (S=1/3)



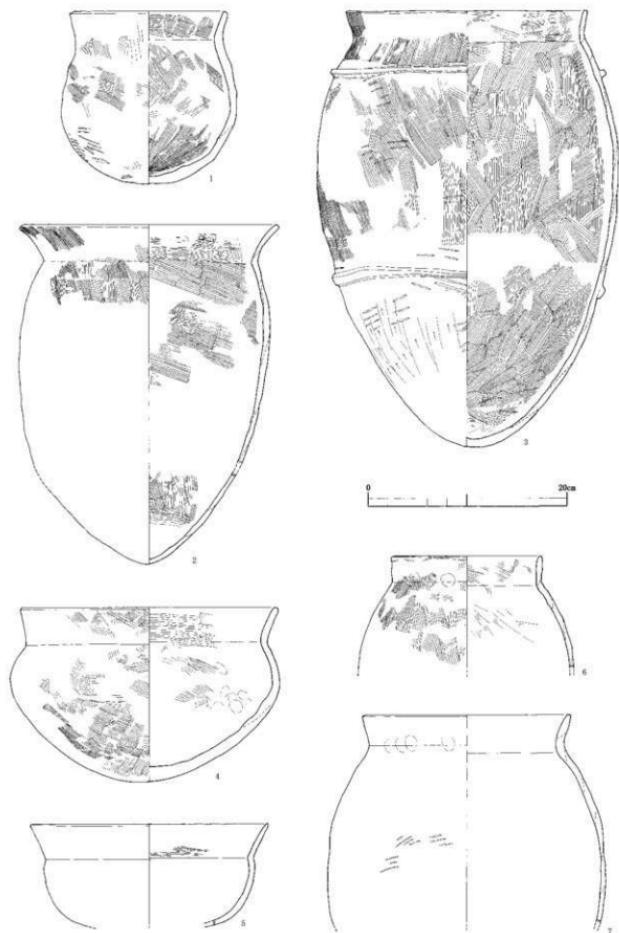


第89図 44号住居出土土器① (S=1/4)

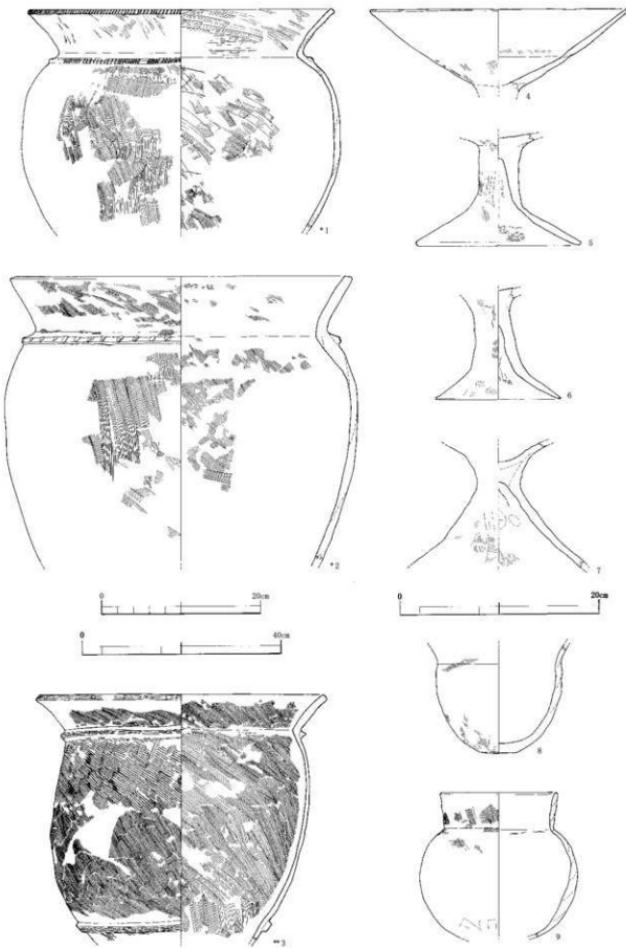


第90図 44号住居出土土器② (S=1/4、*付はS=1/5)



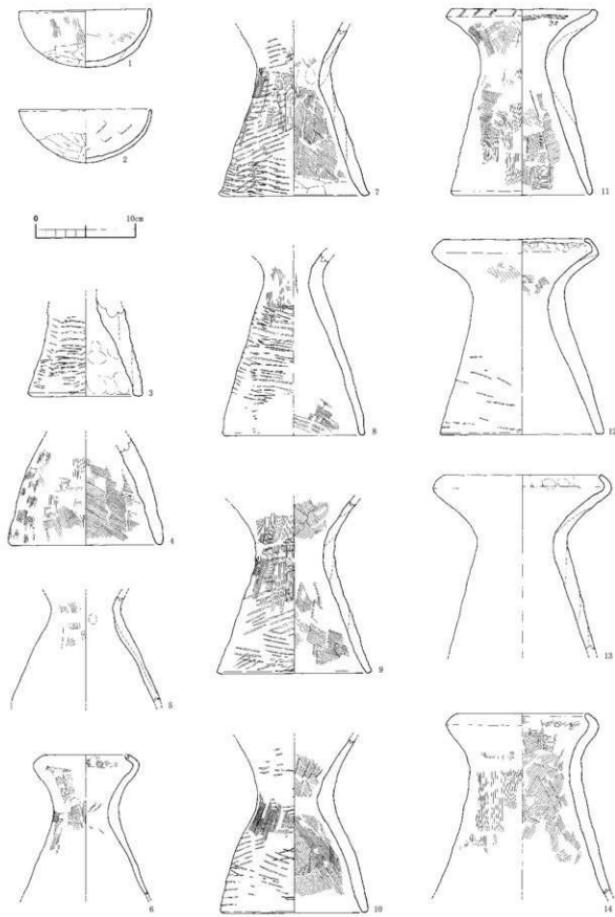


第91図 44号住居出土土器③ (S=1/4)



第92図 44号住居出土土器④ (S=1/4、*付はS=1/5、**付はS=1/8)





第93図 44号住居出土土器⑤ (S=1/4)



出土遺物 (第89~95図/図版29・30・33・35・36・37)

遺構図に示したとおり、ベッド状遺構内部を中心に多量の土器が出土している。土層断面と遺物の出土レベルから、住居を廃棄する際の初段階に括弧で示されたものと考えられる。完形もしくはそれに近い形状まで復元出来るものが多く、住居廃棄の際の祭祀の行為に伴う可能性もある。器種は甕類の大型品を主体とするが、鉢・高杯・器台と多岐にわたり、微量ながら石器・鉄製品も含まれている。

甕は頭部の屈曲が緩く、底面が尖り気味の形状を示すもの。但し外面調整については、口縁部まで平行タタキを残すものと、口縁部はタテハケで胴部のみ平行タタキを残すものが混在している。外面にタテハケは施されているものの、タタキが優勢な時期のものである。微量ではあるが口縁部が明瞭に屈曲し、ハケが優勢なものも含まれている。また、頭部に貼付突帯を持ち、突帯にも平行タタキを施す大型のものが3点確認されている。うち1点は甕帽として使用された可能性もあるが、出土状況からはそれを裏付けることは出来なかった。

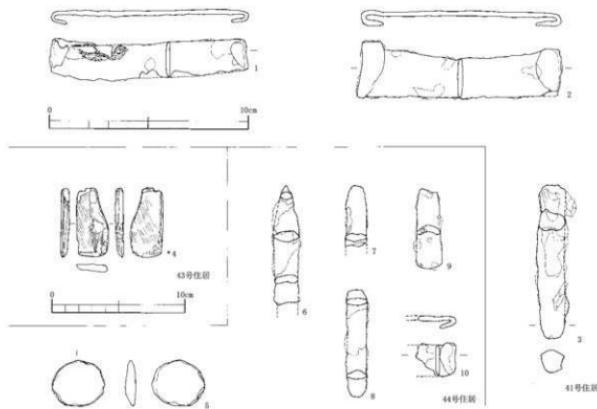
壺は口縁部が内側に屈曲し、肩部に円盤を貼り付けるもの、短頸のものがあり、その他に肩部と胴部下方に貼付突帯を持つ、長胴化したもののが確認されている。第91図-3は、外面に煤が付着しており、甕的な使用がなされていなかったと考えられる。

鉢のうち、頭部が屈曲するものは、口縁部が外反して伸び、底部が丸底の古い様相を示すものと、口縁部が直立に向かい一つあるものが混在している。但し、いわゆる小型丸底壺と称される形状・調整のものは確認されていない。内溝で立ち上がるものは器高が低く底部にケズリを施すものと、小型の杯的な様相を示すものが混在する。

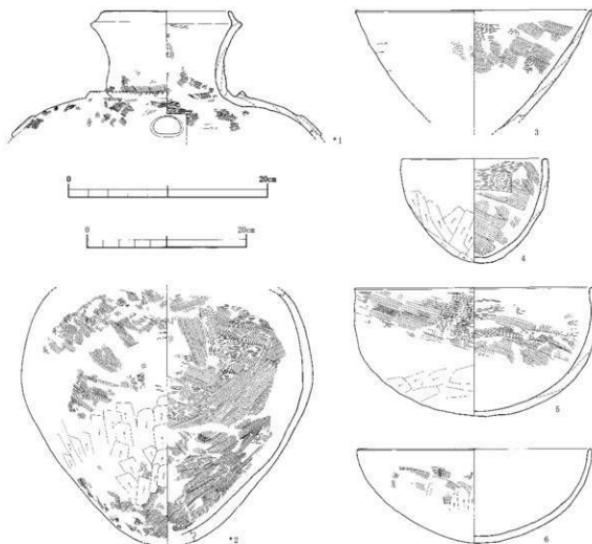
高杯は少量の出土であるが、杯部内面に段を持つ外反して真直ぐに立ち上がる時期のもの。

器台は鼓形の系統で、上部が内側へ屈曲するものと、斜め上方に真直ぐ立ち上がるものとが混在している。但し調整は外面平行タタキ、内面ハケを基本とし、外面のタタキ痕跡のハケ消しの度合いに若干の差異が認められる。

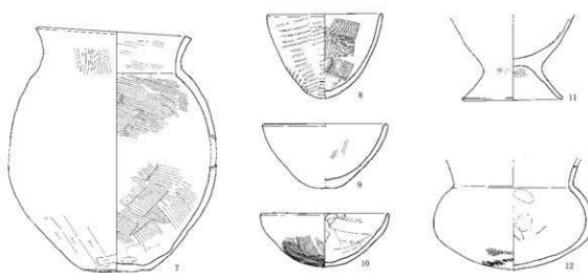
その他、土製円盤、鉄製ヤリガンナ、鉄製捕縄が出土している。



第94図 41・43・44号住居出土土製品・石器・鐵器 (S=1/2, *付はS=1/3)

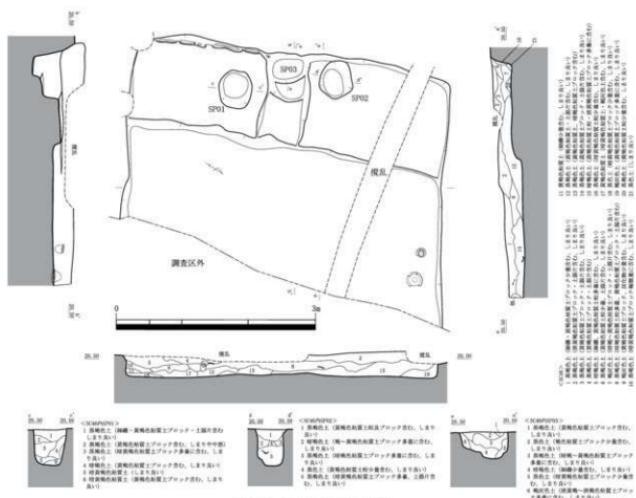
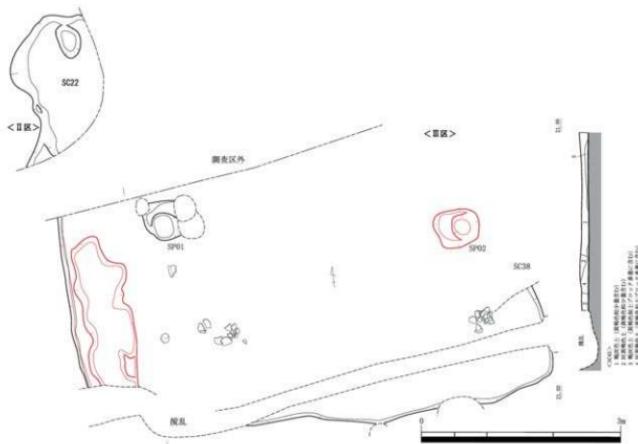


44号住居



45号住居

第95図 44・45号住居出土土器 ($S=1/4$, *付は $S=1/5$)



22・45号住居（第96図/図版13）

調査区北端中央寄りに位置し、38号住居に切られ、64号住居、9号溝を切る。北東部分は調査区外へ延長し、北西隅はII区にまたがる。II区での検出断階では22号住居として単独造構の扱いをしていたが、III区の調査完了段階で同一の造構であると判断されたため、2つの番号を付している。造構の大部分はIII区内で検出しているが、38号住居及び既に削平されているため残存状況は非常に悪い。主軸は東西方向で平面プランは方形を呈し、2柱の構造を探ると思われる。東西6.8×南北6.5m。II区での検出面からの深さは0.35mを測る。主柱は南北方向にぶれがあるが、この2基のビット以外に柱穴と考えられる掘り込みは認められなかったため、主柱と判断した。床面全体に褐色粘質土で薄く貼床を施しており、西辺に湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが認められる。

出土遺物（第38・95・102図/図版30・38）

床面直上と埋土内から少量の遺物が出土している。甕は内外面ともハケ調整、外面にケズリ調整を施した平坦な底部を持つもの。小型の鉢類は外面に平行タタキの痕跡が認められる。頭部が屈曲するタイプの鉢は、口縁部が直立する傾向が認められるものの、小型丸底甕の形状を探るにはいたらない時期のもの。その他、台付鉢の脚部が1点出土している。

石器類は投弾が1点のみ、鉄製品は勧先が1点出土している。砥石等は確認されていない。

46号住居（第97図/図版13・14）

調査区北東隅に位置し、37号住居・7号溝に切られる。東側約3分の1は調査区外へ延長するが、I区へはいたらない。2柱の構造を探り、主軸は東西方向、平面プランは方形を呈すると思われる。東西残存長3.7×南北4.8m、検出面からの深さは0.28mを測る。西辺に幅1.5m、高さ0.15mの段掘りによって構築されたベッド状造構を持つ。東辺にも同様の施設を備えていると思われる。西辺のベッド状造構上に3基のビットを検出しているが、主軸方向と位置関係からSP03が主柱となり、両脇のSP01・02は規模・深さともほぼ共通のことから、2基で主柱の補助的な役割を果たしたものと判断した。南西の壁沿いで部分的に細溝を掘り込んでいる。炉跡と考えられる土坑状の掘り込み、焼土・炭化物の広がり等は見られない。貼床は認められなかったが、造構の床面は全体的に平坦で凹凸にとぼしい。

出土遺物（第101図/図版30・31）

造構圖に示した床面直上の遺物の他、埋土から微量の土器・石器が出土しているが、原型を留めるものは床面直上から出土したもののみであった。甕は口縁部が屈曲して外反する平底のもの、肉厚で内外面ともハケ的な痕跡を残す工具ナデ調整を施す。第101図-I・2は正位置で入れ子状になって出土している。

その他、図示したコップ状の鉢、数点の投弾が出土している。

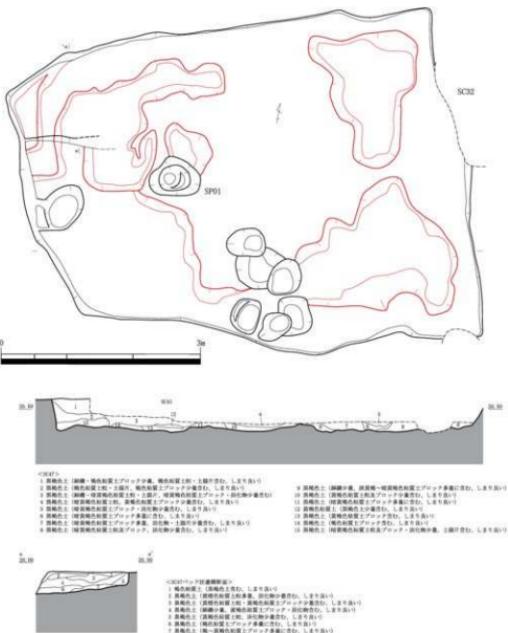
47号住居（第98図/図版14）

調査区南西寄りに位置し、31・32・41号住居に切られ、58・63号住居を切る。西辺を除く造構の大半が上面造構に削平されており、残存状況は非常に悪い。平面プランは南西隅の形状が不良ではあるが、長方形を呈すると思われる。主軸は東西方向、長軸6.8×短軸0.5m、検出面からの深さは最大0.5mを測る。北辺に廃土を盛り上げて構築した、幅1.3m、高さ0.35mのベッド状造構を持つ。本来は北辺に沿つて全体に構築されていたと思われるが、41号住居に破壊されており、詳細は不明である。2柱の構造を探ると考えられるが、主柱と判断出来るのはSP01のみで、これと対応するビットは確認出来なかった。また、炉跡状の掘り込みも、残存する造構の範囲内では本確認の状態である。底面には褐色粘質土で薄く貼床を施しており、貼床下には広い範囲で不整形の掘り込みが認められた。

出土遺物（第101・102図/図版33・40・41・46）

埋土内より少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものは認められない。甕は口縁部が屈曲して立ち上がり、内外面はハケ調整で平坦な底部を持つもの。甕は体部に貼付突帯をめぐらす。いずれも弥生時代後期の所産。

その他、黒色緻密質凝灰岩の板状製品、砥石、投弾等、少量の石器が出土している。



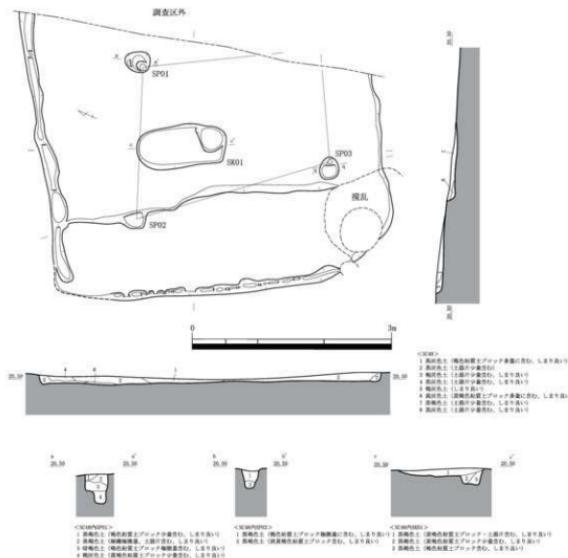
第98図 47号住居 (S=1/60)

48号住居 (第99図/図版14)

調査区東端中央に位置し、36号住居に切れ、53・54号住居を切る。造構の東約3分の1は調査区外へ延長する。後世の造成により大幅に削平を受けしており、特に東側は顕著である。平面プランは方形を呈すると思われる。主柱は4本で南東隅は調査区外へいたると想定した。柱穴はSP02を除いて段掘りの形状を示す。主軸は東西方向で、東西残存長4.3×南北5.1m、深さ最大0.15mを測る。西辺に幅1.4m、高さ0.18mの段掘りで構築したベッド状造構を持つ。東側の上部は削平されているが、同様の構造であった可能性がある。北側の2柱間に不整筋形のピットを伴う土坑を検出しているが、埋土・炭化物は含まれず、却勝である可能性は低い。北・西辺に沿って細溝を断続的に掘り込んでいる。貼床は造構全体に認められず、削平を受けた証ではないようである。

出土遺物 (第101・102図/図版44)

造構埋土内より出土した遺物は極めて微量で、いずれも繊片である。要類は口縁部が屈曲して外反する弥生時代後期の所産。図示した小型の鉢の底部は指ナテ痕跡が明瞭に残る粗略なつくり。その他、石庖丁の小片、投擲が数点出土している。



第99図 48号住居 (S=1/60)

49号住居 (第100図/版図14)

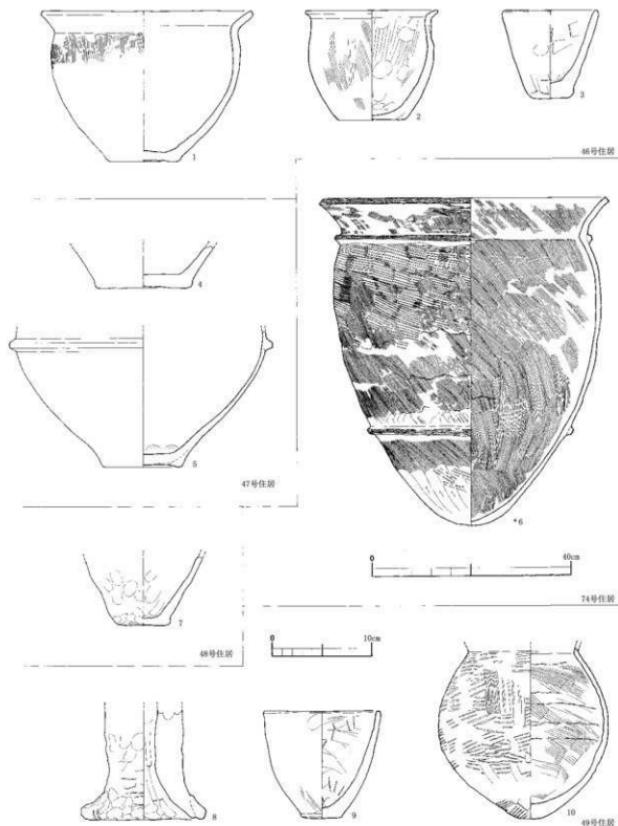
調査区中央に位置し、28号住居、16・17号土坑に切られ、9号溝を切る。主軸は南北方向で、長軸4.75×短軸4.65m。検出面からの高さは最大0.15mを測る。遺構上面の大部分を28号住居に削平されているため、残存状況は非常に悪い。平面プランはややひずみのある正方形を呈し、2柱の構造を持つ。主柱は主軸から西へずれるが、柱穴と考えられるビットが既に検出されなかつたこと、ビット同士の位置関係と深さに問題がなかったことから、主柱と判断した。いずれも2段掘りで充分な深さを持つ。柱間に梢円形の土坑、北東隅に不整円形の土坑を検出しているが、SK01が寄跡であると思われる。南東と西辺沿いに断続的に細溝を掘り込んでいる。助床は遺構の全面で確認出来なかった。

出土遺物 (第101・102図/版図31・38・44・45)

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものではない。甕は頸部が屈曲し口縁部が外反して立ち上がり、胴部が張りを持って尖り氣味の底盤へ繋がる、古墳時代初頭の形状。但し外側には平行タタキ痕跡が明瞭に残り、タテハケによるナテ消しあは粗略に行なわれている。鉢はコップ状のものが1点見られるのみ。支脚は指ナテ痕跡の残る鼓形の系統で、平行タタキは認められないものの、粗いつくりとなっている。

その他、図示した石庖丁、スクレイバーの未成品の他、投弾數点と鉄製品1点が出土している。





第101図 46・47・48・49・74号住居出土土器 (S=1/4、*付はS=1/8)

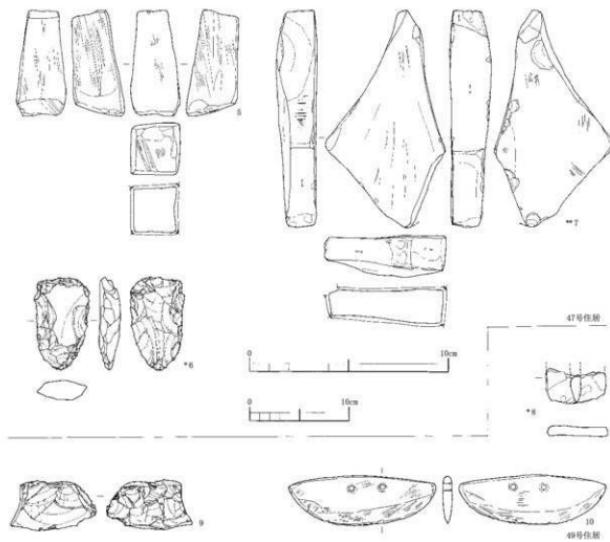
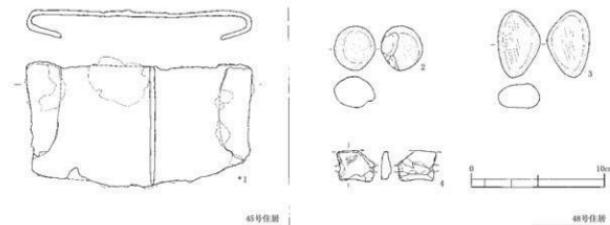
掘り込みが確認されている。なお、南辺中央に長方形で中央にピットを伴う下層土坑を検出している。形状から、単独の土坑の可能性もあるが、残存状況が不良で、貼床下層溝を切って検出されていることから、ここでは住居内土坑のSK02として扱う。

北・西辺に沿って細溝を掘り込んでいるが、南辺のどこまで延長するかは不明である。

出土遺物 (第104・107・109図/図版31・41)

埋土から比較的まとまった量の遺物が出土している。但し形状を留めるものはさほど多量ではない。表



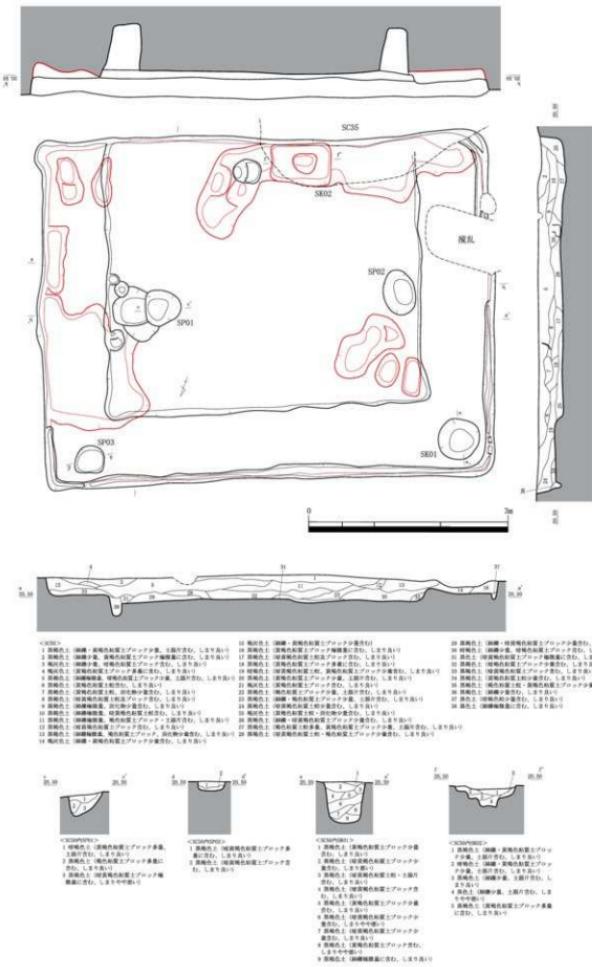


第102図 46・47・48・49号住居出土石器・鉄器 ($S=1/3$ 、*付は $S=1/2$ 、**付は $S=1/4$)

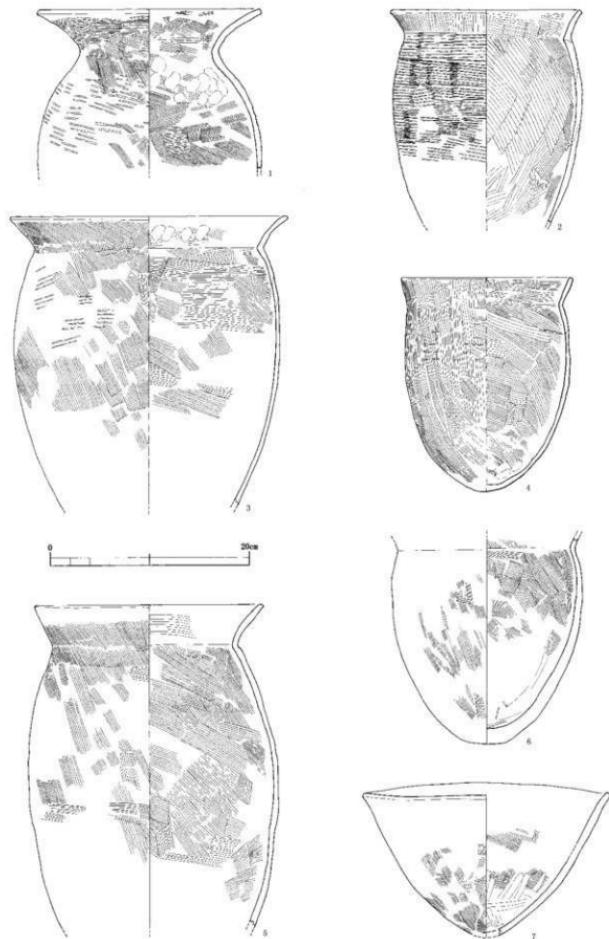
類を主体とし、少量の壺・鉢等を作う。要是頭部が屈曲し、口縁部が外反して延びるもので、体部外面に明瞭に平行タタキの痕跡を残すものと、タテハケによるナデ消しが優位なものとが混在している。胴部は長胴化しており、同じ形状・調整のものでも大小の差がある。但し全面に平行タタキが残るのではなく、口縁部は外面もタテハケを施している。器壁は比較的薄い。

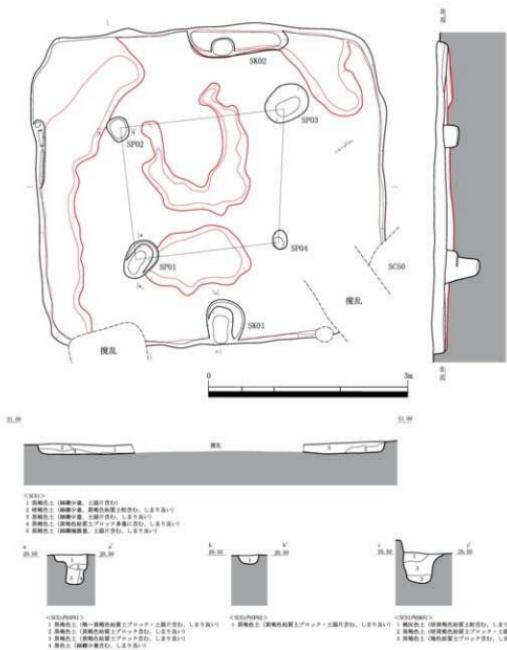
鉢は体部が斜めに真直ぐ立ち上がるものの、口縁部が屈曲して立ち上がるタイプのものは、屈曲が崩れながらも残っているものと、口縁部が直立した小型丸底壺の形状を示すものとが混在している。支脚は杏形の系統で、外面に指ナデ痕を残す、粗略なつくりのもの。器台は脚部に穿孔を施し、受部が小型のもの。





第103図 50号住居 (S=1/60)

第104図 50号住居出土土器 ($S=1/4$)



第105図 51号住居 (S=1/60)

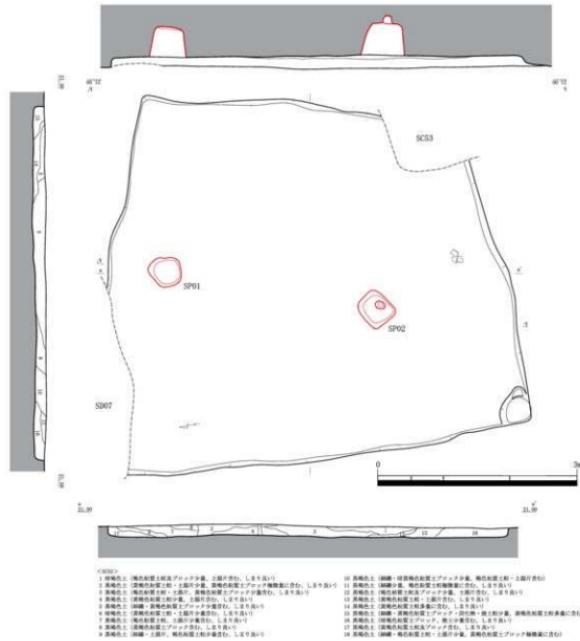
その他、図示した黒色密質質凝灰岩製の石錐、砥石、台石、投弾といった少量の石器類と、用途不明の鉄製品1点が出土している。

51号住居 (第105図/図版15)

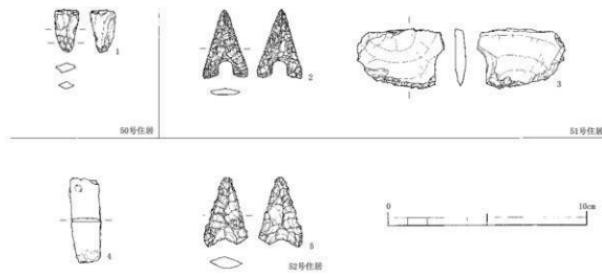
調査区中央南寄りに位置し、50号住居に切られ、77号住居・8号溝を切る。道構の中央を搅乱が削平しているため、埋土の状況は不明瞭である。但し搅乱は道構底面には及んでいないことから、道構の形状・規模は明らかとなっている。主軸は北東—南西方向で、4柱の構造を探る。長軸5.3×短軸4.8m、検出面からの深さは最大0.2mを測る。平面プランは隅丸方形を呈し、南辺中央の一部に細溝を掘り込んでいる。柱間に土坑は認められないが、東辺にはプラスを伴う不整形円形、西辺にはピットを伴う楕円形の土坑がそれぞれ掘り込まれている。形状から、SK02が切跡であると考えられる。底面にはほぼ全体に黄褐色粘質土で貼床が施されており、貼床下には南辺沿いに湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが、中央と北西側には不整形の掘り込みが認められる。

出土遺物 (第107・109図/図版34・42)

埋土から極少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものはない。表は口縁部が屈曲

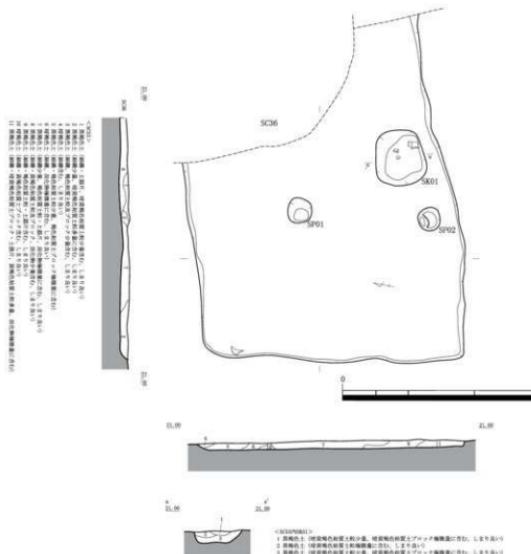


第106図 52号住居 (S=1/60)



第107図 50・51・52号住居出土石器・鉄器 (S=1/2)





第108図 53号住居 (S=1/60)

して外反するもの。弥生時代後期の所産。図示した完形のミニチュア甕は埋土内から出土している。石器類は黒曜石の石鏃と黒色緻密質安山岩のスクレイパーの他、投弾数点が出土している。

52号住居 (第106図/図版15)

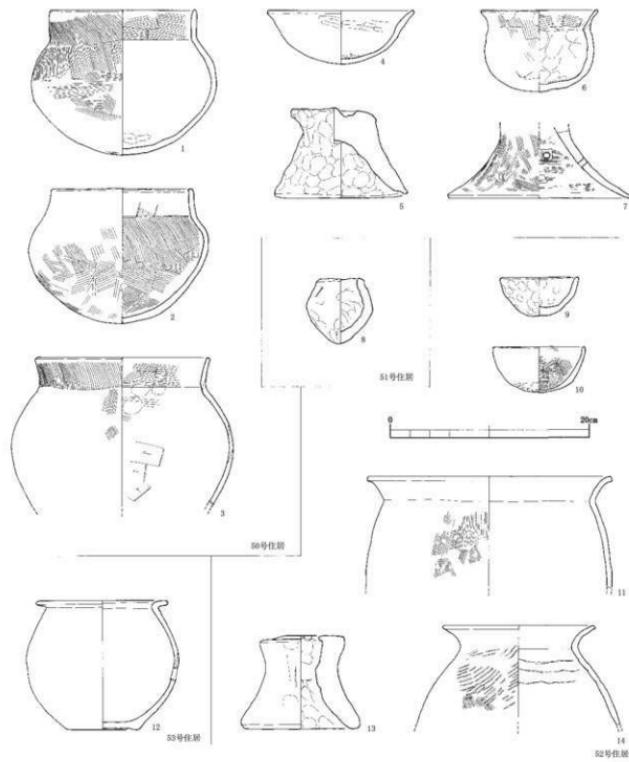
調査区北東寄りに位置し、53号住居、7号溝に切られ、55・61・68号住居、11号溝、1号土壙墓を切る。遺構の大半は切り合ひの関係がないが、上面を削平されており、残存状況は不良である。主軸は南北方向で、平面プランは不整な方形を呈する。長軸6.1×短軸5.5m、検出面からの深さは最大0.15mを測る。掘り込みの立ち上がりは比較的明瞭に残る。検出・掘削段階では柱穴を検出出来なかつたが、下層住居の掘削終了後に相互の掘り込みを確認し、SP01・02がこの遺構の主柱となると判断した。その他、遺構に伴う掘り込みは南西側で検出したピットのみで、土坑・細溝等は確認されていない。

出土遺物 (第107・109図/図版31・37・42)

埋土から極微量の遺物が出土しているが、小片が多く原型を留めるものはない。甕は体部外面に平行タタキを残すものと、タテハケのみで調整するものが混在する。鉢類は丸底の底部から立ち上がる小型のもののみが出土している。こちらは平行タタキを施さない。支脚は杏形の系統で上面は平坦な円形となり、指ナデ痕跡を残す粗略なつくりのもの。

その他、黒色緻密質安山岩の石鏃と鉄製ヤリガンナの小片が出土している。

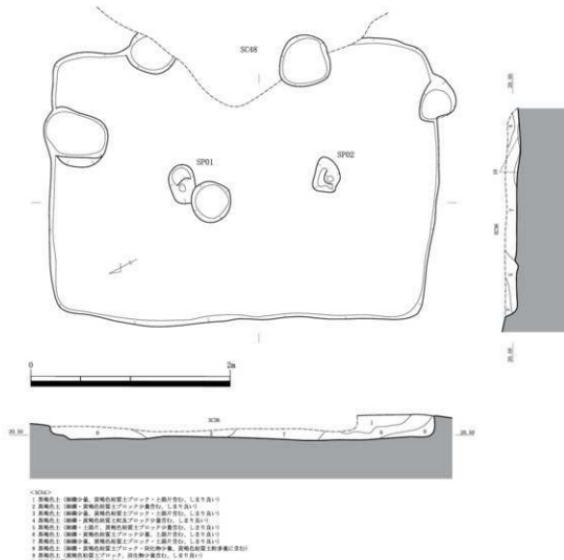




第109図 50・51・52・53号住居出土土器 (S=1/4)

53号住居 (第108図/図版15)

調査区東端中央に位置し、36・48・52号住居に切られ、54・57・68号住居、11号溝を切る。遺構の東辺は36号住居に破壊されて残存しない。また上面は後世の造成により削平を受けており、遺構の残りは非常に悪い。主軸は東西方向と思われる。東西残存長5.15×南北3.9m。検出面からの深さは最大0.1mを測る。遺構の立ち上がりは緩やかな傾斜となっている。2柱の構造を探ると思われるが、調査段階で主柱となるピットは検出出来ていない。調査完了後、現地の状況や切り合う他遺構の図面から主柱の復元を試みたが、西側の柱をSP01と判断したものの、対応するピットは見つけられなかった。南辺沿いのSK01は遺構の縁辺中央部に位置する土坑と思われる。その他、細溝・炉跡といった住居に伴う構造物は確認出来ていない。貼床は遺構全面で認められなかった。



第110図 54号住居 (S=1/40)

出土遺物 (第109図)

埋土・屋内土坑内から微量の遺物が出土しているが、いずれも小片である。甕の形状は口縁が緩んだL字形を呈し、底部が平底となる弥生時代後期初頭のもの。その他、鼓形器台の細片、投弾等が出土している。

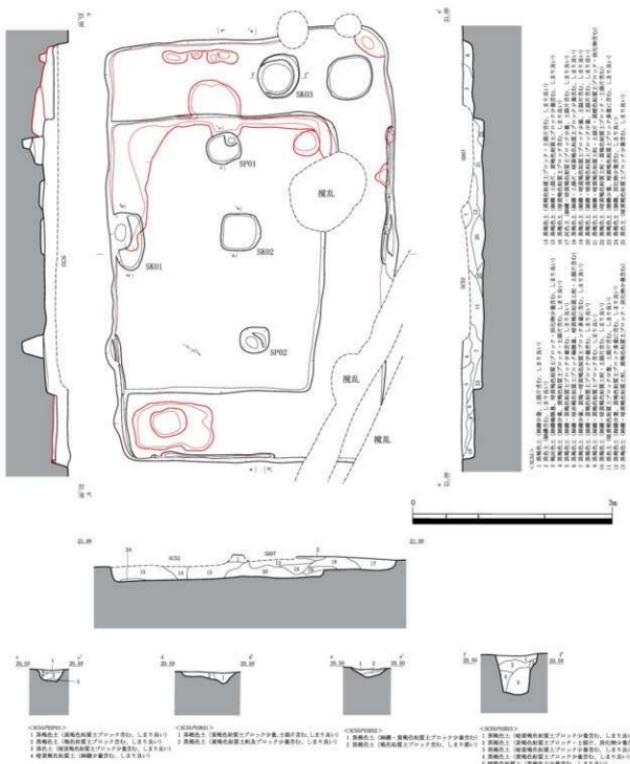
54号住居 (第110図/図版15)

調査区東端中央に位置し、36・48・53号住居に切られ、24号土坑を切る。48号住居に破壊されているため、東辺の詳細は不明である。主軸は北東—南西方向で、平面プランは橢丸長方形を呈する。長軸5.8×短軸4.2m。検出面からの深さは最大0.35mを測る。2柱の構造を探るとと思われるが、主柱に相当するピットは小型で不整形である。その他、土坑状の掘り込みは造構縁辺部に4基が認められるが、この造構に伴うと考えられるものはない。

出土遺物 (第113・117図/図版46)

埋土から微量の遺物が出土しているが、いずれも小片である。甕は口縁部が緩いL字形を呈し、底面はやや広い平底となるもの。高杯は彫刻口縁で丹塗り痕跡が認められる。弥生時代中期後葉の所産。

その他、台石、投弾等、石器類が出土している。



第111図 55号住居 (S=1/60)

55号住居 (第111図/図版15)

調査区北東に位置し、52号住居・7号溝に切られ、61・68号住居を切る。主軸は北東—南西方向で、平面プランは長方形を呈する。北東隅が壊乱によって削平されているが、比較的残存状況は良い。2柱の構造を採り、長軸6.4×短軸4.3m。検出面からの深さは最大0.3mを測る。主柱は主軸から若干ずれるものの、2段掘りで充分な深さがあり、しっかりととした構造となっている。南辺を除く3辺に、幅1.0m、高さ0.1mのベッド状遺構をめぐらす。ベッド状遺構は地山の一部を残す段掘りを基本とし、その上面に貼床と同種の粘質土を貼り付けているが、西辺のみはベッド状遺構内部とほぼ同じ高さまで掘り込みを行なったのち、黄褐色粘質土を盛り上げている。柱間には隅丸形の土坑、南辺沿いの中央にはピットを伴う梢円形の土坑が、西辺のベッド状遺構上には深い掘り込みの円形土坑が確認されている。形状と位置から

SK02が炉跡であると考えられる。

出土遺物 (第113・117図/図版31・32・39・45・46)

埋土内に少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めるものは少ない。頭部が屈曲し、胴部に張りを持って平底の底面へ繋がる形状の甕と、尖り気味の底部からやや内湾して立ち上がる鉢類が認められる。その他、外面に平行タタキの軌跡をわずかに残す台付鉢が1点出土している。

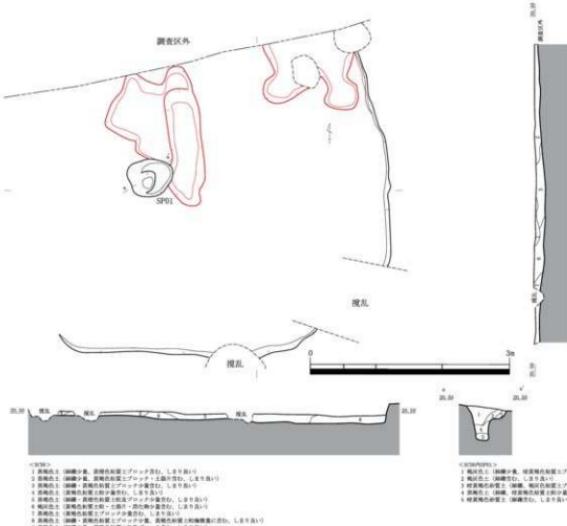
石器類は黒色緻密質安山岩の半加工品、金属製品の研磨に使用したと思われる棒型の砥石等、少量出土するのみである。

56号住居 (第112図/図版15)

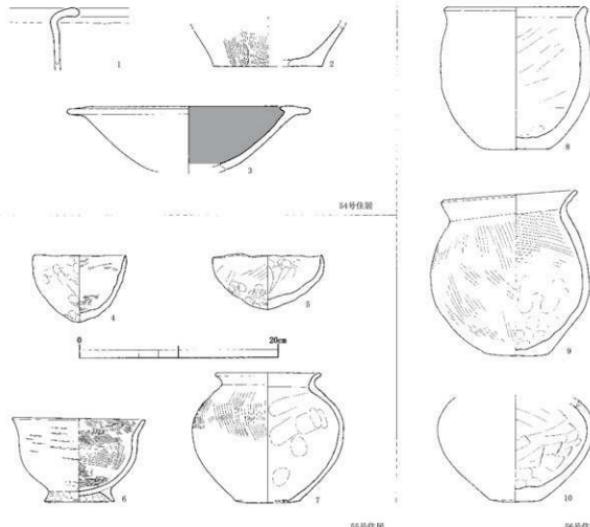
調査区北端東寄りに位置し、38・45号住居に切られ、20・21号土坑、9号溝を切る。2軒の住居に切られるため上面は大幅に削平を受けており、住居の原型は留めていないが、東辺の立ち上がりが比較的明瞭に認められるため、1軒の住居であると判断した。造構の北半分は調査区外へ延長するが、II区へはおよばない。主軸は南北方向で、東西残存長5.3×南北残存長4.5m、検出面からの深さは最大0.3mを測る。2柱の構造を探り、北側の柱は調査区外にあると思われる。床面には黄褐色粘質土で薄く貼床を施し、貼床下には不整形の掘り込みが認められる。壁沿いの細溝、屋内土坑等の住居に伴う施設は一切確認出来ていない。

出土遺物 (第113・117図/図版40)

造構そのものの残存状況が不良であるため、遺物の出土はわずかである。甕は頭部が緩いくの字に屈曲



第112図 56号住居 (S=1/60)



第113図 54・55・56号住居出土土器 (S=1/4)

し、肩部に張りを持つて平底の底部に累がる時期のもの。調整は内外ともハケもしくは工具ナデで、平行タキの痕跡は認められない。

その他、安山岩・黒曜石の片剥と、図示したガラス小玉1点が出土している。

57号住居（第114図/図版5）

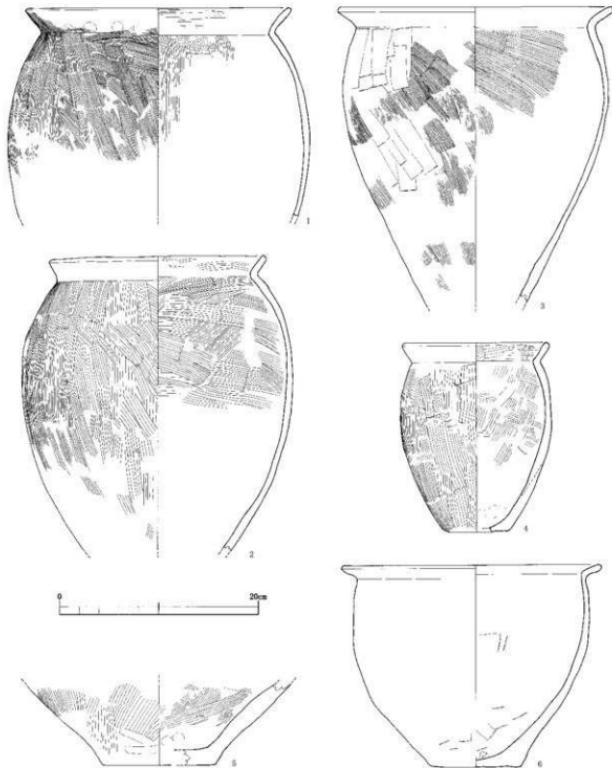
調査区中央東寄りに位置し、50・53号住居に切られ、60・65・68号住居、11号溝、1号土壠墓を切る。主軸は北東-南西方向で、4柱の構造を持つ。北隅に段階掘りと粘質土貼付を併用したベッド状造構を検出しているが、下層の11号溝との差異が明瞭に確認出来ず、北西辺との接点は不明となっている。柱間に隅丸方形と長方形の2基の土坑を掘り込んでいる。SK01は東西両脇に小型のピットを伴っており、住居の上部構造もしくはSK01の補助的な役割を果たしたものと思われる。SK02は埋土下層に少量ではあるが焼土を含み、こちらが卯跡であると考えられる。沿いには部分的かつ断続的に細溝が認められる。貼床は造構のどこからも確認されていない。

出土遺物（第116-117図/図版32・38・41・42・45）

床面直上及びSK01内を中心に少量の遺物が出土している。甕・壺を主体とする大型のものが多いが、完形に復元出来るものはわずかである。甕は口縁部がくの字形に屈曲し、肩部で張りを持つもの。壺は底部のみの出土であるが、平底から上部へ大きく広がるもの。弥生時代後期前葉の所産。

石器類は黑色緻密質安山岩の石礫、石錐、半加工品の他、金属製品の研磨に使用したと思われる砥石が出土している。砥石は遺物の中ではやや異質であり、上面造構埋土からの混入品である可能性もある。



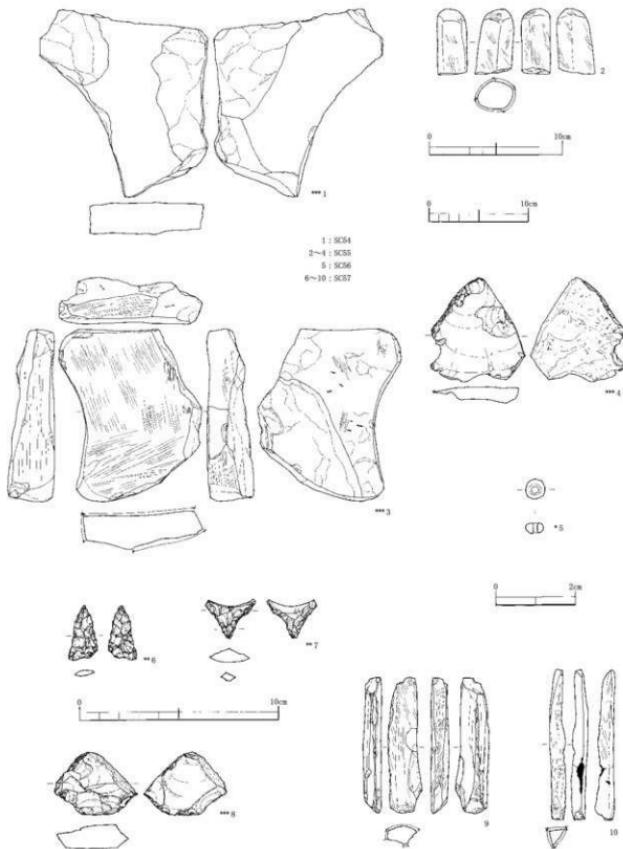
第116図 57号住居出土土器 ($S=1/4$)

58号住居 (第115図/図版16)

調査区中央南西寄りに位置し、32・41・47号住居に切られる。検出状況からは8・10号溝との先後関係は不明である。遺構の大半は上面遺構に削平されており、北西隅の一角が残存するのみとなっている。遺構の規模、主柱数、内部構造等は全て不明、北西隅にピットを1基だけ確認している。平面プランは方形あるいは長方形を呈すると思われる。

出土遺物は極めて微量であり、いずれも細片のため時期を示すものではない。



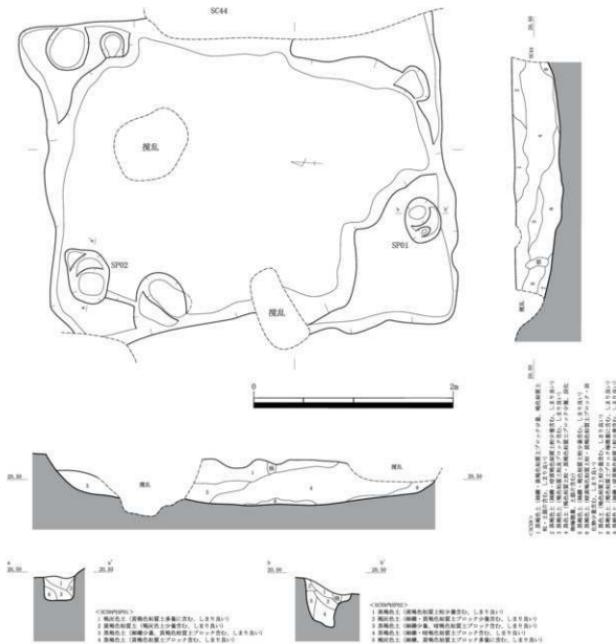


第117図 54・55・56・57号住居出土石器 (S=1/3、*付はS=1/1、**付はS=1/2、***付はS=1/4)

59号住居 (第118図/図版16)

調査区南東隅に位置し、44号住居に切られ、65号住居、12号溝、26号土坑を切る。主軸は南北方向で、長軸4.0×短軸3.2m、検出面からの深さは最大0.5mを測る。上面からの削平はわずかであるものの、遺構そのものの形状が不明瞭であり、壁面の立ち上がりも緩やかな傾斜となっている。主柱になるビットは



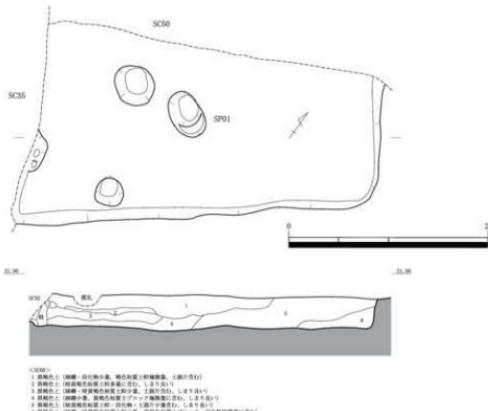


第118図 59号住居 (S=1/40)

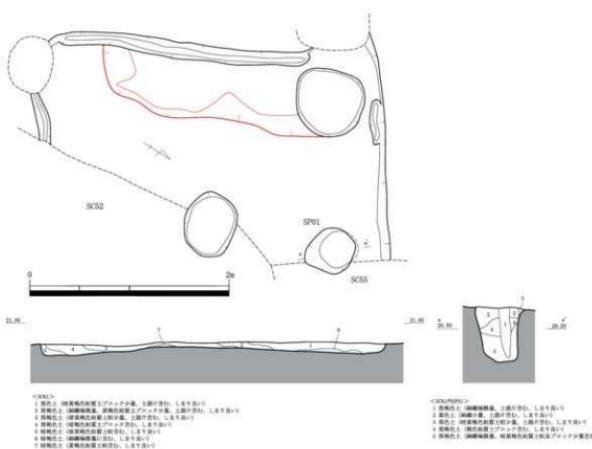
調査段階では確認出来ていない。東辺沿いでは柱穴が認められないが、おそらくSP01・02とともに4柱の構造を探ると思われる。平面プランは長方形であるが、縁辺部は崩落のためか不整なラインを描く。遺構の4隅にはテラス状の段差が見られる。大きさはまちまちで形状も不整だが、段掘りで構築されていることから、ベッド状遺構的役割を果たしたと考えられる。その他、炉跡等の住居に伴う施設は確認していない。

出土遺物

埋土から土器・石器の出土があるが、遺構の残存状況と比較すると非常に少量である。またいずれも小片のため、図示は控えた。甕類は口縁部が外に向く屈曲し、端部にキザミを持つものと、口縁部から肩部へ至る箇所に接合による段差を持つものが見られる。弥生時代前期前葉の所産だが、混入品か。その他、石斧小片、投弾等の微量の石器が出土している。



第119図 60号住居 (S=1/40)



第120図 61号住居 (S=1/40)





60号住居 (第119図/図版16)

調査区中央南東寄りに位置し、35・50・57号住居に切られ、65号住居を切る。上面遺構の削平により南東隅を残すのみだが、35号住居との切り合い部分でわずかに西側の立ち上がりが認められるところから、主軸は北西—南東方向、方形もしくは長方形の平面プランを持つ。2柱の構造であると思われる。東西3.8×南北残存長2.1m。検出面からの深さは0.35mを測る。東・西壁面からの位置を根拠にSP01を主柱と判断した。これと対になるピットは、上面遺構調査時に検出したものも含めて検討したが、確認出来ていない。遺構の残存する範囲では、屋内土坑、堀溝等の住居に伴う施設は認められなかった。床面に貼床は施されていない。

出土遺物 (第127図/図版40)

土器から極微量の土器片と、砥石・投弾等が出土しているが、細片のため一部の図示に留めている。土器は口縁部がくの字形に屈曲する甕を含み、弥生時代後期前葉の所産と思われる。

61号住居 (第120図/図版16)

調査区中央北東寄りに位置し、52・55・68号住居に切られる。上面遺構に削平され、東半分は残存していない。主軸は北東—南西方向、平面プランは長方形を呈すると思われる。南北3.5×東西残存長2.2m、検出面からの深さは最大0.15mを測る。西壁沿いと南北両辺に断続的に細溝の掘り込みが認められる。土器の状況からSP01を主柱と想定したが、上面遺構で検出したものを含め、対になるものは確認出来なかつた。位置からは2柱とも4柱とも考えられる。52号住居に切り合う部分及び北西隅に浅い土坑状の掘り込みを確認している。底面には黄褐色粘質土で薄く貼床を施し、西辺沿いに湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが見られる。

出土遺物 (第127図/図版45)

遺物の出土は極めて微量であった。時期を示すものは、弥生時代後期の甕片、柱状片刃石斧の小片の2点のみである。

62号住居 (第121図/図版16)

調査区北西寄りに位置し、29号住居に切られ、70・74・76・80号住居を切る。主軸は南北方向で、長軸5.8×短軸3.9m、検出面からの深さは0.6mを測る。遺構の残存状況は良好である。2柱で平面プランは長方形を呈し、柱間に不整円形の小型の土坑を持つ。北辺を中心に、東西辺の中央部分にかけて堀沿いに細溝を掘り込んでいる。北辺全体と南東・南西部に幅0.8~1.3m、高さ0.15mの段掘りで構築したベッド状遺構を検出している。南辺中央部に空白があるが、ここには主柱の補助と思われるピットが掘り込まれているため、出入口ではないと考えられる。南西隅のベッド状遺構上にはもう一段テラス状の高まりがあり、この部分が出入口に相当すると思われる。床面全体に黄褐色粘質土で貼床を施し、貼床下には床面全体がテラス状を呈する段差を持つ。

出土遺物 (第122・127図/図版32・34・41)

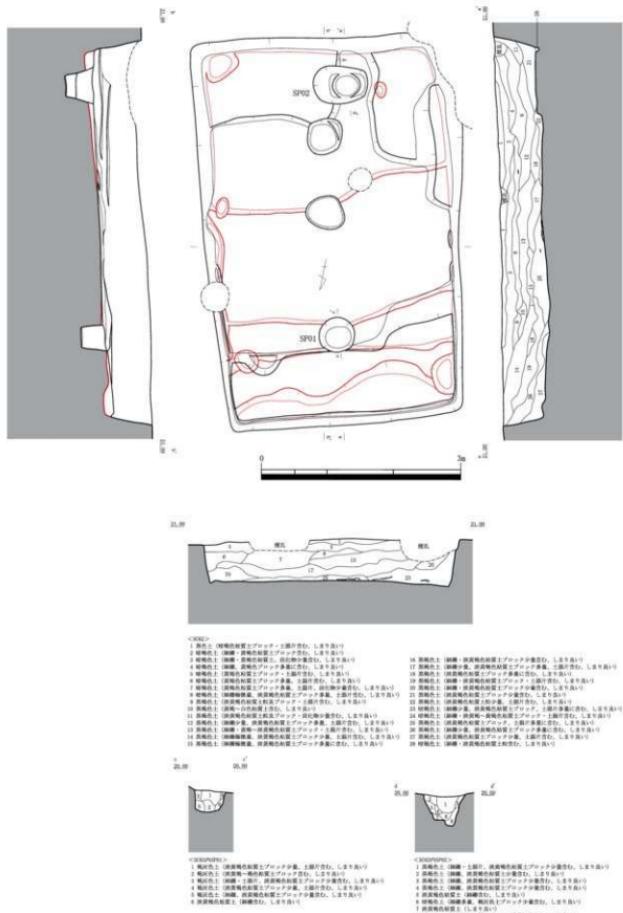
床面直上を中心に、埋土からまとまった量の遺物が出土している。器種は甕・鉢・器台の他、ミニチュア土器も含む。甕は額部の届曲や壊いもののかくの字形へ変化し、外面の平行タタキ優勢からタテハケ優勢へ転換する時期のもの。鉢は外面に平行タタキ痕跡を残すもの。壺は鉢の変遷過程で口縁部の直立が緩いものと、脇部がしっかりと張った丸底を呈するものが混在している。器台は鼓形の系統で外面に平行タタキの痕跡が見られる。その他、口縁部が屈曲して直立する広口壺が1点出土している。

石器の出土はスクリイバー・台石の他、微量の投弾のみである。鉄製品は認められない。

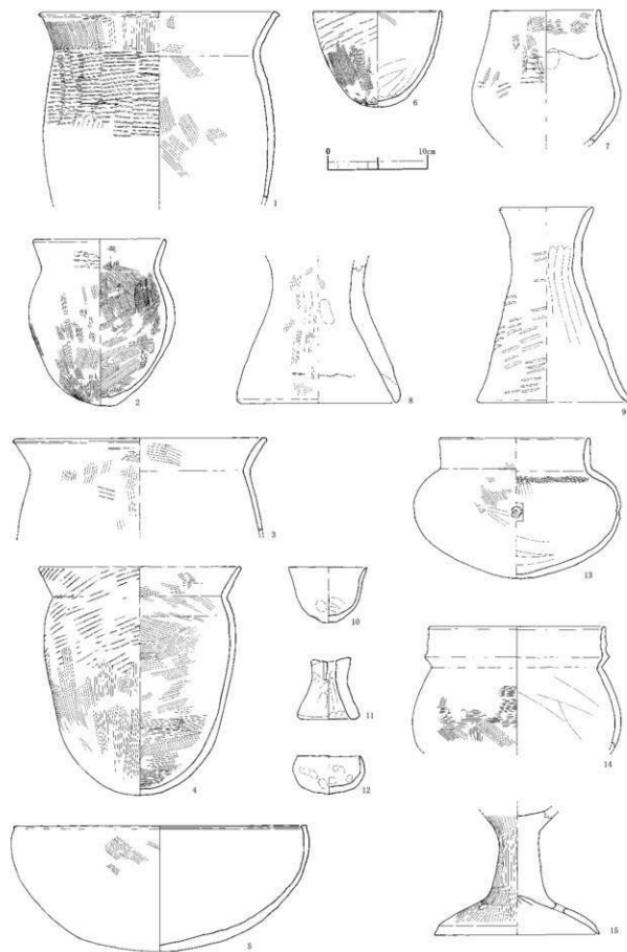
63号住居 (第124図/図版16)

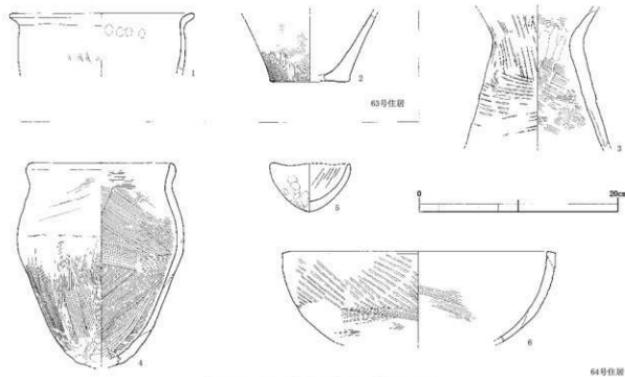
調査区南西隅に位置し、34・47号住居に切られる。遺構のほとんどが削平されているが、残存するピットから、主軸は東西方向と判断した。南北4.6×東西残存長最大2.3m、検出面からの深さ0.45mを測る。平面プランは長方形と想定され、2柱で東側にテラス状の段差を持つがベッド状遺構と判断出来るほどの幅はない。屋内土坑と思われる遺構も床面からは確認されていない。



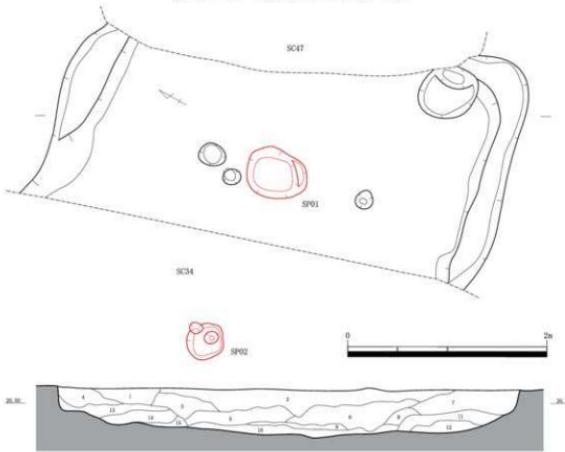


第121図 62号住居 (S=1/60)

第122図 62号住居出土土器 ($S=1/4$)

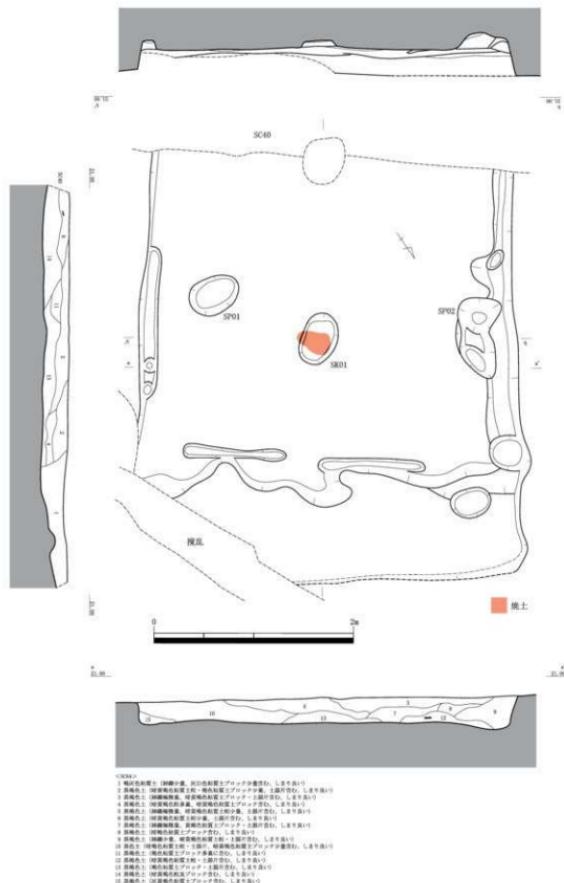
第123図 63・64号住居出土土器 ($S=1/4$)

64号住居



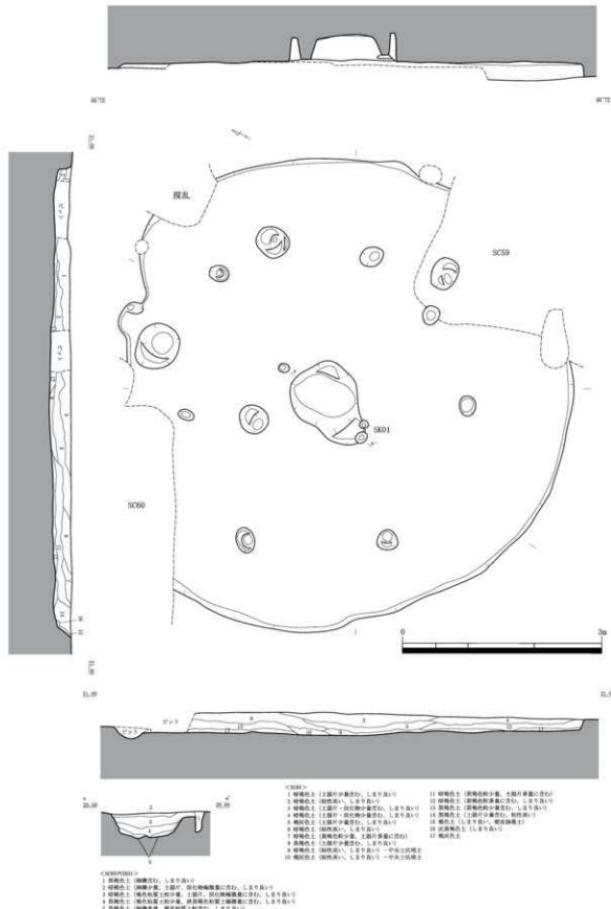
- SC47
SP01
SF02
- 2.8m
1. 領地内土 (1) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
2. 領地内土 (2) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
3. 領地内土 (3) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
4. 領地内土 (4) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
5. 領地内土 (5) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
6. 領地内土 (6) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
7. 領地内土 (7) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
8. 領地内土 (8) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
9. 領地内土 (9) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
10. 領地内土 (10) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
11. 領地内土 (11) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。
12. 領地内土 (12) 土質: 淡茶褐色の粘土質土。塑性強度は弱めで、しなりにくい。

第124図 63号住居 ($S=1/40$)



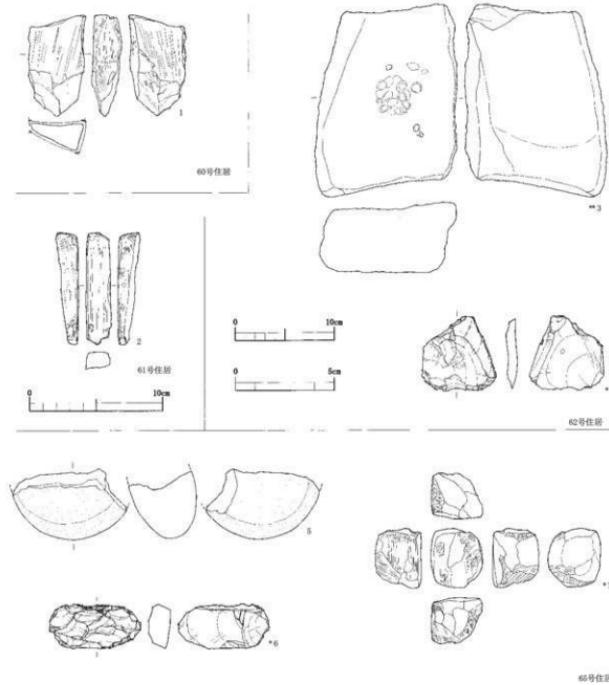
第125図 64号住居 (S=1/40)





第126図 65号住居 (S=1/60)



第127図 60・61・62・65号住居出土石器 ($S=1/3$ 、*付は $S=1/2$ 、**付は $S=1/4$)

出土遺物 (第123図)

遺構そのものの残存状況が不良なため、遺物の出土も極わずかである。時期を示すものとしては、弥生時代後期初頭の甕片数点が認められるのみである。

64号住居 (第125図/図版16)

調査区中央北寄りに位置し、40号住居に切られる。北辺は後世の造成により削平されており、立ち上がりは残存していない。主軸は東西方向で2柱の構造を探る。東西3.8×南北残存長4.2m、検出面からの深さ0.3mを測り、平面プランは長方形を呈する。柱間に楕円形の浅い土坑を検出しており、上面に焼土の広がりが認められることから炉跡と判断した。北辺には幅1.0m、高さ0.1mの段掘りによって構築されたペッド状遺構が見られる。東西辺及びペッド状遺構の下端に沿って細溝を検出している。ペッド状遺構の端部は不整なラインを描いており、本来なら里沿いに掘削される細溝がペッド状遺構の段差の際に見られることから、この不整なラインの部分までが1軒の住居となる可能性もある。





出土遺物 (第123図/図版34)

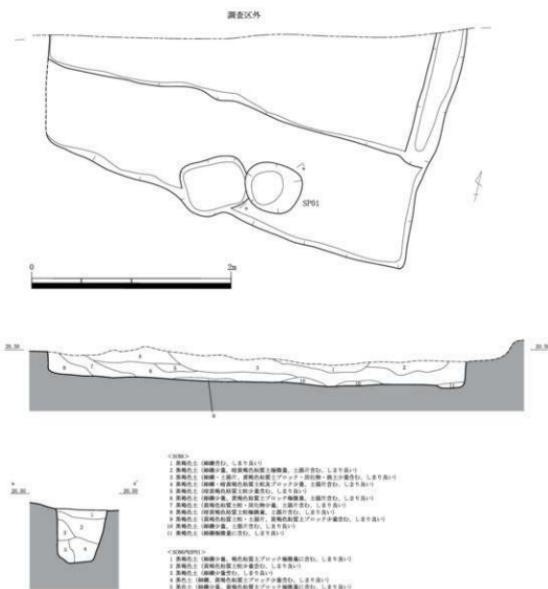
遺物の出土は極めて少量で、原型を留めるものはほとんどない。甕は頭部に明瞭な屈曲を見せない、内外面ともハケ調整のもの。器台は波形の系統で外面に平行タタキの経跡を残す。弥生時代後期末の所産。

65号住居 (第126図/図版16)

調査区南東寄りに位置し、59・60号住居に切られる。平面プランは北端が若干不整な形状であるものの、ほぼ正円形を呈する。直径7.3m、検出面からの深さ0.3mを測る。中央にピット2基を伴う土坑を持ち、その周縁に6基の柱穴がめぐら、いわゆる松菊里型と呼ばれる形状をとる。この他にも造構の床面では複数のピットが検出されているが、柱穴としては不整な形状であったり、他の柱穴との位置から造構に伴わないものと判断している。

出土遺物 (第127図/図版40・41・45)

埋土から遺物の出土は認められるものの、極少量である。土器類はいずれも細片で弥生時代前期後葉の所産と思われる。石器類は図示したスクレイパー、磨石と、石材は不明だが研磨痕跡のある半加工材、投



第128図 66号住居 (S=1/40)



弾が出土している。

66号住居（第128図/図版17）

調査区北東側に位置し、27号住居に切られ9号溝を切る。北半分は調査区外へ延長するため、詳細な規模は不明である。また、南西側は後世の削平により遺構の立ち上がりが残存していない。床面で検出したビットの状況から南北を主軸にし、南北両辺にベッド状遺構を作りと考えられる。南北残存長1.95×東西残存長南辺で検出したベッド状遺構は幅1.1m、高さ0.15m、段掘りで構築されている。東辺に横溝の掘り込みがある他は、屋内土坑等の住居に伴う施設は見られない。また踏床も認められない。

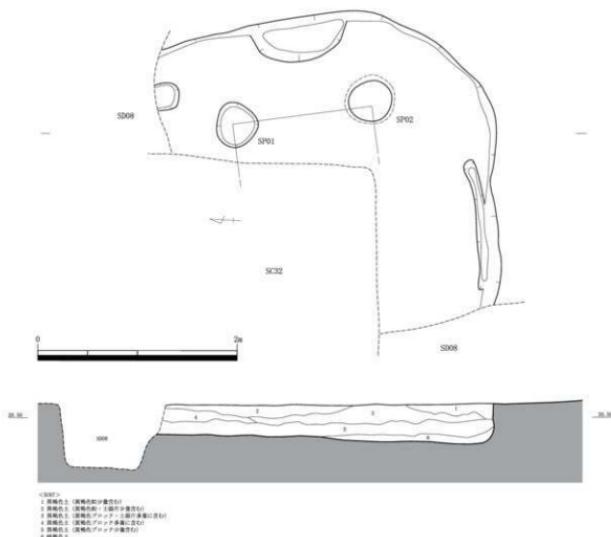
出土遺物（第135図/図版36・38）

埋土から遺物の出土は認められるが、極めて少量で細片のため図示は控えた。土器は口縁部がくの字形に屈曲して平底の底部へ延びる、弥生時代後期の所産。

その他、鉄製の摘躑片、鍵状の鉄製品が出土している。石器の出土は認められない。

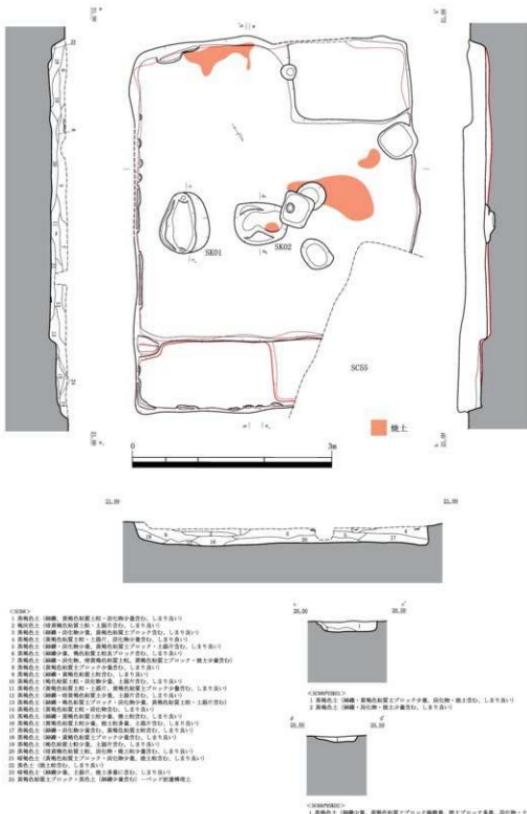
67号住居（第129図/図版17）

調査区中央南西寄りに位置し、32号住居、8号溝に切られる。残存する掘り方・ビットの状況から、4





柱で平面プランは隅丸方形と想定される。主軸は東西方向と思われる。南北残存長3.25×東西3.3m、検出面からの深さは最大0.4mを測る。東辺沿いに半円形のテラス状の高まりを持つ。柱間に相当する位置であることから、この部分が入口であったと考えられる。南辺沿いの一部分に細溝が掘り込まれている他の住居に伴う施設と想定される掘り込み等は認められない。また、床面に貼床と見られる痕跡は確認されていない。



第130図 68号住居 (S=1/60)



出土遺物（第132図）

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で原型は留めていない。甕はやや綻んだ字形を呈し、肩部に断面三角の貼付突帯を持つ、大型のもの。同時期の蓋、口縁部に穿孔を施した小型甕も出土している。弥生時代中期後葉の所産。

その他、石庖丁の小片、投弾等、微量の石器が出土している。

68号住居（第130図/図版17）

調査区北東寄りに位置し、52・53・55・57号住居に切られ61号住居、11号溝、1号土壤墓を切る。主軸は北東—南西方向で、長軸5.7×短軸4.3m、検出面からの深さ0.27mを測る。平面プランは長方形で2柱と考えられるが、調査段階で主柱は検出出来ていない。整理作業時に切り合いで構築で検出されたピット群を含め、主柱の検討を行なったが、該当すると判断出来るものは見られなかった。南西隅と北辺に、幅1.1m、高さ0.15mの段掘りで構築されたベッド状構造を持つ。構造の東半部を中心に断続的な壘溝が認められる。床面中央には不整形の凹、土坑があり、土坑内及び周辺に焼土の広がりが認められたことから炉跡と判断した。ベッド状構造とも含め、全体に黄褐色粘土質でしっかりと貼床を施す。

出土遺物（第132・135図/図版32・35・40・41・45）

埋土より一定量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めない。甕類は頸部が明顯に屈曲し、器壁が肉厚になる時期のもの。一部頸部に貼付突帯を持つものが含まれる。支脚は舟形の系統で外面に平行タタキ痕跡を残す。弥生時代後期の所産。

石器類は図示した黒色織密質安山岩のスクレイパー、加工途中の原石、金属製品の研磨に使用したと思われる砥石類、ガラス小玉の他、投弾が少量出土している。

69号住居（第4回/図版17）

調査区中央北寄りに位置し、42号住居に切られ71号住居を切る。平面プランは不整な形状であるが、主軸は東西方向、2柱の構造を探ると思われる。長軸7.5×短軸残存長4.9m、検出面からの深さ0.25mを測る。主柱は主軸から若干ずれているが、掘り込みの深さ、位置関係からSP01・02と判断した。柱間に不整形の浅いピットが確認されており、微量ではあるが焼土の広がりも見られることから、炉跡の可能性が考えられる。床面には黄褐色粘土質で薄い貼床が施され、貼床下には北東—南西方向の溝状の掘り込みが認められる。その他、構造に伴う施設は認められない。

出土遺物（第132・135図/図版32・36・37・40・46）

埋土から遺物の出土は認められるものの、極めて少量でいずれも細片である。甕類は口縁部の屈曲が認められず、体部外面に平行タタキの痕跡を明瞭に残す時期のもの。鉢は口縁部が直立する傾向があるが、胴部に張りがなく古手の形状を示す。器台は舟形の系統で外面に平行タタキの痕跡を残す。

石器類は台石、磨石と投弾のみが出土している。これに対して完形に近い鉄製ヤリガンナ、摘鎌が出土しており、金属製品が優位となっている。

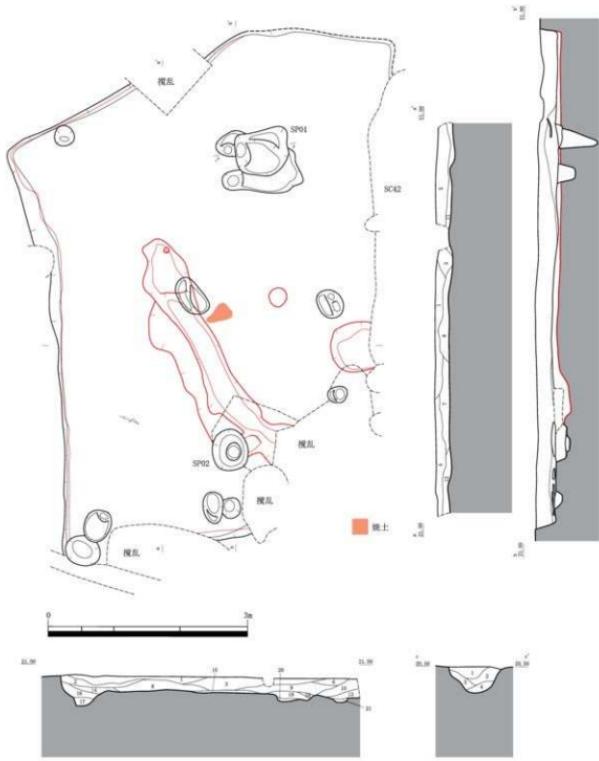
70号住居（第133図/図版17）

調査区北西隅に位置し、62号住居に切られ、74・75・76・79・80号住居を切る。西辺を62号住居に削平されているが、北辺で東西方向の規模が判明している。主軸は南北方向を思われ、長軸5.8×短軸4.45m、検出面からの深さ0.5mを測る。2柱の構造を探ると思われるが、62号住居で検出されたものを含めて検討した結果、主柱と判断出来る柱穴は認められなかった。東辺沿いの小型ピットを伴う4柱の可能性もある。床面には地山と同色の粘土質を用いた貼床は認められなかったが、溝状の掘り込みが確認されていることから、最下層の黄褐色粘土質ブロックを含んだ黒褐色土が貼床であった可能性が考えられる。南辺の中央部には段掘りで構築されたテラス状の高まりがあり、この部分が入口であったと想定される。

出土遺物（第138図）

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で時期の特定は困難であった。甕は頸部に平行タタキ痕跡を残す貼付突帯を持ち、胴部下方にも同様の突帯をめぐらすと思われる。大型のもの。器台は鼓

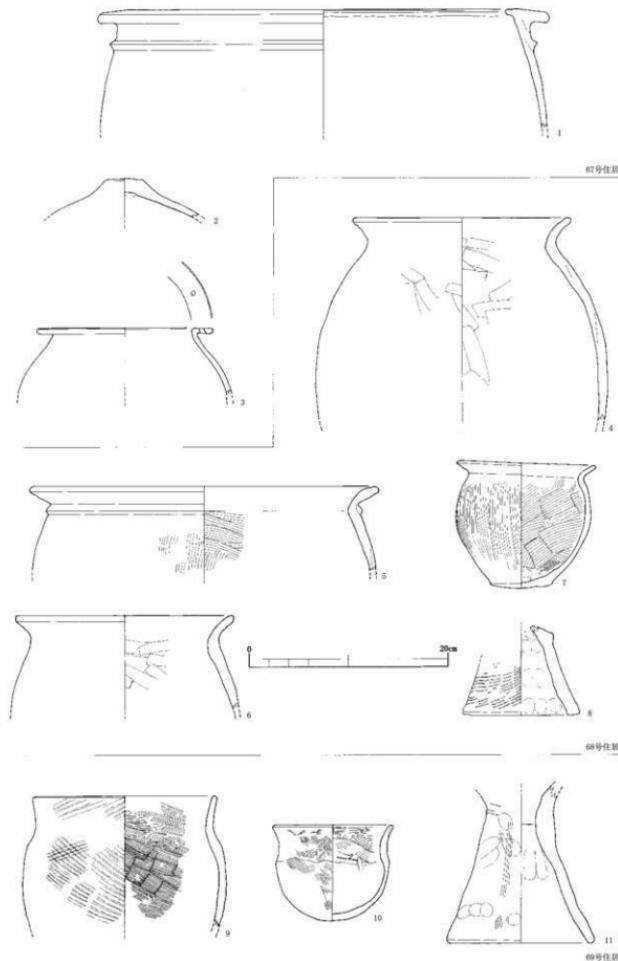




- C300W:
1. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 2. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 3. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 4. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 5. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 6. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 7. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 8. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 9. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 10. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 11. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 12. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 13. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 14. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 15. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 16. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 17. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 18. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 19. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 20. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
- C300W':
1. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 2. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 3. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い
 4. 廊下 (縦壁: 無れ、横壁: 無れ) ブリッケ仕上げ、しまり良い

第131図 69号住居 (S=1/60)





第132図 67・68・69号住居出土土器 (S=1/4)



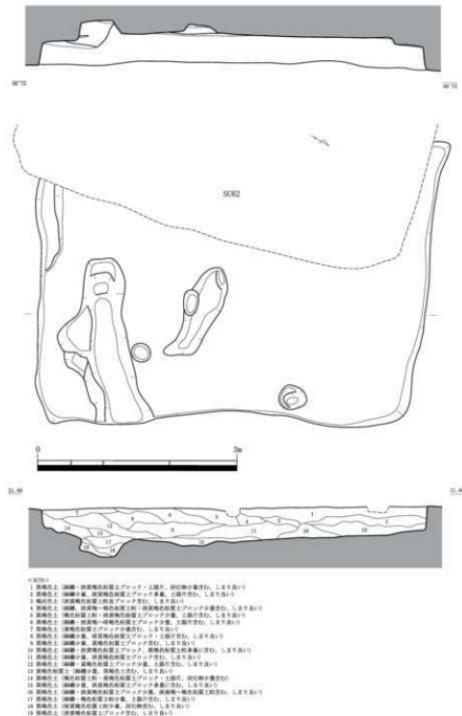


形の系譜で、上部が内側へ屈曲するもの。調整に平行タタキは認められない。鉢は口縁部の直立と胴部の張りが比較的目立つもの。弥生時代後期末の所産。

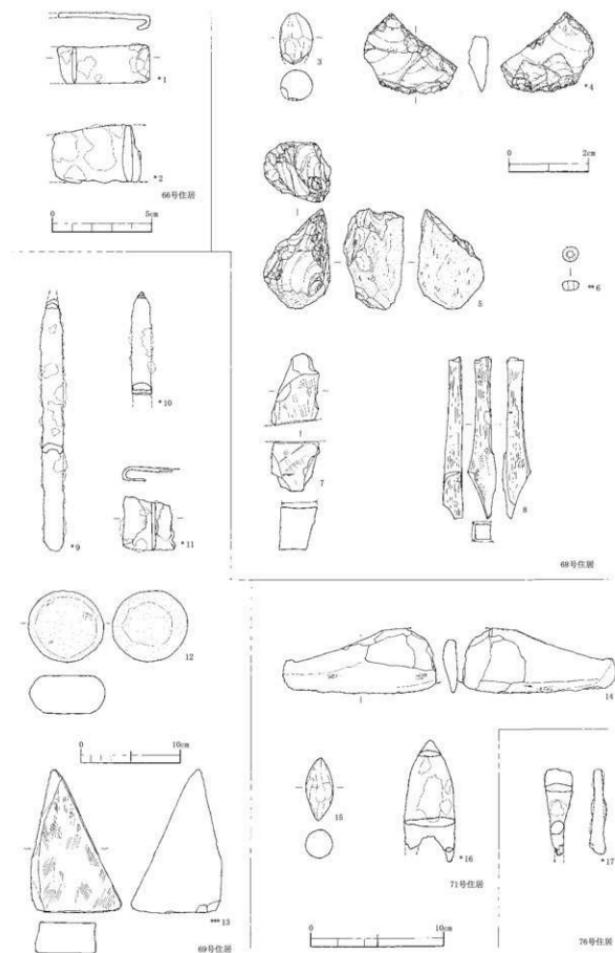
石器・鉄器類は皆無に近く、わずかに投弾1点が確認されているのみである。

71号住居 (第134図/図版17)

調査区北西に位置し、69号住居・31号土坑に切られ、22号土坑を切る。東辺を除く造構の3辺は上面造構の削平を受けておらず、原型を保っているはずだが、平面プランは極めてひずみのある方形である。検出・調査段階では理上の状況から1軒の住居と判断したが、小型の方形住居と切り合う、あるいは北東側にベッド状造構を持っていた可能性もある。主軸は南北方向で、長軸最大4.6×短軸4.7m。検出面からの深さは0.3mを測る。2柱の構造を探り、ピットの規模・形状からSP01・02を主柱と判断したが、南側はSK01に伴うピットが主柱となる可能性もある。柱間にテラスを持つ楕円形の浅い土坑が、南辺中央に



第133図 70号住居 (S=1/60)



第135図 66・68・69・71・76号住居出土土製品・石器・鉄器
(S=1/3、*付はS=1/2、**付はS=1/1、***付はS=1/4)



72号住居（第136図/図版17）

調査区南東隅に位置し、造構の大部分が調査区外へ延長する。東辺は搅乱によって破壊されており、造構の規模・構造の詳細は不明である。北辺の状況から、主軸は北東—南西方向と考えられる。東西残存長4.2×南北残存長1.9m、検出面からの深さは最大0.45mと測る。東辺に段掘りによって構築された、高さ0.18mのベッド状造構を持つ。北辺から東辺にかけて堀沿いに細溝を掘り込んでいる。検出した範囲内では主柱は認められないが、調査区内で確認している他造構と比較して判断すると、2柱の構造を探ると思われる。軒跡及び貼床の痕跡は認められない。

理上から極微量の遺物が出土しているが、いずれも細片で時期の特定は不可能だった。

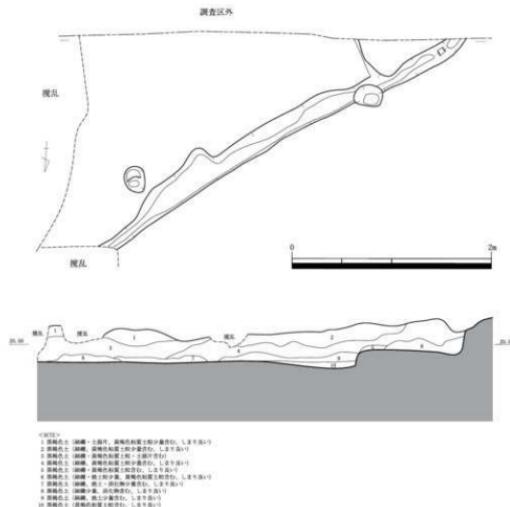
73号住居（第137図/図版17）

調査区西端中央に位置し、29号住居に切られる。造構の大部分は調査区外へ延長する。北辺は搅乱に削平されており、立ち上がりは残存していない。主軸は東西方向と思われ、南北4.3×東西残存長0.95m、検出面からの深さ最大0.45mを測る。南北東隅にピットを伴う他は、検出した範囲内で造構に伴う施設は確認されていない。また貼床の痕跡も認められない。

大型の土坑の可能性もあるが、他の検出住居と規模が類似することから、ここでは住居として扱っている。

出土遺物（第138図）

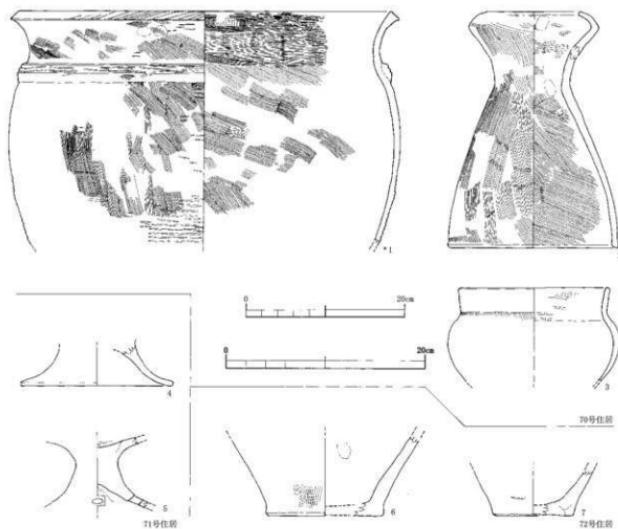
遺物は土器の細片が微量に出土するのみである。図示した甕の底部は弥生時代中期末の所産。石器・鉄製品等の出土は皆無であった。



第136図 72号住居 (S=1/40)



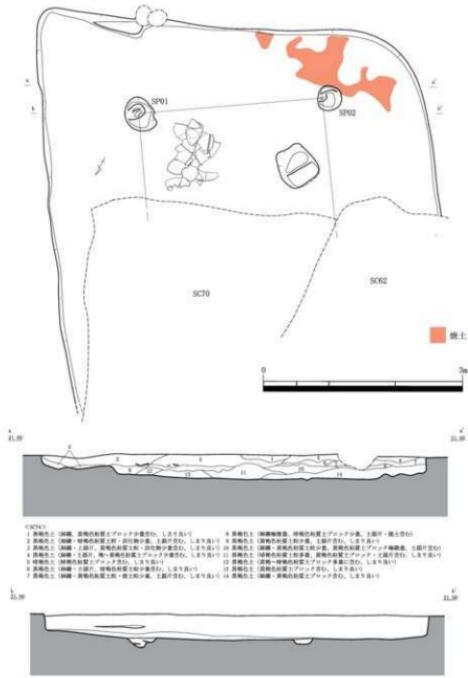
（図73）
 1. 窓枠：（縦縞模様、表面地に墨色のブリッケラ痕有り。しまり無い）
 2. 基礎内：（縦縞模様、表面地に墨色のブリッケラ痕有り。しまり無い）
 3. 基礎外：（縦縞模様、表面地に墨色のブリッケラ痕有り。しまり無い）
 4. 窓枠：（縦縞模様、表面地に墨色のブリッケラ痕有り。しまり無い）
 5. 基礎内：（縦縞模様、表面地に墨色のブリッケラ痕有り。しまり無い）
 6. 基礎外：（縦縞模様、表面地に墨色のブリッケラ痕有り。しまり無い）
 7. 基礎内：（縦縞模様、表面地に墨色のブリッケラ痕有り。しまり無い）
 8. 基礎外：（縦縞模様、表面地に墨色のブリッケラ痕有り。しまり無い）

第137図 73号住居 ($S=1/40$)第138図 70・71・73号住居出土土器 ($S=1/4$ 、*付は $S=1/5$)

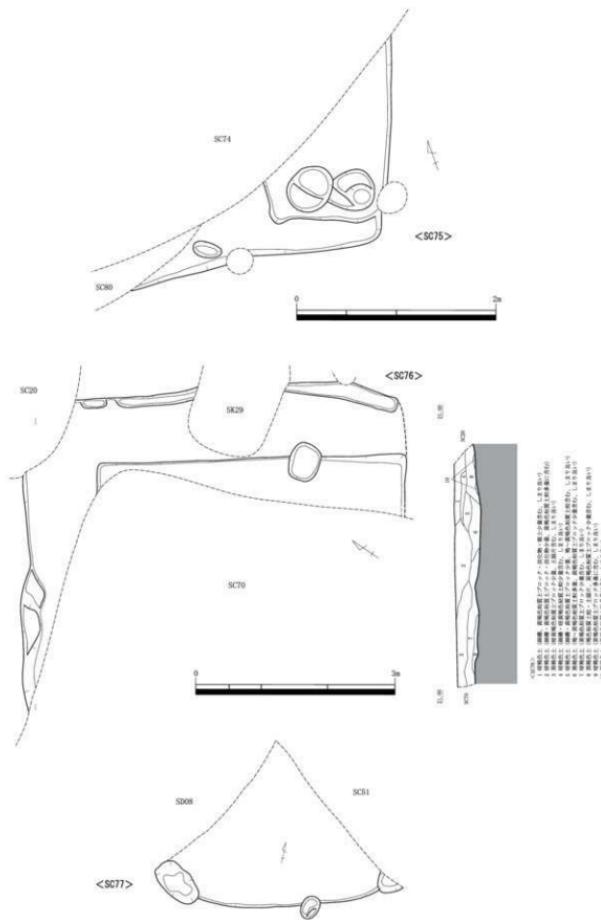
74号住居（第139図/図版18）

調査区西端に位置し、62・70号住居に切られ、75・76・79・80号住居を切る。北辺は62・70号住居に大幅に削平されているため詳細は不明である。主軸は北西—南東方向で、南北残存長6.2×東西5.8m、検出面からの深さ最大0.35mを測る。4柱の構造を探ると考えられるが、柱穴と判断したビット群を検討したものの、対応するものが確認出来なかつた。SP02の北西に不整方形の浅い土坑を検出しているが、用途は不明である。また遺構床面の南西隅では焼土の広がりが見られたが、炉跡状の掘り込みは確認されていない。南東隅は住居の床面と比較するとやや高い傾向があるが、ベッド状遺構と判断出来るほどの明瞭な段差ではなかつた。

遺構図にも示しているが、床面から大型の甕が出土している。接合の結果、ほぼ完形となつたが、遺構の検出段階では墓坑のラインは確認されておらず、また遺構削除後も甕棺墓の存在を示唆する痕跡が認められなかつたため、住居に伴う遺物と判断している。

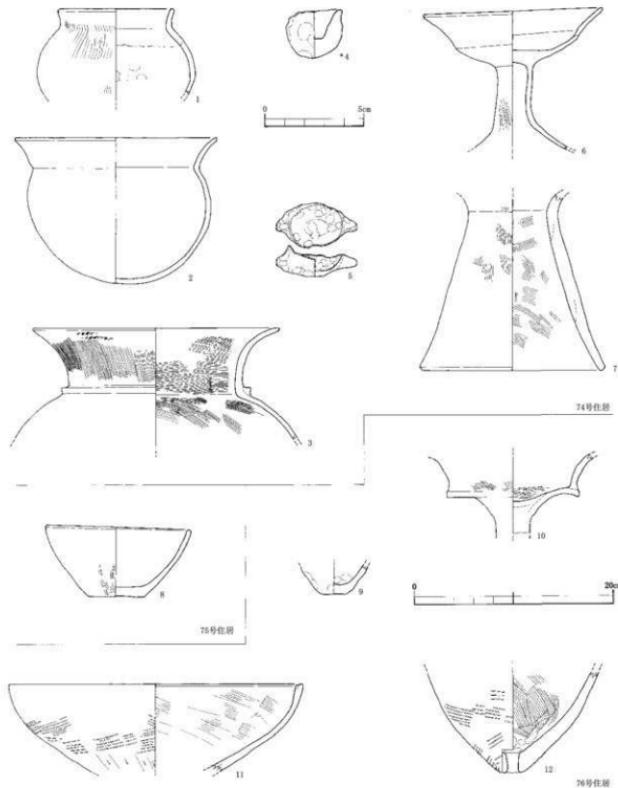


第139図 74号住居 (S=1/60)



第140図 75・76・77号住居 (75 : S=1/40, 76・77 : S=1/60)



第141図 74・75・76号住居出土土器 ($S=1/4$ 、*付は $S=1/2$)

出土遺物 (第101・141図/国版32・33・34)

埋土から少量の遺物が出土しているが、形状を留めるものは極わずかである。甕は頸部が屈曲して外反する口縁部を持つ丸型のものと、頸部に断面三角の腹付直甕を持つもの、床面直上で出土した大型で体部に2条の突帯をめぐらすものが見られる。器台は披形の系統だが、外面に平行タタキは認められない。高杯は杯部内面にわざかに段を持つもの。ミニチュア土器は粗悪な甕と把手付鉢か。弥生時代後期後葉の所産。その他、図示していないが、投弾少量と用途不明の鉄製品が出土している。





75号住居 (第140図/図版18)

調査区西端中央部に位置し、74・80号住居に切られる。近接する79号住居との先後関係は検出状況からは不明である。造構検出時は79号住居と同一で1軒の住居を構成すると想定していたが、74号住居に切られた東辺が長大になること、北辺・南辺それぞれの方角が揃わないことから、2軒の住居であると判断した。造構の大半は上面造構に削平されており、主軸・規模・構造等は全て不明である。南北残存長 $2.1 \times$ 東西残存長 $2.5m$ 、検出面からの深さは最大 $0.35m$ を測る。床席は認められない。

出土遺物 (第141図/図版32)

埋土から極少量の遺物が出土しているが、時期を示すものは図示した1点のみである。弥生時代中期末の所産。その他、投擲數点が出土している。

76号住居 (第140図/図版18)

調査区西端中央部に位置し、20・62・70・74号住居、29号土坑に切られる。但し74号住居とは先後関係が不明瞭であった。西辺は上面造構に大幅に削平されており、詳細は不明である。残存部から、主軸は東西方向、2柱の構造を探ると思われる。南北 $5.8 \times$ 東西残存長 $4.8m$ 、検出面からの深さ $0.45m$ を測る。東・北辺に幅 $1.1m$ 、高さ $0.1m$ の段掘りによって構築されたベッド状造構を持つ。北辺の中央に相当すると思われる部分に狭いテラス状の痕跡があり、この位置が出入口であったと想定される。主柱は切り合い造構内で検出されたピットも含めて検討したが、該当するものは確認出来なかつた。

出土遺物 (第135・141図/図版36)

埋土内から少量の遺物が出土している。鉢は真直ぐに延びた体部が口縁部で内湾するもの。高杯は杯部が明らかな屈曲を持ち、口縁部に向かって外反するもの。甌は底部が尖り氣味で穿孔が1箇所のみ施されている。鉢・甌には外面に平行タタキの痕跡が残る。

77号住居 (第140図/図版18)

51号住居・8号溝に切られる。直径 $6.5m$ 前後の円形住居と思われる。規模・形状から円形住居の一部と判断したが、8号溝の内部及び51号住居の北西部分には造構の延長は認められない。造成時の削平により消滅したか。また、埋土内に遺物は一切確認されていない。

78号住居 (第142図/図版18)

調査区南辺東寄りに位置し、造構の北東隅のみ検出している。土坑の可能性も高いが、掘り込みに明瞭な方形の角が認められることから、ここでは住居と判断した。造構の形状・規模は一切不明である。検出面からの深さは $0.35m$ を測る。遺物の出土は皆無であった。

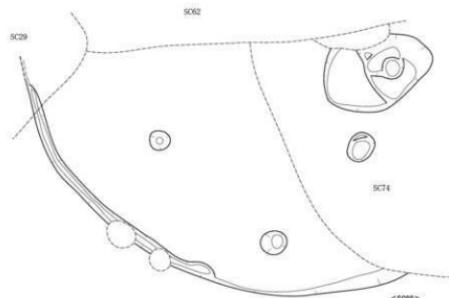
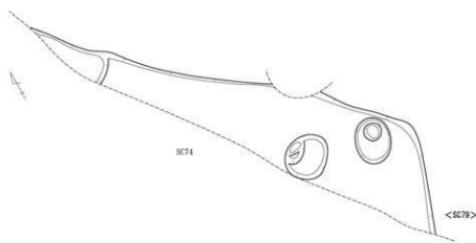
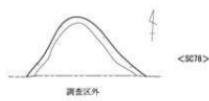
79号住居 (第142図)

調査区西端中央部に位置し、70・74・76号住居に切られる。造構の大半は上面の住居に削平されており、形状・規模は不明である。東西残存長 $4.0 \times$ 南北残存長 $1.0m$ 、検出面からの深さは $0.35m$ を測る。確認された範囲の状況からは、北辺中央に土坑を持つ、4柱の構造とも考えられる。遺物の出土は認められない。

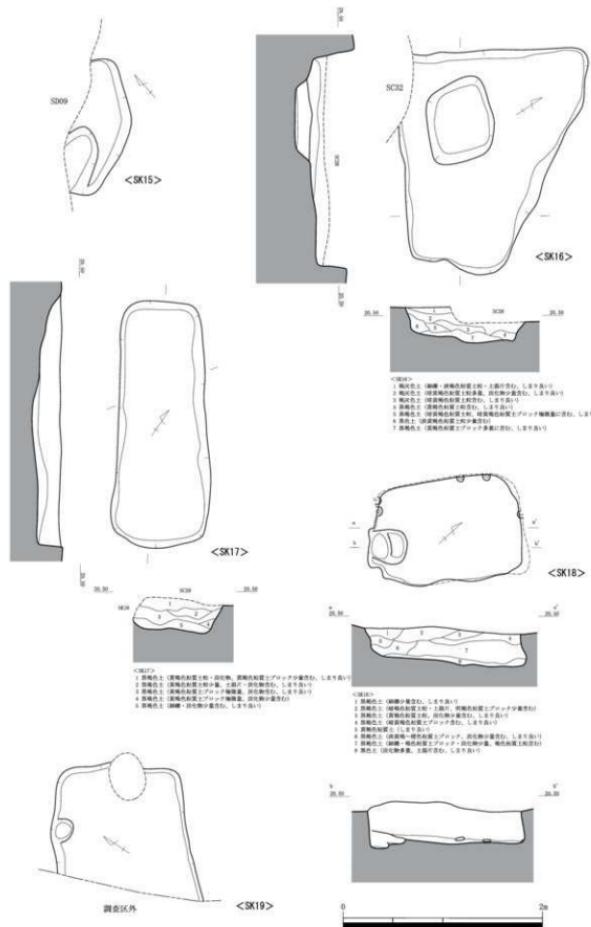
80号住居 (第142図)

調査区西端中央部に位置し、29・62・74号住居に切られ、75号住居を切る。直径 $5.0m$ 前後の円形住居と思われる。検出部分で確認したピットの状況から、松葉型里を探る可能性もあるが、詳細は不明である。壁沿いの一部に細溝を掘り込んでいる。74号住居で検出した不整形の土坑は、位置・深さ等からこの造構に伴うものと判断した。遺物は全く出土していない。





第142図 78・79・80号住居 (S=1/40)



第143図 15~19号土坑 (S=1/40)



<土坑>

15号土坑 (第143図/図版21)

調査区北辺東寄りに位置する。9号溝掘削時に検出したが、一括して掘削してしまったため先後関係は確認出来ていない。15号土坑が9号溝を切ると思われる。東西残存長1.85×南北残存長0.6m、検出面からの深さ最大0.55mを測る。平面プランは梢円形を呈すると思われる。西端にピット状の1段深い掘り込みを作り。廐棄土坑の一種か。

埋土から鐵蓋天井部の小片が出土している。弥生時代中期の所産。

16号土坑 (第143図/図版18)

調査区中央部に位置し、28・32号住居に切られ、49号住居、17号土坑、8号溝を切る。主軸は北西—南東方向で、平面プランは不整形方を呈する。長軸2.2×短軸最大1.8m、検出面からの深さ0.35mを測る。造構底面に不整形方の土坑状の掘り込みを持つ。埋土は褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。

埋土からは投彈と土器の細片が出土しているが、造構の時期・用途は不明である。

17号土坑 (第143図/図版18)

調査区中央部に位置し、28号住居・16号土坑に切られ、49号住居、9号溝を切る。主軸は北西—南東方向で、平面プランは梢丸長方形を呈する。長軸2.5×短軸0.95m、検出面からの深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。造構底面はやや傾斜を持つが掘り方の立ち上がりは比較的明瞭で、平面プランの形状から、土壤墓の可能性も考えられる。

埋土からは、投彈と安山岩剥片、微量の炭化物と土器片が少量出土しているが、いずれも細片で時期を示す資料は認められなかつた。

18号土坑 (第143図/図版19)

調査区南東寄りに位置し、35号住居に切られる。主軸は北東—南西方向で、平面プランは梢丸長方形を呈する。長軸1.55×短軸1.0m、検出面からの深さは0.35mを測る。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積に近い様相を示す。造構底面の縁に5基の小型のピットを、南辺中央に段掘りの大型ピットを作り。埋土は造構の廐棄後に一部崩落した状況を示している。貯蔵穴として使用されたと思われる。

出土遺物 (第146図)

埋土からは甌・壺の小片、石斧の細片と投彈が出土している。弥生時代前期後葉の所産と考えられる。

19号土坑 (第143図/図版19)

調査区西辺中央に位置し、西半分は調査区外へ延長する。主軸は北東—南西方向で、平面プランは長方形を呈する。東西残存長1.3×南北1.35m、検出面からの深さは0.3mを測る。北辺中央部にピット状の掘り込みを持つ。貯蔵穴か。

埋土からは微量の土器が出土しているが、いずれも細片で時期を示すものはない。

20号土坑 (第144図/図版19)

調査区北東寄りに位置し、38・45・56号住居に切られ、21号土坑、9号溝を切る。主軸は北東—南西方向で、不整形の平面プランを検出しているが、本来は梢丸長方形であったと思われる。主軸の延長線上に幅0.2m程度のテラス状の段差を持つ。長軸3.4×短軸1.3m、検出面からの深さは最大0.2mを測る。底面の西側が低くなるが、明瞭に段差を認められるほどではない。

出土遺物 (第146図/図版32)

造構図に示した並の他、少量の土器、投彈が出土している。弥生時代後期末の所産か。





21号土坑（第144図/図版19）

調査区北東寄りに位置し、38・45・56号住居、20号土坑に切られ、9号溝を切る。東側は20号土坑に削平されており、道構の全容は定かではない。主軸は北東—南西方向で、平面プランは不整形として検出しているが、本来は長方形を呈したと思われる。長軸残存長1.3×短軸最大1.5m、検出面からの深さは0.15mを測る。埋土の状況から、縁辺部が崩落したのち徐々に埋没したと考えられる。残存状況は不良であるが、貯蔵穴か。

埋土から微量の土器が出土しているが、いずれも細片で時期は不明である。

22号土坑（第144図/図版19）

調査区北西寄りに位置し、71号住居に切られる。主軸は東西方向で、平面プランは長方形を呈する。長軸1.3×短軸0.8m、検出面からの深さは1.0mを測る。埋土は黒色土を主体とし、全体に均質である。底面には浅いビットと杭痕跡と思われる小型ビット2基を検出している。落とし穴として使用したと考えられる。

道構内からの遺物の出土は皆無であった。

23号土坑（第144図/図版19）

調査区中央の28・50号住居間に位置する。他道構との切り合い関係を持たない。主軸は北東—南西方向で、平面プランは不整形円形を呈する。東西両端に小型のテラス状の段差を持つ。長軸1.2×短軸0.9m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は黒色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種か。

埋土から微量の遺物が出土しているが、いずれも細片で時期の特定は出来なかった。

24号土坑（第144図/図版19）

調査区東辺中央に位置し、36・48・54号住居に切られる。主軸は南北方向で、長軸1.2×短軸0.6m、検出面からの深さは最大0.35mを測る。平面プランは2基のビット状を呈するが、埋土の状況からは1基の土坑であると判断出来る。埋土は黒褐色土を主体とし、堆積状況は短期の使用を示す。

出土遺物（第146図/図版46）

埋土からは、図示した砥石と微量の土器が出土しているが、いずれも細片であった。

25号土坑（第144図/図版20）

調査区西端中央に位置し、29号住居とビット1基に切られる。主軸は南北方向で、検出時の平面プランは不整形円形であったが、本来は長方形を呈すると思われる。長軸残存長2.7×短軸1.05m、検出面からの深さは最大0.4mを測る。北端にテラス状の段差を、道構底面に不整形円形のビット2基を持つ。埋土は黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種か。

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で道構の時期決定は出来なかった。

26号土坑（第145図/図版20）

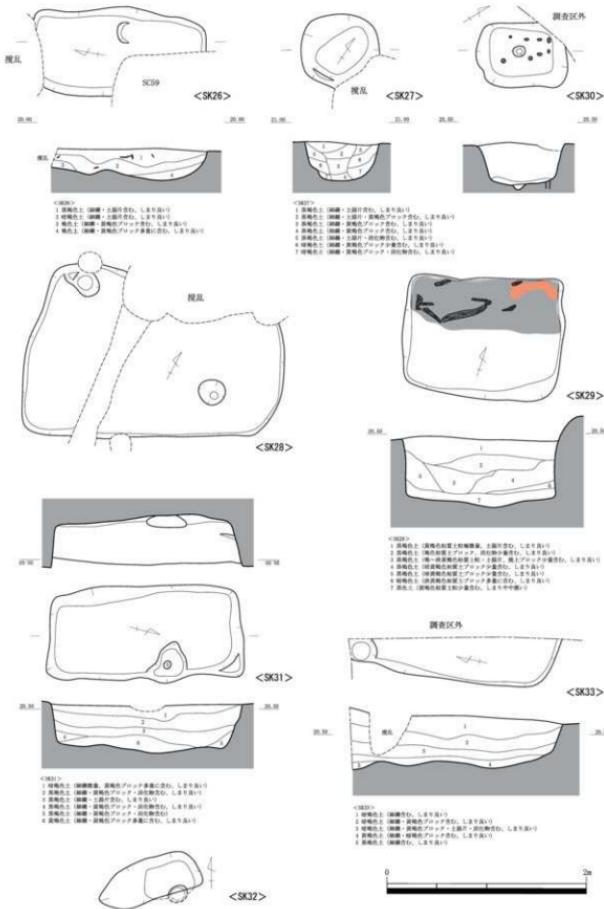
調査区南東隅に位置し、59号住居と搅乱に切られる。主軸は南北方向で平面プランは長方形を呈する。長軸1.8×短軸0.9m、検出面からの深さは0.35mを測る。底面に馬蹄形状の掘り込みが認められるが、道構に伴うビットもしくは土坑が一部残存したものか。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。形状から、土壙墓の可能性もある。

埋土からは甌の口縁部等、少量の土器が出土しているが、細片のため図示は控えた。弥生時代中期後葉の所産と考えられる。

27号土坑（第145図/図版20）

調査区北東隅に位置する。55・37号住居の間にあり、他道構との切り合い関係を持たない。主軸は南北方向で、長軸0.85×短軸残存長0.7m、検出面からの深さ0.4mを測る。平面プランは不整形円形を呈す





第145図 26~32号土坑 (S=1/40)



る。埋土の状況からは柱穴ピットとも考えられるが、この遺構とともに掘立柱建物を構成すると想定される他遺構の存在が認められなかつたことから、ここでは土坑として扱つた。

埋土から少量の遺物が出土しているが、時期特定が困難な細片のみである。

28号土坑（第145図/図版20）

調査区中央北寄り、64・69号住居の間に位置する。他遺構との切り合い関係を持たない、単独の遺構である。主軸は東西方向で、長軸2.6×短軸1.7m、検出面からの深さは最大0.3mを測る。平面プランは不整長方形を呈し、遺構底面に2基のピットを持つ。埋土は黒褐色土の単層で、上面が大幅に削平されていると思われる。貯蔵穴か。

埋土からは遺物の出土は一切認められていない。

29号土坑（第145図/図版20）

調査区北西寄りに位置し、76号住居を切る。主軸は東西方向で、長軸1.65×短軸1.2m、検出面からの深さは0.65mを測る。平面プランは長方形を呈し、裏面の崩落もなく残存状況は良好である。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。遺構底面の北側からは、形状を残す炭化材及び炭化物粒が面的に広がる状況が確認され、北東隅には燒土も含まれていた。但し、床面に赤化あるいは硬化したような被熱痕跡は認められない。施廬土坑の一種と思われる。

出土遺物（第146図/図版33）

埋土からまとまった量の土器が出土している。甕は口縁部がくの字形に屈曲し、外反するもの。胴部に対して口縁部の広がりは狭く、外面に平行タキの痕跡を残す。高杯は脚部に穿孔を施し、杯部内面に段を持つもの。器台は鼓形の系統で内外面ともハケ調整を行なうものと、外来系の小型のものが混在している。いずれも古墳時代前期の所産。

30号土坑（第145図/図版20）

調査区北辺西寄りに位置し、17・20号住居に切られる。主軸は北東—南西方向で、長軸0.9×短軸0.6m、検出面からの深さ0.45mを測る。平面プランは隅丸長方形を呈する。遺構床面中央には小型のピットが検出されている。杭杭と思われる8基のピットが列状に並んでいるのが確認されている。小型の落とし穴。

埋土からの遺物の出土は全く認められない。

31号土坑（第145図/図版20）

調査区北西寄りに位置し、71号住居を切る。主軸は南北方向で、長軸1.95×短軸0.95m、検出面からの深さ0.45mを測る。平面プランは長方形で、東辺中央部に不整形のピットを伴う。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。形状から、土壤墓の可能性もある。

埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため図示は控えた。甕口縁部の形状から、古墳時代中期の所産と思われる。

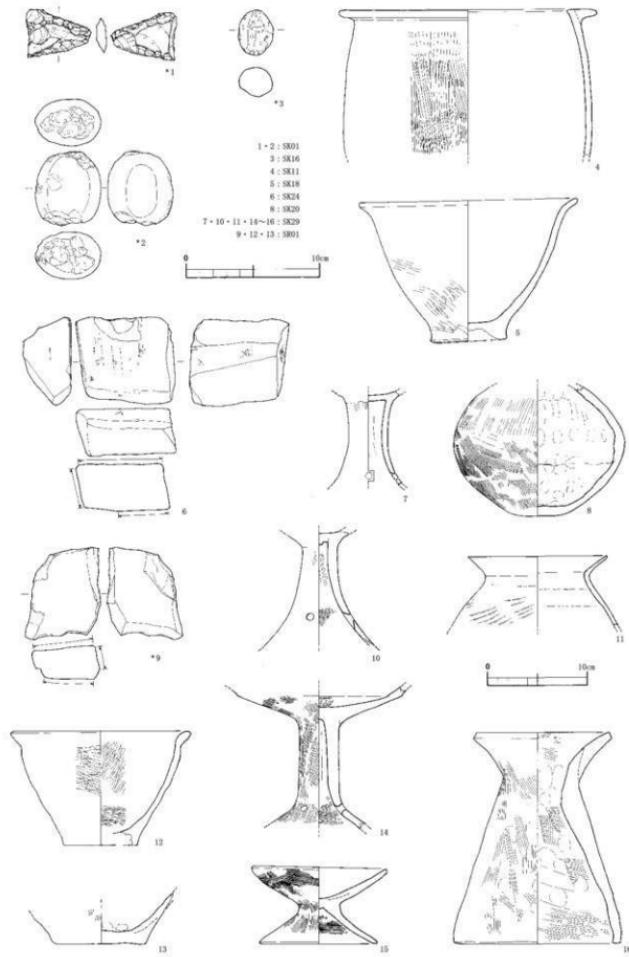
32号土坑（第145図/図版20）

調査区北西寄り、17・76号住居の間に位置する。他遺構との切り合いがない。単独の遺構である。主軸は東西方向で、長軸1.05×短軸0.4m、検出面からの深さは0.25mを測る。平面プランは不整方形を呈すると思われる。上部が大幅に削平されており、遺構の状況は不明瞭である。底面に円形ピットを1基検出しておらず、落とし穴の可能性が考えられる。

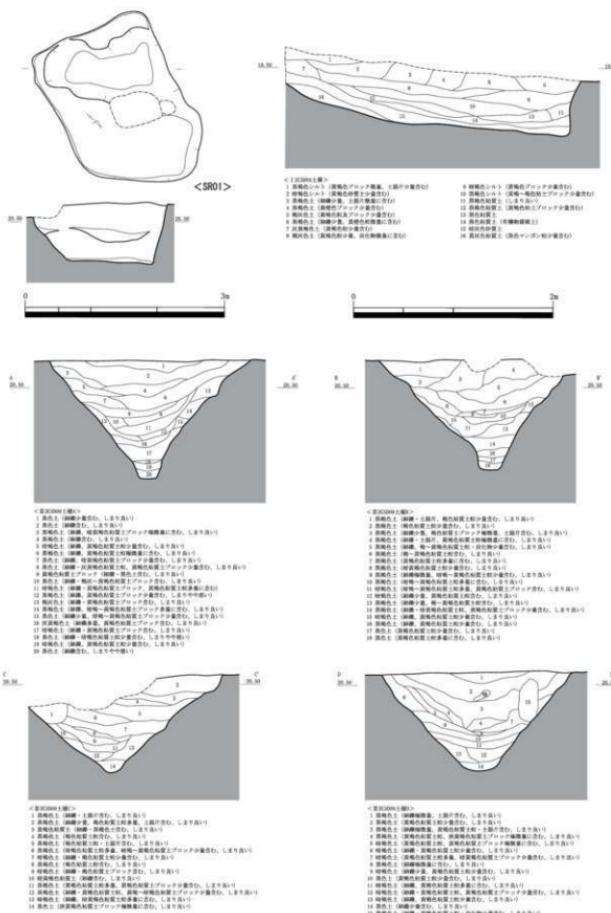
埋土からは少量の土器が出土しており、壺口縁部の破片から弥生時代中期の所産と見られる。

33号土坑（第145図/図版21）

調査区北東隅に位置し、遺構の大部分は調査区外へと延長する。I・III区間の道路部分に大半が所在する住居跡の可能性もあるが、ここでは土坑として扱つた。主軸は南北方向で、南北残存長1.95×東西残存



第146図 土坑・土壤裏出土土器・石器 (S=1/4、*付はS=1/3)



第147図 1号土壤墓 (S=1/60) ・ 環濠土層 (S=1/40)



長0.5m、検出面からの深さ0.45mを測る。平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。西辺に円形のピットを伴う。埋土は暗褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種か。

埋土からは少量の土器が出土しているが、細片のみで時期を特定するにはいたらなかった。

<土壤墓>

1号土壤墓 (第147図/図版22)

調査区中央部北東寄りに位置し、52・57・68号住居、11号溝に切られる。不整形の浅い掘り込みを施したのち、不整形の墓坑の掘り込みを行なっている。墓坑本体の主軸は北西—南東方向で、長軸1.85×短軸0.8m、深さ0.8mを測る。2段掘り込みの形状から、本来は石蓋を伴っていた可能性もある。

出土遺物 (第146図/図版32)

埋土から石器を含む少量の遺物が出土しているが、残存状況は悪い。鉢は口縁部が緩く屈曲し、体部が外反して広がるもので、内外面ともミガキ調整を施している。弥生時代前期後葉の所産。

<環濠・溝>

三沢南崎遺跡3の全調査区において、計12条の溝を検出している。うち3条はⅠ区での検出遺構としてⅢ章で報告済である。4号溝はⅢ区9号溝と同一の遺構であることから、ここで報告する。なお、5・6号溝はⅢ区で検出し、溝状遺構として掘削したが、出土遺物及び遺構の状況から現代の造成痕跡と判断した。そのため5・6号溝は欠番となっている。

Ⅰ区4号溝 (第5・147図/図版21)

調査区北辺で南岸を中心検出している。切り合いで造構である。9・10・13号住居、3・6・7号土坑の全てに切られる。造構の大部分は調査区外へ延びる。北に向かってふくらみをもって湾曲し、西はⅢ区へと繋がっている。東はⅠ区東端で調査区外へ延びるが、南への延長は調査区内へは及ばない。北東隅ではわずかに掘り方の両岸が認められる。検出面での規模は上面幅2.2m、底面幅0.9m、深さ0.3mを測る。断面は長方形を呈する。埋土は上層がレンズ状堆積、下層が水平堆積の様相を示す。黒褐色土を主体とするが、下層にはマンガン粒を含む砂質土の堆積が認められ、底面直上の層は細礫を多量に含む。造構底面に溝と平行する凹凸が見られることから、水流を作っていた可能性もある。但し造構底面からの湧水は認められない。また、溝に伴う見られる底面ピット、溝岸のピット等は検出されていない。

出土遺物 (第150図/図版45)

埋土から土器、石器が出土しているが、少量でいずれも細片である。土器類は明瞭に時期を示すものが見られないため、図示していない。石器は黒色緻密質安山岩のスクレイバー、少量の投弾を確認している。

Ⅲ区9号溝 (第48・147図/図版22)

調査区北東から南西へ、調査区を縦断する形で検出している。計13軒の住居と3基の土坑、1条の溝に切られる。北端はⅠ区からの続続性を示す、わずかに北へふくらみを持つが、その他の部分はほぼ直線を描いて南側の調査区外へと延長する。検出面での規模は上面幅1.9m、底面幅0.3m、深さ1.05mを測る。断面は三角形を呈する。埋土は一部を除いて水平堆積の様相を示す。黒褐色土を主体とし、上層から下層までほぼ均質である。上面にテラス状の痕跡、土手状の盛土などは認められない。埋土の堆積状況から、検出面から約0.9mのあたりまで、1回以上の掘り直しを行なっていることが見て取れる。造構底面からの湧水はなく、埋土に水性鉄も確認出来ないことから、素掘りでの使用が想定される。造構底面及び溝岸にピット状の掘り込みは検出されていない。

出土遺物 (第150図/図版33・44)

埋土からまとまった量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めるものは少ない。甕は口縁部が緩く屈曲し、平底の底部へ繋がるもの。器壁は内厚で、内外面はハケあるいは板状工具による粗略な調整を施している。弥生時代前中期から中期初頭の所産。

その他、微量ではあるが石器類が出土している。





8号溝 (第148図/図版22)

調査区南辺西寄りに位置し、28・32・51号住居に切られ、67・77号住居、9号溝を切る。ほぼ正円形を呈する、周溝状遺構である。内径5.0m、外径7.6m、溝幅1.4m、深さ0.6mを測る。断面は長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込んだ形状が残存している。遺構床面にはテラス状の段落ちと、土坑状のくぼみ部分が複数認められる。周溝状遺構の内部には、土坑・墓坑といった一連の遺構を構成すると思われる掘り込みは認められず、溝のみの単独遺構であると判断した。埋土は黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。

出土遺物 (第150図/図版33・37・44)

埋土内よりまとまった量の遺物が出土しているが、小片が多く、原型を留めるものは少ない。甕は屈曲した頸部から外反して広がるもので、内外面ともハケ調整を施す。鉢は体部が丸みを持って立ち上がるものと、平底から直立て立ち上がるものが混在している。弥生時代後期初頭の所産。

その他、筋鍾車の未成品、石臼丁の小片、砾石といった石器類と、鉄製ヤリガンナの小片が出土している。

10号溝 (第149図/図版22)

調査区中央西寄りに位置し、32号住居、16号土坑に切られる。但し16号土坑と8号溝の間に延長部分は認められない。内径3.5m、外径4.1m程度の正円形を呈すると思われる、周溝状遺構である。溝幅0.45m、深さ0.15mを測る。上面は削平を受けており、遺構の残存状況は不良である。断面は台形を呈する。遺構底面はほぼ平坦となる。切り合う遺構の内部を含め、周溝状遺構の内部には、溝と一連の遺構を構成すると思われる土坑・墓坑状の痕跡は認められない。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で時期を示すものではない。

11号溝 (第149図/図版22)

調査区中央東寄りに位置し、52・53・57・68号住居に切られ、1号土壙墓を切る。内径2.65m、外径4.3m、溝幅0.9m、深さ0.25mを測る。溝の断面は台形、平面プランは正円形を呈する、周溝状遺構である。溝の内部には一連の遺構を構成すると見られる土坑・墓坑状の痕跡は認められず、単独の遺構と考えられる。遺構底面にはテラス状の段落ちと土坑状のくぼみ部分が確認されている。埋土は黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。

出土遺物 (第150図)

埋土より少量の遺物が出土しているが、いずれも細片である。甕は口縁部が緩んだ字形を呈し、底部は平底でミガキに似たナデ調整を施す。弥生時代中期の所産。

12号溝 (第149図/図版22)

調査区南辺東寄りに位置し、59号住居に切られる。遺構の南半分は調査区外へ延長する。内径3.0m程度の圓丸形を呈すると思われる。溝幅0.5m、深さ0.15mを測る。溝の断面は台形を呈する。78号住居とした方形状の掘り込みと一連の遺構を構成する可能性もあるが、位置的な問題からここでは単独の周溝状遺構と判断した。遺構の底面はほぼ平坦となる。

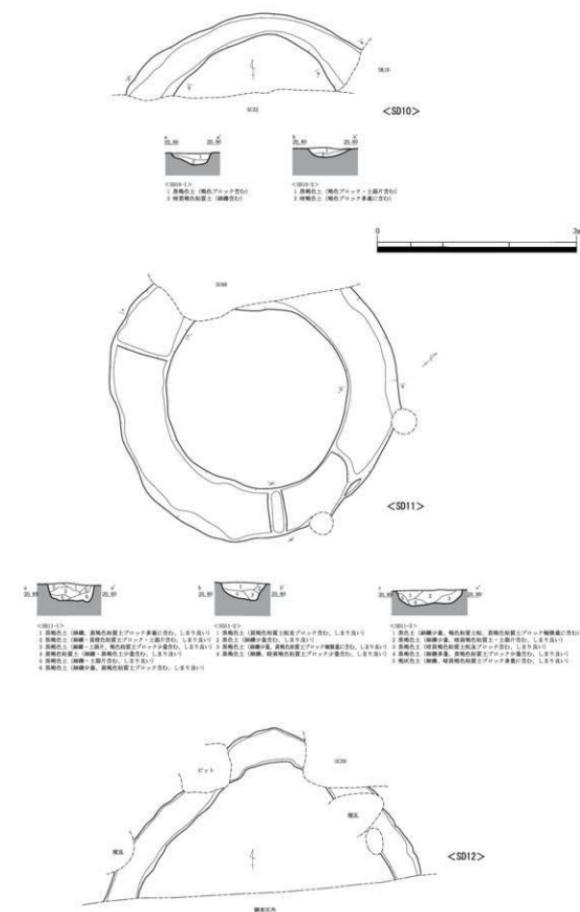
埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

＜ビット群＞ (第151図/図版33・35)

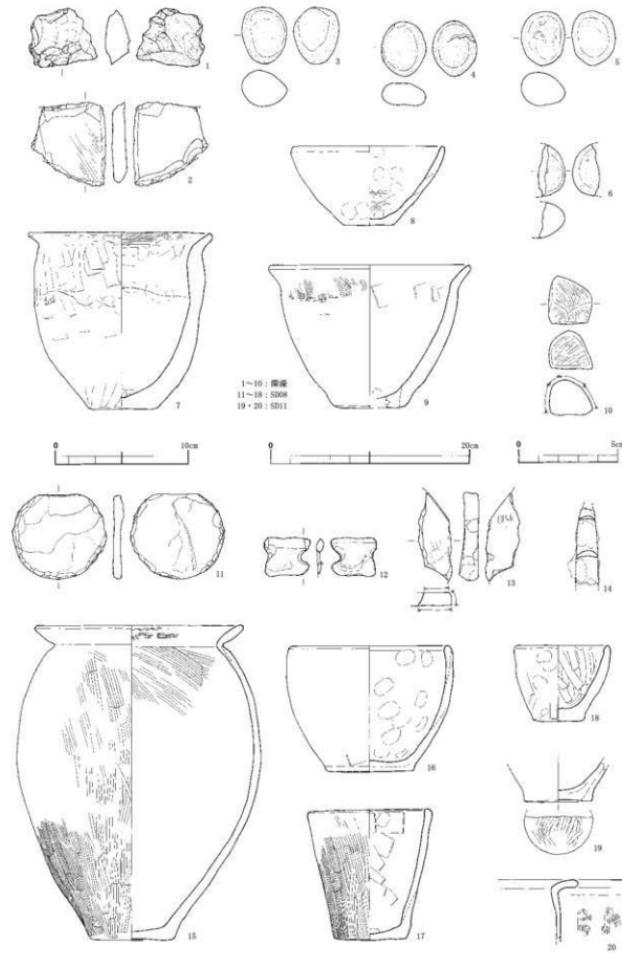
本遺跡では、Ⅰ・Ⅱ区は検出した遺構全てを完掘している。しかし、Ⅲ区については調査期間の都合上、検出段階で柱穴の可能性が高いと判断したビットのみを掘削し、擾乱・根痕の可能性が想定されるビットについては未掘のまま調査を終了している。開発に伴う発掘調査のためやむなく採った措置であるが、調査完了後は即座に道路改良工事が実施され、遺跡は破壊されており、調査担当者として反省するところである。

ビット群については全調査区において、検出段階で全ての平板測量を実施し、掘立柱建物を構成するか



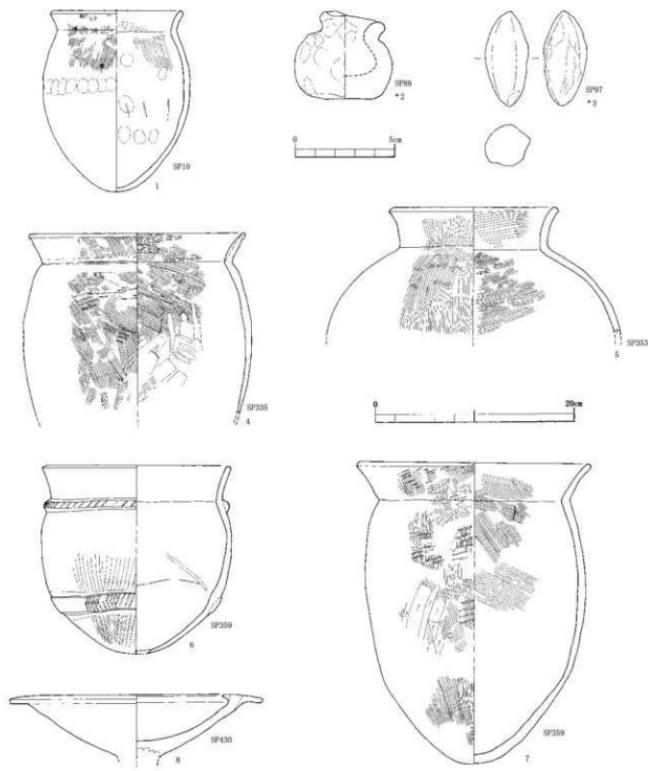


第149図 10・11・12号溝 (S=1/60)



第150図 環縹・溝状追模出土土器・石器・鉄器 (S=1/4、石器はS=1/3、鉄器はS=1/2)





第151図 ピット出土遺物 (S=1/4、*付はS=1/2)

否かの検討を行ない、遺物・遺構図面の整理段階で再度掘立柱建物の存在を検討している。しかし、全調査区において、掘立柱建物を構成すると考えられるピット群のまわりは認められなかつた。そのため、ここではピット出土遺物のうち、比較的形状を留める遺物を掲載するに留める。完形に復元出来るものも見られたが、土器埋納ピットと想定される状況は確認されていない。出土遺物の時期についても、調査区内で確認されている住居・土坑とほぼ同時期であると思われる。





VI. 調査成果のまとめと検討

本遺跡の調査においては、78軒の堅穴住居、33基の土坑、10条の溝状遺構、そして環濠を確認している。特筆すべきは住居の密度であり、この段丘上に営まれた集落の中心部分であったと考えられる。ここでは、住居群・環濠・住居からの出土土器の3点に着目し、遺跡の概要とその特色を述べる。

(1) 三沢南崎遺跡における集落の変遷と住居の形状

＜遺跡の立地＞

三沢南崎遺跡は、この地域に発掘調査の手が及んだ平成17年度から、その立地条件が注目されてきた。本遺跡は小都市北西部の丘陵地帯（通称：三国丘）から延びる舌状段丘の先端に位置し、東西に谷部を挟んでいる。谷部には投げ戸を示すような自然流路を伴い、水田耕作に適した地形となっている。

同様の条件は、本遺跡から谷を隔てて東隣の段丘上に所在する、力武前畠・内畠遺跡（以下、力武遺跡群と記す）にも備わっている。力武遺跡群は弥生時代前期から近世までの複合遺跡であるが、主体となるのは弥生時代前期の集落・生産遺跡である。集落は北から南へ延びる段丘上に、大型円形住居を含む堅穴住居群と掘立柱建物で構成され、集落域の北端は断面V字形の環濠によって区切られる。集落の東側には段丘ぎわい貯蔵穴群を掘削し、南に下った谷部の湿地には水田を営む。水田耕作には自然流路を利用し、矢板・杭列で構築した井堰を用いて計画的な水資源活用を行なっていた。しかし中期以降は、段丘東部に堅穴住居が散見される程度の規模に縮小し、再び活発な集落形成を確認するには古墳時代後期を待たねばならない。

以下、今回調査を実施した範囲を中心に、三沢南崎遺跡の集落の変遷を述べる。この変遷を図示したのが第153・154図である。遺構の時期については出土遺物のうち遺構に伴うと判断したものを根拠とし、遺物による明瞭な時期決定が出来なかつたものについては切り合い関係も考慮している。遺物の時期名称については『小都市史』第1巻に準じている。なお、1次調査区の位置については概念図であり、実際の距離と方位はこれとは異なることをここで断りしておく。

＜遺跡の概要＞

本遺跡で検出した遺構は、弥生時代前期中葉～古墳時代中期に及ぶが、集落の主体は弥生時代中期後半～後期となる。また平成19年度に東西の谷部においても発掘調査を実施しており（三沢南崎遺跡2・4、平成20年度報告書刊行）、南崎2では自然流路と水田痕跡が、南崎4では自然流路と祭祀遺構が確認されているが、その時期は本遺跡の集落とほぼリンクすることが明らかとなっている。

平成17年度調査地では、本遺跡と同時期の堅穴住居が11軒確認されており、同一集落の一部を構成することが判明したが、ここでは同時に弥生時代前期の環濠と貯蔵穴群も検出しており、力武遺跡群と同時期の集落の存在を証明している。但し集落のビーグは異なっており、互いに類似する立地環境にありながら、集落としては別の変遷と展開を迎えたと考えられる。

＜弥生時代前期の状況＞

三沢南崎遺跡の集落は、1次調査で確認された弥生時代前期前半の環濠と貯蔵穴群の組み合わせからスタートする。この環濠は出土遺物から前期中葉頃まで機能しており、その後段階を経て埋没したとされる。本遺跡内でも前期の土器を伴う長方形堅穴住居（SC59）を検出しているが、遺構の切り合い関係からはこの時期の住居とは認められず、遺物は混入品と判断している。

1次調査環濠の埋没と併行するように、前期中葉には北側に新たな環濠が掘削される。環濠内部には、松葉型土器を含む円形住居や貯蔵穴、土窓等が営まれる。調査区内の遺構密度は比較的低く、集落の中心部ではなかったと思われる。しかし1次調査区には貯蔵穴のまとまりが見られることから、力武遺跡群の例にならうなら、1次調査区及び今回の調査区は集落の東縁部の貯蔵穴集中箇所であり、これに伴う環濠を（掘り直しも含めて）維持しながら集落の一部を構成しており、集落本体の住居群はこれより南もしく



は北に所在すると想像することも出来るだろう。なお、環濠以前の遺構として落とし穴状遺構を3基検出しているが、これらは段丘上の平坦部に構築されるタイプのもので、北に向かって湾曲したラインで並んでいる。いずれも遺物の出土は認められず、詳細な時期は不明である。

この時期は三国丘陵上全体で集落が散見され始める時期で、中でも南端に位置する力武遺跡群の先行した隆盛は注目に値する。本遺跡は規模こそ異なるが、これに後続し、以北の遺跡群へと繋がるものであると言える。

＜弥生時代中期の状況＞

中期前葉～中葉に際しては、若干の住居・土坑が認められるのみである。但し後期の遺構の埋土には中期前～中葉の土器片も一定量含まれておらず、集落の衰退期というよりは、後期の遺構と位置が重複しており、破壊されていると考えた方が自然なようである。出土遺物には丹塗磨研の祭祀用土器や甕棺と思われる大型のものもあり、墓域を伴う集落の存在が示唆される。

中期後葉になると長方形・方形住居の数が増加し、集落の規模は拡大する。今回の調査区は、この時期から本格的な集落としての様相を示す。住居は調査区ほぼ全域に分布し、形状は平面プランが長方形の2柱で、柱間に炉状の土坑を伴うものが主体となる。堀沿いに細溝をめぐらすのが多く、炉跡とは別に堀面近くに不整形の土坑状の掘り込みを持つものも見られる。SC20が長軸6.5m×短軸5.0mとやや大ぶりである他は、長軸5.0m×短軸3.0mの範囲におさまる大きさのようである。SC13・36のような梢円形、SC80のような円形住居も少量ではあるが残存している。主軸方向からは、須玖II式（古段階）と須玖II式（新段階）のまとまりが見られる。同位置での住居の立替は稀で、近接した場所に新たな住居を構築している状況がうかがえる。

墓坑や祭祀土坑は全く確認されていない。但し周溝状遺構のうちSD11・12の2条はこの時期のものであり、これまでの市内遺跡での検出状況から祭祀的な役割を果たしている可能性が示されていることから、これらが祭祀土坑の代用に使用されていたとも想像出来る。また墓域については、三国丘陵上の弥生時代中期の遺跡では近接する別丘陵に集落と墓域を構築する例が多く見られることから、周辺の調査を待ってこの集落との関連を考え必要があると思われる。この時期の住居は1次調査区内でも確認されているが、住居の構造や想定規模は今回調査区とさほど離隔のない状況である。

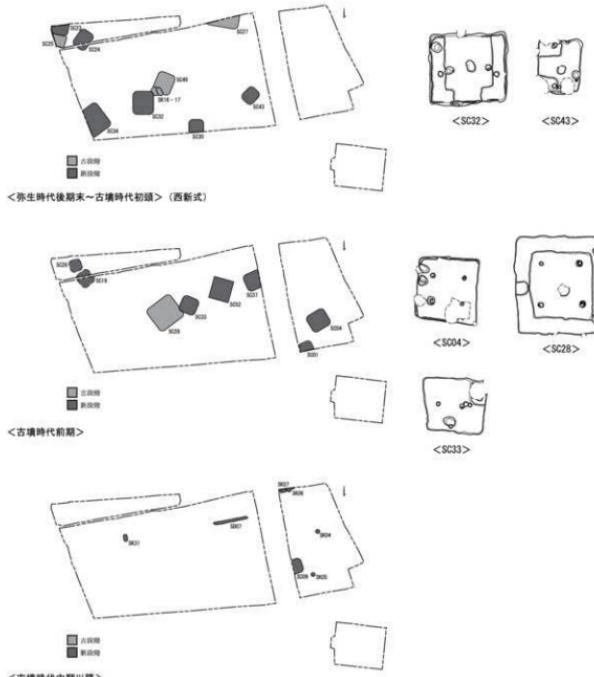
1次調査環濠はこの段階まで萍地に残っていたと判断されているが、本遺跡ではこの時期の住居が環濠上面で確認されているためほぼ完全に埋没していたと思われる。但し微量ではあるが中期の遺物の出土も認められることから、部分的な埋没が残存していた可能性は考えられる。

弥生時代中期は三国丘陵上の活動のピークであると言える。北部の丘陵地帯を中心で大規模な集落・墓域が経営されており、これに伴う生産遺跡の存在も確認されている。また、市中央部に位置する小郡・大坂井遺跡でも、大規模な円形住居と甕棺墓群を作りて中期にピークを迎える。これに対して、中間に位置する三国丘陵南端部においては、集落及び出土遺物の質・量とともに小規模であり、勢力的に劣る感が否めない。

＜弥生時代後期初頭～前半の状況＞

後期初頭も、前段階から引き続き同規模の集落が継続する。しかし住居の分布には若干の変化があり、東側の段丘端では遺構密度が低くなる傾向が見られる。住居の形状は、前段階の平面プランが長方形で2柱、中央に炉状の土坑を伴うものと、隅丸方形で4柱のものが混在するようになる。今回調査区では、軒数としては隅丸方形のものがやや優勢であると言える。2柱のものはベッド状遺構を伴うものも含まれており、堀沿いの土坑に加えてベッド状遺構の上面に正円形に近く、深く掘り込みの別土坑を持つものが登場する。この土坑は住居の角部分に設置されることが多く、中に遺物を伴う例が散見されることから、住居廃棄時の祭祀的行為に関連する可能性も考えられる。この時期の住居の規模は平面プランによって変化するよう、長方形のものは長軸6.0m×短軸4.0m前後、方形のものは4.0m四方の範囲におさまる。目立つて大型の住居は確認されていない。時期による主軸の通りは認められず、形状によって方位が左右される状況でもない。立替については、前段階と同様に同位置には行なっていないものの、比較的近接した

第153図 集落変遷図(1) ($S=1/1000$, 住居は $S=1/300$)

第154図 集落変遷図(2) ($S=1/1000$, 住居は $S=1/300$)

位置に新たに構築している様子が見られる。

1次調査区で検出されているSC01はこの時期の造構であるが、焼失により廃棄されている。住居内からはソーダガラスの小玉が出土しており、廃棄に伴う何らかの行為を示すものと考えられる。

周溝状造構は後期初頭まで残存するが、これ以降は認められなくなる。大板井遺跡においては、この時期の隅丸長方形周溝状造構が他造構とは隔離された状況で検出されており、祭祀造構としての性格を証明するものと考えられている。本遺跡では集落内で住居と共存する形で確認されており、形状の差異もさることながら、造構の性格そのものもしくは祭祀の方法にも相違があると想像される。

現在の西鉄三国が丘駅周辺でこれまで確認してきた、三国丘陵上の弥生時代の集落群は、この時期から徐々に消滅あるいは小規模化していく傾向がある。これ以降も継続するのは、三沢堀原遺跡や三国の鼻



遺跡等のわずかな例にとどまる。丘陵の南端で弥生時代前期以降連続と続いた三沢南崎遺跡が、他集落の縮小と同時に集落としてのピークを迎えるのは、時代の徒花であるのか、それとも三国丘陵の集落遷移の中で重要な意味を持つのか、今後詳細な検討が必要であろう。

＜弥生時代後期中葉～後半の状況＞

この時期に三沢南崎遺跡は集落としてのピークを迎える。遺構密度は全時期を通じて最も高く、出土遺物の量も多い。遺構の分布は西に寄り、段丘の崖に近い1次調査区及び今回調査区の東には全く遺構が見られなくなる。意図的にこの範囲を避けた理由は不明であるが、三沢南崎遺跡は東西に谷を持つ舌状段丘上に所在することから、集落全体が（西ではなく）北側へ拡張しながら移動したとも考えられる。

住居のプランは長方形が主体となり、前段階に主流であった隅丸方形のものは逆に少数派となる。1軒のみ規格円形住居（SC36）が確認されているが、出土遺物の内容や遺構の切り合い関係からこの時期のものと判断した。通常の住居とは異なる使用も想定される。主は完全に2柱のタイプになり、柱間の縦状の掘り込みがないものも出現する。代わりに柱状の崩路は里沿いの土坑へと移っていく。また、里沿いにベッド状遺構を持つものがほとんどとなる。ベッド状遺構は住居の大きさによって設置辺の数が異なるが、2～3辺に付くものが多く、前段階に出現したベッド状遺構上面の土坑も継続して掘削される。住居本体の規模は、長方形が長軸7.0×短軸5.0m前後の比較的大型のものと長軸5.0×短軸4.0mのこれまでの住居と差がないものとに二分される。方形のものは前段階と同様で4.0m四方前後のものが多い。大型の住居は複数が同時に存在していたと思われ、集落内での崩路差やその人数比率の問題を考えるに当たって興味深い。住居の主軸は北西～南東方向となり、ほぼ全体で一致する。立替は同一箇所あるいは極めて隣接した位置で短期間に頻繁に実施されることが多く、ベッド状遺構の構築に前段階の住居の廃土を使用する例も見られる。

この段階の住居は、埋土に多量の土器を含むものが多い。遺構の残存状況にもよるが、SC14・35・44といった住居廃絶時に土器の一括廃棄を行なったと見られる住居はこの時期に集中している。これらは埋土の上部に近い位置で出土しており、特にSC44では顕著であるが、複数の時期にわたる遺物がまとまりをもって廃棄されている。住居廃絶に関する祭祀的な意味合いを持つのか、住居を単なる廃棄場所として転用したのかは不明であるが、同時期のこのような事例の追加が待たれるところである。

弥生時代後期は、水稻耕作による生産性の向上と農業社会の進展に伴う集落間競争が本格的に始める時代であり、この時期の集落には柵列や環濠といった防衛的施設を備えたものが多く見られる。三沢南崎遺跡が所在する三国丘陵においても、三国の暴廢跡のように、急傾斜を持ついわば天然の要塞状の丘陵上に集落を営み、傾斜の緩い部分についてはその周辺に環濠を掘削して防護施設とする例が確認されている。しかし1次調査区及び今回調査区においては、集落を防護するための施設と考えられる痕跡は一切確認されていない。これは集落が所在する段丘谷の谷部であり、同年度に調査を行なった三沢南崎遺跡2・4においても同様である。この点を考慮した上で、三沢南崎遺跡の集落域が当時の社会情勢の中でどのように位置づけられるのかを検討する必要があるだろう。

＜弥生時代後期末～古墳時代初頭の状況＞

弥生時代後期末から、三沢南崎遺跡の集落としての規模は縮小していく。但し、調査においてこれ以降の遺構は残存状況が悪く、調査区内では掘削の埋土も含めてこれ以降の古墳時代後期～古代の遺物がほとんど確認されていない状況があることから、集落は継続したものその後の造成により完全に破壊されたという可能性も考えられる。ここでは今まで、前段階との検出遺構の比較結果として「集落規模の縮小」と述べたい。

遺構密度は前段階に比べると非常に低くなるが、東側の段丘崖よりを避ける傾向は引き続き認められる。住居の平面プランはほぼ方形のみとなり、主柱については2柱が優勢であるものの、4柱が新たに登場して並存している。里沿いのベッド状遺構は一部の住居に限つてこの段階にも見られるが、設置辺は減少しておりSC43のように1辺の一部分のみの設置も見られる。ベッド状遺構上面の掘り込みはSC32で認められるが、これが最終段階となる。住居の規模は前段階よりやや小型となり、6.0m四方のものと4.0m四方

のものに二分化される。検出した住居の主軸からは、「大型1軒に小型2~3軒」という組み合わせが想定される。この組み合わせを前提とすると2~3回の立替が考えられるが、下層遺構を無視してその上面に新たに構築する例と、これまで未使用であった場所を意図的に選択して構築する例とが見られる。今回の調査区は非常に造構の切り合いで多く、単独で検出した住居は4例（うち2例はSC72・78で造構の全体像が不明）のみであるが、うち2例はこの時期の造構である。

この時期の造構で特筆すべきはSC30である。この住居は床面に多量の焼土と炭化材が残存する焼失住居であり、埋土に含まれる状況は下層から焼土+炭化材+土器の順となっていた。何らかの原因によって屋内に失火し、住居内部は焼け、そのまま灰になった構築材が焼け落ち、最後に土器類を廃棄して、その上にさらに大型の礎を乗せている。出土状況からは、礎を用いて土器類を意図的に破壊した可能性が高いと考えられる。土器そのものは日用品の器種で、祭祀的な遺物は含まれていない。1次調査区においても、前述のとおり焼失住居を確認しているが、これとは時期も土器の出土状況も異なっている。この造構の上層で見られた土器破壊の行為がどのような意味を持つのか、今後詳細な検討を必要とする。

弥生時代から古墳時代への転換期は、今さら述べるまでもないか社会構造の大きな変革期であり、墓制や階級構造、地域間交流に変化が認められる時期である。当然のことながら集落にもその変化は反映されている。三沢南崎遺跡については、集落範囲の極一部の調査であるため、その全容を把握するにはまだいたっていないが、今後集落域の調査の進展に伴ってこの変革をいかに受容したかが明らかにされていくと思われる。

＜古墳時代前期の状況＞

古墳時代に入ると検出造構の数は激減する。集落変遷図に挙げた住居も多くは前期の早い段階のものであり、この時期で住居群は認められなくなる。

住居の分布は、前段階まで避けられてきた東側の段丘崖沿いに再び構築がなされるようになり、集落域の再編成の可能性がうかがえる。住居の平面プランは完全に方形となり、主柱は2柱のものが若干残るもの、4柱が主体となる。ベッド状造構はこの時期でも残存しているが、1辺に沿って取り付くのではなく部分的な構造となる。住居本体の規模は一括され、5.0m四方のもので統一されている。

今回の調査区で確認された住居のうち、最大規模であるSC28はこの時期の早い段階の所産である。ひずみのない正方形で8.0m四方、ベッド状造構が4周するが主柱は4本で、古い段階の形状と新しい要素が混在している。一般的な堅穴住居としてではなく、集落の中心として共有スペース的に使用された可能性が考えられる造構である。

堅穴住居の構造変化については、外的要素の流入あるいは導入が契機となると想定されている。本遺跡では、弥生時代後期初頭と古墳時代前期にこの変化が顕著に現れているが、集落全体が変化するのではなく、それ以前の古い要素も常に並存している状況にある。新しいタイプの住居と古い系譜を引く住居の並立や、SC28のように1軒の住居内に複数の要素を含む例も多い。このような外的要素の受け入れ状況が、防御施設を持たず、戦略的に優位な立地でもない後期集落である、三沢南崎遺跡の特色を示している可能性も考えられる。

＜古墳時代中期以降の状況＞

古墳時代中期以降の造構は土坑・溝が散見されるのみである。なおSC09は出土遺物から時期特定が困難で他造構との切り合いで、関係からの時期決定も不可能であるため、この段階に含めている。本来はこれよりも古い時期の所産である可能性が高い。

本遺跡内の出土遺物には、須恵器は断片1点が壇乱土内から出土しているのみで、それ以降の遺物は1区防空壕埋土内の近代遺物までの間、空白となる。古墳時代中期以降の造構の所在については完全に不明であるが、もしこれが存在していたとしても、比較的早い時代に土地造成が行なわれ、削平されていると考えられる。

古代~中世にかけては、本遺跡の東側に谷部を隔てて所在する力社遺跡群で、わずかながら造構・遺物が確認されている。また、東の段丘崖下に位置する三沢南崎遺跡2においても微量ではあるが中世の土師

器片の出土が認められることから、この時期についても集落域の一部を構成していた可能性が考えられる。

<他集落との類似性>

弥生時代後期に全盛期を迎える集落としては、前述の三沢栗原遺跡・三国の鼻遺跡の他、宝満川右岸に位置する乙隈天道町遺跡が挙げられる。弥生時代後期が主体となる集落は、当時の時代背景から軍事的な要素を持つ例が多く、三国の鼻遺跡については規模こそ小さいものの、北部にある福岡平野から二日市地峡を抜けて筑紫平野へ入る人口部分を見渡せるという立地状況から、筑紫平野北部の監視的な役割を担っていたとの想定がなされている。しかし本遺跡については、東に花立山（城山）を臨む見晴らしの良い位置にあるものの、軍事的利点はあまりなく、防衛施設と考えられる痕跡も確認されていない。ここでは集落としての性格を、本遺跡と類似する例を挙げ、比較検討してみたい。

力武遺跡群との関連

本章の冒頭に記したとおり、三沢南崎遺跡は東隣の段丘上に位置する力武遺跡群と地理的環境が類似している。集落としての発展段階と全盛となる時期は異なるものの、かなりの期間にわたって対峙して存在しており、生産域である谷部の水田についてはどこかで境界を持って共有していたと考えられる。この境界としては口無川から北へ延びる支流が想定されるが、おそらく水利権や水田そのものをめぐる争いもあったものと想像出来る。三沢南崎遺跡の住居からは、回示したものこそわずかであるが、多量の投弾が出土しており、石剣の存在も認められる。ただし、現在確認されている双方の遺構・遺物の状況からは、交流の可能性が考えられるのは弥生時代中期までである。本遺跡が全盛となる後期には力武遺跡群の主体は段丘の東端へと移っており、三沢南崎遺跡との関連は希薄であったと思われる。

三沢栗原遺跡との関連

これとは別に、直接的な交流は想定しづらいが、極めて似通った地理的環境にあるのが同じ三国丘陵上に所在する三沢栗原遺跡である。昭和56年から4次にわたる発掘調査が実施されたこの遺跡は、三国丘陵から南へ延びる丘陵上に位置し、北・東の2面で谷部に面する。北の谷部には現在の上田町堤から、東の谷部には一ノ口堤から発生する小河川が流れ、これが合流して口無川となって三沢南崎遺跡の南を経由して宝満川へと注ぐ。谷部に面する方向こそ異なるが、立地条件は本遺跡と酷似している。

この遺跡では弥生時代前期前半から小規模な集落が始ままり、これが連鎖と統いて、中期末から古墳時代初頭にかけてピークを迎える。中でも弥生時代末から古墳時代初頭にかけての遺構密度は高く、出土遺物も多彩となる。特筆すべきは鉄製品の豊富さで、その種類は農・工具から武器にまで及び、鉄津や素材と思われる板状鉄塊も出土している。集落内の鐵器製造の可能性も提示されており、渡来人との関連も示唆される集落である。出土遺物には中国製の鏡片があり、有力集團の居住する集落であったと判断されている。

堅穴住居については、弥生時代中期からベッド状遺構を持つ住居が登場して集落内の主体となり、古墳時代初頭までこの傾向が継続している。平面プランは長方形で2柱・柱間に戸を、側壁中央に屋内土坑を持つのが一般的なスタイルとなっている。ベッド状遺構に関しては、中期末～後期初頭は短軸に沿った2辺にのみベッド状遺構を伴っているが、後期後半にはコの字型に3辺に設置される。あるいは4辺にめぐらしく一部に出入口の空白部分を持つようになる、というベッド状遺構の拡大的な変化のとらえ方をされている。その後、出土土器の様式で言うと布留式以降は4柱の方形住居に転換し、古墳時代のカマドを持つタイプの住居へと繋がり解釈されている。集落内の住居の立替については、弥生時代中期～後期前半には隣接地への立替が見られるものの、後期中葉～古墳時代前期には離れた位置に新規に設置するようであり、三沢南崎遺跡の状況とは異なる。但し三沢栗原遺跡の所在する丘陵は、三沢南崎遺跡のある段丘よりも幅広であり、地形的な制約によって選地の状況が変化することも考慮に入れる必要がある。

乙隈天道町遺跡との関連

宝満川を隔てて東に位置する乙隈天道町遺跡は、小都市乙隈と朝倉郡夜須町（現筑前町）四三島にまたがる遺跡で、昭和62年に発掘調査が実施されている。遺跡は宝満川支流の草場川北岸の低台地にあり、西・南の方向で小規模な谷部に向かって傾斜している。台地は東を宝満川、南を草場川、北を曾根田川に囲まれており、周辺は起伏に乏しい地形となっている。三沢南崎遺跡とは若干立地状況が異なるが、河川

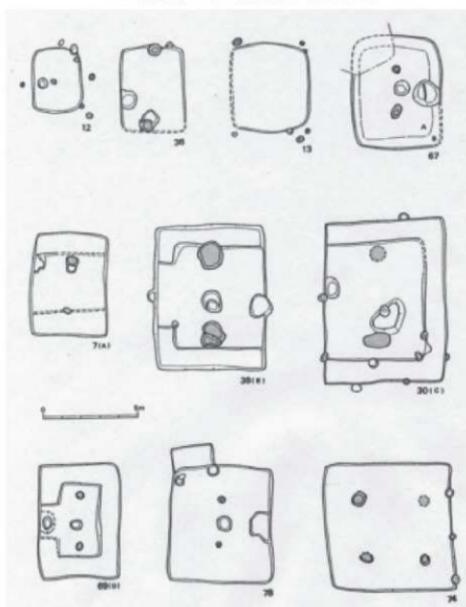


[弥生時代中期～後期前半]

[弥生時代後期中葉～古墳時代初期]

[古墳時代前期]

<三沢秉原遺跡Ⅲ・Ⅳ区の住居分布状況>（市報告書第23集）



<乙賀天道町道路で検出された住居の変遷図>（市報告書第66集）

第155図 三沢秉原遺跡の住居分布と乙賀天道町道路の住居の変化



に囲まれた微高地に集落が所在し、その周辺に水田耕作適地が存在する点は、これまで挙げてきた力武・三沢栗原・三沢南崎と共通する。

三沢南崎遺跡と同様、県道工事に伴う発掘調査であるため集落の全容はうかがえないが、弥生時代中期の祭祀土坑から集落としてスタートし、弥生時代後期～古墳時代初頭にピークを迎える。その後も集落は奈良時代まで継続し、近接する千瀬城山遺跡とともに宝塚川右岸の中心集落となったようである。遺構密度は非常に高く、集落そのものの変遷は提示されていないが、出土遺物の内容から遺構はピーク時に集中しており、短期間に類似な住居の立替が行なわれていたと思われる。この頻度と遺構の切り合い密度は三沢南崎遺跡と共通する部分がある。

堅穴住居については、ベッド状遺構の構造を4期に区分し、その拡大的变化をとらえている。解説は三沢栗原で行なわれている内容とはほぼ同じであり、この変化そのものが一般的に見られる展開であることを示している。各期の具体的な時期は示されていないが、住居の短辺2箇所にベッド状遺構を伴い始めるのは下大隅式の時期であるが、この形状は他の形状と並存して西新式（新段階）まで継続している。この中で3辺にベッド状遺構の設置範囲が拡大し、やがてベッド状遺構そのものが作られなくなっていくが、複数の形状が並存しつつ、大筋としては三沢栗原遺跡の例から提示されている変遷となるのは、三沢南崎遺跡の状況と一致する。但し乙限天道町遺跡のベッド状遺構は全て盛土で構成されており、地山の段振りが主体である三沢栗原・三沢南崎遺跡の状況とは異なる。三沢南崎遺跡でも下層遺構が存在する場合は盛土のベッド状遺構を確認しており、構築方法の差異は地山の残存状況に規定されるだけなのかもしれない。

この遺跡の出土遺物にも鉄製品が多く含まれており、その内容は多岐に渡る。その一方で石刀を主とする石製品も比較的遅い時期まで残っており、並存の状況は三沢南崎遺跡と類似している。三沢栗原遺跡のように威儀的な遺物は弥生時代後期には認められないが、似ていると言えるだろう。調査範囲が狭域であるため、今後の調査によって新たな発見の可能性もあるが、有力集団の居住域ではないか防御施設を伴わず、軍事的利点も持たないのに後期に全盛となる集落、という点で、同時の社会では三沢南崎遺跡と同種類の集落であったと想像される。

(2) 三沢南崎遺跡の環濠

今回の調査区内では、遺跡の最古段階の遺構として、断面V字形の環濠を検出している。同様の形状を示す環濠は、調査区南東に位置する三沢南崎遺跡1でも確認されているが、それぞれは異なる弧を描いており、同一の環濠とは認められない。それぞれの位置関係を示したのが第152図である。

<1次調査環濠の性格>

三沢南崎遺跡1の環濠は検出全長約10m、検出面からの深さ1.7～1.8m、幅2.0～2.1mを測り、西側にやや内湾する。断面はV字型で、最低1回の掘り直しが確認されている。最下層の出土遺物から弥生時代前期中葉までに掘削されたと判断されている。これと同一の溝が隣接地の下水道工事の際に確認されており、東西幅約50mの環濠となるようである。前項でも述べたが、1次調査区で検出された弥生時代前期の遺構は環濠と貯蔵穴のセット関係であり、この環濠は貯蔵穴を囲繞するものと判断されている。

弥生時代前期の環濠は、外敵からの貯蔵穴の防護と、貯蔵穴内の湧水を誘導するための施設として掘削された例が多いようである。平成20年度に小都市大保で発掘調査を実施した大保横枕遺跡（平成22年度報告書刊行予定）においても、同様の機能を果たしたと思われる環濠と貯蔵穴の組み合せが確認されている。1次調査で検出された環濠が、どの程度の規模の環濠と貯蔵穴群を囲繞していたかは、今後遺跡所在地の南部の調査によって確認されるであろうが、段丘の先端に近い部分に貯蔵穴群を構築し、段丘根元側を切るように環濠を掘削していることから、比較的小規模なものと想定される。

なお1次調査で確認された環濠は、その後多数の環濠を作り集落が展開する三国丘陵上では最も早い段階のものとなる。環濠掘削には多数の人手と期間が必要であり、周辺集落との連携が必須である。初段階の環濠を持つ、弥生時代前期の三沢南崎遺跡が当時の社会状況においてどのような位置づけをされていたのかは重要な問題であり、今後の資料の増加が待たれるところである。



<今回調査区で検出した環濠の性格>

今回検出された環濠（SD04・09）については、I区で検出された部分（以下SD04と記す）は全長約13m、南西側に内溝し、幅2.2m、深さ0.3mで断面は台形となる。III区で検出された部分（以下SD09と記す）は全長約39m、東側にわずかに内溝し、幅1.9~2.0m、深さ1.0m前後で断面はV字型になる。土層観察から、I次調査区で検出された環濠（以下SD01と記す）と同じく、1回以上の掘り直しを行なったと判断している。全体は東西幅70m前後の規模となると想定される。

溝としての形状はI・III区でそれそれ異なるが、SD04は段丘崖から段丘上へと環濠が延びる屈曲部を検出している。地形的な制約によりV字型掘削が困難であったとも考えられるし、段丘崖という自然地形を利用することで環濠の掘削は最小限にとどめたと想定することも出来る。検出した環濠の済曲具合から南東側の継続ラインを推定すると、ちょうど現行の農道上に環濠が走ることになる。この農道部分も県道開発対象地であり、今回調査範囲に含まれていたが、交通路確保のため調査不可としている。今回の調査区と東側の農道とは3m前後の高低差があり、過去に造成による削平も受けている。これまで三国丘陵で確認されている環濠の中には、急傾斜の斜面や丘陵端部の崖面など、自然地形を利用して防御施設あるいは区画の境界とし、その部分には環濠を掘削しないという傾向が認められる。三沢南崎遺跡の場合はどういう措置を講じていたのか、実際の遺構から確認出来る可能性は極めて低いと言わざるを得ない。

SD09はSD04から北東へと延長した環濠が北端部分で済曲し、南へと戻るラインを検出している。段丘上の平坦部に構築されていることから、深さは全体に均一で、湧水もなく形状も良好に維持されている。調査区外へ延長する南西端から継続ラインを推定すると、I・II次調査区よりやや南で段丘西側の崖にぶつかることになる。この崖下には南北方向に流れる自然流路が存在することが、三沢南崎遺跡4（平成20年度報告書刊行）の調査成果から明らかになっており、流路埋土内には環濠と同時期の遺物も含まれている。おそらく段丘上の集落に居住した人ととの生活痕跡の一例であろう。またそれより南側は舌状段丘が低地へといたる傾斜部分となる。今回検出した範囲内では、環濠の岸部には橋状の構造物を設置した痕跡は認められていない。環濠外にある流路への出入り確認されていることからも、SD04・09の未調査区画、あるいは南への延長部分に構造物痕跡もしくは陸橋が残存している可能性が考えられる。

またSD04・09は、SD01の埋没直後に新たに掘削したものと判断している。調査段階では二重にめぐら環濠の可能性も想定していたが、最深部の形状がSD01と09では異なっており、出土遺物の時期にも差があること、今回調査区では貯蔵穴がほとんど認められず空濠であること、SD01の北端が今回の調査区では確認されておらず、環濠間が30m以上開くこと等から、別時期に用途を異として構築された遺構であると考えた。

三沢南崎遺跡は舌状段丘の南端部に近い位置から遺構の分布がはじまり、前期後葉にはSD01の想定北限ラインよりも北側で、円形住居を含む集落が本格的に展開する。SD04・09は描くラインこそSD01と類似するが、この時期に発生する集落域より北を取り巻くように掘削されており、これより外側には集落を構成する遺構は確認されていない。これらの状況を踏まえると、SD04・09は集落域を区画するための環濠であり、段丘南端で発生した集落が北に拡大するのと同時に構築されたと判断出来る。この状況は冒頭に記した力武遺跡群の集落北端の様相と酷似しており、この時期の集落構造や立地条件による集落施設の在り方、近接する集落間の近似性を考える上で興味深い事例であると言える。

(3) 出土遺物の様相

本遺跡で検出された住居内では、パンケースにして総数87箱の土器・石器類が出土している。このうち遺構に伴い、かつ残存状況が良好なもののみを本書に掲載している。主となるのは弥生時代後期の土器群であり、中期末から古墳時代初頭にいたるまでの流れを追うことが可能な量の資料が確認されている。北部九州の弥生土器編年は森貞次郎を嚆矢に、長年多くの研究者によって検討・提案がなされており、細密な成果が蓄積されてきた分野である。本遺跡の所在する三固丘陵上で出土した弥生土器についても、内陸部特有の独自性を持った土器群として、これまでの調査成果を基に詳細な編年が組まれてきた。しかし後期の土器については、出土遺跡が極めて限定されるという条件ゆえに、前・中期と比較するとその精度に



はやや問題を残している。本遺跡では、これまで資料不足の感がいなめなかつた後期の土器がまとまつた出土をしており、今後の三国丘陵上の弥生土器研究に寄与出来るものと考える。ここでは、出土遺物の中から後期の特色を良く示していると思われる資料を取り上げ、三沢南崎遺跡内で見られる土器様相の変化を概観したい。但し、出土遺物については1遺構から出土したものであつても内容には時期幅があり、複数の型式にまたがるもののが多く、調査段階の遺物取り上げの際に詳細に分類しなかつたことから、ここではやむなく一括の遺物として取り扱つてることをお断りしておく。

<出土土器の概要>

前期～中期の土器は、これまでの調査において三国丘陵上の集落遺跡から出土したものとはほぼ同じ形状を示す。素材となる粘土が花崗岩バイン土ではないため、全体に精良で精緻な印象を受けるが、外形や調整、器種構成にも共通性が認められる。

後期前葉までは中期の土器の要素が残存するためか、やはり共通点が多い。しかし後期中葉以降になると様子は一転し、異質な状況となる。外面調整はタキアが明顯に残るものが多く、ハケで丁寧に削いでいる既出品とは全く異なっている。器壁も三沢南崎遺跡出土のものは肉厚で、一見粗雑な印象を受ける。何より、後期末になると他遺跡では多量に含まれてくる外来系の土器が(高杯など一部を除いて)ほとんど認められない状況である。出土遺物の多くは、既存の土器編年の上に掲載されることのない、いわゆる在地系の土器であり、これが遺構の時期決定を極めて困難なものにしている。

このような土器様相であるのは、三沢南崎遺跡の集落としての在り方にも要因があると思われる。前述のように同時期の集落である三国の鼻遺跡は、軍事上の監視地としての位置づけもされており、福岡平野や広くは畿内も含む他地域からの影響を受けやすい状況にあったと推測される。また、三沢栗原遺跡についても外来鏡を有する有力層の居住があった以上に、他地域との交流は存在したものと考えられる。このような環境にあった両集落においては、日常品である土器にその影響が反映され、いわゆる外来系土器と呼ばれる製品が流入あるいは製作されるにいたったのだろう。これに対して、三沢南崎遺跡はいわば「田舎の一集落」であり、集落本体の発展も農耕社会における必然的展開の帰結であるとも思われる。このような中では日常品の形状も既存の技術・手法を踏襲していく中での変化にとどまり、その結果として在地系土器の使用へと繋がっていくと考えられる。

但し、同じような在地の集落であったと考えられる乙限天道町遺跡の土器と類似する傾向があるのは上記の理由から解釈が可能であるが、器種構成・器面調整などについては甘木市(現朝倉市)平塚山の上遺跡・平塚川添遺跡で出土している遺物とも共通点が認められる。平塚川添遺跡は弥生時代後期の北筑後の拠点集落であり、集落を囲繞する三重の環濠集落として知られている。この共通性については、日常品を規制する地域性という括りで解釈すべきであるのか、それ以外の何らかの要素が存在するのか、今後集落本体と出土遺物を併せて詳細な検討を行なう必要があるだろう。

<弥生時代後期初頭～前葉の様相>

既存の編年では高三瀧(古～新)式とされる時期のもの。壺類は中期末の流れを引く「くの字」型に屈曲した口縁部を持ち、底部は底平となる。外面調整はタテハケが主体である。鉢類は前段階の形状を踏襲するが、一部コップ状の形状を持つものも含まれる。器台は鼓形で前段階から大きな変化は認められない。壺は口縁部が内湾を始め、胴部が円形に近く張りを持つ。

本遺跡においては、SD08・SC46・56など住居6軒と溝1条が高三瀧式古段階、SC47・57など住居6軒が高三瀧式新段階の遺構となる。出土遺物は概ね既存の編年表に載る内容であるが、強いていうなら壺類の出土が極めて少量であるところが特徴的である。

<弥生時代後期中葉～後葉の様相>

下大隈式と呼ばれる時期のもので、この時期が三沢南崎遺跡の集落の最盛期となる。壺類の底径が前段階より小さくなり、底部の厚みが若干増す。器台は上部に広がりを持ち、中央より上に屈曲部分が認められるようになる。壺類は胴部がソロバン玉状に張り出し、体部の突帶が前段階より低い位置へ移動する。

この段階の遺構としては、住居20余軒が確認されている。三沢南崎遺跡出土遺物では、甕の頭部より上にタタキが残存するか、ここに消去のためのタテハケが明瞭に施されるかと、体部下方にタタキを残すか、タテハケで消すか、の2点において2期に区分可能である。古い段階では良好な一括遺物は出土していないため、小片を基準に判断している。SC44で出土している土器群がこの過渡期に当たり、双方の様相を示す土器が確認されている。なお、新しい段階では台付鉢・甕や口縁部が直立に近く、甕のように煮炊きに使用された甕が見られる。

下大隈式の新しい段階から、出土遺物に鉄製品が含まれるようになる。本遺跡からの出土品はヤリガンナが多く、農耕具は少量である。この段階は短期間に住居の頻繁な立替が認められる時期でもあり、大工道具であるヤリガンナが目立つ点は非常に興味深い。

＜弥生時代後期末～古墳時代初期の様相＞

西新式と称され、弥生時代から古墳時代への過渡期となる時期のもの。外來系土器が出土する集落では布留甕が含まれる。在地系の器種には大きな変化は認められないが、甕・壺類の底部が丸底志向を示し始める。高杯の杯部が前段階よりも外反し、内面に暗文が見られるようになる。

三沢南崎遺跡の集落はやや規模が縮小する時期である。この時期の土器は、高杯にのみ外來系の綴ぐS字に渦曲した杯部を持つものが認められる他は、ほとんどが在地系の土器で占められる。布留甕的な形状を示すもの一部には見られるが、体部外面に併行タタキを残すなど、在地色が強い。なお、甕類はこの時期から底部のケズリ調整が施されるようになる。

石庖丁をはじめとする石製品はこの段階まで継続して使用されていたようである。三沢栗原遺跡や乙限天道町遺跡ではこれよりやや先行して鉄製品の使用が本格化しているとの比べると、何らかの要因が働いていると考えられる。

ここまで、あくまで出土遺物のおおまかな変化を既存の編年軸に沿って並べただけであり、これを弥生時代後期の土器編年による華やせるにはより詳細な資料分析や他遺跡・他地域との比較検討が必要である。今回は時間的制約もあり概観にとどめたが、外來系土器との共伴を必要としない在地系遺物の時間軸設定の確立は必須であり、今後の急務の課題としたい。

三沢南崎遺跡の発掘調査は、4車線の道路幅の中から80軒の住居を検出するという、非常に密度の高い遺跡内で実施された。面積だけ見れば小規模な遺跡であるが、その内容は実に多彩かつ広範囲にわたっており、調査報告のみでおさめられるものではない。ここでは詳細な検討をすると思われる問題点を列記したのみであるが、これから弥生時代の社会構造論、集落構造論を論じる上で、多くの資料を提示する遺跡であることは間違いない。ここで挙げた諸問題の詳細な分析と検討については、今後の資料の増加を期待しつつ、調査担当者の課題とすることを許されたい。



	壺(中型)	甕	壺(大型)	壺(小型・台付)
下大環				
SC35				
SC44				
SC50				
SC14				
西新 (古)				
SC30				
SC32				
SC28				

*土器25-1/16, 甕付25-1/16

第156図 出土器変遷系(1)





	鉢	盃（長頸・短頸・小型）	高杯	器台・支脚
下大張				
SC44				
SC50				
SC35				
SC14				
西新(古)				
西新(新)				
*土器025-1/16				

第157図 出土土器変遷案(2)





遺物観察表







<三沢南崎遺跡3 出土土器>

種別番号	出土地名	法線(復元)	法線(復元)	出土	焼成・調整技術	参考	被用年
第13080	櫛	口 : (11. 4) 高 : 8. 9 厚 : 0. 9	外 : 深褐色 内 : 暗黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好 内 : ハラクエリラ 外 : タタキ	SC09-9	
第13082	縫	口 : (23. 2) 高 : (11. 05)	外 : 深褐色 内 : 暗褐色	2~3mmの砂粒を含む	不良? 底内 : 指オサニ後ナグ	善しく歪む。	SC09-13
第13083	縫	高 : 6. 4	外 : 深褐色~黒褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	良好 内 : 板状工具ナダ		SC02-1
第13084	縫	口 : (13. 6) 高 : 7. 0 厚 : 1. 1	外 : 深褐色~黒褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	良好 外 : ハケ目のあとがわざかに残る	外面に黒斑。	SC02-3
第13085	縫	口 : (13. 6) 高 : 7. 0 厚 : 1. 1	外 : 深褐色~黒褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	良好 外 : ハケ目のあとがわざかに残る	外面に黒斑。	SC02-13
第13086	縫	口 : (11. 9) 高 : 9. 7 厚 : 0. 9	外 : 暗褐色 内 : 明褐色	1mm以下の砂粒、角閃石を含む	良好 (内 : ヨコナダ) ハケ目		SC03-1
第13087	縫	口 : (12. 0) 高 : (4. 25)	外 : 黄褐色 内 : 暗褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	良好 歪れ : ヨコナダナフ		SC09-11
第13088	縫	口 : (13. 2) 高 : (7. 1)	外 : 深褐色~黒褐色	2~3mmの砂粒を含む	良好 内 : ナダ ヨコナダ 外 : ハケ		SC09-19
第13089	縫	口 : (18. 2) 高 : (6. 25)	深褐色	1~4mmの砂粒を含む	良好 (内 : ヨコナダ) 内 : 板状工具ナダ 外 : ハケ		SC04-1
第13090	縫	高 : 7. 05	外 : にいへー褐色 内 : 暗褐色	1mm以下の砂粒、角閃石を含む	良好 内 : ハケ目 指オサニ	外面に黒斑。 内面に赤色付着。	SC04-14
第13091	支脚	上端 : (6. 0) 高 : (0. 4)	にいへー褐色	1mm以下~2mmの砂粒を含む	良好		SC04-19
第13092	縫	口 : 3. 1 高 : 10. 1 厚 : 0. 7	外 : 暗褐色~にいへー褐色 内 : にいへー褐色~灰褐色	2mm以下の砂粒をやや多量に含む	普通 (内 : ヨコナダ) ハケ目 口外 : ヨコナダ ハラミガラ ハオチナフ	側面に穿孔! あなり。外面に黒斑。	SC09-6
第13093	縫	口 : 3. 0 高 : 10. 1 厚 : 0. 7	暗~灰褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好 内 : ナダ 外 : ハラミガラ ナオチナフ		
第13094	縫	口 : (13. 2) 高 : 8. 3 厚 : 0. 9	外 : 明褐色~灰褐色	1mm以下~2mmの砂粒を含む	良好 (口 : ヨコナダ) 内 : ハケ目 外 : ヨコナダナフ	手挫ね。	SC04-12
第13095	縫	口 : (1. 7) 高 : (0. 4)	にいへー褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好 (口 : ヨコナダ) 内 : ヨコナダ		SC09-11
第13096	縫	口 : 3. 1 高 : 10. 1 厚 : 0. 7	にいへー褐色~灰褐色	1mm以下の砂粒をやや多量に含む	普通 (内 : ヨコナダ) ハケ目 口外 : ヨコナダ ハラミガラ ハオチナフ	側面に穿孔! あなり。外面に黒斑。	SC09-6
第13097	縫	口 : (1. 7) 高 : (0. 4)	にいへー褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好 (内 : ヨコナダ) ハケ目		SC09-5
第13098	縫	口 : (25. 0) 高 : (22. 7)	外 : 灰褐色 内 : 暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好 (口 : ヨコナダ) 内 : ハケ目		SC08-1
第20090	縫	口 : (30. 0) 高 : (22. 7)	にいへー褐色~黒褐色	1~2mmの砂粒を含む	普通 (口 : ヨコナダ) 内 : ハケ目 背面共に部分的に黒斑。スヌ。		SC10-3
第20091	縫	高 : 3. 31 高 : 2. 2 厚 : 0. 7	外 : 明褐色 内 : 暗褐色	大小の砂粒、角閃石を含む	良好 (内 : ナダ) 底内 : 指オサニ後ナグ 歪れ : ハラミガラ ナダ	外面に黒斑。	SC09-14
第20092	縫	高 : 3. 31 高 : 2. 2 厚 : 0. 7	外 : 明褐色	大小の砂粒、角閃石を含む	良好 (内 : ナダ) 底内 : 指オサニ後ナグ 歪れ : ハラミガラ ナダ	外面に黒斑。	SC09-14
第20093	縫	口 : (11. 4) 高 : 6. 6	外 : にいへー褐色~灰褐色 内 : にいへー褐色~灰褐色	2mm以下の砂粒を多量、微細な1~1. 5mmの雲母、角閃石をわずかに含む	普通 (内 : 工具ナダ) 工具痕あり 外 : ハハ目 底内 : 穿孔! 上に砂粒を含む。ナダ	小面の凹溝! 小口は1cm程幅広い。ハラミガラの部分を一貫するように背面に底源は施設側面部から立ち上る。	SC10-2
第20094	縫	口 : 18. 5 高 : 5. 4 厚 : 1. 1	暗~灰褐色	2mm以下の砂粒を多量、微細な1~1. 5mmの雲母、角閃石をわずかに含む	普通 (内 : 工具ナダ) 工具痕あり 指オサニ後ナグ 外 : ハケ目 ナダ	外側面は上に~中央に穿孔! 体に差し込む。	SC10-1
第20095	縫	口 : (12. 4)	暗~灰褐色	大口の砂粒を含む	良好 (内 : ナダ)		SC09-12
第20096	縫	口 : (11. 0) 高 : (0. 4)	にいへー褐色	2~3mmの砂粒を含む	良好 (内 : ナダ)	背面に黒斑。	SC10-13
第20097	縫	口 : (12. 4) 高 : (0. 4)	外 : 黄褐色 内 : 明褐色	5~6mmの砂粒を多量に含む	良好 (内 : ナダ)	背面に黒斑。	SC10-4
第20098	縫	口 : (4. 45) 高 : 6. 0 厚 : 0. 9	外 : にいへー褐色 内 : 灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好 (内 : ナダ) 底内 : 指オサニ後ナグ	背面に黒斑。	SC10-6
第20099	縫	口 : (13. 6) 高 : 6. 6	にいへー褐色 内 : 灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好 (口 : ヨコナダ) 口内 : ハケ目		SC11-1
第20100	縫	口 : (1. 95) 高 : (2. 2)	黄褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	良好 (内 : ナダ)	内 : ハケ目 外 : ハハ目 指オサニ	SC11-3
第20101	縫	口 : (28. 2) 高 : (31. 0) 厚 : (1. 1)	明褐色~赤褐色	微細~4mm程の白色砂粒、微細~2mm程の角閃石、微細な雲母、黑色砂を少量に含む	普通 (口 : ヨコナダ) 内 : 指オサニ	内面外側黒化。	SC09-10
第20102	縫	口 : (2. 0) 高 : 6. 6 厚 : 0. 9	黄褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	良好 (内 : ヨコナダ) 外 : ヨコナダ		SC02-2
第20103	縫	口 : (4. 45) 高 : 6. 0 厚 : 0. 9	外 : にいへー褐色 内 : 灰褐色	砂粒を多量、2mm程の砂粒、角閃石を含む	良好 (内 : ナダ) 底内 : 指オサニ後ナグ 歪れ : ハラミガラ	背面に黒斑。	SC02-4
第20104	縫	口 : (2. 0) 高 : 6. 6 厚 : 0. 6	外 : 黄褐色~淡黄褐色 内 : 灰褐色	1~2mmの砂粒、角閃石を含む	良好 (内 : ナダ)		SC02-11
第20105	縫	口 : (29. 4) 高 : (4. 45)	にいへー褐色 内 : 灰褐色	1mm程度の砂粒、角閃石を含む	良好		SC02-1
第20106	縫	口 : (16. 4) 高 : (5. 2)	外 : にいへー褐色	微細~2mm程の白色砂粒、微細な雲母、黑色砂を少量に含む	普通 (口 : 工具ヨコナダ) 内 : 板状工具ナダ 外 : 板状工具ナダ	底部外側に黒斑。 内面外側黒化。	SC10-12
第20107	縫	口 : (16. 2) 高 : 3. 9 厚 : 1. 2	暗~灰褐色	微細~3mm程の白色砂粒、微細な角閃石、黑色砂、赤褐色砂、雲母を少量含む	普通 天内 : ヨコナダ 内 : ナダ 外 : ハハ目 壁 : ナダ	穿孔全部で4個。壁内に作りかけた穿孔2ヶ所。	SC10-14
第20108	縫	天 : 0. 6 高 : 12. 2 厚 : 1. 2	にいへー褐色	微細~3mmの砂粒を多量、雲母を少量含む	やや不良 天内 : ナダ 外 : 一部ハケ目が剥離にかけ善く歪む。		SC09-15



種別番号	登録番号	規則	位置(復元場)	色調	計上	既成	既用・調整技術	備考	整備番号
第22809		便 高: (4.8)	内: 黄緑色	1~3mmの砂粒を含む	良好	内: ハケ日		SC13-1	
第22810		便 高: (2.9)	褐色	1~2mmの砂粒を含む	中や本 高: (2.9)	内: ハケ日 外: ハケ日	内: ヨコナダ 外: ヨコナダ	SC13-2	
第228011		便 高: (4.25)	褐色	1~2mmの砂粒を含む	中や本 高: (3.1)	内: ハケ日 外: ハケ日	内: ヨコナダ 外: ヨコナダ	SC13-5	
第228012		便 高: (3.1)	褐色(赤褐色)	細砂粒を含むが粗粒	良好	内: ヨコナダ 外: ハタギ、ヨコナダ	内: 内面丹張り、 外: ハタギ	SC13-6	
第22801		便 高: (26.9)	内: 緑色	黒褐色～1mmの砂粒を多量に含む	普通	口: ヨコナダ 口内: ハケメ 内: タタキ、ハケ後ハケ日 外: ハタギ、工具箱、直行タタキ後ハケ日、ハタ日	口: ヨコナダ 口内: ハケメ 内: タタキ、ハケ後ハケ日、 外: ハタギ、工具箱、直行タタキ後ハケ日、ハタ日	SC14-5	
第22802		便 高: (23.9)	赤褐色、内: 非常に赤褐色	黒褐色～3mm程の白色砂粒	普通	口: ナダ 内: ヨコナダ 外: ハケ日	内面はスム、全体に 歪む。	SC13-3	
第22803		便 高: (19.7)	内: 褐色	1~3mmの砂粒を含む	良好	口: ヨコナダ 内: ヨコナダ 外: ハケ日	外面上黒、外面上 スム。	SC14-6	
第22804		便 高: (4.5)	赤 内: 明赤褐色	1~3mmの砂粒を多量、金属性、 凹凸石も含む	良好	内: ハタキ後ハケ日 外: ハタ日	内: ヨコナダ 外: ハタキ後ハケ日、 外: ハタ日	SC14-31	
第22805		便 高: (27.55)	内: にこい葉緑～暗褐色	黒褐色～2mm程の白色砂粒を多量、 鐵錆等を含む	普通	口: ヨコナダ 内: ハケメ 外: ハタギ、工具箱、ケタリ 日、平打タタキ、追外、ケタリ	全体的に歪む。	SC14-2	
第22806		便 高: (8.8)	内: 黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	中や本 高: (10.45)	内: ヨコナダ 外: にこい葉緑	内: ヨコナダ 外: ハケ日	側面部中央に黒斑	SC14-10
第22807		便 高: (2.5)	内: 淡赤褐色	1~3mmの砂粒を含む	良好	口: ヨコナダ 内: ヨコナダ 外: ハケ日	内: ヨコナダ 外: ハケ日	SC13-9	
第22808		便 高: (26.2)	内: にこい葉緑～暗褐色 内: にこい葉緑	黒褐色～1mmの白色砂粒を少、 凹凸石も含む	良好	口: ヨコナダ 内: ハケ日、ナダ 外: ハタ日、タタキ後ハケ 日、ケタリ	外面上黒2か所、 側面は歪む。	SC14-4	
第22801・2		便 高: (27.55)	内: にこい葉緑	1~3mmの砂粒を多量、角閃石を 含む	良好	内: ナダ 外: ハケ日	内: ハケ日	SC14-28	
第22803		便 高: (9.6)	内: 暗黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	良好	口: ヨコナダ 内: ナダ 外: ハタ日、タタキ後ハケ 日、ケタリ	内: ヨコナダ 外: ハタ日	SC14-18	
第22804		便 高: (19.35)	褐色	1~3mmの砂粒を多量、角閃石を 含む	良好	内: ハタ日 外: ハタ日、タタキ後ハケ日	内: ヨコナダ 外: ハタ日	SC14-25	
第22805		便 高: (11.2)	内: 暗黄褐色	黒褐色～2mm程の白色砂粒、 鐵錆等、角閃石、黑色鉱と歩留 率の低落	普通	口: ハマ日 内: ナダ 外: 工具ナダ 内: ヨコナダ、ハタ日	外面上黒、全体に 歪む。	SC14-1	
第22806		便 高: (13.4)	内: 暗黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	良好	内: ハタ日 外: ハタタキ後ハケ日	内: ヨコナダ 外: ハタタキ後ハケ日	SC14-7	
第22807		便 高: (14.1)	内: 暗黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	中や本 高: (1.4)	内: ヨコナダ 外: ハタ日	外面上黒、外面上 スム。	SC14-40	
第22808		便 高: (15.4)	内: 黄褐色	1~3mmの砂粒を多量、角閃石を 含む	良好	内: ヨコナダ 外: ハタ日	外面上黒。	SC14-40	
第22809		便 高: (16.0)	内: 暗黄褐色	1~3mmの砂粒を多量、角閃石を 含む	良好	内: ヨコナダ 外: ハタ日	内: ヨコナダ 外: ハタ日	SC14-39	
第22810		便 高: (1.9)	内: 淡赤褐色	1~3mmの砂粒を多量、 鐵錆等を含む	普通	内: ヨコナダ 外: ハタ日	内: ヨコナダ 外: ハタ日	SC14-02	
第33001		便 高: (6.25)	内: にこい葉緑	1~3mmの砂粒を多量、角閃石を 含む	良好	口: ヨコナダ 内: ハケ日	外面上黒。	SC14-29	
第33002		便 高: (10.6)	内: にこい葉緑	1~3mmの砂粒を含む	良好	内: ハタ日 外: ヨコナダ	内: ヨコナダ 外: ハタ日	SC14-07	
第33003		便 高: (9.05)	内: 明赤褐色	1~3mmの砂粒を多量、角閃石を 含む	良好	口: ヨコナダ 内: ヨコナダ 外: ハタ日	内: ヨコナダ 外: ハタ日	SC14-28	
第33004		側面 高: (20.6)	内: 西黃褐色	1~3mmの砂粒を含むが粗粒	良好	内: ヨコナダ 外: ハタ日	脚部に穿孔あり。	SC14-45	
第33005		便 高: (23.77)	内: 暗黄褐色～暗赤褐色 内: 明赤褐色	黒褐色～3mm程の白色砂粒を少、 凹凸石も含む	普通	口: ヨコナダ 内: ヨコナダ 外: ハタ日	外面上の一部に偏り 性。	SC14-09	
第33006		便 高: (5.05)	内: 黄褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	中や本 高: (0.9)	内: ヨコナダ 外: ハタ日	外面上黒。	SC13-19	
第33007		便 高: (28.0)	内: 西黃褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	中や本 高: (3.9)	内: ヨコナダ 外: ヨコナダ	内: ヨコナダ 外: ヨコナダ	SC13-18	
第33008	24	便 高: (19.95)	内: にこい葉緑～暗赤褐色 内: にこい葉緑～暗赤褐色 厚: 1.45	細繊の砂粒を多量に含む	普通	口: ヨコナダ 内: ヨコナダ 外: ハタ日 内: ナダ 外: タタキ後ハケ日	外面上黒、外面上 スム、底面に縦線、 カット跡有り。	SC15-1	
第33009	23	便 高: (19.5)	内: にこい葉緑～暗赤褐色	黒褐色～3mm程の白色砂粒を少、 凹凸石も含む	良好	口: ヨコナダ 内: ヨコナダ 外: ハタ日 内: ナダ 外: タタキ後ハケ日	外面上黒。	SC15-2	
第33010		便 高: (5.7)	内: 黄褐色～淡赤褐色 内: にこい葉緑～暗赤褐色 厚: 0.4	黒褐色～3mm程の白色砂粒を少、 凹凸石も含む	普通	内: 版状工具ナダ 外: ハタケ日	全体的に歪む。	SC15-11	
第33011		便 高: (18.35)	内: 暗黄褐色～暗赤褐色 内: にこい葉緑～暗赤褐色 厚: 0.25	黒褐色～5mmの白色砂粒を少量 含む	普通	口: ヨコナダ 内: ヨコナダ 外: ハタケ日	口縫の一端に黒斑。	SC15-13	
第33012	24	便 高: (5.9)	内: にこい葉緑～黒色 内: にこい葉緑	1~3mmの白色砂粒を少量、 凹凸石も含む	良好	内: ワニナ 外: ワニナ	底部外面上黒。	SC15-23	

種別番号	田舎番号	图形	由風(風矢印)	色調	粒度	成形	成形・調節技術	標示	種別番号	
第38051	縁	□: 15.2 △: 11.0	外: 赤黄褐色～褐色 内: 赤褐色～赤褐色	微細～2mmの白色砂粒を多量、無機分が黄色を少量、無機分 1mm程の角開石をやや多く含む	良好	ロ: タタキ後ナメ 内外: 工具ナ メ	外面上に黒斑。	SC19-1		
第38052	縁	□: (31. 0) △: (31. 0)	外: 淡い赤い黄褐色 内: 淡い黄褐色	微細～1mmの白色砂粒を多量、無 機分が黄色を少々含む	普通		外面上に黒斑にかけて 外能。	SC20-11		
第38053	高杯	□: (27. 0) △: (26. 0)	褐色	微細～2mmの白色砂粒、無機 1mm程の基盤色砂粒を少量含む	良好	ロ: ヨコナメ 内外: ナメ	内面上に片側り現存。	SC20-15		
第38054	縁	□: (15. 0) △: (23. 7) △: (23. 7)	高 幅 厚: 6.6	高: (15. 0) 幅: (23. 7) 厚: 6.6	内: 黄褐色 外: 黄褐色～赤褐色	1～2mm程の砂粒、白色砂粒を多 量に含む	普通	内: 板状工具ナメ 外: ハケ目 底面: ヨコナメ 底外: ナメ	内面上一部にわざか に片側り現存。	SC20-13
第38055	24 節	□: (10. 0) △: (9. 6) △: (9. 6)	高: 2.6 天厚: 1.4	外: 浅黄褐色～赤褐色 内: 浅黄褐色	微細～2mm程の砂粒を多量、無 機分が黄色を少々含む	普通	内: 指オサニ、ナメ 外: ナメ	外面上に黒斑、各部 下位に算毛1.0%。	SC20-18	
第38056	縁	□: (21. 0) △: (21. 0)	褐色	微細～2mm程の白色砂粒を多 量、無機分が白色、0.5mm程の 角開石、無機分が白色を少々含む	普通	内: 工具ナメ 外: 板状工具ナ メ 消し、ハマ目 底外: ナメ		SC20-19		
第38057	縁台	上端: 12.5 幅: 17.5 厚: 13.45	内: 淡い黄褐色～褐色	1～2mm程の砂粒、白色砂粒を多 量に含む	普通	ロ: ヨコナメ 内: 指オサニ、ナ メ 外: ハケ目 頸部: ハケ目、 指オサニ、ナメ 頸部: ヨコナメ		SC20-20		
第38058	24 節	□: (13. 0) △: (13. 0)	高: 3.6 幅: 1.4	外: 浅黄褐色 内: 浅黄褐色～に赤い 色	微細～2mm程の白色砂粒、無機 1mm程の基盤色砂粒を少量含む	良好	内: 工具ナメ、ナメ、指オサニ、工 具ナメ		SC20-21	
第38059	24 節	上端: 11.45 幅: 11.8 厚: 1.4	内: 淡い黄褐色～褐色	1～2mm程の砂粒、白色砂粒を多 量に含む	普通	ロ: ヨコナメ 内: 指オサニ、ナ メ 外: ハケ目 頸部: ヨコナメ		SC20-21		
第39051	24 節	□: (33. 0) △: (33. 0)	高: 18.0 幅: 18.0	縁～灰褐色	微細～1mm程の砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	ロ: ヨコナメ 内: ナメ、指オサニ 外: ハケ目	山林地黒斑。口継筋 は走る。	SC20-20	
第39052	縁	□: (33. 0) △: (33. 0)	内: 淡い黄褐色	微細～1mm程の砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	ロ: 板状工具ナメ 内: ヨコナメ 外: ナメハケ目、ナメハケ目	山林地内面の一部 に風呂。	SC20-21		
第39053	縁	□: (37. 0) △: (37. 0)	高: 17.4 幅: 1.4	外: に赤い黄褐色～褐色 内: 淡い黄褐色	微細～2mm程の砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	内: ナメ 外: 一面にハマ目 唇 外面全体に黒斑によ る変化。		SC20-19	
第39054	縁	□: (33. 1) △: (33. 1)	外: に赤い黄褐色～褐色 内: に赤い黄褐色	微細～2mm程の砂粒を多量、0.5 ～1mm程の白色を多量含む	普通	内: ナメ 外: ナメ後ハケ目	脇部外面のみ黒化。		SC20-20	
第39055	縁	□: (33. 0) △: (33. 0)	外: 浅黄褐色	微細～2mm程の砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	ロ: ヨコナメ 内: 指オサニ 外: ナメ 外: ハケ目		SC20-4		
第39056	縁	□: (33. 0) △: (33. 0)	外: に赤い黄褐色～淡黄褐色 内: に赤い黄褐色	微細～2mm程の砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	ロ: 工具ナメ 内: ナメ 外: ハ ケ目		SC20-4		
第39057	縁	□: (44. 7) △: (45. 0)	外: に赤い黄褐色～褐色 内: に赤い黄褐色	微細～2mm程の砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	ロ: 工具ナメ 内: ナメ 外: ハ ケ目		SC20-5		
第39058	縁	□: (32. 5) △: (32. 6)	外: 浅黄褐色～に赤い 褐色 内: 浅黄褐色～次 浅黄褐色	微細～1mm程の砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	ロ: 工具ナメ 内: ナメ	山林地外面上にスス。	SC20-7		
第39059	24 節	□: (36. 0) △: (36. 0)	高: 19.9 天厚: 6.7	外: 浅黄褐色～に赤い 黃褐色 内: に赤い黄褐色	微細～2mm程の砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	ロ: ヨコナメ 脱部: ハケ目 外: ハケ目 天外: ナメ	脇部にスス。	SC20-19	
第39060	24 節	□: (29. 0) △: (29. 0)	高: 28.8 天厚: 9.4	外: 浅黄褐色～暗褐色 内: 淡い黄褐色	微細～2mm程の砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	ロ: ヨコナメ 内: ハケ目	脇部外面に黒斑。	SC20-1	
第42051	縁	□: (36. 0) △: (36. 0)	高: 3.4 底厚: 1.1	褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	内: ナメ		SC20-10	
第42055	縁	□: (25. 6) △: (25. 6)	外: に赤い黄褐色 内: 細 縫	微細～2mm程の白色砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	良好	ロ: ヨコナメ 内: ハケ目 外: ハケ目、ハラクツリ(底ナメ)		SC22-2		
第42056	高杯	□: (34. 0) △: (34. 0)	外: 灰褐色 内: 淡い黄褐色	微細～2mm程の白色砂粒を多量、無 機分が白色を少々含む	普通	ロ: ヨコナメ 内: ナメ 外: ハ ケ目		SC22-2		
第42057	縁	□: (30. 0) △: (30. 0)	内: 淡い 褐色	1mm程の砂粒を多量、角開石を 含む	良好	内: ハケ目 外: タタキ	外面に黒斑。	SC22-1		
第42058	縁	□: (30. 0) △: (30. 0)	高: 3.4 底厚: 1.1	褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	内: ナメ		SC22-10	
第42059	縁	□: (25. 6) △: (25. 6)	外: に赤い 黄褐色 内: 細 縫	1～2mmの砂粒を多量含む	良好	ロ: ヨコナメ 内: ハケ目 外: ハケ目、ハラクツリ(底ナメ)		SC22-2		
第42058	高杯	□: (31. 0)	外: 灰褐色 内: 淡い黄褐色	1mm程の砂粒を含む	やや不 良	内: シボテナム 外: ハケ目		SC22-9		
第42057	縁	□: (30. 0) △: (30. 0)	高: 0.95 幅: 16.0	褐色	1～2mm程の砂粒を含む	良好	内: ナメタ ナメ: ヨコナメ、ハ ケ目、ハマキツ(底ナメ)	外面に黒斑。	SC22-9	
第42060	25 節	□: (27. 6) △: (27. 6)	高: 17.45	外: に赤い黄褐色 内: に赤い黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	ロ: ヨコナメ 内: ハケ目 外: ハケ目、ナメ 外: ハマ目 外: ハマ目	山林地外面上に脇部 中間にスス。	SC22-1	
第42069	縁	□: (32. 2) △: (32. 2)	高: 9.2 底厚: (0.1. 6)	黄褐色	1～2mmの砂粒、角開石を含む	軟質 (底)	ロ: ヨコナメ 内: ハケ目 外: ハケ目、ハラクツリ(底ナメ)		SC24-2	
第42068	高杯	□: (31. 0)	外: 灰褐色 内: 淡い黄褐色	1mm程の砂粒を含む	やや不 良	内: シボテナム 外: ハケ目		SC24-3		
第42067	縁	□: (30. 0) △: (30. 0)	高: 0.95 幅: 16.0	褐色	1～2mm程の砂粒を含む	良好	内: ナメタ ナメ: ヨコナメ、ハ ケ目、ハマキツ(底ナメ)	著しく歪む。	SC24-1	
第42068	25 節	□: (27. 6) △: (27. 6)	高: 17.45	外: に赤い黄褐色 内: に赤い黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	ロ: ヨコナメ 内: ハケ目 外: ハケ目、ナメ 外: ハマ目 外: ハマ目	内: 指オサニナメ 外: ナメ 外: ハマ目	SC24-2	
第42069	縁	□: (32. 2) △: (32. 2)	高: 9.2 底厚: (0.1. 6)	黄褐色	1～2mmの砂粒、角開石を含む	軟質 (底)	ロ: ヨコナメ 内: ハケ目 外: ハケ目、ハラクツリ(底ナメ)		SC24-2	
第42070	縁	□: (33. 0) △: (33. 0)	高: 10.3 底厚: 4.5	黄褐色～灰褐色	1～2mmの砂粒を含む	やや不 良	内: シボテナム 外: ハケ目		SC24-3	
第42071	24 節	□: (30. 3) △: (30. 3)	高: 4.9 底厚: 6.8	黄褐色～灰褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	内: ハケ目 外: ナメ	著しく歪む。	SC24-1	
第42072	縁	□: (30. 3) △: (30. 3)	高: 7.2 底厚: 0.95	灰褐色	1mm以下の砂粒を含む	やや不 良	内: 指オサニナメ 外: ナメ 外: ハマ目		SC24-2	

種類番号	回数番号	部位	位置（復元図）	色調	地土	構成	底面・側面技法	被者	被者番号
第4501	24	蓋	口：(26.4 高 (27.05 幅) 内：(24.8)	内：にぶい黄褐色 外：灰黄褐色～灰白色	1~2mmの砂粒・白色砂粒を含む	普通	内面：ハケ目 口外：ハケ目側面 底面はナダ 内：板状工具ナダ 外：ハケ目	口縁部外面上～側面外 底面下位に黒斑。	SC25-1
第4502		鉢	口：(21.6 高 底：(21.6)	内：灰黄褐色 外：灰黃褐色	1mm程の砂粒をわずかに含む	中や少 少～無	内：上位はハケ目 外：タタキ	口縁部外面上に黒斑。	SC25-19
第4503		鉢	口：(11.7 高 底：(7.3)	内：紺色 外：紺色	1mm程の砂粒をわずかに含む	良好	内：中位はハケ目	側面外面上位～底部 底面に黒斑。	SC25-19
第4504		鉢	口：(12.3 高 底：(7.0)	内：浅緑褐色 外：浅緑褐色	1~2mmの砂粒を多量、角閃石を含む	中や少 少～無	内：中位～底面は脂オサニ後ナダ 外：下位～底部はハラケズリ	口縁部外面上～底部 底面に黒斑。	SC25-8
第4505		鉢	口：(27.4 高 底：(12.1)	内：樹へにびい黃褐色 外：灰褐色	1mm程の砂粒をわずかに、角閃石を含む	良	内～底内：ハケ目 外～底外：ハ カ目	底面外面上に黒斑。	SC25-16
第4506		蓋	口：(13.6 高 底：(13.6)	内：にぶい黄褐色	2mm以下の砂粒をわずかに、角 閃石を含む	良好	口外～側外：ハケ目 基盤内：ヨ コナダ	側面外面上位～下位 底面に黒斑。	SC25-2
第4507		高杯?	高：(5.55)	紺色	1~3mmの砂粒を含む	良好	側外～側外：ハケ目 基盤内：ヨ コナダ	側面外上位～底部 底面に黒斑。	SC25-16
第4508	24	高杯	高：(11.4 高 底：(3.6)	内：樹へにびい黃褐色 外：灰褐色	1mm程の砂粒を多量、1~3mmの砂粒を含むやや多量～全く	普通	側面内：ナダ 脂外：ハケ目 線 内～底内：ハケ目 外～底外：ハ カ目	脚部穿孔3.0mm (内 側から外へ) 黒斑。	SC25-20
第4509		高杯	高：(10.40 高 底：(4.02)	内：にぶい黄褐色 外：灰褐色	2~4mmの砂粒を多量に含む	良好	内～底内：ハケ目 安定：ハ カ目	底面外面上～側面外面上 底面に黒斑。	SC25-19
第5101	24	青磁支脚	上端：(8.5 高 底：(12.5 幅)	紺色	1~2mmの砂粒を多量に含む	良好	内：ナダ 外：タタキ 基盤内：ヨ コナダ	外地下下位に黒斑。	SC25-31
第5102	24	青磁支脚	高：(11.4 幅 (12.2)	内：樹へ～灰黃褐色 外：灰黃褐色	1mm以下～3mm程の砂粒、角閃石を含む	良好	内：ナダ 外：タタキ 基盤内：ヨ コナダ	外地下下位に黒斑。	SC25-30
第5103		叉脚	高：(2.35)	にぶい黄褐色	2.1~6.0mmの石英質、長石を含む 底上～葉茎をぐくぐくに含む	良好	上端：ナダ 外：脂オサエ	側面外上半に黒斑。	SC25-34
第5104	24	支脚	高：(9.13 幅 (11.33)	内：樹へ～灰黃褐色 外：灰褐色	1mm程の砂粒を多量に含む	良	内：ナダ 外：脂オサニ後ナダ 脂外：脂オサエ 基盤内：ヨコナダ	側面が著しく歪む。 側面に穿孔。	SC25-33
第5105		支脚	高：(9.6)	内：樹へ～灰黃褐色 外：灰褐色	1~3mmの砂粒を多量、角閃石を含むやや不 規則	良好	内～底内：脂オサエ	側面外上半に黒斑。	SC25-31
第5106		鉢	口：(10.9 高 底：(6.2)	樹へ～灰褐色	1mm程の砂粒を多量、角閃石を含むやや不 規則	良好	内～底内：工具ナダ タ～底外： ハケ目	手削れ。	SC27-6
第5107	25	鉢	口：(8.7 高 底：(4.0)	内：にぶい黄～灰黃褐色 外：灰黃褐色	2~3mmの白色砂粒を含むやや不規則、黙離な雲母、赤色鉱を少 量含む	普通	側面外面上半～底部 底面に黒斑。	SC27-4	
第5108	25	高杯	口：(16.5 高 底：(16.5)	紺色	細砂粒を含む	良好	脚内：上段はしばり痕、中位～底 内：ハケ目 脂外：ハケ目後～下 段はナダ 脂外：脂オサエ	脚部外面上半に黒斑。 脚部穿孔上位 (2 cm)。	SC27-8
第5109	25	器台	上端：(8.15 高 底：(22.2 幅) 内：(16.3)	樹へ～灰褐色	1mm程～2mmの白色砂粒を多 量、微細な雲母、鐵錆～1mmの 角閃石を少額含む	普通	内：上段はナダ 脂オサエ、下 段はハケ目後ナダ 外：下段 はハケ目後ナダ、中位～下位はナ ダ	脚部外面上半に黒斑。 脚部穿孔上位 (2 cm)。	SC27-7
第5110		壺	口：(18.7 高 (15.1)	内：黑色	脚部～2mm程の白色砂粒を含むやや不 規則、角閃石を含む	良	内：ヨコナダ 外～ハケ目	側面外面上位に黒 斑。	SC27-1
第5111	25	壺	口：(23.30 高 底：(21.7)	内：にぶい黄～紺色	脚部～2mm程の白色砂粒を多 量、微細な雲母、角閃石を少 量含む	普通	内：ヨコナダ 外～ハケ目後ナ ダ	側面外面上位に黒 斑。	SC27-2
第5112		壺	高：(10.8)	灰黃褐色	0.3~1mmの石英、長石を少量。 底上～葉茎をぐくぐくに含む	良好	内：ハケ目 外～タタキ後ハ カ目 内：ハケ目 外：タタキ	側面外面上位にスズ。	SC29-1
第5401	34-2	鉢	口：(3.3 高 底：(3.0)	白～灰黃褐色	1mm程の砂粒をわずかに含む	良	脂オサエ	手削れ。ミニチャ ツ。	SC28-21
第5402	34-2	鉢	口：(5.8)	内：灰黃褐色 外：黃褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	良好	脂オサニ後ナダ	側面外面上位～底部 底面に黒斑。	SC28-18
第5403	34-2	高杯	口：(4.7 高 底：(3.05)	紺色	1~2mmの砂粒、角閃石を含む	良好	脂外：ナダ ナダ：脚部付近 工具によるナダ、(2)はナダ、 タタキ 脂外：ヨコナダ	ミニチュア。	SC28-17
第5404	34-2	壺	口：(7.0 高 (5.8)	内：灰黃褐色～黑褐色	細砂粒を含む	不良	脂オサニ後ナダ	側面外面上位～下位 底面に黒斑。手削れ。 ミニチュア。	SC28-19
第5405		鉢	口：(9.45 高 底：(4.4)	内：灰黃褐色 外：灰褐色	0.3~3mmの石英、長石を少量。 底上～葉茎をぐくぐくに含む	良好	内：ナダ 内～底内：ハケ目後ナ ダ 外：タタキ後ナダ、底外：工 具ナダ	側面外面上位～下位 底面に黒斑。手削れ。 ミニチュア。	SC28-10
第5406		高杯	高：(4.0 高 底：(2.6)	内：灰黃褐色	0.3~2mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母を含む	良好	内：ヨコナダ 外～ハケ目後ナ ダ 内：ナダ 外：タタキ後ナダ	側面外面上位に黒 斑。	SC28-11
第5407	34-2	高杯?	高：(4.5 高 底：(6.7)	内：灰黃褐色	1mm程の砂粒、角閃石を含む	良好	基盤内：工具によるオサエ？	外地下下位に黒斑。脚 部は重ね。	SC28-10
第5408		高杯?	口：(14.6 高 底：(8.8)	内：灰黃褐色 外：灰褐色	脚部～2mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母を含む	良好	内：ヨコナダ 外～ハケ目後 ナダ 内：上位はナダ、下位 はハケ目後ナダ 外：タタキ後ナ ダ	側面外面上位～下位 底面に黒斑。	SC28-1
第5409	25	壺	口：(14.6 高 底：(8.8)	内：灰黃褐色 外：灰褐色	脚部～2mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母を含む	良好	内：ヨコナダ 外～ハケ目後 ナダ 内：上位はナダ、下位 はハケ目後ナダ 外：タタキ 後ハカ目 底外：ナダ	側面外面上位～下位 底面に黒斑による赤斑。	SC28-1

種別番号	出荷番号	規格	色見 (色見度)	色調	特徴	成形・塑性技術	被覆	種別番号
第54010		高杯 高: (13.9)	外: 浅黄緑～黄緑、橙緑 内: 淡黄緑、橙緑	微細～3mmの白色砂粒を多量、微細～2mmの赤色斑点を少量含む	普通	内: ナデ～ハケ目 (断面のため 不明瞭) 外: カデ (断面)	SC28-12	
第54011		高杯 高: (14.0)	外: 浅黄緑、明黄緑、橙 緑 内: 橙、浅黄	微細～6mmの白色砂粒を多量、微細～3mmの赤色斑点を少量含む	良好	内: ナデ～ハケ目 (断面)	SC28-13	
第54012	11	高杯 高: (6.6)	外: 浅黄緑～黄緑 内: 黄緑	微細～3mmの白色砂粒を多量、微細な斑点、1mmの赤色斑点を少量含む	良好	内: ナデ～ハケ目 (断面)	SC28-8	
第54013	25	高杯 高: (11.9)	外: 淡黄緑	微細～5mmの白色砂粒を多量、微細な斑点、1mmの赤色斑点を少量含む	良好	内: ナデ～ハケ目 (断面)	SC28-9	
第54014		縁? 高: (4.0)	外: 淡黄緑～黄緑 内: 淡黄	微細～3mmの白色砂粒を多量、微細な斑点を少しだけ含む	やや不良	口目: ナデ 内: 深内: ナデ・削 オリエ	SC28-1	
第54015	縁?	高: (4.0)	外: 淡黄緑～黄緑 内: 黄緑	微細～3mmの白色砂粒を多量、微細な斑点を少しだけ含む	不良	内: ナデ	底内: 工具ナダ	SC28-9
第54016		縁? 高: (3.8)	外: 淡黄緑	微細～3mmの白色砂粒を多量、微細な斑点、1mmの角閃石、1mmの赤色斑点を少しだけ含む	普通	外: 半径はタタキ、下位はタタキ 後: ハケ目 近外: ハケ目	底部外面にスス、	SC28-6
第54017		高杯 高: (0.25)	外: 淡黄緑～灰、白 内: 淡黄緑	微細～5mmの白色砂粒を多量、微細な斑点を少しだけ含む	良好	外: ナデ 底内: 指オサニ	SC28-1	
第54018	35-1 11-2	高杯 高: (11.9) 鋼: (12.2)	黄緑色	0.1～0.3mmの砂粒をわずかに含む	良好	口目: ナデ 内: ナデ・削 オリエ 外: ナデ・削 オリエ 下位: ハケ目	底部外面下位に黒斑、工具ナダ、外: 上半部ハケ目、底: 工具ナダ、下位: 深内: ハケ目	SC28-7
第54019	35-1	馬蹄品 高: (11.9)	外: 黄褐色 内: 黑褐色	やや粗約 0.1～0.3mmの石英、粒径 5～10mmの母母を多く含む	良好	内: ナデオサニ、ナデ、擦過面附近に集積し、複合化より上位は立たなくなつて、下位はハケ目	底部・尾端部は黒斑、尾端部はハケ目	SC28-21
第54020		縁? 高: (11.9)	内: にあり 黄緑色	微細～2mm程の白色砂粒を多量、角閃石を少しだけ含む	良好	口目: ナデ 内: ナデ・削 オリエ 下位: ハケ目	口部外面上位～中位に黒斑、	SC28-4
第54021		高杯 高: (28.5)	外: 浅黄緑～黄緑色	1～3mmの砂粒を多量、角閃石を含む	良好	口目: ハケ目 内: 上位、下位はハケ目	側面部外面上位～中位に黒斑、	SC28-3
第54022		縁? 高: (33.2)	内: にあり 黄緑色	1mm以下の砂粒を含む	良好	口目: ハケ目 内: 上位、下位はハケ目	側面部外面上位～中位に黒斑、	SC28-2
第54023		高杯 高: (16.3)	外: にあり 黄緑色 内: にあり 黄緑色	1～3mmの砂粒を多量、角閃石を少しだけ含む	良好	口目: ハケ目 内: 上位～中位はハケ目、下位はハケ目	側面部外面上位～中位に黒斑、	SC28-1
第54024		縁? 高: (14.9)	外: にあり 黄緑色～灰 黃色 内: にあり 黄緑色	1～3mmの白色砂粒を多量、微細な斑点、角閃石を少しだけ含む	良好	口目: ハケ目 下位: ハケ目～ハケ目	口縫部外面～側面部、側面部外面下位に黒斑、工具ナダ～ツラギ目、工具ナダ～ツラギ目	SC28-10
第54025		高杯 高: (14.0)	内: にあり 黄緑色	微細～3mm程の白色砂粒を多量、微細な斑点、角閃石を少しだけ含む	良好	内: 上位はハケ目、中位はハケ目 後: ハケ目～ハケ目 下位はハケ目	口縫部外面～側面部、側面部外面下位に黒斑、	SC28-10
第54026		高杯 高: (13.0)	外: 黄～灰 黄色 内: 黄～灰 黄色	微細～3mm程の白色砂粒を多量、微細な斑点、角閃石を少しだけ含む	普通	口目: ハケ目 下位: ハケ目～ハケ目	口縫部外面に黒斑、	SC28-19
第54027		高杯 高: (11.4)	内: にあり 黄緑色	微細～3mm程の白色砂粒をやや多量に含む	良好	口目: ハケ目 日替: ハケ目～ハケ目 しばり目、ナダ目、脚部: ハケ目	脚部に穿孔、	SC28-17
第54028		高杯 高: (16.0)	内: にあり 黄緑色	微細～1mmの白色砂粒を多量に含む	良好	口目: ハケ目 日替: ハケ目～ハケ目 しばり目、ナダ目、脚部: ハケ目	脚部に穿孔、	SC28-14
第54029		高杯 高: (14.9)	内: にあり 黄緑色～灰 黄褐色	微細～2mm程の白色砂粒、微細な斑点、角閃石を少しだけ含む	普通	口目: ハケ目 日替: ハケ目～ハケ目 しばり目、ナダ目、脚部: ハケ目	口縫部外面に黒斑、脚部外面にスス、	SC28-18
第54030		高杯 高: (14.9)	内: にあり 黄緑色	微細～3mm程の白色砂粒を多量、微細な斑点、角閃石を少しだけ含む	良好	口目: ハケ目 日替: ハケ目～ハケ目 しばり目、ナダ目、脚部: ハケ目	脚部に穿孔、脚部外面にスス、	SC28-18
第54031		高杯 高: (16.0)	内: にあり 黄緑色	1～2mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好	口目: ヨコナダ 高: ハケ目	口縫部外面に黒斑、脚部外面にスス、	SC28-15
第54032		高杯 高: (14.9)	内: にあり 黄緑色～灰 黄褐色	微細～2mm程の白色砂粒、微細な斑点、角閃石を少しだけ含む	良好	口目: ハケ目 日替: ハケ目～ハケ目 しばり目、ナダ目、脚部: ハケ目	脚部に穿孔、脚部外面にスス、	SC28-11
第54033		高杯 高: (14.9)	内: にあり 黄緑色	1～2mmの白色砂粒を少しだけ含む	良好	口目: ヨコナダ 高: ハケ目	口縫部外面に黒斑、脚部外面にスス、	SC28-15
第54034		高杯 高: (14.6)	内: にあり 黄緑色	微細～3mm程の白色砂粒を多量、微細な斑点、角閃石を少しだけ含む	普通	口目: ヨコナダ 内: ハケ目～ハケ目 しばり目、ナダ目、脚部: ハケ目	脚部外面に黒斑、	SC28-9
第54035		高杯 高: (14.9)	内: にあり 黄緑色	1～2mmの白色砂粒を少しだけ含む	良好	口目: ハケ目 日替: ハケ目～ハケ目 しばり目、ナダ目、脚部: ハケ目	脚部に穿孔、脚部外面にスス、	SC28-11
第54036		高杯 高: (14.9)	内: にあり 黄緑色	1～2mmの白色砂粒を少しだけ含む	良好	口目: ヨコナダ 高: ハケ目	口縫部外面に黒斑、脚部外面にスス、	SC28-5

構造番号	区間番号	路肩番号	形状	底材（復元率）	色調	地上	底材	底材・調整技術	被覆	被覆番号
第66047	26	巻	口：(9.3) 高：11.6 厚：1.2	高 幅：(13.8) 厚 幅：0.9	明褐色	底面～2mmの白色砂粒を多量、 微細な雪印・赤色粒、1mm粒の角閃石を少量含む	普通	内：工具ナダ		SC30-8
第66048	26	巻	口：(9.2) 高：12.5 厚：0.8	口：(9.2) 厚 幅：0.8	にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を少量、 微細な雪印・角閃石をわずかに含む	内肩	口端：ヨコナダ 口：ハケ日 内：オサ子ナダ 外：ハケ日 底工具ナダ	口端部外側～側部外 面下位、側部外面中 位～黒面。	SC30-7
第66049	26	台付舗	口：(15.2) 高：13.8 厚：0.9	口：(15.2) 厚 幅：0.9	灰褐色～浅黄色	1～3mmの白色砂粒を少量、 微細な雪印・角閃石をわずかに含む	内肩	口端：ナダ ロ：ハケ日 内：オサ子ナダ・工具ナダ 外：ハケ日 底工具ナダ	脚部前面～底面、 脚部前面～側部外側中位 に被熱し上る赤化。 脚端：ナダ	SC30-12
第66050	26	台付舗	口：(15.1) 高：14.4 厚：0.75	口：(15.1) 厚 幅：0.75	にぶい黄褐色～褐灰色	底面～2mmの白色砂粒を多量含む	内肩	口端：ヨコナダ 口内：ハケ日 外：ハケ日後ヨリナダ 脚内： ハケ日後ヨリナダ 幅：ハケ日 下半はタラズナダ 外：ハケ日 脚端：中位はハケグ リ、ほかはハケル脚端：ヨコナダ	外面上に黒面。 脚部前面～側部外 面下位、側部外面中 位～黒面。	SC30-13
第66051	26	巻	口：(11.7) 高：13.5 厚：0.8	口：(11.7) 厚 幅：0.8	にぶい黄褐色	底面～2mmの白色砂粒を多 量、微細な雪印・角閃石を少量含む	良好	内：ヨコナダ 口：ハケ日 内：工具ナダ・ナダ 外：ハケ日 脚部前面～側部外 面下位、脚部前面～側部外 面中位～黒面。		SC30-6
第66052	26	巻	口：(18.7) 高：22.6 厚：0.8	口：(18.7) 厚 幅：0.8	にぶい黄褐色	底面～2mmの白色砂粒を多 量、微細な雪印・角閃石・赤色 粒を少含む	良好	内：ヨコナダ 口：ハケ日 内：工具ナダ・ナダ 外：ハケ日 脚部前面～側部外 面下位、脚部前面～側部外 面中位～黒面。	脚部外面中位に黒 化。	SC32-9
第66053	26	巻	口：(21.7) 高：(29.1) 厚：0.8	口：(21.7) 厚 幅：(29.1)	にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒と 微細な角閃石を含む	良好	口端：ナダ 口：ハケ日 内：上 半はナダ、下半はハケ日後ヨリ 内：上半はハケ日、中位はタラズ ナダ、下半はハケルナダ 外：ハケ日 脚端：タラズナダ～ハケ日、直ナダ	脚部外面中位にス トック化。	SC32-3
第66054	26	巻	口：(19.8) 高：4.2 厚：0.6	口：(19.8) 厚 幅：0.6	にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を多量含む	良好	口端：ヨコナダ 口：ハケ日 内：ハハ日 外：ハケ日 脚内： ヨコナダ 外：工具ナダ	脚部外面中位～側部外 面下位、底部外面に ス。	SC32-8
第66055	26	巻	口：(22.3) 高：37.3 厚：0.9	口：(22.3) 厚 幅：37.3	にぶい黄褐色～明褐色	底面～5mmの白色砂粒をや や多く含む	普通	口端：ヨコナダ 口：ハケ日 内：ハハ日 外：ハケ日 脚内： ハハ日 外：ハケルナダ 脚端：ハハ日後～ハケラズナ	脚部外面中位～側部外 面下位～中位、底 部外面にス。	SC32-2
第66056	26	巻	口：(40.2) 高：(38.6) 厚：0.6	口：(40.2) 厚 幅：(38.6)	にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒、微細な角閃 石を少含む	良好	口：ハハ日ヨリヨコナダ 脚内： ロ：ハハ日 外：工具ナダ	脚部外面～脚部外 面下位～底面。	SC32-7
第66057	26	巻	口：(18.2) 高：17.8 厚：0.6	口：(18.2) 厚 幅：17.8	にぶい黄褐色～灰褐色	底面～2mmの白色砂粒をや や多く含む	普通	口端：ヨコナダ・巻、口内： オサ子ヨコナダ 外：ハハ日 脚端ヨコナダ 内：下半はハハ日、 下半はナダ 外：ハケ日後ナダ 脚内：オサ子ナダ	脚部外面～ス、脚 部外面～器具剥離、 脚部外面下位～黒面。	SC32-4
第66058	27	巻	口：(8.5) 高：7.6 厚：0.5	口：(8.5) 厚 幅：0.5	明褐色～浅黃褐色	底面～1mmの白色砂粒を多 量、微細な雪印・赤色粒、微 細な角閃石を含む	普通	口端：ヨコナダ 内：工具ナダ 外：ハハ日	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-11
第66059	27	巻	口：(11.7) 高：(16.6) 厚：0.5	口：(11.7) 厚 幅：(16.6)	にぶい黄褐色	1～2mmの白色砂粒を多 量、微細な雪印・角閃石を含む	不良	外：ハハ日ギヤクナダ ナダ ヨコナダ 外：オサ子ハハ日 脚端ヨコナダ 内：下半はハハ日、 下半はナダ 外：ハケ日後ナダ 脚内：オサ子ナダ	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-17
第66060	27	巻	口：(11.4) 高：(8.7) 厚：0.5	口：(11.4) 厚 幅：(8.7)	黄褐色	0.1～0.3mmの白葉 粒を多 量、0.3mmの白葉をわずかに含む	良好	内：ハケナダ 口端：ヨコナダ 内：ナダ 外：ハハ日	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-16
第66061	27	巻	口：(10.2) 高：(13.5) 厚：0.4	口：(10.2) 厚 幅：(13.5)	にぶい黄褐色	1～2mmの白色砂粒を多 量、微細な角閃石を含む	良好	内：ハハ日ヨリヨコナダ 脚内： ロ：ハハ日 外：工具ナダ 脚端：ナダ～タラズナダ、下位 はハケ日	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-15
第66062	27	巻	口：(12.2) 高：(13.5) 厚：0.4	口：(12.2) 厚 幅：(13.5)	西黄色～暗灰色	底面～2mmの白色砂粒をや や多く含む	普通	口端：ナダ ロ：ハケ日 内：ハハ日ヨリヨコナダ 外： ハハ日後ヨリナダ 上半 はハハ日、ほかはナダ 外：上 半はハハ日	脚部外面～側部外 面下位に黒面。脚部 外面下位～中位にス。	SC32-13
第66063	27	巻	口：(17.3) 高：(18.6) 厚：0.5	口：(17.3) 厚 幅：(18.6)	明褐色～にぶい黄褐色	底面～2mmの白色砂粒を多 量、微細な雪印・角閃石を含む	普通	内：上部部近辺はヨコナダ、ほか はナダ 上部、外：ナダ 外：ハハ日 脚端：ナダ～タラズナダ、下位 はハケ日	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-29
第66064	27	支脚	上端：8.2 高：10.2 厚：0.5	上端：8.2 高： 幅：10.2	西黄色	1～2mmの白色砂粒を多 量、微細な雪印・角閃石を含む	良好	内：ハハ日ヨリヨコナダ 内：ナダ 外：ハハ日	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-15
第66065	27	支脚	口：(11.5) 高：(13.5) 厚：0.4	口：(11.5) 厚 幅：(13.5)	西黄色	1～2mmの白色砂粒を多 量、微細な角閃石を含む	良好	内：ハハ日ヨリヨコナダ 内：ナダ 外：ハハ日	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-15
第66066	27	巻	口：(12.2) 高：(13.5) 厚：0.4	口：(12.2) 厚 幅：(13.5)	西黄色～暗灰色	底面～2mmの白色砂粒をや や多く含む	普通	内：ハハ日ヨリヨコナダ 内：ナダ 外：ハハ日	脚部外面～側部外 面下位に黒面。脚部 外面下位～中位にス。	SC32-13
第66067	27	巻	口：(17.3) 高：(18.6) 厚：0.5	口：(17.3) 厚 幅：(18.6)	明褐色～にぶい黄褐色	底面～2mmの白色砂粒を多 量、微細な雪印・角閃石を含む	普通	内：上部部近辺はヨコナダ、ほか はナダ 上部、外：ナダ 外：ハハ日 脚端：ナダ～タラズナダ、下位 はハケ日	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-29
第66068	27	支脚	上端：8.2 高：10.2 厚：0.5	上端：8.2 高： 幅：10.2	西黄色	1～2mmの白色砂粒を含む	良好	内：ハハ日ヨリヨコナダ 内：ナダ 上部、外：ナダ 外：ハハ日 脚端：ナダ～タラズナダ、下位 はハケ日	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-29
第66069	27	巻	口：(11.5) 高：(13.5) 厚：0.4	口：(11.5) 厚 幅：(13.5)	西黄色～暗灰色	1～2mmの白色砂粒を多 量、微細な角閃石を含む	良好	内：オサ子ナダ	手ねじ。	SC32-31
第66070	27	台付舗	口：(6.6) 高：(7.7) 厚：0.5	内：(6.6) 厚 幅：0.5	にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	内：ヨコナダ後ヨリナダ 内：ナダ 外：ハハ日	密しく歪む。	SC32-28
第66071	27	台付舗	口：(10.7) 高：(11.1) 厚：0.5	内：(10.7) 厚 幅：0.5	西黄色	1～2mmの白色砂粒を多 量、微細な雪印・角閃石を含む	普通	内：ヨコナダ 日：ハケ日ヨリ ヨコナダ 内：ハハ日 外：ハハ日	脚部外面～底面、 脚部外面中位～底 部外面に黒面。	SC32-31
第66072	27	高析	高：(11.3) 厚：15.0	高：(11.3)	褐色	底面～2mmの白色砂粒を多 量、微細な雪印・赤色を少含む	普通	内：ナダ 脚端：ナダ ロ：ハ ケ日ヨリヨコナダ 外：ナダ 内：ナダ 上部、外：ナダ 外：ハ ハ日	脚部外面～側部外 面下位に黒面。脚部 外面下位～中位にス。	SC32-27

種別番号	回数番号	图形	重量(重さ)	色調	鉄生	成形・調整技術	機器	機器番号
第65回13	26	番	口：(10.4) 高：19.9 厚： 20.3 底厚： 0.4	淡黄緑～黒色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量、 鐵生～1mmの雲母、角閃石、 赤色を少量化	普通	内：工具ナード 外：ハケ目ナフ工具 ナダク調節のため不規則	HCD-11
第65回14	27	高杯	口：(33.0) 高：(27.3) 壁厚： 1.0	淡黄色	鐵生～1mm程の白色砂粒を多量、 鐵生～2mmの角閃石を多量含む	良好	口：ハケ目 ハケ目～タガキヘリ～ タガキ、脚外：ハケ目 脚内：オーバーハー クルクル、脚外：ハケ目 解：ハケ目 輪	HCD-28
第65回15	26	番	口：(16.4) 高：(27.3) 壁厚： 1.0	淡黄色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量、 鐵生～1mmの雲母、角閃石を わざわざに含む	普通	口：開け付付はハケ目ヨコヨコ ヨコヨコナダ、内：工具ナード ナダク、外：ハケ目 実害は朝日、はけ 日ハケ目ナダク	HCD-14
第65回16	26	錘	口：(22.6 高： 9.1 壁厚：0.5	淡黄色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量 に含む	良好	口：ハケ目 内：工具ナード 外：上部～中はドロード、下部はハ ケ目、壁外：ハケ目ナダク	HCD-29
第65回17	26	錘	口：(15.9) 高： 2.95	淡灰色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量	不良	内：一端内：脚ササナダ、外： 底内：ハケ目、外：底外：ハケ目ナダク	HCD-7
第65回18	25	番	口：(16.6) 高： 20.4	にげり黄緑色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量、 微細な黒雲母、角閃石をわざ わざに含む	普通	口：ヨコナダ ロ：ハケ目 ヨコヨコヨコナダ、内：ハケ目 外：上半 ハケ目、下半ハラズリ	HCD-1
第65回19	26	錘	口：(11.5) 高： 20.0	明黄色	鐵生な白色砂粒、角閃石を少量化	普通	口：ヨコナダ ホ：ハケ目	SC1-5
第65回20	26	番	口：(12.2) 高： 底厚：1.0	外：浅黄～灰黄緑色 内：暗黄緑色	鐵生～3mmの白色砂粒を多量、 微細～5mm程の雲母をやや多量、 鐵生な角閃石をわざわざに含む	普通	内：上部ハケ目、中位ハケ目ナ ダク、外：底外：板状工具ナダク	SC1-2
第65回21	26	高振盪	口：(15.5) 高： 23.3	にげり黄緑～明黄色	鐵生～3mmの白色砂粒を多量、 微細～5mm程の雲母をやや多量、 鐵生～2mmの角閃石を多量含む	普通	実害はヨコナダ、ほかはハケ目	HCD-14
第65回22	26	番	口：(15.0) 高：(2.1)	にげり黄緑色	鐵生～3mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母、角閃石を少量化	良好	内：一端内：脚ササナダ 外：工具ナ ード ドロード、底内：ナダク	SC3-4
第65回23	26	錘	口：(16.4) 高： 19.9	淡黄色	～1mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母、角閃石を少量化	良好	口：上部はハケ目、中位～下位は ハケ目ナダク、子はハケ目 内：ハ ケ目 外：子位はハケ目、中位 はハケ目ナダク	SC3-6
第65回24	26	錘	口：(15.0) 高： 0.4	褐色	鐵生～1mm程の白色砂粒を多量 に含む	良好	内：ハケ目後ナダ 外：工具ナダ	HCD-11
第65回25	26	錘	口：(33.0) 高： 4.9 壁厚：0.8	淡黄緑色	鐵生～2mmの白色砂粒をわざか に含む	普通	内：ハケ目 外：ナダク後オニコ	SC3-5
第65回26	27	脚台	高：(7.1)	明黄緑色	～1mmの砂粒、角閃石を多量 に含む	良好	脚台：ヨコナダ	SC3-9
第65回27	26	脚台？	高：(9.0)	にげり～にげり褐色	1mm以下の砂粒、角閃石を多量 に含む	良好	脚台：工具ナダク 基部外：脚ササ ナダク	SC3-7
第65回28	27	脚台	高：(8.8) 壁 厚：(3.0)	褐色	鐵生～3mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母	普通	穿孔合板	SC3-8
第65回29	26	番	高：(19.0) 底 厚：0.8	外：にげり褐色 内：明黄～灰黄緑	～1mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母、角閃石を少量化	良好	内：上位ハケ目、中位～下位は ハケ目ナダク、子はハケ目 内：ハ ケ目 外：子位はハケ目、中位 はハケ目ナダク	SC3-4
第65回30	27	番	口：(15.0) 高：5.9 壁厚： 0.4	褐色	鐵生～1mm程の白色砂粒を多量 に含む	良好	内：ハケ目後ナダ 外：工具ナダ	HCD-11
第65回31	26	錘	口：(33.0) 高： 4.9 壁厚：0.8	淡黄緑色	鐵生～2mmの白色砂粒をわざか に含む	普通	内：ハケ目 外：ナダク後オニコ	SC3-5
第65回32	27	脚台	高：(7.1)	明黄緑色	～1mmの砂粒、角閃石を多量 に含む	良好	脚台：ヨコナダ	SC3-9
第65回33	26	脚台？	高：(9.0)	にげり～にげり褐色	1mm以下の砂粒、角閃石を多量 に含む	良好	脚台：工具ナダク 基部外：脚ササ ナダク	SC3-7
第65回34	27	番	高：(8.8) 壁 厚：(3.0)	褐色	鐵生～3mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母	普通	穿孔合板	SC3-8
第65回35	26	番	高：(19.0) 底 厚：0.8	外：にげり褐色 内：明黄～灰黄緑	～1mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母、角閃石を少量化	良好	内：上位ハケ目、中位～下位は ハケ目ナダク、子はハケ目 内：ハ ケ目 外：子位はハケ目、中位 はハケ目ナダク	SC3-4
第65回36	27	番	口：(21.5) 高：30.7 壁厚： 5.9 底厚：0.8	外：輕～にげり褐色 内：輕～にげり黃緑色	鐵生～2mm白色砂粒を多量、 角閃石を少量化	良好	口：ナダ ロ：ハケ目 内：上 位はハケ目、中位～下位はドロード ハケ目ナダク 外：ハケ目、脚部外 面に黒斑	SC3B-2
第65回37	26	番	口：(28.3) 高：35.6 壁厚： 5.9 底厚：0.8	外：灰黄緑～細白緑色 内：にげり～にげり褐色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量、 角閃石を少量化	良好	口：ヨコナダ 内：上位～下位は ハケ目ナダク、子はハケ目、中位 はハケ目ナダク、外：ハケ目、脚部外 面に黒斑	SC3B-4
第65回38	27	番	口：(21.30) 高：34.0 壁厚： 6.0 底厚：1.1	外：にげり～にげり褐色 内：褐色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母	良好	内：上位～中位はハケ目、下位は ハケ目後ナダ 外：ハケ目 壁部外 面に黒斑	SC3B-1
第65回39	27	番	口：(17.4) 高：18.4 壁厚： 8.9	にげり褐色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量、 赤色を少量化	良好	口：ナダ ロ：ハケ目 ハケ目～ ナダク後ハケ目、内：ハケ目 外：ハ ケ目ナダク、子はハケ目、中位 はハケ目ナダク	SC3B-3
第65回40	27	錘	口：(25.5) 高：30.6 壁厚： 8.9	褐色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量、 赤色を少量化	良好	口：ハケ目後ナダ ヨコナダ～ ハケ目後ナダク 外：ハケ目 壁部外 面に黒斑	SC3B-4
第65回41	27	番	口：(17.4) 高：(11.5)	褐色	鐵生～3mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母、角閃石、赤色、 黒雲母を少量化	普通	口：～開け付付はハケ目 日本：波状 ヨコヨコヨコナダ、内：ハケ目 外：ハ ケ目ナダク、子はハケ目 (波状) 脚日、ほかはナダク (波状)	SC3B-18
第65回42	26	番	口：(22.8) 高：(18.8)	にげり褐色	0.6～2mmの白色砂粒を多量、 1mmの雲母を少量化	普通	口：ヨコナダ ヨコナダ～ヨコナダ 内：ハケ目 外：受容はヨコナダ	SC3B-20
第65回43	28	錘	口：(18.3) 高：30.6 壁厚： 1.0	淡黄緑～黒褐色	鐵生～2mmの白色砂粒を多量に 含む	不良	内：下位ハケ目 外：受容はヨコナダ 内：ヨコヨコヨコナダ 外：ハケ目 壁部外面上位に黒斑、脚部外面上 位に黒斑	SC3B-22

種別番号	登録年月	品目	生長（復／宿）	色調	特徴	成形・調整方法	被覆	被覆条件	
第71044	27	垂葉	高：(2.2) 幅：(0.8) 厚：0.95	外：緑～赤褐色～黒色 内：明赤褐色～濃い赤褐色	繊細～7mm程の白色砂粒を多量、微細な露苔、黒色糸を少量含む	口：ハケ目 内：ハケ目 外：黄褐色はヨコナダ、内側は黒目、上半はハケ目、下半はナダ目ナダ目、底面はナダ目、全体的に墨してある	脚部内面、脚部外表面に墨	SCB-17	
第71045	28	垂葉	口：(17.40) 高：(34.5) 幅： 厚：0.7	外：明赤褐色～棕色 内：棕～にい黄褐色	0.5～3mmの白色砂粒を多量、金糸をごく少量含む	普通 口端部外側～脚部外側位に墨、脚部上面に墨、内～底位：ハケ目 実物：ヨコナダ	口端部外側～脚部外側位に墨、脚部上面に墨、内～底位に黒墨	SCB-21	
第71046		垂	口：(16.00) 高：(37.95)	にい黄褐色	1～5mmの砂粒を多量に含む	良好 口：墨のため不規則 内：ハバ目 脚部タキ目	脚部外側～脚部外側位に墨、脚部上面に墨、内～底位に黒墨	SCB-24	
第71047		垂	高：(9.55)	にい黄褐色～浅黄褐色	2～5mmの砂粒を多量に含む	良好 外：実物は黒目、因ひハケ目ナダ目、墨減らしのため黒墨	脚部外側～脚部外側位に墨、脚部上面に墨、内～底位に黒墨	SCB-28	
第72041		林	口：(27.03) 高：(14.25)	褐色	1～2mmの砂粒を多量、角閃石を含む	良好 ハケ目	脚部外側に黒墨	SCB-40	
第72042		脚部	高：(7.73) 幅：(0.95)	黄褐色	0.5～2mmの砂粒を多量、金糸を含む	良好 脚部外：ヨコナダ	脚部外側に黒墨	SCB-18	
第72043		瓶	高：(1.35) 幅：(1.5)	内：浅黄褐色～灰褐色 外：浅黄褐色	0.5～2mmの砂粒を多量、黒色糸を含む	不良 脚部内～脚部外側位に少量化含む	外側に黒墨、瓶蓋は黒墨成形丸	SCB-16	
第72044		器台	上端：(17.25) 外：浅黄褐色～棕色 内：浅黄褐色～明褐褐色	繊細～3mm程の白色砂粒を多量、微細な露苔、角閃石、黒色糸を含む	普通 内：上半はナダ、中間はしづか 底、下半はニダナ目、中位はナダ、下位はタクナ目	全般的に墨む。	SCB-40		
第72045		台付蟹	口：(29.40) 幅： 高：(15.8) 厚：0.5	にい黄褐色	0.5～6mmの角閃石、長石を多量、0.5～2mmの角閃石、赤色糸を含む	普通 口外：ハケ目 内：上半はハケ目・辺縁ナダ目、下半はハケ目 脚部外：ナダ 脚内：ハバ目	脚部外面上位に墨	SCB-5	
第72046	28	高杯+	口：(3.65) 幅：(4.2)	明赤褐色	繊細砂をわずかに含むが精良	良好 脚外：ナダ 脚端外：ナダ	SCB-54		
第72047		高杯	高：(15.25) 脚部：(17.45)	織にい黄褐色～灰褐色	繊細～5mm程の白色砂粒、微細な露苔、角閃石、黒色糸を含む	普通 脚内：上半はナダ、下半はハケ目、脚部内～脚部外側位に墨、脚部上面に墨、内～底位に墨	脚部外側に黒墨、脚部内～脚部外側位に墨、脚部上面に墨	SCB-49	
第72048		高杯	高：(15.25) 脚部：(17.2)	織～灰褐色～黑色	繊細～8mm程の白色砂粒、微細な露苔、黒色糸をやや多量に含む	普通 脚内：上半はナダ、下半はハケ目 脚部外：ナダガラ	脚部外側内面に黒墨、脚部の掌状は23 シルバーハンドルは23シルバーハンドルに黒墨	SCB-48	
第72049		垂	高：(8.9) 幅：(15.0)	内：褐色 外：にい黄褐色	むずかに砂粒を含むが精良	良好 内：ナダナダナダナダ 外：ハケ目	脚部外側下方に斑状丸	SCB-34	
第72050	28	高杯	口：(8.3) 高：(9.9) 幅：(11.9) 厚：0.7	内：黄褐色 外：黄褐色～明褐褐色	繊細～10mm程の白色砂粒を多量、微細な露苔、角閃石、黒色糸を含む	口：ナダ 内：上半はナダ後オサ目 脚部外：ナダナダナダナダ 脚内：ハバ目	脚部内面下半～底端 内面に黒墨	SCB-39	
第72051		器台	上端：(6.43) 高：(11.55) 幅：(12.2)	内：浅黄褐色 外：白灰色～明褐褐色	繊細～8mm程の白色砂粒を少 量、微細な露苔、角閃石、黒色糸を含む	普通 上端：ナダ 内：上半はしづか 底、下半はナダ後オサ目 脚部外：ナダ	上端：ナダ後オサ目 上端：ナダ後オサ目 内外：タクナ 脚部外：ヨコナダ	SCB-43	
第72052	28	支脚	上端：(9.4) 高：(11.5) 幅：(14.2)	内：浅黄褐色～灰褐色～暗 色 外：灰褐色	繊細～10mm程の白色砂粒を多量、微細な露苔、角閃石、黒色糸を含む	普通 上端内：ナダ後オサ目 上端外：ナダ後オサ目 脚部外：ヨコナダ 脚内：ナダ	脚部外側～板状部に 墨、脚部は着しく 墨む。	SCB-42	
第72053		器台	上端：(6.4) 高：(10.46)	にい黄褐色～灰褐色	繊細～10mm程の白色砂粒を多量、微細な露苔、角閃石、黒色糸を含む	普通 上端内：ナダ後オサ目 上端外：ナダ後オサ目 脚部外：ヨコナダ 脚内：ナダ	上端内：ナダ後オサ目 上端外：ナダ後オサ目 脚部外：ヨコナダ	SCB-41	
第79001		便	高：(9.8)	にい黄褐色	1～3mmの砂粒を多量に含む	良好 内：ナダ 外：ヨコナダ	内：ナダ 外：ヨコナダ	ミニチュア。	SCB-10
第79002	28	高杯	口：(30.7) 高： (7.9)	織～黑色	繊細な白色砂粒を少量、微細な露苔、角閃石をやや多量、微細な露苔、角閃石を少量化含む	普通 内：ヨコナダ 内：ハケ目 脚部外：ヨコナダ 脚内：ナダ	脚部外側内面に墨、 脚部内面に墨	SCB-11	
第79003		林	口：(3.0) 高：(2.2) 幅：(0.85)	灰褐色～灰黑色	1～3mmの砂粒を多量、微細な露苔、角閃石を少量化含む	良好 内：ナダ 外：ヨコナダ	内：ナダ 外：ヨコナダ	ミニチュア。	SCB-10
第79004		塊ウ	口：(2.7) 高：(3.6) 幅：(0.7)	内：黑色 外：にい黄褐色	1mm程の砂粒を含む	良好 内～底位：ナダ 外：ヨコナダ	外～底端外面に墨 面。ミニチュア。	SCB-6	
第79005		鉢	口：(10.0) 高：(4.2) 幅：(4.3)	内：にい黄褐色～灰白色 外：にい黄褐色	～7mmの白色砂粒をやや多量、微細な露苔、角閃石をわずかに含む	良好 脚オサエ後ナダ	内：ナダ 外：ヨコナダ	SCB-9	
第79006		便	口：(15.6) 高：(1.6) 幅：(1.6)	内：緑～にい黄褐色 外：褐色	1～3mmの白色砂粒を多量、微細な露苔、角閃石をわずかに含む	良好 内：ナダ 外：ヨコナダ	内：ナダ 外：ヨコナダ	SCB-2	
第79007	28	支脚	高：(12.45) 幅：(14.6)	内：明黄褐色～にい黄褐色 外：にい黄褐色	1～2mmの白色砂粒をやや多量、微細な露苔、角閃石を少量化含む	良好 内～底位：ナダ 外：ヨコナダ	内：ナダ 外：ヨコナダ	SCB-13	
第79008		便	高：(17.95)	明黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好 内：ナダ 外：ヨコナダ	内：ナダ 外：ヨコナダ	SCB-3	

種別番号	田舎番号	图形	田舎(廃止前)	色調	特主	成形・調節技術	機器	種別番号
第7959	28	櫻	口:(22.4) 高:(31.1)	外:に高い黄緑色 内:淡黄色	撒播～1m段の白色砂粒をやや多量、撒播する當部、撒播～2mm粒の角閃石を少量含む	普通	内:ハケ日後コナダ 内外:はオサエナツグデ 外:撒誠のため明	鋼部外面上下位に黒斑、鋸部外面上位にスヌ、鋸部外面上位にスヌ、鋸部外面上位に黒斑、鋸部外面上位にスヌ
第79610		高杯	高:(16.15)	外:橙色 内:明赤褐色	撒播粒を含む	良好	内:上位～中位にはしまり板、下位にはオサエナツグデ 外:撒誠のため明	SC9-1
第82011	28	櫻	口:(13.9 高: 14.0 厚: 9.6)	-	撒播～3mmの白色砂粒を多量、撒播～2mmの角閃石をわずかに含む	良好	口面:ナダ ロ:ハケ日 内:ハケ日 外:上位にはタキモ、中位にはオサエナツグデ 外:撒誠のため明	鋼部外面上～鋸部外面上位に黒斑、鋸部外面上位にスヌ
第82012	28	櫻	口:(13.5 高: 14.0 厚: 9.8)	外:に高い黄緑色 内:淡黄～暗紅色	撒播～1m段の白色砂粒を多量、撒播～2mmの角閃石をわずかに含む	良好	口面:ナダ ロ:ハケ日 内:ハケ日 外:上位にはタキモ、中位にはオサエナツグデ 外:撒誠のため明	SC9-1
第82013	便?		高:(16.0 厚: 6.4)	棕色	撒播～1m段の白色砂粒を多量、撒播～1mm粒の角閃石を少量含む	良好	内:ハケ日 内外:ナダ 指サホ ロ:タタキヘラズリ	鋼部外面上位に黒斑、鋸部外面上位に黒斑
第82014	28	櫻	口:(26.0 高: 25.0 厚: 6.0)	外:に高い暗色 内:に高い黄緑～灰褐色	撒播～1m段の白色砂粒を多量、撒播～1mm粒の角閃石を少量含む	良好	口面:ナダ ロ:ハケ日 内:ハケ日 外:ハケ日後コナダ	鋼部外面上位に黒斑、鋸部外面上位に黒斑
第82015	28	鉢	口:(9.2 高: 9.5 厚: 5.1)	棕色	撒播～2m段の白色砂粒を多量、撒播～2mm粒の角閃石を多量含む	良好	口面:ナダ ロ:ハケ日 ロ:ヨコナダ 内:ハケ日後コナダ 外:オサエナツグデ 日後コナダ 外:オサエナツグデ ロ:ヨコナダ ロ:ハケ日後コナダ	鋼部外面上～鋸部外面上位に黒斑、鋸部外面上位に黒斑
第82016	28	鉢	口:(31.4 高: 6.7 厚: 4.1)	外:灰黃～暗紅色 内:灰黃～暗紅色	撒播～1m段の白色砂粒を多量、撒播～2mm粒の角閃石を多量含む	良好	内:底内 工具ナダ 外:工具ナダ	鋼部外面上位に黒斑
第82017	28	鉢	口:(11.8 高: 6.6 厚: 4.9)	外:に高い暗褐色 内:灰黃～暗紅色	撒播～1m段の白色砂粒を多量、撒播～2mm粒の角閃石を少量含む	良好	内:底内 工具ナダ 外:オサエナツグデ ロ:ヨコナダ	鋼部外面上位に黒斑
第82018	29	鉢	口:(8.3 高: 8.0 厚: 4.2)	外:黄褐色 内:に高い黄緑～暗褐色	撒播～1m段の砂粒を多量、角閃石を少量含む	不良	指サホニツナダ	手捏ね
第82019	29	鉢	口:(6.5 高: 6.0 厚: 4.0)	外:に高い黄緑～暗褐色 内:黒褐色	撒播～1m段の砂粒を多量、2～3mm粒の石英を少量、雲母・角閃石を少量含む	やや不良	ハケ日	柔む
第82020		鉢	口:(16.0 高: 16.0 厚: 6.1)	淡黄褐色	撒播～1m段の砂粒を含む	良	ロ:ハケ日 内:ナダ 指サホ	鋼部外面上半に黒斑
第82021	29	櫻	高:(20.35)	外:明褐色～褐色 内:明褐色	撒播～1m段の砂粒を多量、角閃石を含む	良好	ロ:ヨコナダ 内:ハケ日後コナダ 外:オサエナツグデ	鋼部外面上半に黒斑
第82022		藤台	上端:(13.4 高:(16.0)	棕色	撒播～1m段の白色砂粒を多量、撒播～2mm粒の角閃石を少量含む	良好	上端:ヨコナダ 内:上端は工具ナダ 下端:ハケ日後コナダ 外:ナダ	鋼部外面上位に黒斑
第8401	29	櫻	口:(15.5 高: 14.5 厚: 6.9)	棕色、丹化り部分は赤褐色	撒播～2m段の白色砂粒を多量、角閃石を多量含む	良好	ロ:ハケタキ 内:上端は工具ナダ ナダ、ナダ、中位～下位は工具ナダ 外:オサエナツグデ 外:ナダ	SC41-1
第8402	29	便?	口:(0.91 高: 8.0 厚: 1.1)	外:に高い黄緑色、一部黒色 内:に高い黄緑色	撒播～1m段の白色砂粒を多量、撒播～2mm粒の角閃石をわずかに含む	良好	内:底内 指サホ工芸ナダ 外:上位～中位はハケ日、下位はオサエナツグデ 外:ハケタキ	鋼部外面上～鋸部外面上位に黒斑
第8403	29	櫻	口:(14.0 高: 14.0 厚: 17.6)	外:棕色、一部暗褐色 内:暗褐色	撒播～1m段の白色砂粒を多量、撒播～1mm粒の角閃石をわずかに含む	良好	ロ:ヨコナダ ロ:ハケ日 内:底内 指サホ工芸ナダ 外:上位はハケ日後コナダ、中位～下位はオサエナツグデ	SC41-9
第8404	29	櫻	口:(15.0 高: 20.1 厚: 8.8)	外:淡黄褐色～黃色 内:黃色	撒播～1m段の白色砂粒を多量、撒播～2mm粒の角閃石を少量含む	良好	ロ:ヨコナダ ロ:ハケ日 内:底内 指サホ工芸ナダ 外:上位はハケ日後コナダ、中位～下位はオサエナツグデ	SC41-10
第8405	29	鉢	口:(15.9 高: 6.6 厚: 6.6)	外:明黄褐色 内:に高い黄緑色	撒播～1m段の白色砂粒を多量含む	普通	ロ:ヨコナダ 内:ハケ日 ロ:ハケ日後コナダ 内:上位はハケ日 外:オサエナツグデ 外:ナダ	鋼部外面上～鋸部外面上位に黒斑
第8406	29	鉢	口:(15.0 高: 6.7 厚: 6.5)	外:に高い黄緑～暗褐色 内:に高い黄緑～赤褐色	撒播粒をナダ～に含むが締目	やや不良	ロ:ヨコナダ 内:ハケ日 外:オサエナツグデ	SC41-11
第8407	29	櫻	口:(17.5 高: 24.2 厚: 9.0)	外:に高い黄緑～暗褐色 内:に高い黄緑色	撒播～1m段の白色砂粒を多量含む	良好	ロ:ヨコナダ 内:ハケ日 ロ:ハケ日後コナダ 内:上位はハケ日 外:オサエナツグデ 外:ナダ	SC41-4
第8408	29	櫻	口:(15.95 高: 27.7 厚: 4.0)	に高い黄緑色	撒播～1m段の白色砂粒を多量含む	良好	内:ナダ撒播のため不規則 外:中位はタキ後ハケ日 (鋼部のため不規則) 内:オサエナツグデ	鋼部外面上～中位にスヌ、鋸部外面上位にスヌ、鋸部外面上位にスヌ

種別番号	登録番号	形状	位置(度/分/秒)	色調	地上	構成	表面・遮蔽技術	被覆	被覆番号
第9981		幾	口 : (30, 4) 高 : 26.3	内 : にぶい緑～にぶい緑 外 : にぶい緑～緑色	黒面～3mmの白色砂粒を多量。	普通	口端 : ナデ 口外 : タタキ 内 : ハケ日 外 : 上位はタタキ、中位はタタ後ハケ日 ハケ日	脚部外側に黒墨。	SC44-20
第9982	29	幾	口 : (19, 4) 高 : 23.9 底 : (7, 7)	内 : 黒～灰黒～灰黒 外 : 黒～黒色、角凹～黒色	黒面～2mm程の白色砂粒。黒面 黒面～2mm程の黄色砂粒。黒面 黒面～2mm程の青色砂粒。黒面 黒面～2mm程の白砂粒。黒面 黒面～2mm程の白砂粒。黒面 黒面～2mm程の白砂粒。黒面	良好	口端 : ヨコゾゲ後ハケ日 口外 : ナデ 口内 : ハケ日 外 : 上位はタタ後ハケ日、上位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日、ハケ日 ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。全体的に黒墨。	SC44-4
第9983		幾	口 : (23, 4 高 : (14, 8)	内 : にぶい緑～灰黒褐色 外 : にぶい緑～灰黒	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を多量。黒面	良好	口端 : ヨコゾゲ ロ内 : ナデ 内 : ハケ日 口外 : 外 : タタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。	SC44-11
第9984	29	幾	口 : (20, 3 高 : (26, 5) 底 : (1, 1)	内 : にぶい緑～黒褐色 外 : にぶい緑～黒色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を多量。黒面	良好	口端 : ヨコゾゲ 口内～底内 : ナデ 中位 : ハケ日 口外 : タタ後ハケ日 外 : 上位～中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日。下位～底位はタタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-1
第9985		幾	口 : (29, 4 高 : (37, 4)	内 : 浅黄緑～緑色 外 : 浅黄緑	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口端 : ヨコゾゲ 口内～底内 : ナデ 中位 : ハケ日 口外 : タタ後ハケ日 外 : 上位～中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-6
第9986		幾	口 : (16, 8) 高 : (16, 8)	内 : にぶい緑～黒褐色 外 : にぶい緑	黒面～3mmの砂粒を少量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量。黒面	良好	口端 : ヨコゾゲ ロ内 : ハケ日 外 : 外 : タタ後ハケ日 口外 : ナデ 中位 : ハケ日 口外 : タタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。	SC44-11
第9987		幾	口 : (17, 4) 高 : (17, 7)	内 : にぶい緑～にぶい黒褐色 外 : にぶい緑	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口端 : ヨコゾゲ ロ : ハケ日 内 : 上位はタタ日、下位はナデ ハケ日 外 : 上位はタタ日、下位はタタ後ハケ日 中位はタタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-5
第9988		幾	口 : (22, 4) 高 : (22, 5)	浅黄緑～緑色、にぶい緑 色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口内～内 : ハケ後ハケ日 口外～外 : タタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-10
第9989		幾	口 : (27, 6) 高 : (28, 8)	内 : 浅黄緑～灰黒褐色 外 : 浅黄緑～灰黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口端 : ヨコナデ ロ内 : ハケ日 内 : 上位はタタ後ハケ日、下位はナデ ハケ日 外 : 上位はタタ後ハケ日、中位はタタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-16
第9990		幾	口 : (21, 4) 高 : (21, 4)	内 : にぶい緑～黒褐色 外 : にぶい緑～黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	不良	口端 : ヨコナデ (黒墨) 内 : ハケ日 (黒墨) 外 : タタ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。全体的に黒墨。	SC44-19
第9991		幾	口 : (21, 5) 高 : (21, 3)	内 : にぶい緑～黒褐色 外 : にぶい緑	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口端 : ヨコナデ ロ内 : ハケ日 口外～外 : タタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-28
第9992		幾	口 : (21, 4) 高 : (21, 3)	内 : 黄緑～灰黒褐色 外 : 黄緑～灰黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口端 : ヨコナデ (黒墨) 内 : ハケ日 (黒墨) 外 : タタ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-19
第9993		幾	口 : (21, 4) 高 : (21, 3)	内 : 黄緑～灰黒褐色 外 : 黄緑～灰黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口端 : ヨコナデ (黒墨) 内 : ハケ日 (黒墨) 外 : タタ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-23
第9994		幾	口 : (27, 6) 高 : (26, 45)	内 : 浅黄緑色、緑葉部は 一語緑色、外 : 浅黄緑	黒面～3mmの砂粒を多量むけ	普通	口内～内 : ハケ日 口外 : ハケ日 横ヨコゾゲ 外 : ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。	SC44-9
第9995		幾	口 : (21, 4) 高 : (21, 4)	内 : 黑～灰白～灰黒褐色 外 : 黑～灰白～灰黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	普通	内 : 中位はハケ日、下位はナデ ハケ日、底位はナデ後オサニヤ ハケ日、中位はタタ後ハケ日、中位はタタ後ハケ日	脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-32
第9996		幾	高 : (13, 5) 厚 : 0.9	内 : 灰～灰白～灰黒褐色 外 : 灰～灰白～灰黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	普通	内 : 中位はハケ日、底位はナデ ハケ日、底位はナデ後オサニヤ ハケ日、中位はタタ後ハケ日	脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-32
第9997	29	幾	口 : (16, 0) 高 : 17.4 底 : 0.8	内 : 橙～灰黒褐色 外 : にぶい緑～灰黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。角凹 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	普通	口端 : ヨコゾゲ 口内～内 : ハケ日 底位 : ヨコゾゲ 口外 : 上位はタタ日、中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日	脚部外側下位に黒墨。	SC44-5
第9998	29	幾	口 : (26, 2) 高 : (34, 1) 厚 : 0.8	内 : 灰黄褐色～黒褐色 外 : 灰黄褐色～黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。角凹 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	普通	口端 : ヨコゾゲ 口内～内 : ハケ日 底位 : ヨコゾゲ 口外 : 上位はタタ日、中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日	脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-7
第9999	29	幾	口 : 24.4 高 : 43.9	内 : にぶい黄緑～緑色 外 : にぶい黄緑	黒面～3mmの砂粒を多量むけ	良好	口端 : ヨコゾゲ 口内～内 : ハケ日 底位 : ヨコゾゲ 口外 : 上位はタタ日、中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-2
第9999	29	絲	口 : (26, 0) 高 : (10, 3)	内 : にぶい黄緑～黒褐色 外 : にぶい黄緑～黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口端 : ヨコゾゲ 口内～内 : ハケ日 底位 : ヨコゾゲ 口外 : 上位はナデ ハケ日、中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日	脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-10
第9999	絲	絲	口 : (24, 0)	内 : 灰～灰黒褐色 外 : にぶい黄緑～灰黒褐色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口端 : ヨコゾゲ 口内～内 : ハケ日 底位 : ヨコゾゲ 口外 : 上位はナデ ハケ日、中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日	脚部外側下位に黒墨。脚部外側下位に黒墨。	SC44-07
第9999	絲	絲	口 : (15, 2)	内 : にぶい黄緑色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	良好	口端 : ヨコゾゲ 口内～内 : ハケ日 底位 : ヨコゾゲ 口外 : 上位はナデ ハケ日、中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。	SC44-13
第9999	幾	幾	口 : (21, 0) 高 : (21, 1)	内 : 灰～灰黒褐色 外 : 淡黄～灰黒色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	不良	口端 : ヨコゾゲ 口内～内 : ハケ日 底位 : ヨコゾゲ 口外 : 上位はナデ ハケ日、中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。	SC44-10
第9999	29	幾	口 : (38, 6) 高 : (27, 6)	内 : 淡黄～灰黒色 外 : 淡黄～灰黒色	黒面～3mmの砂粒を多量。黒面 黒面～3mmの砂粒を少量むけ	普通	口端 : ヨコゾゲ 口内～内 : ハケ日 底位 : ヨコゾゲ 口外 : 上位はナデ ハケ日、中位はタタ後ハケ日、下位はタタ後ハケ日	脚部外側～脚部外側下位に黒墨。	SC44-41

確認番号	出発番号	图形	由来(履歴)	色調	粒度	地成	成形・整粒技術	備考	確認番号
第9282	30	■	口 : (43, 0) 高 : (35, 0)	外 : にい・黄褐色 内 : にい・褐色	微細～3mmの砂粒を多量。雲母を少含む	良好	口端 : ヨコナギ 口 : ハケ目 内 : 領域はヨコナギ。ほかはハケ目 外 : 略端はヨコナギ強剤目。 12月2日	鋼瓶外面にスズ。	SC44-17
第9283	33	▲	口 : (58, 0) 高 : (49, 0)	外 : にい・褐～にい・黄褐色 内 : 褐、浅黃褐色	微細～3mmの砂粒。微細～1mmの雲母を少量。1mm粒の角閃石。赤褐色をわずかに含む	良好	口端 : ヨコナギ 口内 : ハケ目 内 : ヨコナギ。上半は新規 外 : ハケ目。表面はヨコナギ 強剤タグ。下半はタキシヘッド 目。下半はタキシ	鋼瓶外面にスズ。 12月2日	SC44-8
第9284	高杯	口 : (26, 0) 高杯 : (8, 4)	外 : 棕色 内 : 棕～オリーブ褐色	微細～1mmの白色砂粒を少量。 微細～1mmの雲母を少量。1mm粒の角閃石。赤褐色をわずかに含む	良好	口端 : ヨコナギ 内 : 上半は新規 内 : ヨコナギ。上半は新規 外 : ハケ目。表面はヨコナギ 強剤タグ。下半はタキシヘッド 目。下半はタキシ	鋼瓶外面に黒。	SC44-30	
第9285	高杯	高 : (31, 0) 脚標 : (16, 6)	黄褐色～褐色	微細～1mmの白色砂粒を少量。 微細～1mmの雲母を少量。1mm粒の角閃石。赤褐色をわずかに含む	良好	軸承内 : ハケ目後タキシ 外 : ハケ目 脚内 : じばく紙、ナ ジダ 脚外 : 基材付近ナジダ。ほか 12月2日	全体的に黒む。	SC44-1	
第9286	高杯	高 : (31, 0) 脚標 : (16, 6)	灰白～明黃褐色	微細～3mmの白色砂粒をやや多量。微細な雲母。微細～1mm粒の角 閃石。赤褐色をわずかに含む	普通	内 : 上半は新規。下半はハケ 目。外 : ハケ目 鋼瓶外面	鋼瓶外面に黒。	SC44-61	
第9287	高杯	高 : (12, 7)	外 : にい・黄～黄褐色 内 : 黄褐色～褐灰色	微細～3mmの白色砂粒を少量。微 細な雲母。微細～1mm粒の角 閃石。赤褐色をわずかに含む	良好	軸承内 : ナジ 脚内 : 上半はナ ジダ。下半はハ ケ目後タキシ。しほり 目。下半はタキシ	SC44-43		
第9288	△?	高 : (10, 0)	内 : にい・褐色	微細～3mmの砂粒を多量に含む	良好	内 : 下半は底面はナジダ。上半 はハケ目。位置 : ナジダヘタクサ 後タキシ カラム : ナジダヘタクサ	鋼瓶外面～底部外面 に黒。	SC44-13	
第9289	▲	口 : (31, 9) 高 : (34, 0)	外 : にい・褐～明赤褐色 内 : 赤褐色	微細～2mmの砂粒を多量に含む	やや不良	口端～口 : ヨコナギ。口外 : ハ ケ目後タキシ 内 : ナジダ	鋼瓶外面に黒。	SC44-41	
第9301	30	△	口 : (13, 4) 高 : (5, 9)	外 : にい・褐～褐色 内 : にい・褐色	微細～3mm粒の砂粒をやや多 量。微細な雲母を少量含む	普通	内 : 上半は新規。下半はハ ケ目。外 : ハケ目 鋼瓶外面	SC44-53	
第9302	30	△	口 : (13, 4) 高 : (5, 4)	外 : 浅褐色～褐色 内 : 浅褐色～褐色	微細～2mm粒の砂粒をやや多 量。微細な雲母を少量含む	普通	内 : 工具ナジ 外 : ハケタクサ	外面上黒。	SC44-54
第9303	▼	高 : (11, 0) 脚標 : (11, 5-12, 12)	内 : 明黄色～淡黄色 内 : 明黄色～淡黄色	微細～7mmの砂粒を多量に含む	普通	内 : ナジ。指ガサナ 外 : タタキ	鋼瓶外面は黒。	SC44-79	
第9304	▼	高 : (10, 7)	外 : にい・淡黄色～黄褐色 内 : にい・淡黄色	微細～7mmの白色砂粒を多量。 微細な雲母を少量。1mm粒の角 閃石。赤褐色を含む	普通	内 : ナジ。指ガサナ 外 : タタキ	鋼瓶外面は黒。	SC44-79	
第9305	▼	高 : (10, 6)	外 : 淡黄色 内 : 淡黄色～褐色	微細～7mmの白色砂粒を多量。 微細な雲母を少量。1mm粒の角 閃石。赤褐色を含む	良好	内 : ナジ。指ガサナ 外 : ハケ目	全体的に黒む。	SC44-17	
第9306	▼	高 : (10, 4)	外 : 淡黄色 内 : 淡黄色～褐色	微細～3mmの白色砂粒を多量。 微細～1mmの雲母を少量。1mm 粒の角閃石。赤褐色を含む	良好	上端内 : ナジ後ハケ目 上端外 : ハケ目。内 : ハケ 目。下半 : ナジ。下半はタ キシ後タキシ	SC44-71		
第9307	▼	高 : (7, 6) 脚標 : (55, 2)	灰白色	微細～2mmの白色砂粒を多量。 微細～1mmの雲母を少量。1mm 粒の角閃石。赤褐色を含む	普通	内 : 上段はヨコナギ。中段はナ ジ後タキシ。中段下 : ハケ目 外 : 上段 : ナジ後タキシ。下段 : ハ ケ目。ナジ後タキシ	SC44-74		
第9308	▼	高 : (18, 35) 脚標 : (54, 4)	外 : 浅黃褐色～褐～黃褐色 内 : 浅黃褐色～褐色	微細～4mm粒の白色砂粒を多 量。微細～1mmの雲母を少量。 1mm粒の角閃石。赤褐色を含む	-	内 : 上段 : ナジ。下段 : ハ ケ目後タキシ。外 : ハケタクサ	SC44-79		
第9309	▼	高 : (17, 0) 脚標 : (18, 6)	外 : 四川～浅黃褐色 内 : 四川～褐色	微細～2mm粒の白色砂粒を多量。 微細～1mmの雲母を少量。1mm 粒の角閃石。赤褐色を含む	普通	内 : 上段 : ハケ目。中段 : ナ ジ。下段 : ナジ後タキシ。外 : 上 段 : ナジ。下段 : ハケ目後タ キシ。ナジ後タキシ	SC44-73		
第9310	▼	高 : (17, 0)	外 : 淡黃褐色～にい・黃褐色 内 : 淡黃褐色～褐色	微細～2mm粒の白色砂粒を少 量。微細～1mmの雲母。赤褐色。 赤褐色を含む	良好	内 : 半位ナジ。ほかはハ ケ目。外 : 中段はタキシ後タ キシ。ほかはハケ目。ナジ後タ キシ	SC44-49		
第9311	30	▼	上端 : (15, 2) 高 : (18, 9) 脚 標 : (14, 25)	裡 : にい・黃褐色	微細～4mm粒の白色砂粒を少 量。微細～1mmの雲母。赤褐色。 赤褐色を含む	良好	上端内 : ナジ後タキシ 上端外 : ヨコナギ。ナジ : ナ ジナジ。ナジ後タキシ	SC44-47	
第9312	30	▼	上端 : (14, 7) 高 : (19, 7) 脚 標 : (16, 5)	明黃褐色～灰～黑褐色	微細～2mm粒の白色砂粒を少 量。微細～1mmの雲母。赤褐色。 赤褐色を含む	良好	内 : ハケ目。外 : 中段はタ キシ後タキシ。ほかはハ ケタクサ	SC44-48	
第9313	▼	上端 : (10, 0) 高 : (17, 7)	裡 : にい・淡黃褐色 内 : 黄褐色～明黃褐色	微細～3mm粒の白色砂粒をや や多量。微細な雲母。微細～1mm 粒の角閃石。赤褐色を含む	良好	上端内 : ナジナジ。内 : 半位ナ ジ。下半 : ナジ。ナジ後タ キシ	SC44-73		
第9314	▼	上端 : (15, 4) 高 : (18, 9)	にい・黃褐色	微細～2mm粒の白色砂粒を少 量。微細～1mmの雲母。赤褐色。 赤褐色を含む	普通	内 : ナジ後タキシ	SC44-48		
第9315	30	▲	口 : (19, 0) 脚標 : (17, 0)	にい・黃褐色	微細～2mm粒の砂粒を多量。赤 褐色を含む	やや不良	内 : ハケ目。外 : ハケ 目。突端はヨコナギ後削刃。ほか はハケ目	SC44-41	
第9316	▼	高 : (31, 5) 脚標 : (26, 0)	灰白色～淡黃褐色	微細～2mm粒の砂粒を多量。赤 褐色を含む	普通	内 : ハケ目。外 : 中段はタ キシ後タキシ。ほかはハ ケタクサ	SC44-49		
第9317	30	△	口 : (28, 0) 高 : (12, 1)	内 : 淡黃褐色～にい・黃褐色 内 : 淡黃褐色～褐色	微細～2mm粒の砂粒を多量。金 雲母。赤褐色を含む	やや不良	内 : 上半はハケ目。下半はナ ジ後タキシ	SC44-61	
第9318	30	△	口 : (18, 8) 高 : (10, 6)	外 : にい・淡黃褐色～にい・黃褐色 内 : にい・淡黃褐色～褐色	微細～2mm粒の砂粒を多量。赤 褐色を含む	やや不良	内 : ハケ目。外 : ハケタクサ	SC44-49	
第9319	30	△	上端 : (14, 2) 高 : (12, 9) 脚 標 : (8, 45)	裡 : にい・明赤褐色 内 : 棕色	微細～3mm粒の砂粒を多量。雲母 を少含む	良好	内 : ヨコナギ。内 : ハケ目 外 : 上半はハケ目。下半はナ ジ後タキシ	SC44-61	

種別番号	登録年月	規則	仕様(度/幅)	色調	形状	構成、調整方法	被覆	規格外
第95046	30	鉛	口：(23, 7) 底：(11, 7 厚：0.7	外：にぶい黄緑～黒色 内：にぶい黄緑色	鏡面～3mm程の白色砂粒・黒色 粒を少量、微細～2mm程の赤 色・角閃石、微細～3mm程の非 金属・角閃石を含む。	口内～内：野獣のため不規 則。外：鏡面～3mm程の赤 色・角閃石、中間部はタフ チ他工具ナダ。底内：ナダ	口縫部外側～縫部上 面に黒墨。若しく至 る。	SC46-42
第95048	30	鉛	口：(11, 7 高 底：8.5	褐色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の雲母を少 量含む。	口縫：ナダ 内：ハケ目 外：タ クモ	鏡部外面下位～底部 外面に黒墨。	SC48-4
第95049	30	鉛	口：(12, 7) 高：6.5 厚：0.85	褐色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の雲母を少 量含む。	口縫：内：上半はハケ目 外： ハケ目	口縫部外面下位～縫部外 面に黒墨。	SC49-6
第95050	30	鉛	口：(13, 0) 底：(10, 0 厚：0.45	黒 褐色	鏡面～3mm程の白色砂粒を少 量、微細～1mm程の角閃石を 少量含む。	口外：ヨコナダ 内：工具ナダ 外～底外：ハケ目		SC45-7
第95051		台付鉛	高：(0, 11) 厚 底：(10, 0) 厚：0.8	黒 褐色	1～2mmの砂粒を含む	口縫：ハケ目		SC45-8
第95052		蓋	高：(10, 6 厚 底：(16, 1)	にぶい黄緑色	鏡面～3mmの白色砂粒を少 量、微細～角閃石・赤色砂 粒を含む。	内：指ササニシ工工具ナダ 外： 下位はハケ目	鏡部外面中位に黒 墨。	SC45-5
第10143	30	鉛	口：(21, 0) 底：(15, 2 厚：2.0 底厚：1.0	赤 赤褐色～にぶい褐色	鏡面～3mmの白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を 少量含む。	口縫：ナダ 内：上半はナダ 外：上位はハケ目 底外：ナダ 内：ナダ	口縫部外面下位に黒墨。	SC46-2
第10142	31	便	口：(13, 4 高： 11, 4 厚： 0.4	黒 褐灰～浅黃褐色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の笠雲母・鐵 英石・2mm程の角閃石を少 量含む。	口縫：ナダ 上位～中位は ハケ目兼ヨコナダ、下位はナ ダ	鏡部外面中位～底部 外面に黒墨。鏡部外 面下位に底墨。	SC46-1
第10143	31	鉛	口：(9, 7 高： 8.9 厚： 0.8 底厚：1.6	黒 黄褐色～褐色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の赤色砂 粒・1mm程の角閃石を少 量含む。	口外：ヨコナダ ナダ 内：ナダ	鏡部外面中位に黒 墨。	SC46-6
第10144		便	高：(4, 2) 底：(9, 6 厚：0.4	赤 赤褐色	1～2mmの砂粒を多量、金雲母 内：にぶい黄緑～褐灰～ 褐色	内：ナダ	鏡部外面に黒墨。	SC47-6
第10145		便	高：(32, 40) 底：(7, 8 厚：1.2	赤 明黄褐色 内：にぶい黄緑色	1～2mmの砂粒を多量に含む	内：ナダ 瓶内：指ササニシ後ナ ダ	鏡部外面は丹墨り。	SC47-7
第10146	33	便	口：(58, 3 高： 46, 3 厚： 0.9	黒 褐色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細な雲母・角閃石を少 量含む。	口縫：ヨコナダ 口：ハケ目 内：ハケ目 外：実磨ヨコナダ ハケ目 下位はハケ目・タクモ ハケ目 下位はハケ目・タクモ ハケ目	鏡部外面上位～下位 に黒墨。	SC47-11
第10147		便	高：(6, 9) 底：(4, 3 ～ 5 厚：0.4	黒	1～2mmの砂粒を多量に含む	内～底外：指オサナ後ナ ダ 底外：ナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC48-1
第10148	31	支脚ナ 糊	高：(11, 1) 底：(12, 6)	明黄褐色～褐灰色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細な雲母・角閃石を少 量含む。	内：工具ナダ 外：工具ナ ダ ナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC49-4
第10149	31	鉛	口：(11, 8 高： 10, 9 厚： 4.6 底厚：1.1	黒 浅黄褐色～褐灰色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石・ 鐵英石・2mm程の角閃石を少 量含む。	内：ハケ目 口：ナダ 上位 はナダ 内：工具ナダ 外： ナダ	鏡部外面下位～底部 外面に黒墨。	SC49-3
第10140	31	便	高：(17, 3)	赤 紅	鏡面～3mmの白色砂粒を多 量、微細な雲母・角閃石を少 量含む。	内：ハケ目 外：上半はタクモ ハケ目 工具ナダ 下位はタ クモ	鏡部外面にスズ。	SC49-1
第10441		便	口：(12, 3) 高： 16 (16, 2)	黒～浅黃褐色	鏡面～3mmの白色砂粒を多 量、微細な雲母・角閃石を少 量含む。	口縫：ナダ 口：ハケ目 内： ナダ 中間部はナダ	鏡部外面は丹墨り。	SC50-8
第10442		便	口：(19, 3 高： 21 (21, 2)	にぶい黒～褐色	鏡面～3mmの白色砂粒を多 量、微細な雲母・角閃石を少 量含む。	口縫：ナダ 以下はナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC50-7
第10443		便	口：(28, 0 高： 28 (28, 2)	赤 にぶい黄褐色～ 褐色	鏡面～3mmの白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石・ 鐵英石・2mm程の角閃石を少 量含む。	口縫：ナダ 口内：ハケ目後 ナダ ナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC50-4
第10444	31	便	口：(17, 3 高： 21, 6 厚： 0.7	黒 深～黒化	鏡面～3mmの白色砂粒を多 量、微細～1mm程の雲母・角 閃石を少量含む。	口：ハケ目 内：ハケ目 外： ハケ目後～ナダ ナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC50-2
第10445		便	口：(23, 0 高： 32 (32, 6)	黒 にぶい黒～暗褐色	鏡面～3mmの白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石・ 鐵英石・2mm程の角閃石を少 量含む。	口縫：ヨコナダ 口：ハケ目後 ナダ 内：ナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC50-5
第10446	31	便	高：(20, 7)	赤 にぶい黄褐色～ 暗褐色	鏡面～3mmの白色砂粒を多 量、微細な雲母・赤色砂 粒を含む。	内：上位はヨコナダ 中位はハ ケ目後～ナダ 下位はナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC50-9
第10447		鉛	口：(25, 0 高： 14, 20)	黒 にぶい黄褐色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細な雲母・赤色砂 粒を含む。	口縫：ナダ 口内：ハケ目 内：ナダ 中間部はナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC50-14
第10448	31	便	口：(14, 6 高： 18, 6 厚： 0.7	赤 浅黄褐色～ 黑色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細な角閃石・赤色砂 粒を含む。	口縫：ナダ 口内：ハケ目 内：ナダ 中間部はナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC50-3
第10449	31	便	口：(14, 3 高： 13, 6 厚： 0.6	赤 浅黄褐色～ 黑色	鏡面～3mm程の白色砂粒を多 量、微細な雲母・赤色砂 粒を含む。	口縫：ヨコナダ 口：ハケ目 内：ナダ 中間部はナダ	鏡部外面下位に黒 墨。	SC50-1

種別番号	出力番号	規格	出力(硬度)	色調	粒度	機成	成形・翻訳技術	備考	規格番号
第109番①		標準	口:(37.5) 高:(8.0) 厚:(22.0)	外: 淡~灰黄色 内: 淡~浅黄色	微細~1mmの白色砂粒をやや多量、 粗細~1mm程の雲母・角閃石を少含む	普通	口面: ナナメ上: ハケ目後ヨコナダ 内: 上位はハケ目後工具ナ ダ+指オサエ、中位はハケタツリ 後ヨコナダ 外: ハケ目前ヨコナ	口縫外部に黒斑。	SC50-4
第109番④	31	錆	口:(34.8) 高:(8.5) 厚:(8.5)	明黄色	微細な白色砂粒、雲母を少量含む	普通	ハクミガキ、磨減のため不明瞭	口縫外部に黒斑。	SC50-13
第109番⑤	31	支撑	高:(9.1) 厚:(13.0)	に深い黄褐色~褐色	微細~1mm程の白色砂粒をやや多量、 微細な雲母・角閃石を少含む	良	ナナメ+指オサエ	上端部~外側に黒斑。	SC50-21
第109番⑥		標準	口:(31.1) 高:(8.2) 厚:(11.0)	外: 淡黄色 内: 黄褐色	微細~3mm程の白色砂粒を多量、 微細~2mm程の雲母・角閃石を少含む	普通	口面: ナナメ上: ハケ目後ヨコナ ダ+指オサエ 内: ナナメ+指オサエ 外: 上位はハケ目後ヨコナダ+指オサエ、 下位は工具ナダ+指オサエ、中位はナ	口縫外部に黒斑。	SC50-20
第109番⑦		標準	高:(8.8) 厚:(8.4)	橙色	微細~3mm程の白色砂粒を多量、 微細~2mm程の雲母・角閃石を少含む	普通	内: 上半部ハケ目後ヨコナダ+指オサ エ 外: ハケ目後ヨコナダ+指オサエ	桜花山小面。	SC50-19
第109番⑧	30-1	標準	口:(4.8) 高:(6.65)	黄褐色	微細~1~0.5mmの石英・長石、 0.5~1mmの雲母・角閃石をわずかに含む	良好	口面: ナナメ 内: ハケ目後ヨコナ ダ+指オサエ 外: ハケ目後ヨコナダ+指 オサエ、部分的に工具使用、下位に黒斑。 ミニチー。	鋼板外側に上位~中位に黒斑。	SC51-4
第109番⑨	31	錆	口:(8.0) 高:(3.9)	灰褐色	やや粗粒の1~1.5mmの石英・長石、 0.5~1mmの雲母・角閃石をとくわ しくに含む	良好	口面: ナナメ 内: 指オサエ後ヨコナ ダ 外: ハケ目後ヨコナダ+指オサエ	口縫外部に黒斑。	SC52-9
第109番⑩	31	錆	口:(9.3) 高:(6.6) 厚:(8.3)	に深い黄褐色~オーバーブ ル	微細~1mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母・角閃石を少含む	普通	内: 口縫付付はハケ目後ヨコナ ダ+指オサエ 外: ハケ目後ヨコナ ダ+指オサエ、一部工具痕。	口縫外部に黒斑。	SC52-8
第109番⑪		標準	口:(3.8) 高:(11.0)	に深い黒褐色~灰褐色	1~2mmの砂粒を多量、雲母・ 角閃石を含む	良	口面: ヨコナダ 外: ハケ目	口縫外部~鋼板外 面にスカスカ。	SC52-1
第109番⑫		標準	口:(3.3) 高:(12.0) 厚:(0.6)	橙色	微細~1mm程の白色砂粒を少量、 微細な雲母・角閃石をわずかに含む	中性		底部外面、丹化り。	SC53-1
第109番⑬		支撑	上端:(8.5) 高:(8.4) 厚:(12.0)	に深い黄褐色	微細~1mm程の白色砂粒を多量、 微細~2mmの角閃石を少量含む	普通	上端: 指オサエ 内: 上半部は指オ サエ+指オサエ後ヨコナダ+指オサ エ、一部工具痕。	口縫外部に黒斑。	SC52-10
第109番⑭		標準	口:(15.0) 高:(10.0)	外: 細緻な 内: に深い黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	口面: ヨコナダ 外: 上半部はタフ タフ。	鋼板外側に上位~中位に黒斑。	SC52-2
第110番①		標準	口:(8.5) 高:(6.7)	内: に深い黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	内: 指オサエ	鋼板外側に上位~中位に黒斑。	SC54-1
第110番②		標準	口:(4.4) 高:(11.0)	橙色	1mmの砂粒を含む	良好	内: ナナメ 外: ハケ目	底面外側に黒斑。	SC54-3
第110番③		外枠	口:(24.4) 高:(8.4)	粗一色	砂粒を含む	良好	口面: ヨコナダ 内: ナナ メ+指オサエ	口縫外部~鋼板外 面にスカスカ。	SC54-4
第110番④		標準	口:(12.4) 高:(8.6)	に深い黄褐色	やや粗粒の1~1.5mmの石英・長石、 0.5~1mmの雲母・角閃石を含む	良好	口面: ナナメ 内: ハケ目 外: ダラダラ後ナダ	鋼板外側に上位~中位に黒斑。	SC55-3
第110番⑤	31	錆	口:(11.1) 高:(8.6)	に深い黄褐色	やや粗粒の3~1.5mmの白色砂粒、 0.5~1mmの雲母・角閃石を少含む	良好	内: 指オサエ 外: ハケ目	内: 黑化色。外: タキヤ後ナダ。	SC55-2
第111番⑥		合材	口:(11.4) 高:(8.3~8.6) 厚:(0.4)	に深い黄褐色	微細~2mmの白色砂粒をやや多 量、微細~1mmの角閃石を少 量含む	普通	内: ナナメ 外: ハケ目	口縫外部~鋼板外 面にスカスカ。	SC55-4
第111番⑦	32	標準	口:(10.4) 高:(12.2) 厚:(0.6)	外: 明黄色 内: 明黄色~稍暗 色	微細~1mmの白色砂粒を多量、 微細~1mmの雲母・角閃石を少 量含む	普通	内: ナナメ 外: ハケ目	口縫外部~鋼板外 面にスカスカ。	SC55-1
第111番⑧		標準	口:(14.4) 高:(6.6) 厚:(1.2)	外: 淡~浅黄色 内: 棕色	1~2mmの白色砂粒をやや多量、 微細な雲母・角閃石をわざわざに含む	良好	内~底内: ナナ メ	鋼板外側に上位~中位に黒斑。 並み。	SC56-1
第111番⑨		標準	口:(13.7) 高:(6.2)	淡黄色~一部黒 色	1~2mmの白色砂粒を多量、 微細な雲母・角閃石をわざわざに含む	良好	口: ヨコナダ 内: 上半部ハ ケ目 外: 下半部指オサエ+指オサ エ+ハケ目 底内: 指オサエナナ	鋼板外側に上位~中位に黒斑。	SC56-2
第111番⑩		標準	口:(10.4) 高:(13.0) 厚:(1.3)	外: 淡黄色 内: 深 色	1~3mmの白色砂粒を多量、 0.5~1mmの角閃石を少含む	良好	内: 上位~中位は工具ナダ、下位 は指オサエ+指オサエ+ハケ目 底内: 指オサエ 色変。	鋼板外側に黒斑。	SC56-3
第111番⑪		標準	口:(12.1) 高:(12.1) 厚:(0.4)	に深い黄褐色~一 般色	1~2mmの白色砂粒を多量、 0.5~1mmの角閃石を少含む	良好	内: ナナメ 外: ハケ目	口縫外部~鋼板外 面にスカスカ。	SC57-4
第111番⑫	32	標準	口:(27.6) 高:(29.6)	に深い黄褐色~一 般色	1~2mmの白色砂粒を多量、 0.5~1mmの角閃石を少含む	良好	内: ヨコナダ 外: 上位はハケ目、 中位は指オサエ+指オサエ+ハ ケ目 底内: 指オサエ	口縫外部~鋼板外 面にスカスカ。	SC57-5
第111番⑬		標準	口:(27.6) 高:(29.6)	に深い黄褐色~一 般色	1~2mmの白色砂粒を多量、 0.5~1mmの角閃石を少含む	良好	内: ヨコナダ 外: 上位はハケ目、 中位は指オサエ+指オサエ+ハ ケ目 底内: 指オサエ	口縫外部~鋼板外 面にスカスカ。	SC57-6
第111番⑭		標準	口:(14.4) 高:(18.1)	外: に深い黄褐色~灰褐色 内: に深い黄褐色	微細~1mmの白色砂粒をやや多量、 微細~1mmの外向角閃石を少 量含む	良好	内: 上半部ハケ目後ヨコナ ダ+指オサエ+ハケ目 底内: ナナ メ	内: 上半部ハケ目後ヨコナ ダ+指オサエ+ハケ目 底内: ナナ メ	SC57-3
第111番⑮		標準	口:(26.2) 高:(20.3) 厚:(1.6)	外: 淡褐色 内: に深い黄褐色~灰褐色	1~2mmの白色砂粒を多量、 0.5~1mmの角閃石を少含む	良好	内: ナナメ 外: ハケ目、一部ナ ダ+指オサエ+ハケ目 底内: ナナ メ	口縫外部~鋼板外 面に黒斑、鋼板外 面下位にスカスカ、 鋼板外側に上位~中位に黒斑。	SC57-4
第111番⑯	32	標準	口:(26.2) 高:(20.3) 厚:(0.7)	外: 淡褐色 内: に深い黄褐色~灰褐色	微細~1mmの白色砂粒を多量、 微細~1mmの雲母を少含む	普通	内~底内: 工具ナダ 外: 下位は 工具ナダ	口縫外部~鋼板外 面に黒斑、鋼板外 面下位にスカスカ、 鋼板外側に上位~中位に黒斑。	SC57-2

種別番号	登録番号	形状	位置(度/分/秒)	色調	地上	構成	底面・調整技法	被覆	被覆率	
第122041		塊	口 : (24, 2) 高 : (19, 0)	内 : に近い黄褐色～暗灰色 内 : 明黄褐色	黒褐色～3mmの白色砂粒を多量、 微細な角閃石、赤色粒を少量含む	普通	口端 : ナデ 口内 : ハケ目 日 外 : タキ後ハケ目 日 内 : ハケ目 外 : 上位はハケ目、中位はハケタ ヌリ (断続的)ため初期に削除	口縫部内面・口縫部 外側～脚部外側に黒。	S062-2	
第122042	32	塊	口 : (13, 5) 高 : (6, 8) 底 : (6, 4, -1, 0)	内 : に近い黄褐色～暗灰黄色 内 : 明黄褐色	黒褐色～3mm程の白色砂粒をやや多量、 微細な角閃石、微細～2mm の内角閃石を少量含む	普通	口端 : ナデ 口内 : ハケ目 日 外 : タキ後ハケ目 日 上位はハハ 目 ナデ、下位はハケ目 底外 : ハ ケ目	口縫部内面・脚部外 側～脚部外側に上半 に黒斑、脚部内面下半 に黒斑、脚部外側にスラ ス	S062-3	
第122043		塊	口 : (25, 6) 高 : (9, 4)	内 : に近い黄褐色～暗灰褐色 内 : 明黄褐色	黒褐色～3mm程の白色砂粒をやや多量、 微細な角閃石、微細～2mm の内角閃石を少量含む	普通	口端 : ナデ 口 / ハケ目 日 内 : ハ ケ目、一部はタキ	口縫部内面・脚部外 側～脚部外側にスラ ス	S062-6	
第122044		塊	口 : (20, 4) 高 : (10, 0) 底 : (6, 0)	内 : に近い黄褐色～灰黃褐色 内 : 明黄褐色	黒褐色～3mm程の白色砂粒をやや多量、 微細な角閃石、内角閃石を少しきら けむ	良好	口端 : ナデ 口内 : ハケ目 日 外 : タキ 日 上位はタキ タキ、中位はタキ後ハケ目、下 位はハハ目 底外 : ハハ目	口縫部外側～脚部上 位に黒斑。	S062-1	
第122045		鉢	口 : (29, 4) 高 : (12, 7) 底 : (6, 0, 7)	明黄褐色	黒褐色～3mmの白色砂粒を多量、 微細な角閃石、内角閃石を多く含む	普通	口端 : ナデ 口内 : ハケ目 日 外 : タキ 外 : 上位はタ キタキ、中位はタキ後ハ ケ目、下位はハハ目	脚部外側～脚部上 位に黒斑。	S062-10	
第122046	32	塊	口 : (13, 0) 高 : (9, 8) 底 : (6, 0)	内 : に近い黄褐色～黒褐色 内 : 明黄褐色	黒褐色～3mm程の白色砂粒を多量、 微細な角閃石を多く含む	普通	口端 : ナデ 内 : ハケ目 日 外 : タキ後ハケ目	口縫部内面・口縫部 外側～脚部外側下位 に黒斑。	S062-18	
第122047		鉢	口 : (11, 0) 高 : (5, 0)	内黄褐色	黒褐色～3mmの白色砂粒を多 量、微細な角閃石、内角 閃石を少しきらけむ	普通	口端 : ナデ 口 / ハケ目 日 外 : ハハ目	脚部外側～脚部上 位に黒斑。	S062-11	
第122048		脚台	高 : (14, 23) 底 : (16, 5)	内 : に近い黄褐色	黒褐色～3mmの白色砂粒を多量、 微細な角閃石、微細～2mm の内角閃石を少しきらけむ	普通	内 : 上位はハケ目、中位はナデ 目、下位はハハ目	脚部外側～脚部上 位に黒斑。	S062-29	
第122049	32	脚台	上端 : (8, 0) 高 : (19, 7) 底 : (15, 0)	西黄褐色～明黄褐色	黒褐色～3mmの白色砂粒を多量、 微細な角閃石、赤色目、微細～2mm の内角閃石を少量含む	良好	内 : 中位はナデ 外 : 中位～下位 はタキ	脚部外側～脚部上 位に黒斑。	S062-21	
第122050	34-1	塊	口 : (7, 9) 高 : (5, 4)	明黄褐色	黒褐色～3mmの白色砂粒を多量含む	やや堅 苦	内 : ナデ 内～底内 : ナデ 外 外 : ナデ	足部外側にちり欠き の黒斑、脚部外側 外側 : ナデ	S062-03 ミニアーチア	
第122051	34-1	脚台	上端 : (1, 96) 高 : (6, 2) 底 : (5, 2)	灰白色	小やや粗0.1～1.2mmの石英・長石 を少量含む	やや堅 苦	内 : ナデ	上端部～外表面に 黒斑。ミニアーチア	S062-23	
第122052	34-1	鉢	口 : (11, 4) 高 : (3, 0)	西黄褐色	黒褐色～3mmの白色砂粒を少量含む	やや堅 苦	内 : ナデ	足部外側に黒斑。ミ ニアーチア。	S062-17	
第122053	32	鉢	口 : (15, 12) 高 : (12, 20) 底 : (6, 9)	橙色	黒褐色～3mmの白色砂粒を少 量、微細な角閃石を含む	普通	内 : ハハクズリ 外 : ハケ目	脚部外側～脚部上 位にスラス。	S062-4	
第122054		高杆	口 : (12, 5) (16, 6)	明黄褐色	1～2mmの白色砂粒を多量、1～2 mmの内角閃石を多く含む	良好	脚外 : 一握束 ハケ目 脚内 : 上半 位はタキ後ハケ目、外 : ハハ目 前脚 内 : ロカタ	脚部草立3.5m所残 す。	S062-19	
第122055		塊	口 : (10, 45) 高 : (6, 65) 底 : (8, 0)	外 : 黄褐色～暗灰色 内 : 暗 褐色	1～2mmの砂粒を多量に含む	良好	内 : ハタキタヌリ脚部の不規則 な凹凸、ロコタ	外側に黒斑。	S062-1	
第122056		塊	口 : (15, 23) 高 : (20, 5)	内 : に近い黄褐色 内 : 暗褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	内 : ナデ 外 : ハハ目	内面にスラス。	S062-2	
第122057		脚台	高 : (13, 0)	橙色	1～2mm以下の砂粒を含む	良好	口端 : ナデ 口 : ハケ目 内 : ハハ目 外 : ハハ目	脚部外側に黒斑、11 月後半～12月に黒斑 内面に黒斑。	S062-6	
第122058		塊	口 : (15, 23) 高 : (20, 5)	内 : に近い黄褐色 内 : 暗褐色	1～2mmの白色砂粒を多量、微 細な角閃石を含む	良好	内 : ナデ	脚部外側～脚部上 位に黒斑。	S062-1	
第122059	34-1	鉢	口 : (8, 0) 高 : (1, 1) 底 : (0, 1, 1)	明黄褐色	細砂粒、微細な角閃石を含む	良好	内 : ナデ	工兵柱 脚部の不規則な凹 凸の跡跡。	S064-4	
第122060		鉢	口 : (27, 6) 高 : (9, 2)	内 : に近い黄褐色	1～2mmの白色砂粒を多量、微 細な角閃石を含む	良好	口 : ロカタ 内 : ハハ目 外 : 上半はタキ、下半はハケ目	脚部外側にスラス。	S064-7	
第122061		大型樹	口 : (45, 5) 高 : (12, 15)	内 : に近い黄褐色～暗灰色 内 : 明黄褐色	1mm以下～3mm程の白色砂粒を 多く含む	良好	口 : ロカタ 内 : ナデナエ 外 : ナタツハハ目	外側に黒斑。	S062-2	
第122062		蓋	外 : 木 天板 : 1, 35 高 : (6, 65)	外 : 明赤褐色 内 : 暗 褐色	1～2mmの砂粒を含むが精良	良好	内 : 天板部分はオカニ、ほかはナ ゲ	外側に黒斑。	S062-3	
第122063		塊	口 : (17, 8) 高 : (6, 95)	西黄褐色	1mmの砂粒を含む	良好	外 : ナデ 内 : ナデ	手握ね。	S067-1	
第122064		塊	口 : (22, 0) 高 : (20, 0)	内 : に近い黄褐色	小やや粗1～1.5mmの石英・長石 を少量、0.1mmの雲母を微量に含む	良好	口 : ロカタ 内 : 板状工具ナ デ 外 : ナタツハハ目	脚部外側にスラス。	S068-3	
第122065		塊	口 : (35, 2) 高 : (8, 0)	西黄褐色	小やや粗1～1.5mmの石英・長石 を少量、0.1mmの雲母を微量に含む	良好	口 : ロカタ 内 : ハハ目 外 : 脚部はロカタ、脚部はハケ目、 脚部はその他のロコタ	外側に黒斑。口縫部 内にスラス。	S068-2	
第122066		塊	口 : (22, 0) 高 : (9, 0)	口黄褐色	小やや粗1～1.5mmの石英・長石 を少量、0.1mmの雲母を微量に含む	良好	口 : ロカタ 内 : 板状工具ナ デ 外 : ハハ目 調整したため明確	口縫部外側～脚部外 側に黒斑。	S068-4	
第122067	32	脚	口 : (13, 2)～(13, 9) 高 : (6, 2)	内 : に近い黄褐色～黒 色 内 : 明黄褐色	1～2mmの白色砂粒を多量、微 細な角閃石を少しきらけむ	良好	内 : ナデ 外 : ハハ目、下位はナ タツハハ目	脚部外側～脚部上 位に黒斑。外側 に握ね。	S068-1	
第122068		支脚	高 : (8, 9) 底 : (11, 8)	橙色	内 : 橙色 内 : 橙～に近い赤褐色	1～2mmの白色砂粒をやや多く、 微細な角閃石を少量含む	良好	天 : ナデ 内 : 握ねナデ ナ デ 外 : タキ	天 : ナデ、内 : 握ねナデ、ナ デ 外 : ナタツハハ目	S068-7

種別番号	出荷番号	規格	出量(貯蔵実績)	色調	形状	性状	成形・調整技術	備考	規格番号
第132番9		便?	口:(18.4) 高:(13.3)	褐色	1~2mmの砂粒・角閃石を含む	良好	内:ハケ目 外:タキ		S09-1
第132番10		便	口:(12.2) 高:(9.7) 厚:(0.7)	外:浅黄～褐色 内:浅黄～褐色	細粒砂を含む	やや不 良	口:端部はヨコナザ、ほかはハケ 目 内:端部はヘラタズリ、ほかは ハケ目 外:ハケ目	底面外面上に黒斑。 下位はハケ目後工程ナダ	S09-2
第132番11	22	舞台	高:(15.6) 幅:(14.6)	外:浅黄緑～褐色 内:褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	内:下位はナタ目 外:上位は開 オサエ、工具柄、中央～下位は閉 オサエ～タクナリ (中位は磨滅の ためナダ)		S09-4
第138番1		便	口:(48.4) 高:(29.5)	にじみ黄緑色	微細～3mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を含む	普通	口面: タキを優先で目 内面: ハ ケ目 口外: ハケ目指すサエ工程 ハケ目 内: ハケ目 外: 実形工 序ナダ、ほかはタキ後ハケ目	側面外面上に黒斑。 壁面: ハケ目	S07-71 S07-76 壁面: 4
第138番2		舞台	上端部:(13.1) 下端部:(13.1) 幅:(17.3)	外:にじみ黄緑色～灰黃褐色 内:灰黃褐色	微細～2mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を含 む	普通	ハケ目		S07-71 S07-76 壁面: 4
第138番3		便	口:(18.2) 高:(8.6) 幅:(17.3)	褐色	微細～1mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	普通	口面: ヨコカサハケ目 外: 側 面はタテ方向へハケ目	外面上に黒斑。	S07-1
第138番4		脚部	高:(15.2) 幅:(15.6)	黄緑色	1~2mmの砂粒を多量、金雲母、 角閃石を含む	良好	磨滅のため不明		S07-1
第138番5		舞台	高:(17.1)	褐色	1~2mmの白色砂粒を多量、微細 な角閃石を含む	良好	内: ハケナダ	穿孔(4.0)、壁 面: 2	S07-77 壁面: 2
第138番6		便	高:(8.0) 底:(11.0)	外: 浅黄緑色 内: にじみ灰褐色	1~3mmの砂粒、角閃石を含む	良好	内: ナタオサエ後ナダ 外: 下位に ナタナダ～ハケ目		S07-3
第138番7		便	高:(8.0)	外: 黄緑色 内: にじみ褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好		底面外面上に黒斑。	S07-4
第141番1		便	口:(11.7) 高:(8.7) 幅:(11.0)	外: にじみ黒～褐色 内: にじみ黄緑色	微細～3mm程の白色砂粒を少 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	やや不 良	外: ハケ目	内面: 黒斑、鋼器部 中央にヒス。	S07-8
第141番2	22	脚部	口:(20.0) 高:(16.5)	外: 淡黄緑～黒～褐色 内: 浅黄緑色	微細～3mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	普通		底面外面上に黒斑、 鋼器部外側に白粉 り等。	S07-4-6
第141番3		便	口:(24.2) 高:(11.0)	にじみ黄緑色	微細～2mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	普通	口: ハケ目 内: ハケ目 外: 実 形工序ナダ	底面外面上に黒斑。	S07-7
第141番4	34-1	跡	口:(2.7) 底:(2.6)	黄緑色	微細～1mm程の石英・長石を少 量、0.1mmの雲母をごくわずかに 含む	やや不 良	ナダ・指オサエ	手握ね、ミニニチ ヲ。	S07-14
第141番5	34-1	跡	口:(3.1) 底:(1.8)	黄緑色	微細～1mm程の石英・長石を少 量、0.1mmの雲母をごくわずかに 含む	やや不 良	ナダ・指オサエ	手握ね、ミニニチ ヲ。	S07-15
第141番6		便	口:(18.1) 高:(14.3)	緑～黒色	微細～3mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	普通	口面: ハケ目後～ハカリ 鋼器部外側: ハケ目後工程	口縁部外面上～鋼器部 外側に黒斑、鋼器部内側に 黒斑。	S07-10
第141番7		舞台	高:(18.0)	にじみ黄緑～明黄色	微細～2mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	普通	内: ハケ目 外: 上半はハケ目		S07-11
第141番8		便	口:(14.7) 高:(10.0) 底:(6.0)	明黄色	微細～1mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	やや不 良	内: ハケ目		S07-5
第141番9		便	高:(10.1) 底:(7.0)	褐色	微細～5mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	良好	ナダ	手握ね、ミニニチ ヲ。	S07-6
第141番10		高杯	高:(9.6)	河内～淡赤褐色	微細～1mm程の白色砂粒を多 量、0.1mmの雲母をごくわずかに 含む	やや不 良	杯内: ハケ目 杯底内: ハラミ 内面: 被膜のため赤 化。		S07-2
第141番11		跡	口:(29.0) 高:(16.8)	褐色	微細～2mm程の白色砂粒を多 量、2mm程の角閃石を含む	良好	内: ハカリ後ナダ 外: 上位～半 位はタタキ、被膜のため不明顯、 下位はハラタズリ	外面上に黒斑。穿孔は 底成膜。	S07-71 S07-76 壁面: 2
第141番12		便	高:(10.1) 底:(7.0)	褐色	微細～2mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	普通	内: 底部附近指オサエ、ほかは ハケ目 外: タキ	外面上に被膜のため赤 化。	S07-1
第146番4		便	口:(26.7) 高:(15.75)	にじみ黄緑色	1~5mmの砂粒を含む	良好	内: ヨコナダ 内: ナダ 外: 上位 はヨコナダヨコナダ、中位はナダ		S01-1
第146番5		跡	口:(22.0) 底:(18.1)	外: にじみ黄緑～褐色 内: 黄褐色～灰褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	良好	内: 直内～工ナダナダ 内: ヨ コナダナダ 沢山附近はヨコナ ダヨコナダ	鋼器部前面・側面前面 ～底部前面に黒斑。	S01-8
第146番6		跡	口:(9.9)	褐色	微細～1mm程の白色砂粒を少 量、微細～1mm程の角閃石を含 む	良好	内: ナダ 内: ヨコナダナダ 下位はナダ・鋼器部外側 クリヤー板付近はナダ・鋼器部 クリヤー盤のため不明顯	鋼器部前面は孔は1孔所 程。	S01-6
第146番8	32	便	高:(13.0) 幅:(17.25) 厚:(1.0)	外: 浅黄緑色 内: 褐色	微細～3mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	良好	内～底内: ナダ・指オサエ 外: ハカリ後工程ナダ	鋼器部の背面は2孔所 程。	S02-6
第146番10		高杯	高:(11.0)	にじみ褐色	微細～2mm程の白色砂粒を多 量、微細～1mm程の角閃石を少 量含む	良好	内: タタキ (横ハカリ)		S02-9
第146番11		便	口:(34.4) 底:(0.0)	明黄色～淡黄褐色	微細～1mm程の砂粒を多量に含 む	良好	内: タタキ (横ハカリ)		S02-9
第146番12	32	跡	口:(18.0) 底:(7.4)	黄褐色	やや粗粒、5mm～1.5mmの石英・長 石を中量、0.1mmの雲母をごく わずかに含む	良好	内: ナダ 内: ハカリ後工程 外: 上位はハカリ、下位はナダ （被膜のため不明顯）	丹籠り？	S01-1
第146番13		便	高:(5.1) 底:(8.9)	赤褐色	やや粗粒1mmの石英・長石 を中量、0.1mmの雲母をごくわずかに 含む	良好	内: ナダ 外: ハカリ。底部付近 はヨコナダヨコナダ、中位はナ ダ 外: ナダ	底部付近はヨコナダヨ コナダ。	S01-1
第146番14		高杯	高:(14.3)	外: 明黄色、一部黒褐色 内: 褐～褐色、一部黒褐色	1~2mmの白色砂粒をやや多量に 含む	良好	杯内: ハラミガキ 外: ナダ 内: ハカリ後ナダ ボルト: ナダ 外: ハカリ後～ハカリ	鋼器の穿孔は23孔所 程。	S02-9

構造番号	区分番号	部類	位置 (復元図)	色調	寸法	構成	底面、調整技術	備考	整備年
第14045	33	器台	内: (13.7) 高: 7.6~7.9 厚: 11.9	に赤い黄褐色	1~3mmの白色砂粒を多量。1~2mmの内凹面を少量含む	良好	内面: ハケ目・隙外: ハケ目・脚内: 陰合付近はナダ。ほかはハケ目・脚外: ハケ目・脚: ナダ	SK29-3	
第14046	33	器台	上部: (14.0) 内: (21.3) 厚: (6.6)	に赤い黄褐色	1~3mmの白色砂粒をやや多量。 表面: 黄褐色・雲母・角閃石を含む	良好	内面: 上部はハケ目。中位は指オサエナダ。下部はハケ目・脚外: ハケ目・脚: ナダ	SK29-7	
第15047	33	塊	1: (13.6 高 17.9 厚: 7.0 底厚: 2.5	黄褐色～赤い黄褐色	表面～3mm程の白色砂粒を多量。 表面: 微細な雲母・角閃石をわずかに含む	普通	内面: ハケ目・口外: ヨコナダ 内面: 工具面・指オサエナダ・内: ナダ・外: 工具ナダ・底面: 指オサエナダを含む	SD09-1	
第15048	33	鉢	1: (14.0 高 8.4 厚: 1.5 底厚: 0.6	米黄褐色	1~3mm程の白色砂粒をやや多量。 表面: 微細な雲母・角閃石を含む	良好	内面: ヨコナダ・内: ナダはオサエナダを含む。下半部指オサエナダ 後ハケ目・外: 上位一辺はナダ。下位はナダ。工具ナダ・直内: ナダ・直底: ナダ	SD09-10	
第15049	33	塊	1: (20.4 高 14.4 底厚: (7.2)	内: 赤い黄褐色 外: に赤い黄褐色	表面～3mm程の白色砂粒を多量。 表面: 微細～2mm程の角閃石を含む	良好	内面: ヨコナダ・脚外: ハケ目 内: 上部はハケ目・工具ナダ。中位～下部はナダ。外: 工具ナダ 底内: ナダ・直底: ナダ	SD09-2	
第15050	33	塊	1: (21.0 高 14.0 厚: 8.0 底厚: 0.5	黄褐色～赤褐色	表面～3mm程の白色砂粒を多量。 表面: 内: に赤い黄褐色・外: に赤い黄褐色を含む	普通	内面: ハケ目後ナダ目・口外: ナダ・直内: ナダ・直底: ナダ 内: 指オサエナダ	SD09-1	
第15051	33	鉢	1: (18.4 高 12.2 底厚: 1.1)	明黄褐色～褐色	表面～2mm程の白色砂粒をやや多量。 表面: 微細な雲母・角閃石を含む	普通	内～底内: 指オサエナダ (底盤が崩壊) 底面外面に黒斑。	SD09-5	
第15052	33	鉢	1: (12.6 高 8.3 厚: 1.5 底厚: 1.5)	赤～に赤い黄褐色	表面～2mm程の白色砂粒を多量。 表面: 微細な雲母・角閃石を含む	普通	内面: ナダ・直内: ナダ 内: ヨコナダ・内: 工具ナダ 外: ハケ目・直底: ナダ・指オサエナダ・直底: ナダ	SD09-7	
第15053	33	鉢	1: (9.7 高 8.1 厚: 1.3)	褐色～に赤い黄褐色	表面～2mm程の白色砂粒を多量。 表面: 微細な雲母・角閃石を含む	普通	内面: 指オサエナダ 外: 直底面に黒斑。	SD09-6	
第15054	33	塊	1: (3.85 高 6.8 底厚: 0.95)	内: に赤い赤褐色 外: 赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	-	内～底内: 指オサエナダ 外: ナダ・直底: ハテミヨコミヨコナダ	SD11-3	
第15055	33	塊	1: (6.1 高 1.1)	に赤い黄褐色	1mm以下の砂粒・金雲母を含む	良好	内: ナダ 外: 一部はヨコナダ・内: ハケ目 内: ナダ・直底: ナダ	SD11-1	
第15111	33	塊	1: (18.2 高 9.0 厚: 0.35)	内: に赤い黄褐色～淡黄褐色 外: 淡黄褐色	1~2mmの砂粒を多量。角閃石を含む	良好	内面: 指オサエナダ 外: 一部はヨコナダ・内: ハケ目 内: ナダ・直底: ナダ	SP19-1	
第15112	33	鉢	1: (3.25 高 4.4 厚: 4.7)	米黄褐色	0.1mmの白色砂粒を少量含む	良好	手研磨。ニヒナダ アズマ	SP98-1	
第15114	33	塊	1: (21.0 高 18.0)	内: 明黄褐色～黑色 外: 黄褐色～褐灰色	1~3mmの砂粒・金雲母を含む	直	内面: ヨコナダ・口内: ハケ目 外: ハケ目後ヨコナダ・内: ナダ ヨコナダ後ハケ目後ナダ目・一部ナダ ナダ・ヨコナダ・ハケ目	SP10-1	
第15115	33	塊	1: (17.0 高 12.0 厚: 1.0)	内: 黄褐色～褐色	1~2mmの砂粒を多量。角閃石を含む	良好	内面: ヨコナダ 外: ハケ目後ナダ目・直底: ナダ	SP10-2	
第15116	33	塊	1: (19.0 高 19.0 厚:)	内: 暗～明褐色～黑色 外: に赤い黄褐色	2mmの砂粒を多量。角閃石を含む	良好	内面: ナダ 外: 指オサエナダ	SP10-3	
第15117	33	塊	1: (23.6 高 19.0 厚:)	内: 黄褐色～黑色 外: 黄褐色～褐灰色	1~3mmの砂粒・角閃石を含む	直	内面: ヨコナダ 外: 指オサエナダ・直底: ナダ 内: 上半はハケ目。下半はナダ ナダ・直底: ナダ	SP10-1	
第15118	高杯	1: (25.4 高 (6.0 厚:)	明赤褐色	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	内面: ヨコナダ	内外面丹垂り。	SP10-1	

<三沢南崎遺跡3 出土石器・鉄器・ガラス・土製品>

構造番号	区分番号	部類	位置 (復元図)	色調	寸法	構成	底面、調整技術	備考	整備年
第14041	42-1	石範	長: 1.2 厚: 1.0 厚: 0.9 厚:	黒墨石	-	-	-	-	SD01-01
第14042	42-1	石範	長: 1.7 厚: 2.1 厚: 0.8 厚: 1.61	黒色鐵質寶安石	-	-	-	-	SD01-01
第14043	42-2	石範	長: 0.3 厚: 0.2 厚: 0.1 厚: 0.15	青碧質寶石	-	-	-	表面の開化層しづ。	SD02-01
第14044	42-1	石範	長: 2.1 厚: 1.4 厚: 0.9 厚: 0.15	黒墨石	-	-	-	-	SD02-01
第14045	46	鉢	長: 16.6 厚: 6.0 厚: 0.7 厚: 7.96	右夷鏡岩	-	-	-	-	SD02-01
第14046	41-1	二重丸工鉢	長: 3.7 厚: 0.7 厚: 0.7 厚: 0.79	黒墨石	-	-	-	-	SD08-01



測定番号	出荷番号	形状	寸法(厘米)	色調/石材	地主	機会	成形・調節技術	備考	測定番号
第1807	42-2	砾石	長: 25.6 幅: 15.9 厚: 4.3 重: 27.00	細粒砂岩					SCD8-07
第18081	43-1	スクレーパーイバー	長: 2.5 幅: 8.4 厚: 1.56	黒色磁礫質安山岩				SCD9出土遺物として扱う。	SCD9-01
第18082	42-2	石塊	長: 12.8 幅: 6.1 厚: 0.6 重: 33.28	赤紫色泥岩					SCD9-02
第18083			長: 9.11 幅: 3.5 厚: 2.3 重: 91.46	石英斑岩				SCD9出土遺物として扱う。	SCD9-03
第18084	30-2	円盤	長: 4.0 幅: 0.45	外: 褐紅色 内: 赤い黄色	やや粗粒2mm以下のむき良石、 雲母等をやや多く含む	良好	内: ナデ 外: ヨコナデ・ナデ	板目側面部へ鋼鋸上位を行ったり欠く。外側 はスルが少々付着。	SCD9-04
第18085	42-1	石礫	長: 3.4 幅: 1.7 厚: 0.4 重: 2.25	黒色磁礫質安山岩					SCD9-05
第18086			長: 0.33 幅: 0.7 厚: 0.8 重: 0.75	頁岩					SCD9-06
第34041	42-1	石礫	長: (2.43) 幅: 1.8 厚: 0.4 重: 1.91	黒曜石					SCD9-07
第34042	42-2	石塊	長: 15.4 幅: 1.4 厚: 0.9 重: 68.72	頁岩質砂岩				孔径: 0.35	SCD9-08
第34043	23	不明	長径: 1.7 高さ: 0.6 厚さ: 0.35	黄褐色	やや粗0.1~1.2mmの石英・長石 を中心、0.1mmの雲母をごくわずかに含む	良好	内: ナデ・一部指オサエ 外: 間 オサエ・ナデ	外面上半に黒斑。	SCD9-09
第34044	42-2	石塊	長: (4.31) 幅: 1.9 厚: 0.7 重: 7.38	灰色頁岩					SCD9-09
第34045	42-2	石塊	長: 0.01 幅: 0.01 厚: 0.6 重: 7.71	灰色頁岩					SCD9-09
第34046	41-1	スクレーパーイバー	長: 4.6 幅: 0.7 厚: 0.17	黒色磁礫質安山岩					SCD9-09
第34047	44-2	石剣	長: 4.6 幅: 0.7 厚: 1.0 重: 23.05	頁岩				表面風化激しい。	SCD9-09
第34048	39-2	砾石	長: 4.6 幅: 0.7 厚: 1.1 重: 91.65	砂岩					SCD9-09
第34049			長: 28.1 幅: 13.2 厚: 0.7 重: 2000	花崗斑岩					SCD9-09
第35041	37-2	セリガシンナ	長: (0.11) 幅: 1.1 厚: 0.2 重: 1.9						SCD9-09
第35042	37-2	セリガシンナ	長: (0.68) 幅: 0.65 厚: 0.2 木厚: シナ 0.76 重: 2.1					持ち手側。	SCD9-09
第35043	43-1	石塊	長: (0.30) 幅: 4.5 厚: 0.7 重: 14.89	赤紫色泥岩					SCD9-09
第35044	43-1	石塊	長: 0.81 幅: 14.81 厚: 0.7 重: 41.70	灰色頁岩					SCD9-09
第35045	43-1	石塊	長: 0.83 幅: 14.83 厚: 0.7 重: 35.87	頁岩質砂岩					SCD9-09
第35046	43-1	石塊	長: 14.4 幅: 3.1 厚: 0.8 重: 35.87	頁岩					SCD9-09
第35047	45-1	片刃刀	長: 4.4 厚: 1.3 重: 102.97	蛇紋岩					SCD9-09



標識番号	位置番号	形状	寸法(底面)	色調／石材	寸法	構成	底面・調整技法	備考	整備年月
第35048		投擲	長：3.9 厚：3.1 厚：1.8 重：30.76	安山岩					SCB-011
第35049		投擲	長：3.5 厚：2.1 厚：1.9 重：25.9	安山岩					SCB-012
第35050		投擲	長：3.8 厚：2.7 厚：2.1 重：27.97	安山岩					SCB-013
第35051		投擲	長：3.5 厚：3.1 厚：2.1 重：26.56	安山岩					SCB-014
第35052	45-1	石膏	長：10.5 厚：7.4 幅：(3.5) 重：375.07	灰白色			表面風化液しりべ		SCB-015
第35053	46	砾石	長：18.6 厚：9.2 幅：4.6 重：898.38	石英斑岩					SCB-016
第35054	46	台石	長：13.3 厚：9.8 幅：5.6 重：1108.44	花崗岩					SCB-017
第35055	46	砾石	長：19.2 厚：14.7 幅：9.5 重：2000.00	砂岩					SCB-018
第35056	43-1	石硝丁	長：(8.3) 幅：(3.2) 厚：1.4 重：14.44	多紫色瓦岩					SCB-019
第35057	43-1	石硝丁	長：(8.0) 幅：4.0 厚：1.7 重：33.25	頁岩					SCB-020
第35058	39-2	砾石	長：13.8 厚：6.8 幅：1.5 重：223.26	砂岩					SCB-021
第35059	43-1	石硝丁	長：(9.1) 幅：4.4 厚：0.5 重：31.82	多紫色瓦岩					SCB-022
第35060	41-1	スカラップ	長：4.0 厚：3.2 幅：0.7 重：4.72	黑色鐵質安山岩					SCB-023
第35061	37-2	マリonna	長：(3.5) 幅：1.15 厚：0.4 重：4.6						SCB-024
第35062	44-2	石硝	長：(2.0) 幅：1.4 厚：0.2 重：0.59	多紫色瓦岩			先端および脚部欠損		SCB-025
第35063	44-2	石硝	長：(2.9) 幅：2.2 厚：0.2 重：2.06	頁岩			先端欠損		SCB-026
第35064	43-2	石硝丁	長：(4.5) 幅：(3.0) 厚：0.3 重：16.78	灰色頁岩					SCB-027
第35065	43-2	石硝丁	長：(5.1) 幅：3.4 厚：0.6 重：16.75	多紫色瓦岩					SCB-028
第35066	43-2	石硝丁	長：(2.9) 幅：(3.0) 厚：0.4 重：9.18	粘板岩					SCB-029
第35067		投擲	長：(3.3) 幅：(3.0) 厚：0.4 重：9.05	頁岩質砂岩					SCB-030
第35068		投擲	長：3.8 厚：3.1 幅：2.2 重：31.98	安山岩			3個セット。		SCB-031
第35069		投擲	長：4.1 厚：3.6 幅：2.0 重：35.82	安山岩			3個セット。		SCB-032



構造番号	出荷番号	形状	寸法(奥行×幅)	色調/石材	地主	機械	成形・調節技術	備考	構造番号
第654回10		板押	長: 8.5 幅: 4.0 厚: 2.1 重: 58.80	安山岩					SCB-01
第654回11		板押	長: 2.9 幅: 3.2 厚: 1.9 重: 16.0	安山岩					SCB-04
第654回12		板押	長: 1.3 幅: 1.4 厚: 1.0 重: 27.12	安山岩					SCB-06
第654回13	38-2	砾石	長: 11.3 幅: 3.6 厚: 1.0 重: 100.00	粘板岩					SCB-09
第654回14	40-3	砾石	長: (2.2) 幅: 9.1 厚: 1.0 重: 474.72	安山岩					SCB-07
第654回15	46	台石	長: 11.0 幅: 12.0 厚: 1.1 重: 995.48	花崗岩					SCB-08
第654回16	56	台石	長: 11.7 幅: 17.0 厚: 1.9 重: 2300	花崗岩					SCB-07
第664回1	40-2	壁玉	長: 1.35 幅: 0.45 厚: 0.45	グリーンタフ				やや風化する。	SCB-01
第664回2	40-2	壁玉	長: 1.2 幅: 0.7	碧玉					SCB-01
第664回3	44-2	砂錆	長: 0.0 厚: 1.55 孔径: (1.6)	に赤い黄褐色	(注)直面3mm以下の石英・長石・斜長石等を少し含む ナデ。上面は木質過の刷毛穴3列。	貝			SCB-07
第664回4	29-1	砾石	長: 10.5 幅: 1.7 厚: 1.6 重: 196.43	泥灰岩					SCB-02
第664回5	35-2	板押	長: 0.60 幅: 0.50 厚: 0.05	緑色	直面1.5mm以下の石英・長石・斜長石等をわずかに含む	貝	ナデ・削オサエ	直面。	SCB-07
第664回6	45-2	卵石	長: 8.2 幅: 4.3 厚: 2.4 重: 156.41	安山岩					SCB-02
第664回7	36-1	砂錆	長: 0.5 幅: 0.5 厚: 0.25 重: 3.1					継ぎを「X」字形に 埋く。	SCB-01
第664回8	37-2	壁玉	長: 0.81 幅: 0.50 厚: 0.4 重: 5.5						SCB-01
第634回1	43-2	石版下	長: 0.11 幅: 0.01 厚: 0.5 重: 51.93	頁岩質砂岩					SCD-01
第634回2	45-2	蓋材鋼	長: 1.2 幅: 0.6 重: 16.66	緑色片岩				表面風化しない。	SCD-09
第634回3	44-2	砂錆	長: 0.31 幅: 0.25 厚: 0.5 重: 4.04	頁岩質砂岩					SCD-04
第634回4	39-1	砾石	長: 1.9 幅: 2.5 厚: 1.5 重: 150.77	粘板岩					SCD-05
第634回5		板押	長: 4.2 幅: 3.7 厚: 2.5 重: 35.27	安山岩					SCD-07
第634回6		板押	長: 5.3 幅: 3.7 厚: 2.9 重: 35.27	安山岩					SCD-09
第634回7		板押	長: 4.7 幅: 3.5 厚: 2.3 重: 35.6	安山岩					SCD-09
第634回8		板押	長: 5.0 幅: 3.2 厚: 2.4 重: 38.97	安山岩					SCD-09





構造物名	寸法番号	形状	寸法(底面寸法)	色調/石材	寸法(上)	構成	底面・調整技法	備考	整地年月
第63回9		投擲	長: 4.4 厚: 3.1, 1.6 重: 29.15	雲山岩					SC3-01
第63回10		投擲	長: 3.1 厚: 2.2, 1.8 重: 16.18	雲山岩					SC3-01
第63回11	46	台石	長: 12.2 幅: 8.1, 7.2 重: 1186.63	花崗岩					SC3-01
第63回12	37-2	ヤード シング	長: 13.57 幅: 1.37 厚: 0.28 重: 4.2						SC3-01
第63回13	27	納石	長: 10.3 幅: 5.15 重: 3.9	明黄褐色	1m以下の砂粒を含む	良好	曲オサ後ナダ	手挖ね。	SC3-01
第73回1	39-2	砾石	長: 7.6 幅: 6.8 厚: 1.5 重: 138.96	細粒砂岩					SC3-01
第73回2	43-2	石垣丁	長: (6.6) 幅: 4.8 厚: 1.85	緑色片岩					SC3-01
第73回3	42-1	石塀	長: 1.9 幅: 0.20 重: 0.85 重: 2.75	黑色細密質安山岩				脚部・基部欠損。	SC3-01
第73回4	41-1	スクリーン イバー	長: 4.4 幅: 5.8 厚: 1.0 重: 23.29	黑色細密質安山岩					SC3-02
第73回5		回石	長: (9.0) 幅: (6.6) 厚: 0.2 重: 350.63	安山岩					SC3-01
第73回6	38-2	砾石	長: 10.2 幅: 4.1 厚: 3.0 重: 126.34	軽板岩					SC3-01
第73回7		投擲	長: 3.5 幅: 2.4, 2.2 厚: 2.2 重: 22.31	雲山岩				2個セット。	SC3-01
第73回8		投擲	長: 3.6 幅: 2.6 厚: 2.0 重: 27.35	雲山岩				2個セット。	SC3-01
第73回9		投擲	長: 4.6 幅: 3.8 厚: 2.2 重: 51.5	雲山岩					SC3-01
第73回10		投擲	長: 4.7 幅: 3.8, 2.9 厚: 56.75	雲山岩					SC3-01
第73回11		投擲	長: 4.7 幅: 3.8, 2.9 厚: 41.47	雲山岩					SC3-01
第78回1	35-2	土玉	径: 1.9 乳: 0.4 高: 1.5	浅黃褐色	約0.1mmの白色砂粒を少數含む	不良	-	-	SC3-01
第78回2		砾石	長: (4.8) 幅: 3.9 厚: 1.3 重: 27.29	砂岩					SC3-01
第78回3	46	台石	長: (3.6) 幅: 12.5 厚: 5.9 重: 2100	花崗岩					SC3-01
第78回4		砾石	長: (15.1) 幅: (2.5) 厚: 0.5 重: 4.36	軽板岩					SC3-01
第78回5	43-2	石垣丁	長: (4.8) 幅: (2.5) 厚: 0.8, 0.6 重: 43	參照色泥岩					SC3-01
第78回6	44-1	石垣丁	長: 14.2 幅: 3.8 厚: 0.7 重: 76.59	砂岩					SC3-01
第78回7	45-2	ハン マーク	長: 5.1 幅: 3.7, 3.2 厚: 0.8	雲山岩					SC3-01





構造番号	出荷番号	形状	寸法(奥行×幅)	色調/石材	地主	機械	成形・調節技芸	備考	構造番号
第81回1	41-2	棚?	長: 4.2 厚: 2.5 厚: 1.0 重: 12.9t	黒色織物質安山岩					SCB-02
第81回2	44-1	石塊1	長: 1.0 厚: 0.77 幅: 1.0 高: 0.58	頁岩質砂岩					SCB-03
第81回3		複雑	長: 4.0 幅: 1.0 高: 2.2 重: 33.2t	安山岩			2個セット		SCB-04
第81回4		複雑	長: 4.4 幅: 3.1 厚: 2.5 重: 45.72	安山岩					SCB-05
第81回5		複雑	長: 4.3 幅: 3.1 厚: 1.6 重: 22.27	安山岩			2個セット		SCB-06
第81回6		複雑	長: 5.0 幅: 4.4 厚: 1.8 重: 41.36	安山岩					SCB-07
第81回7		複雑	長: 3.8 幅: 2.0 厚: 1.7 重: 18.47	安山岩					SCB-08
第81回8		複雑	長: 3.1 幅: 2.7 厚: 2.2 重: 22.29	安山岩					SCB-09
第81回9	40-1	砾石	長: 0.6 厚: 0.6 幅: 2.3 重: 106.75	石英斑岩					SCB-10
第87回1	44-1	石塊1	長: 0.3 厚: 0.6 幅: 0.6	頁岩質					SCD-01
第87回2	44-2	石塊2	長: 0.9 厚: 0.9 幅: 1.1 高: 1.04	粘板岩					SCD-02
第87回3		砾石	長: 4.3 幅: 1.4 厚: 0.6 重: 9.43	フォルンフェルスか					SCD-03
第87回4	44-1	石塊1	長: 0.6 厚: 0.72 幅: 1.0 高: 1.05	頁岩質砂岩					SCD-04
第87回5	44-2	石塊2	長: 0.4 厚: 0.4 幅: 0.71	頁岩					SCD-05
第87回6	39-1	砾石	長: 7.0 幅: 3.5 厚: 0.5 重: 94.65	粘板岩					SCD-06
第94回1	36-2	複雑	長: 1.8 幅: 10.0 厚: 0.25 重: 9.1t						SCD-07
第94回2	36-2	複雑	長: 2.88 幅: 10.31 高: 0.25 折返 厚: 0.75 重: 21.8t						SCD-08
第94回3	37-2	複雑	長: 0.77 高: 0.25 厚: 0.15 重: 7.4						SCD-09
第94回4	45-1	扁平角	長: 0.52 幅: 2.4 厚: 0.6 重: 11.85	織物質					SCD-10
第94回5	35-2	円盤	長: 2.3 幅: 2.6 厚: 0.55	淡黄褐色~褐灰色	やや粒3mm以下の石英・長石・ 霞晶等をやや多く含む	貝	手捏ね。		SCD-11
第94回6	37-1	アリガシ シナ	長: 1.0 厚: 0.4 幅: 0.55 重: 0.6					樹齋れのため、木末 が削りよりも厚くなっています。	SCD-12
第94回7	37-1	アリガシ シナ	長: 0.31 幅: 1.1 厚: 0.95 重:						SCD-13
第94回8	37-1	アリガシ シナ	長: 0.30 幅: 1.17 厚: 0.49 重: 0.6						SCD-14



地質番号	出露番号	出露	岩相 / 石材	厚さ	構成	成因・調整技法	備考	標本番号
第102図9	37-1	ヤリガ シナト	長 : (4.1) 幅 : 1.37 厚 : 0.3 重 :					SC48-#1
第102図10	36-2	横縞	長 : 1.5 幅 : (2.6) 厚 : 0.25 重 : 2.6					SC48-#2-1
第102図11	38-1	鰐先	長 : 6.6 幅 : (1.1) 厚 : 0.27 重 : 70.5					SC48-#1
第102図12		波瀬	長 : 3.3 幅 : 3.6 厚 : 2.3 重 :	安山岩				SC48-#3
第102図13		波瀬	長 : 5.0 幅 : 3.1 厚 : 1.1 重 :	安山岩				SC48-#4
第102図14	44-1	石船丁	長 : (2.9) 幅 : 1.29 厚 : 0.7 重 : 5.05	赤紫色死岩				SC48-#1
第102図15	46-1	砾石	長 : (7.9) 幅 : 3.7 厚 : 3.4 重 : 178	石英斑岩				SC47-#1
第102図16	41-2	櫻	長 : 4.7 幅 : 2.7 厚 : 1.1 重 : 15.21	黑色細脈安山岩			未製品?	SC47-#1
第102図17	46	砾石	長 : 6.0 幅 : (4.6) 厚 : 4.1 重 : 948.05	細粒砂岩				SC47-#3
第102図18	38-2	鉄	長 : (1.71) 幅 : 2.0 厚 : 0.6 重 : 5.6					SC48-#1
第102図19	45-2	石群	長 : 3.8 幅 : 6.5 厚 : 49.26 重 :	黑色細脈安山岩				SC48-#3
第102図20	44-1	石船丁	長 : 11.1 幅 : 2.7 厚 : 0.7 重 : 42.09	赤紫色死岩				SC48-#1
第107図1	41-2	石船タ	長 : 2.1 幅 : 1.3 厚 : 0.4 重 : 1.25	黑色細脈安山岩				SC50-#1
第107図2	42-1	石船	長 : 13.5 幅 : 2.2 厚 : 0.6 重 : 2.08	黑色細脈安山岩				SC51-#1
第107図3	41-1	スクリ イバー	長 : 3.0 幅 : 0.6 厚 : 0.6 重 : 10.53	黑色細脈安山岩				SC50-#2
第107図4	37-2	刀子	長 : (1.53) 幅 : (4.26) 厚 : 0.21 重 : 3.1					SC52-#1
第107図5	42-1	石船	長 : 3.5 幅 : 2.2 厚 : 0.5 重 : 2.05	黑色細脈安山岩				SC52-#1
第117図1	46	竹石	長 : 18.9 幅 : 17.6 厚 : 3.2 重 : 1296.99	玄武岩				SC54-#1
第117図2	39-1	砾石	長 : (12.9) 幅 : (2.5) 厚 : 0.6 重 : 63	細粒砂岩				SC55-#1
第117図3	46	砾石	長 : 17.3 幅 : 14.4 厚 : 4.7 重 : 1295	細粒砂岩				SC55-#1
第117図4	45-2	石群	長 : 20.5 幅 : 9.6 厚 : 1.1 重 : 184.36	黑色細脈安山岩				SC56-#1
第117図5	40-2	小瓦	径 : 0.5 厚 : 0.1	ガラス				SC56-#1
第117図6	42-1	石船	長 : (2.7) 幅 : (1.4) 厚 : 0.5 重 : 0.99				脚部欠損。	SC57-#1



測定番号	出荷番号	種別	寸法(奥行×幅×厚)	色調/石材	地主	機械	成形・調節技芸	備考	測定番号
第117B87	41-2	石譜	長: 1.9 幅: 2.6 厚: 0.6 重: 1.92	黒色織柄質安山岩					SC37-02
第117B88	45-2	石材	長: 6.2 幅: 1.8 厚: 2.4 重: 115.99	黒色織柄質安山岩					SC37-06
第117B89	38-2	砾石	長: 1.0 幅: 1.3 厚: 0.3	粘板岩					SC37-04
第117B90	38-2	砾石	長: 11.3 幅: 1.2 厚: 1.2 重: 177.03	粘板岩					SC37-01
第127B91	40-1	砾石	長: 1.0 幅: 1.2 厚: 0.6 重: 0.96	赤色砂岩					SC39-01
第127B92	45-1	粗粒花崗岩 石右側	長: 0.4 幅: 1.3 厚: 0.7 重: 36.70	粗粒花崗岩					SC39-01
第127B93		珪石	長: 0.5 幅: 1.4 厚: 2.1 重: 3400	花崗岩					SC39-05
第127B94	41-1	スクリーン イバメ	長: 0.6 幅: 7.77 厚: 0.6 重: 0.96	黒色織柄質安山岩					SC39-01
第127B95	40-3	砾石	長: 0.4 幅: 1.0 厚: 0.7 重: 250.41	安山岩					SC39-09
第127B96	41-1	スクリーン イバメ	長: 0.2 幅: 1.1 厚: 1.14 重: 0.44	黒色織柄質安山岩					SC39-01
第127B97	45-2	石材	長: 0.0 幅: 1.2 厚: 2.8 重: 24.66	含クロム雲母岩					SC39-01
第135B91	36-2	砾譜	長: 1.9 幅: (4.60) 厚: 0.6 重: 7.3	面端					SC39-01
第135B92	38-1	鉄譜	長: (2.9) 幅: (1.51) 厚: 0.6 重: 15.0						SC39-02
第135B93	30-2	粗骨	長: 0.4 幅: 2.3 厚: 0.25	橙色	注: ほんの、1m以下の石英・長石・雲母等を少し含む	丸	ナジ・挽オサス		SC39-09
第135B94	41-1	スクリーン イバメ	長: 0.6 幅: 1.0 厚: 0.25	黒色織柄質安山岩					SC39-01
第135B95	45-2	石材	長: 0.0 幅: 4.5 厚: 7.5 重: 1.0	黒色織柄質安山岩					SC39-09
第135B96	40-2	小玉	長: 0.4 厚: 0.25	ガラス					SC39-0'1
第135B97		砾石	長: 0.3 厚: 3.6 重: 3.2 重: 0.05	粘板岩					SC39-01
第135B98	37-1	ヤリガネ シナ	長: (0.2) 6.0 幅: 1.00 厚: 0.3 重: 4.8						SC39-01.8
第135B99		セリガネ シナ	長: (0.1) 10 幅: 0.05 厚: 0.12 重: 18.0						SC39-01.4
第135B100	36-2	砾譜	長: 2.7 幅: (2.7) 厚: 0.18 重: 0.8						SC39-02
第135B101	40-3	砾石	長: 0.4 幅: 安山岩 厚: 2.9 重: (0.5) 90						SC39-01
第135B102	06	砂石	長: (0.1) 10 幅: 0.11 厚: 0.14 重: 0.41	安山岩					SC39-04
第135B104	06	石譜	長: (0.1) 10 幅: 0.10 厚: 0.14 重: 0.27	粘板岩					SC37-01





標高番号	測量番号	測量	位置 (度・分)	色調／石材	地質	構成	成形・調整方法	備考	標高番号
第130回15	35-2	投擲	長 : 4.7 厚 : 2.05 幅 : 2.15	に広い縦へ横色	かぐれ2mm以下の石英・長石・ 斜長石等をやく多く含む	良	ナフ・指オサエ	黒面。	3271-1'
第130回16	36-1	鉄鋼	長 : (6.18) 厚 : 0.95 幅 : 0.5						3271-11
第130回17	36-1	鉄鋼	長 : (4.33) 厚 : 1.44 幅 : 0.71						3271-11
第140回1	41-1	スカラップ バイバー	長 : 3.0 幅 : 4.9 厚 : 0.8 幅 : 14.18	黒色細粒質安山岩					3301-11
第140回2	45-1	叩石	長 : 3.5 厚 : 4.8 幅 : 3.5		安山岩				3301-11
第140回3		投擲	長 : 3.4 厚 : 2.0 幅 : 2.2	重 : 未 厚 : 2.2 幅 : 重 : 未	砂岩				3301-11
第140回6	46	砾石	長 : 8.8 厚 : 10.0 幅 : 4.5	重 : 未 厚 : 2.5 幅 : 15.0	砂岩				3324-11
第140回9		砾石	長 : 6.9 厚 : 5.6 幅 : 2.5	重 : 未 厚 : 2.5 幅 : 11.8	砂岩				3301-12
第150回1	45-2	剥片	長 : 3.1 厚 : 1.8 幅 : 3.5		黑色細粒質安山岩				3304-11
第150回2	44-1	石粉土	長 : (6.3) 厚 : (5.6) 幅 : 2.9	緑色片岩			未製品。		3309-11
第150回3		投擲	長 : 4.3 厚 : 3.4 幅 : 2.7	重 : 未 厚 : 2.7 幅 : 50.73	安山岩		4個セット。		3304-13
第150回4		投擲	長 : 4.2 厚 : 3.2 幅 : 1.7	重 : 未 厚 : 1.7 幅 : 27.44	安山岩				3304-13
第150回5		投擲	長 : 3.2 厚 : 2.5 幅 : 28.27		安山岩				3304-13
第150回6		投擲	長 : 3.8 厚 : 2.6 幅 : 18.41		安山岩				3304-13
第150回10		砾石	長 : 6.4 厚 : 7.1 厚 : 6.8 幅 : 34.58		石英斑岩				3304-14
第150回11	44-2	筋鉛垂 柔軟品	長 : 6.4 厚 : 7.1 厚 : 6.8 幅 : 34.58				未製品。		3308-14
第150回12	44-1	石粉土	長 : (3.4) 厚 : (2.9) 幅 : 0.5	長石質砂岩					3308-11
第150回13		砾石	長 : (6.6) 厚 : (5.0) 幅 : 1.4		砂岩				3308-13
第150回14	37-2	ヤリガ ンナ	長 : (3.6) 厚 : 1.17 幅 : 0.17						3308-11
第151回3	35-2	投擲	長 : 2.5	墨褐色	中空粗0.1~0.5mmの白色砂粒を 少數含む	良好	ナフ・指オサエ	手握ね、一握、被熱 のため化粧	3307-11





写真図版







図版1



三沢南側道2・3・4全景（合成写真、写真上方が北）





図版2



①三沢南嶺遺跡3　I区全景（写真上方が東）



②調査区及び周辺風景（南西から）



図版3



① 1号住居 遺物出土状況（南西から）



② 1・3号住居 完掘状況（南西から）



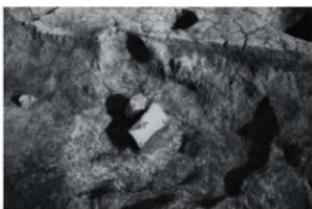
③ 2号住居屋内土坑 遺物出土状況（東から）



④ 4号住居 遺物出土状況（南から）



⑤ 4号住居 貼床検出状況（南から）



⑥ 5号住居 遺物出土状況（西から）



⑦ 5号住居 完掘状況（北から）



⑧ 6号住居 検出状況（北から）



図版4



① 7号住居 遺物出土状況（南から）



② 7号住居 完掘状況（南から）



③ 8号住居 完掘状況（東から）



④ 9号住居 貼床検出状況（南から）



⑤ 10号住居 貼床検出状況（北西から）



⑥ 11号住居 完掘状況（南から）



⑦ 12号住居屋内土坑 遺物出土状況（南から）



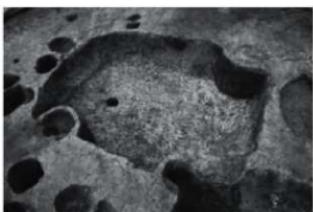
⑧ 12号住居 完掘状況（南東から）



図版5



①13号住居 遺物出土・完掘状況（北から）



②1号土坑 完掘状況（東から）



③2号土坑 完掘状況（北から）



④3号土坑 完掘状況（南から）



⑤4号土坑 完掘状況（北から）



⑥5号土坑 遺物出土・完掘状況（南西から）



図版6



①6号土坑 完掘状況（南から）



②7号土坑 完掘状況（南から）



③8号住居 完掘状況（南東から）



④9号土坑 完掘状況（南東から）



⑤三沢南崎道路3 II区全景（写真上方が東）



図版7



①15号住居 遺物出土・完掘状況（南から）



②16号住居 土層・完掘状況（南から）



③II区17号住居 完掘状況（南東から）



④III区17号住居 貼床棟出状況（北東から）



⑤II区20号住居 完掘状況（南から）



⑥III区20号住居 貼床棟出状況（北西から）



⑦II区14号土坑 完掘状況（北から）



⑧III区14号土坑 完掘状況（南から）



図版8



①23号住居 遺物出土状況（北西から）



②25号住居 遺物出土状況（南西から）



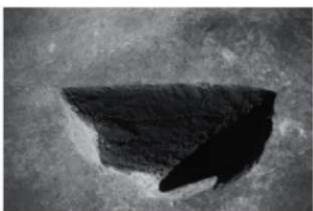
③14・23・25号住居 完掘状況（西から）



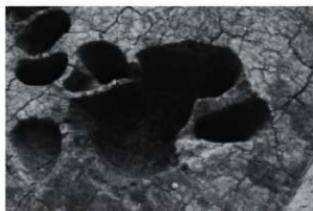
④24号住居 完掘状況（南西から）



⑤26号住居 完掘状況（南東から）



⑥10号土坑 土層断面（南から）



⑦11号土坑 完掘状況（北東から）



⑧II区調査風景（東から）



図版9



三沢側面調査3 III区全景 (写真上方が北)





図版10



①27号住居 完掘状況（北西から）



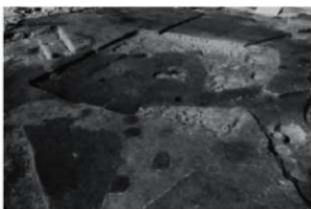
②19号住居 完掘状況（南から）



③28号住居 ベッド状遺構検出状況（南から）



④28号住居屋内土坑 遺物出土状況（北東から）



⑤28号住居 貼床検出状況（南東から）



⑥29号住居 完掘状況（北西から）



⑦30号住居 遺物出土状況（南から）



図版11



①30号住居 焼土・炭化物検出状況（南から）



②30号住居 完掘状況（南から）



③31号住居 貼床検出状況（東から）



④32号住居内土坑 遺物出土状況（北から）



⑤32号住居 貼床検出状況（東から）



⑥33号住居 完掘状況（西から）



⑦34号住居 貼床検出状況（北西から）



⑧35号住居 遺物出土状況（南東から）



図版12



①35号住居 貼床棟出状況（北から）



②36号住居 完壁状況（東から）



③37号住居 貼床棟出状況（南東から）



④38号住居 貼床棟出状況（北西から）



⑤39号住居 貼床棟出状況（南西から）



⑥40号住居 貼床棟出状況（東から）



⑦41号住居内ピット 遺物出土状況（南から）



⑧41号住居 貼床棟出状況（南から）



図版13



①42号住居 貼床検出状況（北から）



②43号住居 遺物出土状況（西から）



③43号住居 完掘状況（北西から）



④44号住居 遺物出土状況（南西から）



⑤44号住居 貼床検出状況（南から）



⑥45号住居 遺物出土状況（南西から）



⑦45号住居 貼床検出状況（北から）



⑧46号住居 遺物出土状況（1）（西から）





図版14



①46号住居 遺物出土状況（2）（東から）



②46号住居 完掘状況（東から）



③47号住居 完掘状況（東から）



④48号住居 遺物出土状況（西から）



⑤48号住居 貼床検出状況（東から）



⑥49号住居 完掘状況（北西から）



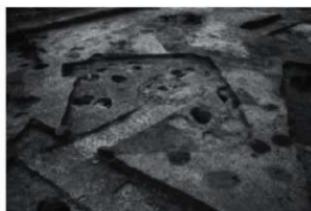
⑦50号住居内ピット 遺物出土状況（南から）



⑧50号住居 貼床検出状況（南から）



図版15



①51号住居 貼床棲出状況（北東から）



②52号住居 貼床棲出状況（北から）



③53号住居 貼床棲出状況（東から）



④54号住居 貼床棲出状況（東から）



⑤55号住居 貼床棲出状況（南から）



⑥56号住居 貼床棲出状況（北から）



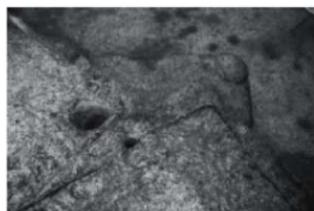
⑦57号住居 遺物出土状況（西から）



⑧57号住居 完成状況（西から）



図版16



①58号住居 完掘状況（南東から）



②59号住居 完掘状況（南から）



③60号住居 完掘状況（北から）



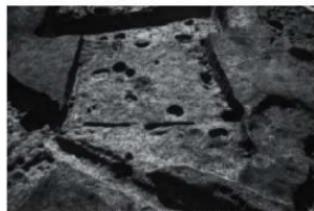
④61号住居 貼床検出状況（東から）



⑤62号住居 貼床検出状況（西から）



⑥63号住居 完掘状況（西から）



⑦64号住居 完掘状況（北から）



⑧65号住居 完掘状況（北西から）



図版17



①66号住居 完掘状況（北から）



②67号住居 完掘状況（北西から）



③68号住居 贼床棟出状況（北西から）



④69号住居 贊床棟出状況（北から）



⑤70号住居 完掘状況（北から）



⑥71号住居 完掘状況（北から）



⑦72号住居 完掘状況（南から）



⑧73号住居 完掘状況（北から）



図版18



①74号住居 遺物出土状況（東から）



②74号住居 完掘状況（北から）



③75号住居 完掘状況（北東から）



④76号住居 完掘状況（北から）



⑤77号住居 完掘状況（北から）



⑥78号住居 完掘状況（南から）



⑦16号土坑 完掘状況（西から）



⑧17号土坑 完掘状況（南西から）



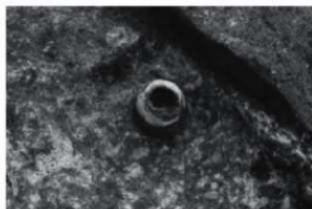
図版19



①18号土坑 完掘状況（南から）



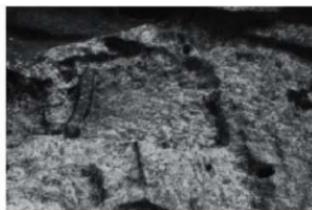
②19号土坑 完掘状況（西から）



③20号土坑 遺物出土状況（西から）



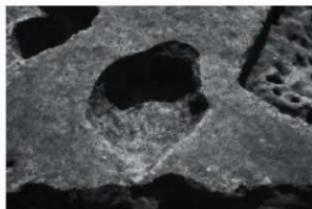
④20号土坑 完掘状況（北から）



⑤21号土坑 完掘状況（北から）



⑥22号土坑 完掘状況（南から）



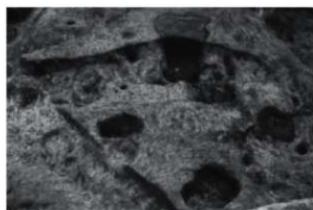
⑦23号土坑 完掘状況（北東から）



⑧24号土坑 完掘状況（東から）



図版20



①25号土坑 完掘状況（西から）



②26号土坑 完掘状況（西から）



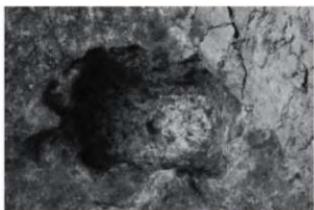
③27号土坑 完掘状況（南東から）



④28号土坑 完掘状況（南から）



⑤29号土坑 完掘状況（南から）



⑥30号土坑 完掘状況（東から）



⑦31号土坑 完掘状況（東から）



⑧32号土坑 完掘状況（北から）



図版21



①33号土坑 完掘状況（北から）



②15号土坑 完掘状況（北西から）

③I区4号溝 土層・完掘状況（南東から）



④8号溝 完掘状況（南西から）



⑤10号溝 完掘状況（南西から）



⑥11号溝 完掘状況（北西から）



⑦12号溝 完掘状況（北から）



図版22



①9号溝 土層断面（1）（南から）



②9号溝 土層断面（2）（南から）



③9号溝 土層断面（3）（南西から）



④9号溝 土層断面（4）（南西から）



⑤9号溝 完掘状況（北東から）



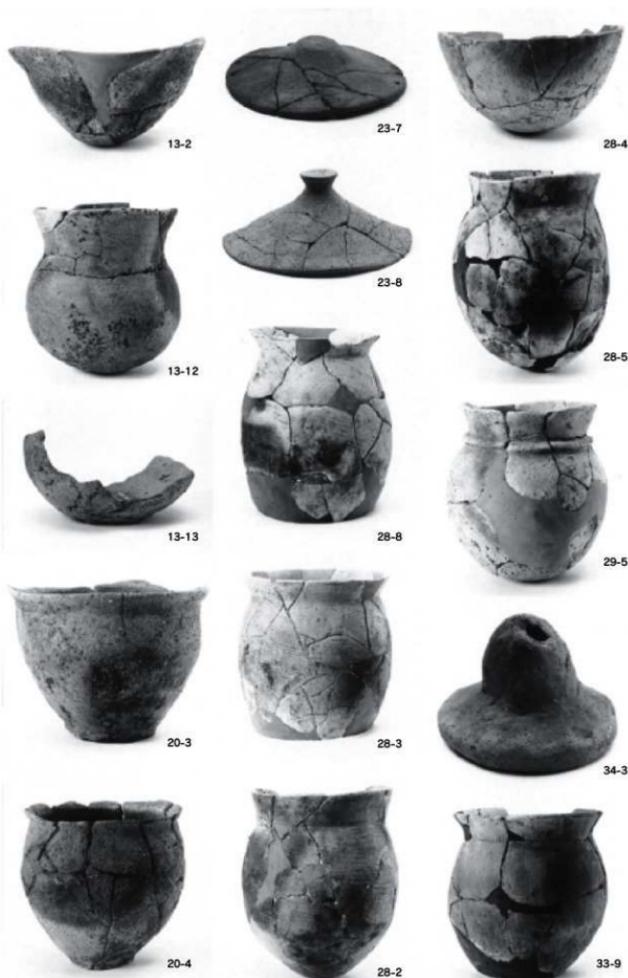
⑥1号土壙墓 土層断面（南から）



⑦1号土壙墓 完掘状況（南から）



図版23

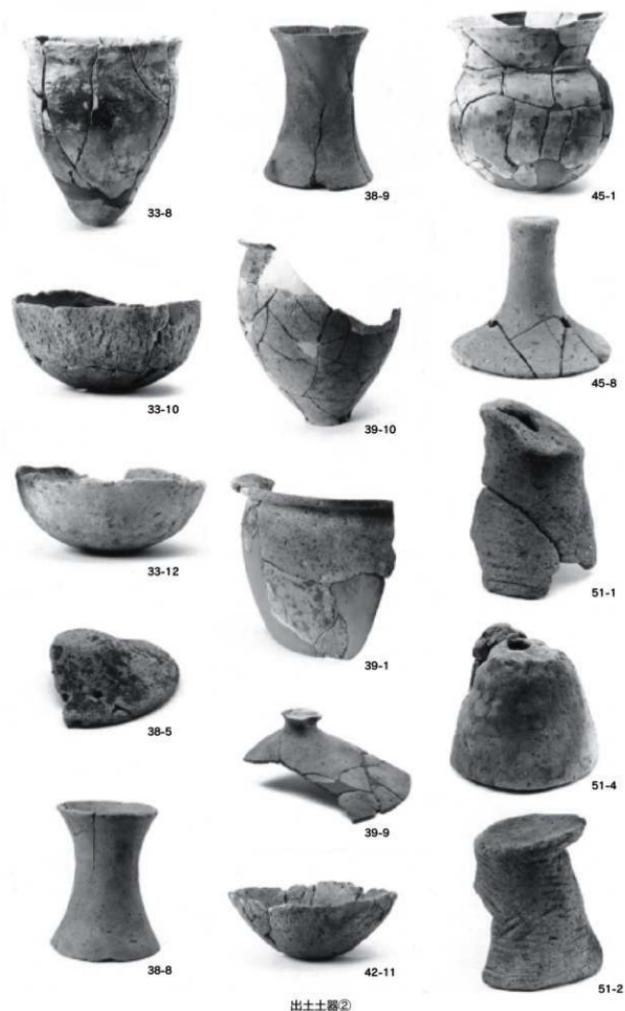


出土土器①





図版24

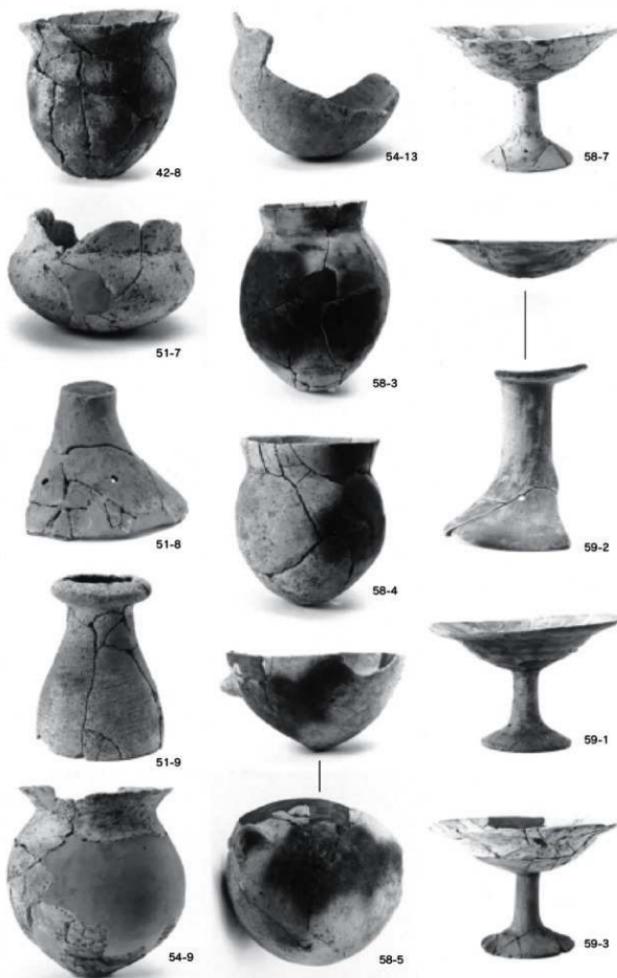


出土土器②





図版25

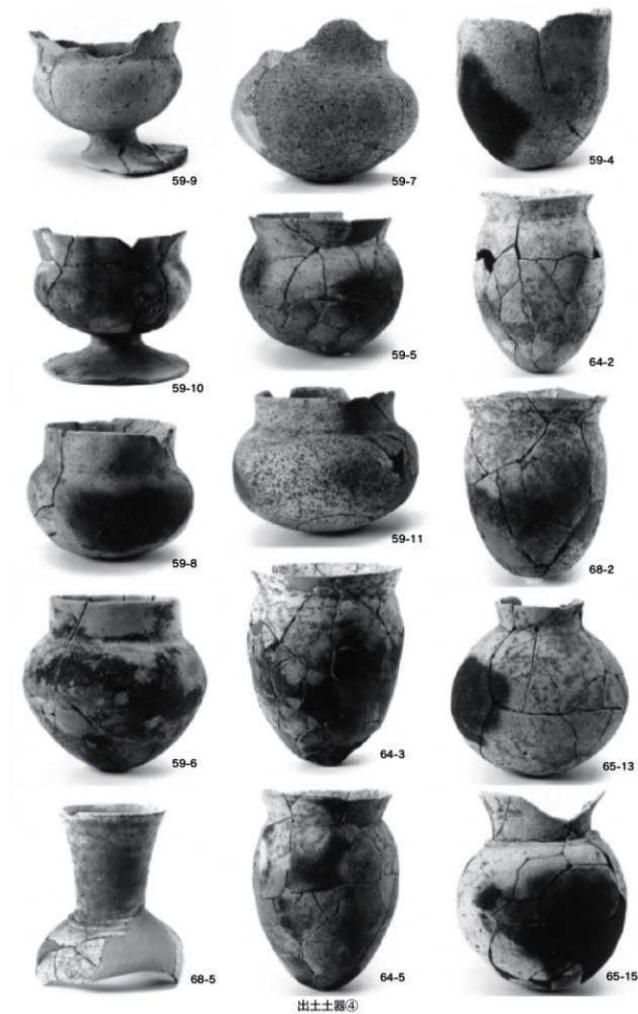


出土土器③



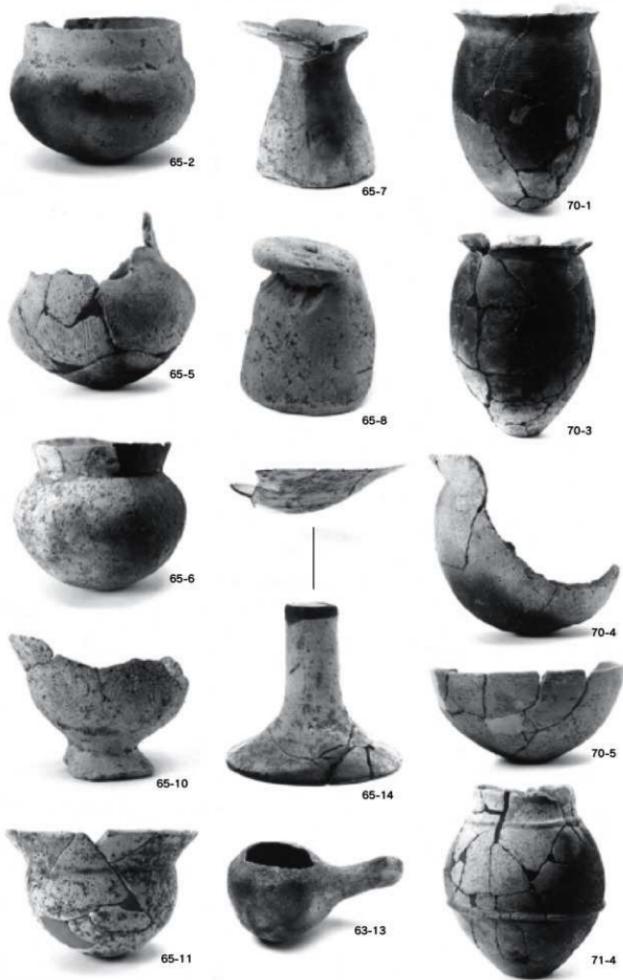


図版26





図版27

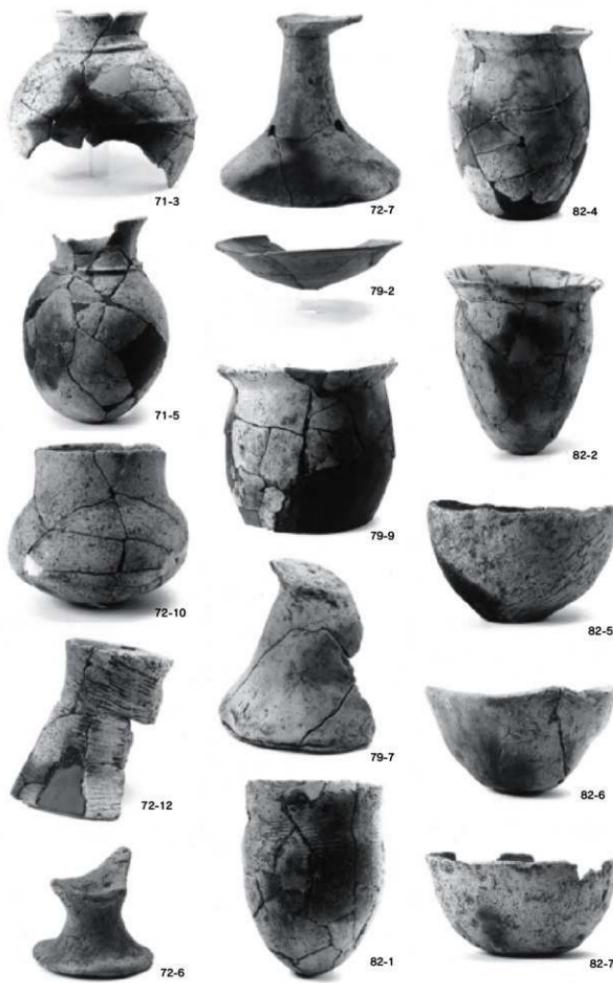


出土土器⑤





図版28

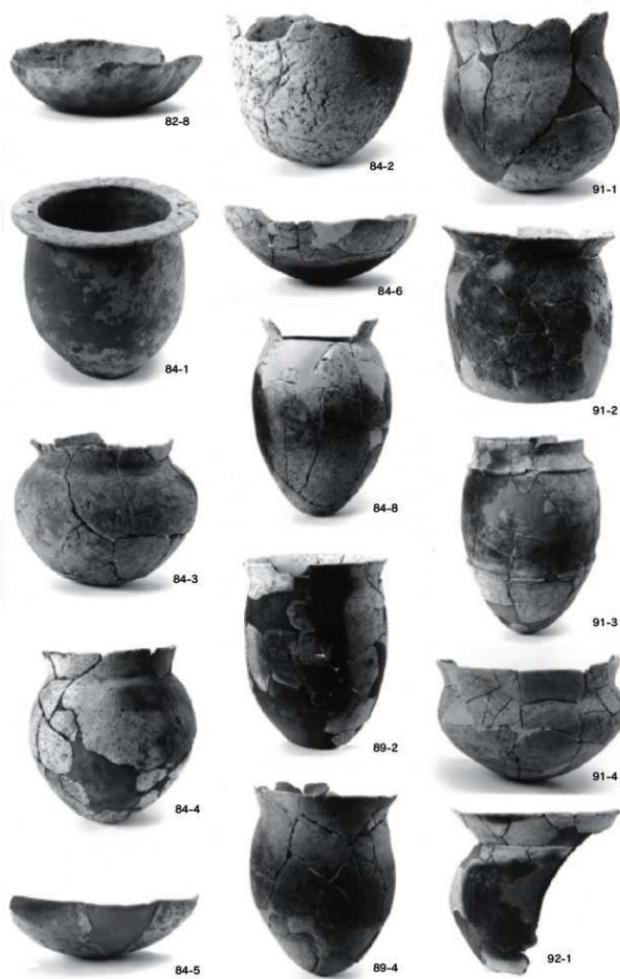


出土土器⑥





図版29



出土土器⑦





図版30

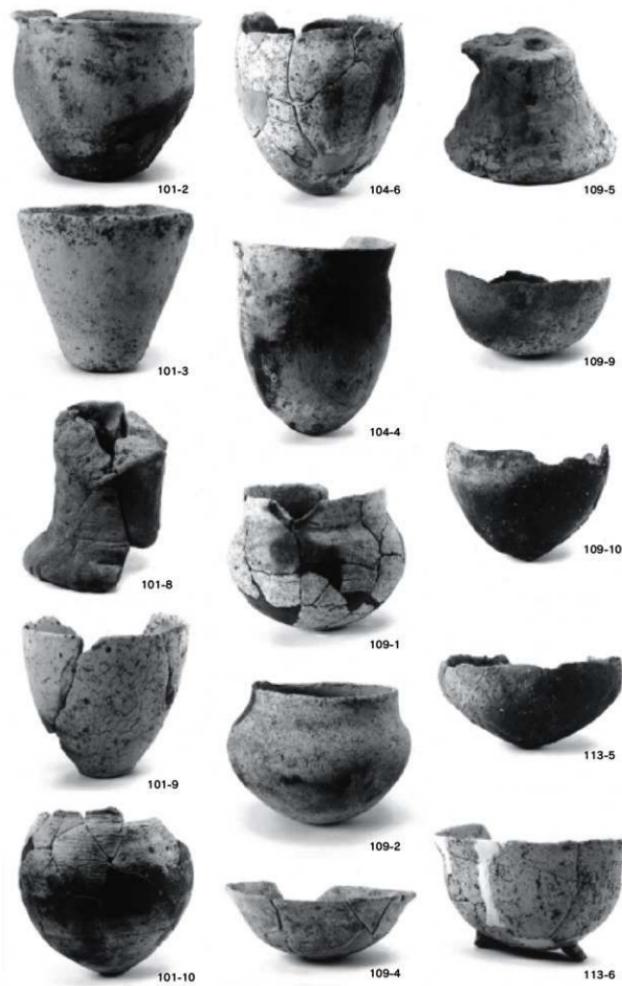


出土土器⑧





図版31

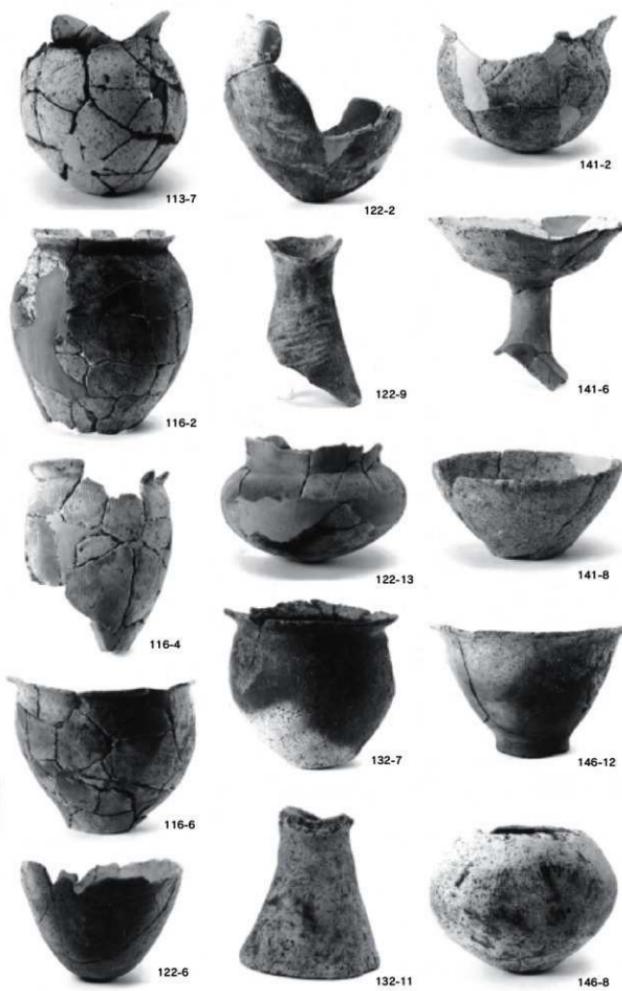


出土土器⑨





図版32

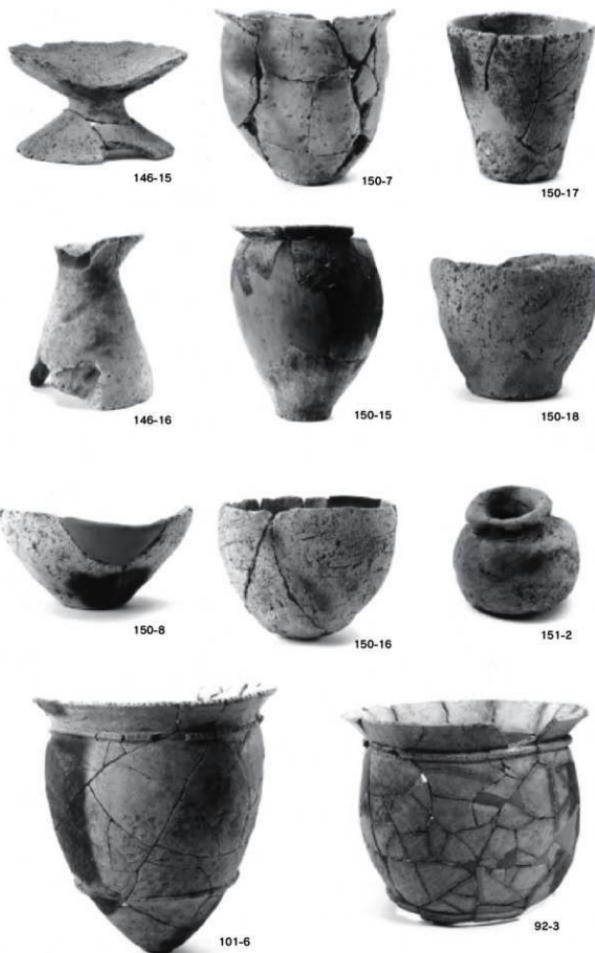


出土土器①





図版33

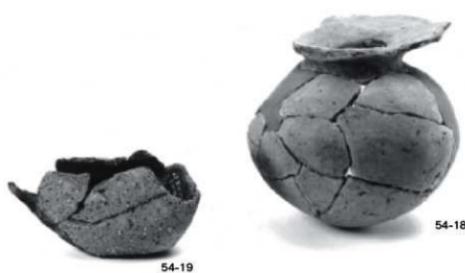


出土土器①





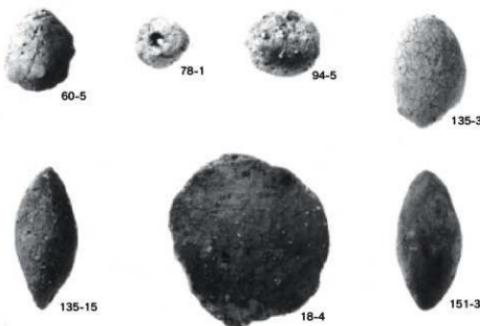
図版35



54-19

54-18

①出土土器



60-5

78-1

94-5

135-3

135-15

18-4

151-3

②出土土製品

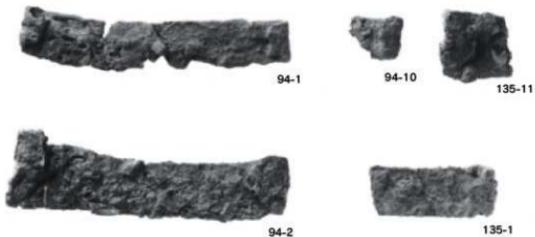




図版36



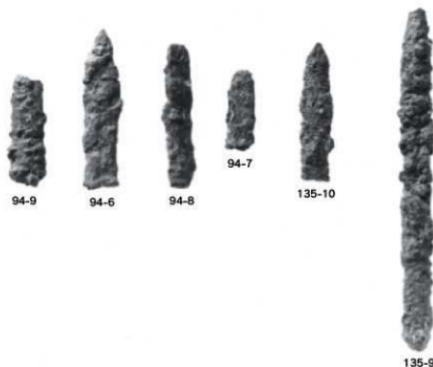
①出土鉄器（鉄鏃）



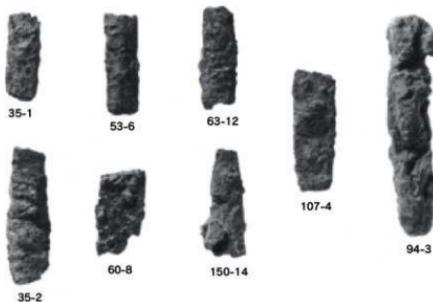
②出土鉄器（摘鏃）



図版37



①出土鉄器（ヤリガンナ1）



②出土鉄器（ヤリガンナ2）



図版38



①出土鉄器



②出土石器（砥石1）





図版39



60-4



63-4



87-6



117-2

①出土石器（砥石2）



34-8



53-3



73-1

②出土石器（砥石3）

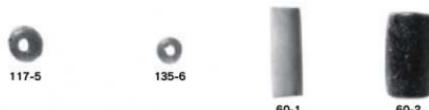




図版40



①出土石器（砥石4）



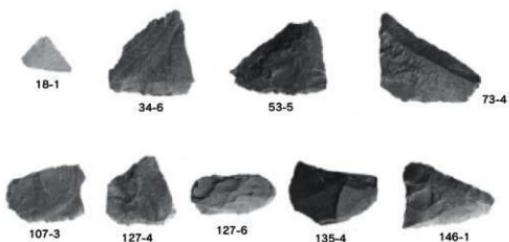
②出土玉類



③出土石器（敲石・磨石）



図版41



①出土石器（スクレイパー）



②出土石器（打製）

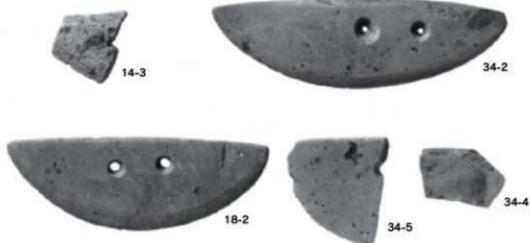




図版42



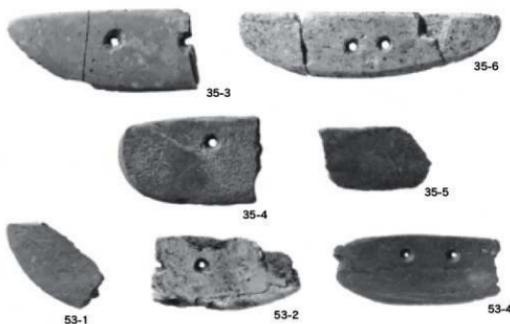
①出土石器（石頭）



②出土石器（石磨丁1）



図版43



①出土石器 (石唐丁2)

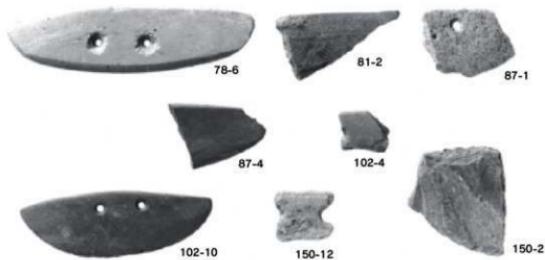


②出土石器 (石唐丁3)

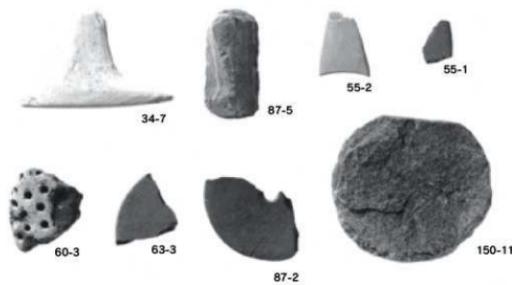




図版44



①出土石器（石磨丁4）



②出土石器・土製品

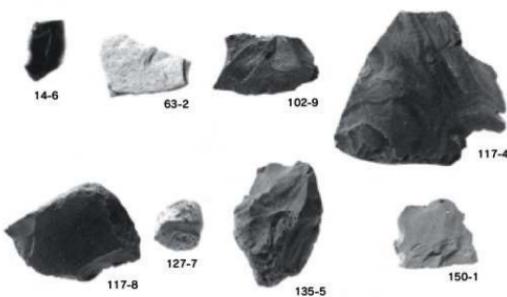




図版45



①出土石器（石斧等）

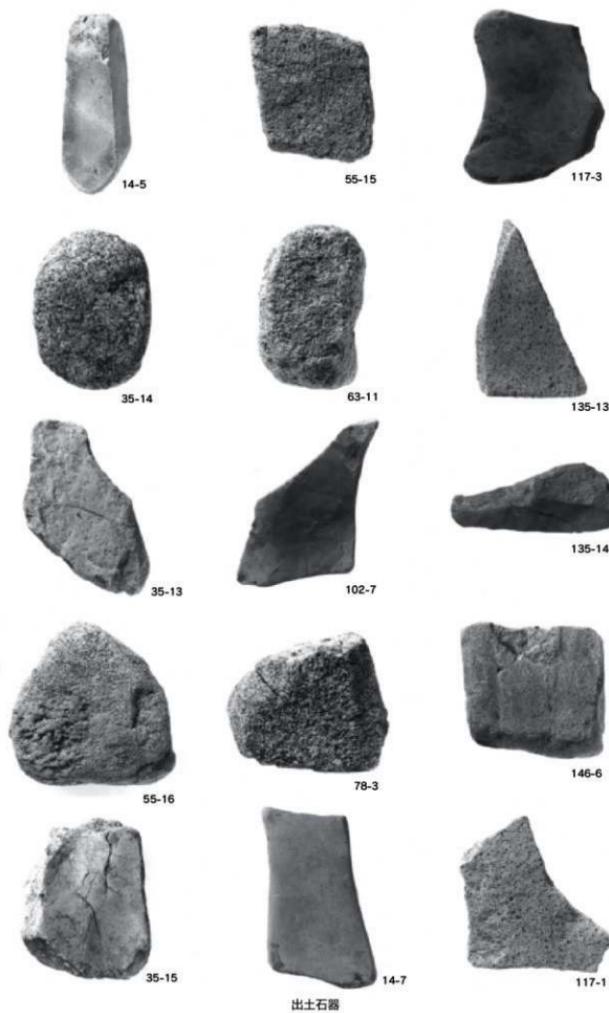


②出土石材





図版46





報告書抄録

ふりがな	みつさわみなみざきいせき						
書名	三沢南崎遺跡3						
副書名	小郡市三沢字南崎所在遺跡の調査報告						
巻次							
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第242集						
編著者名	上田 恵						
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財センター						
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 TEL. 0942-75-7555						
発行年月日	平成21(2009)年3月13日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三沢南崎 遺跡3	福岡県 小郡市 三沢字南崎	40216	33° 25' 01"	130° 33' 48"	20070705 ~ 20080215	1780 m ²	県道 本郷基山線 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
三沢南崎 遺跡3	集落	弥生時代前期 弥生時代中期 弥生時代後期 古墳時代前期	竪穴住居・溝 竪穴住居・土坑 竪穴住居・土坑 竪穴住居・土坑	土器・石器類 土器・石器類 土器・石器・鉄器類 土師器・鉄器類	鳥形土製品出土		



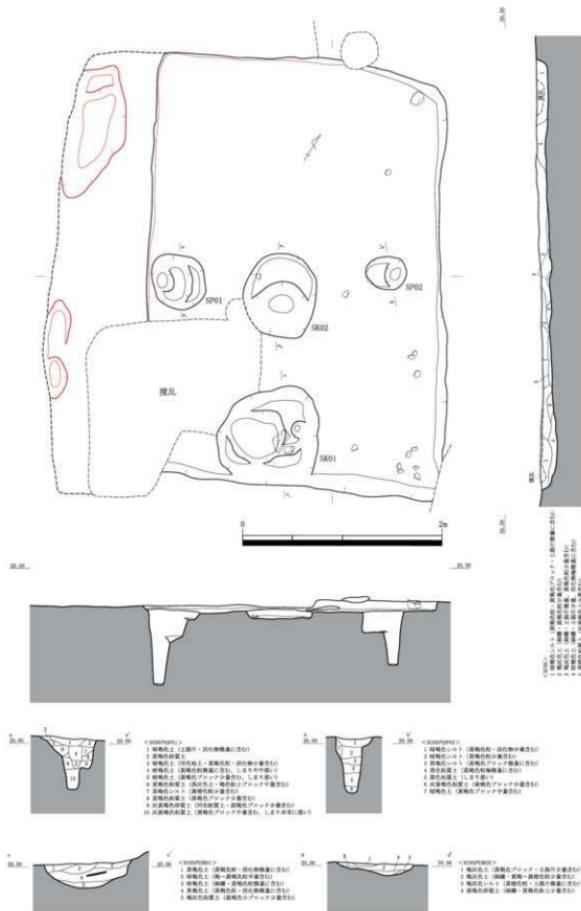
三沢南崎遺跡 3

—小郡市三沢字南崎所在遺跡の調査—

小郡市文化財調査報告書第 242 集

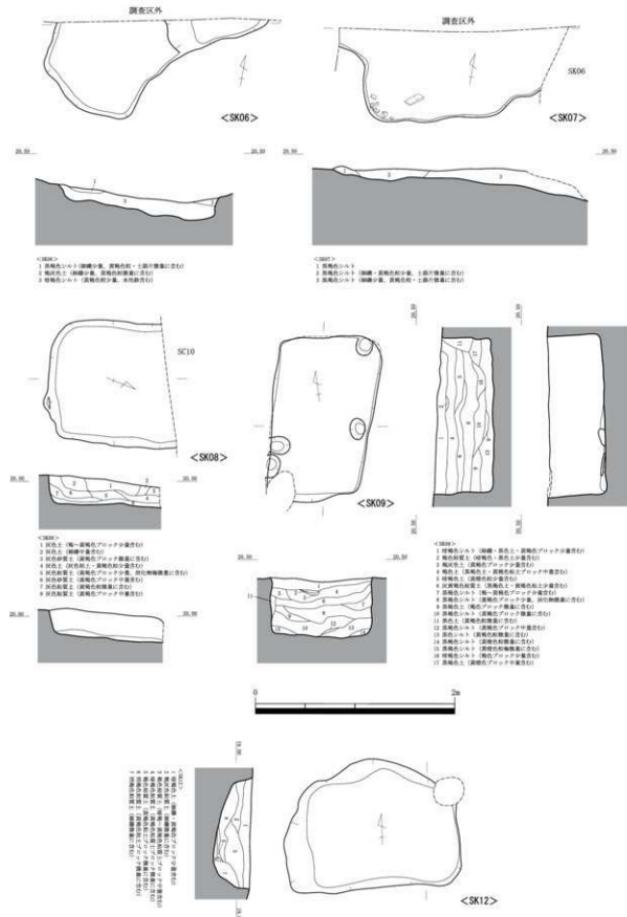
平成 21 年 3 月 13 日

発 行 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 255-1
印 刷 株式会社 四ヶ所
福岡県朝倉市馬田 336

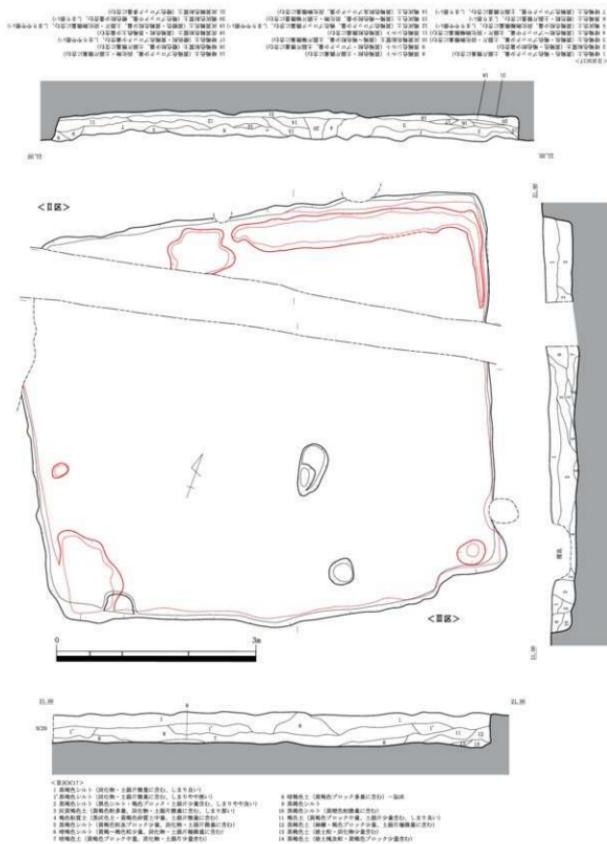


第10図 5号住居 (S=1/40)



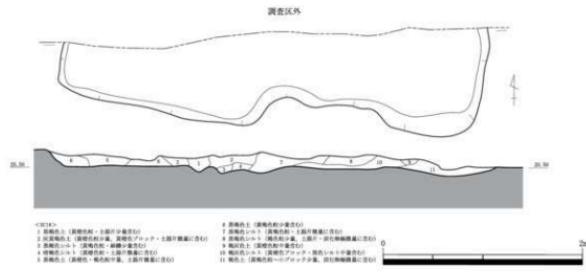


第25図 6~9・12号土坑 (S=1/40)

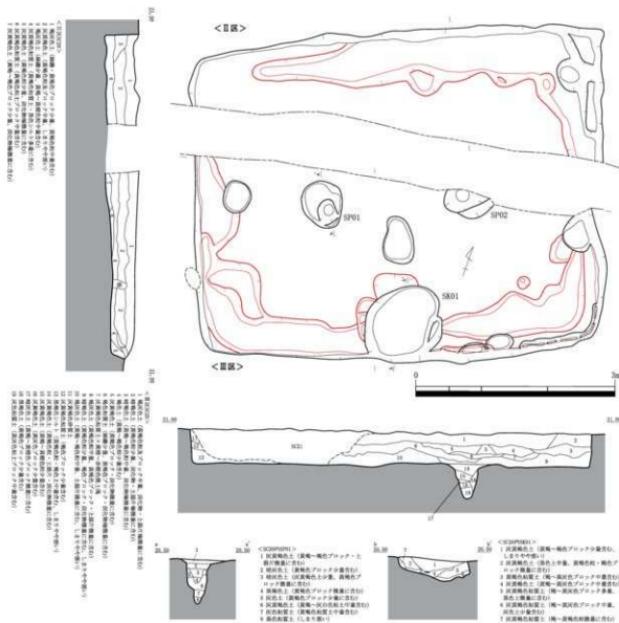


第32図 17号住居 (S=1/60)

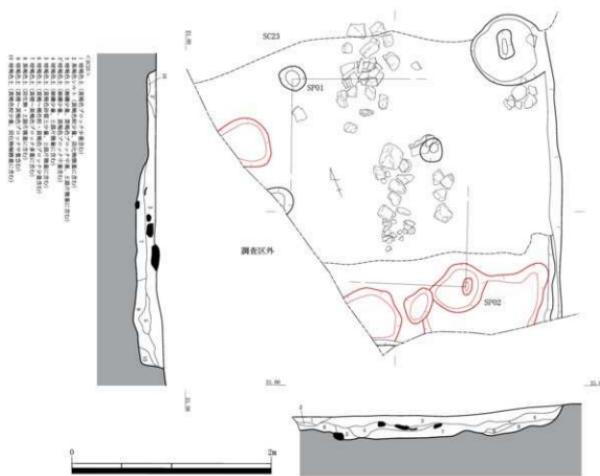




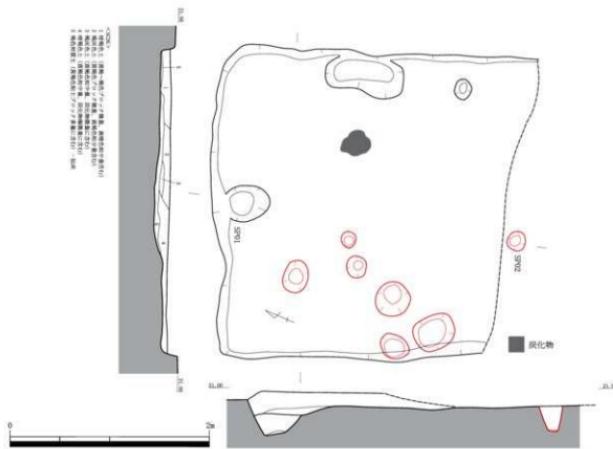
第36図 18号住居 (S=1/40)



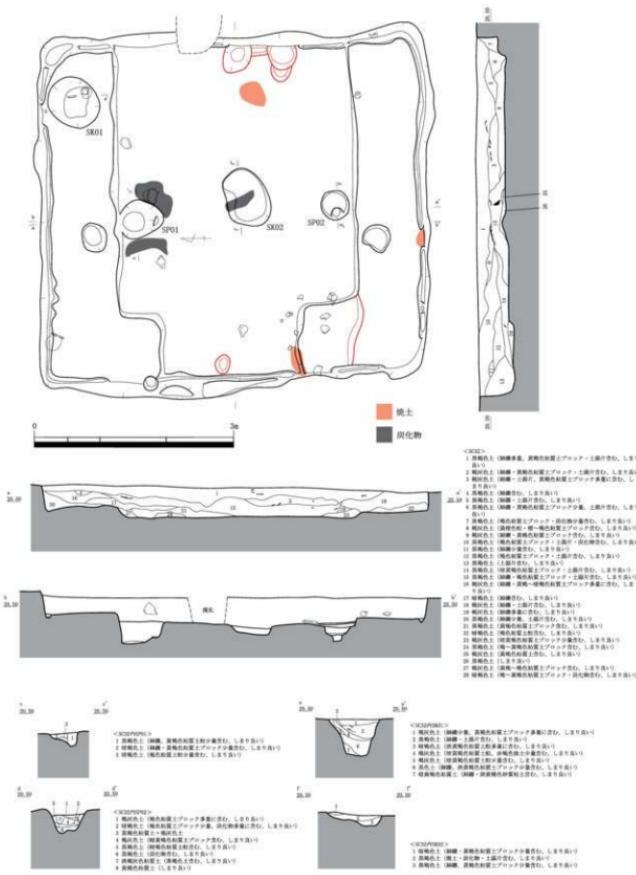
第37図 20号住居 (S=1/60)



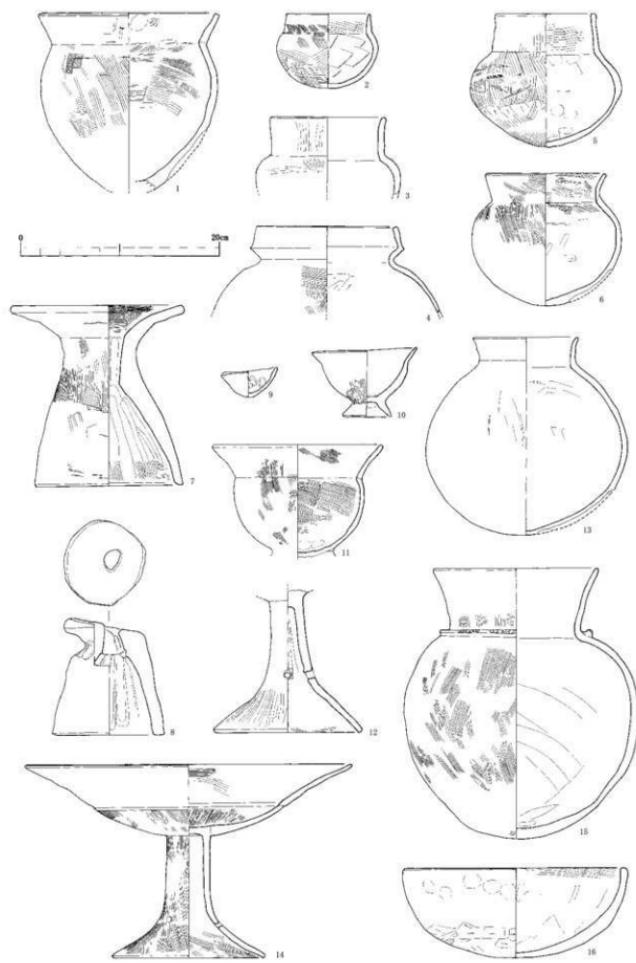
第43図 25号住居 (S=1/40)



第44図 26号住居 (S=1/40)



第62図 32号住居 (S-1/60)



第65図 32号住居出土土器② (S=1/4)

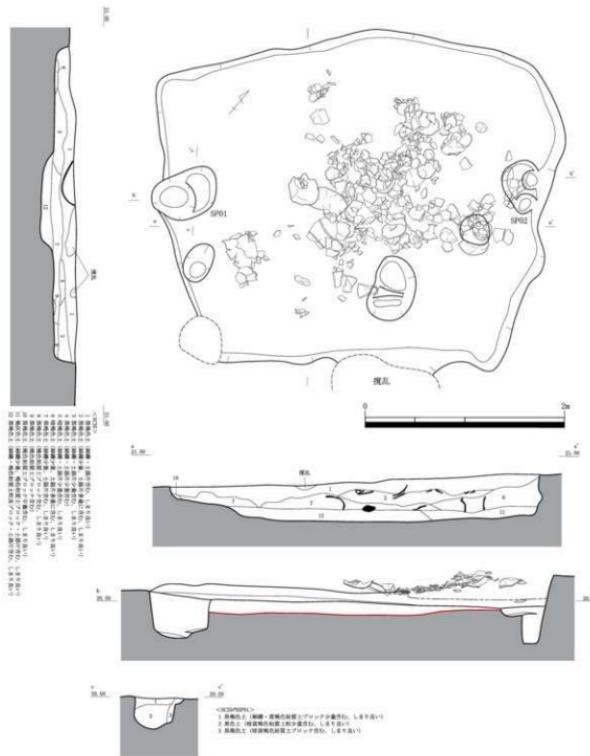


出土遺物 (第68図/図版II)

埋土から少量の土器・石器が出土しているが、小片が多く原型は留めない。胴部が円形に張り、とがった底部を持つ古墳時代初頭の盤、脚部に穿孔し受部が小型の器台等、外来系要素を持つ土師器類が見られる。その他、図示した砥石、石斧片、投擲等、微量の石器・鉄器類が出土している。

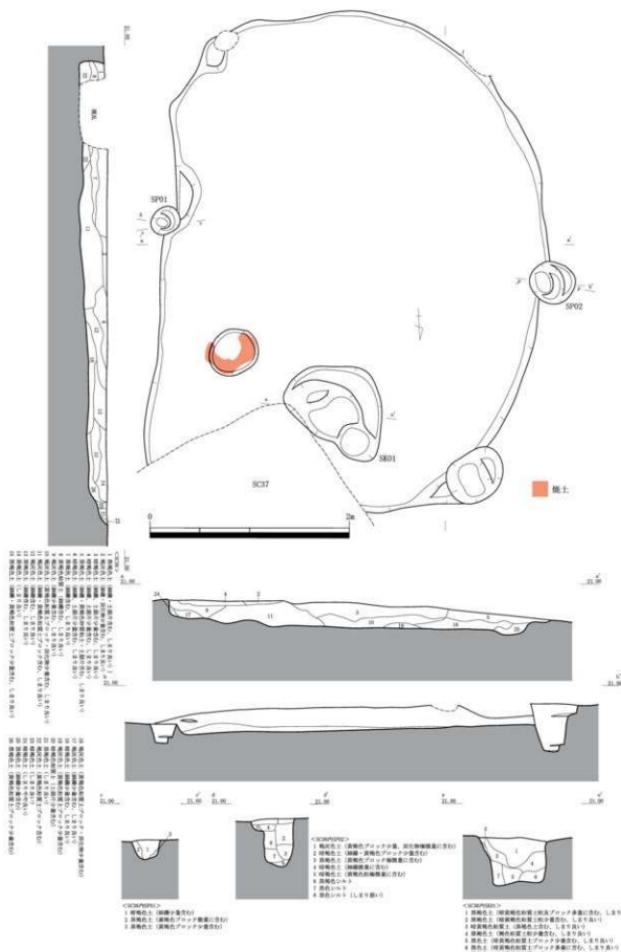
35号住居 (第69図/図版II)

調査区中央南東寄りに位置し、50・60・65号住居、18号土坑を切る。主軸は北東一南西方向で、長軸 $4.0 \times$ 短軸 $3.15m$ 、検出面からの深さは $0.31m$ を測る。平面プランはひずみのある長方形で、支柱は掘り込みの際にある2本であると判断した、検出段階から極めて多量の遺物を確認している。主柱以外の掘り

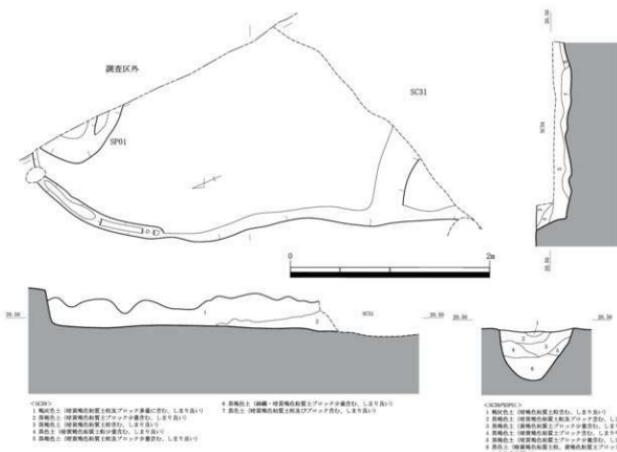


第69図 35号住居 ($S=1/40$)

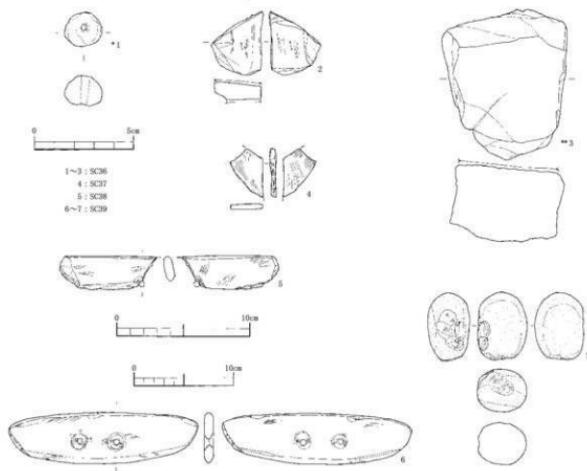




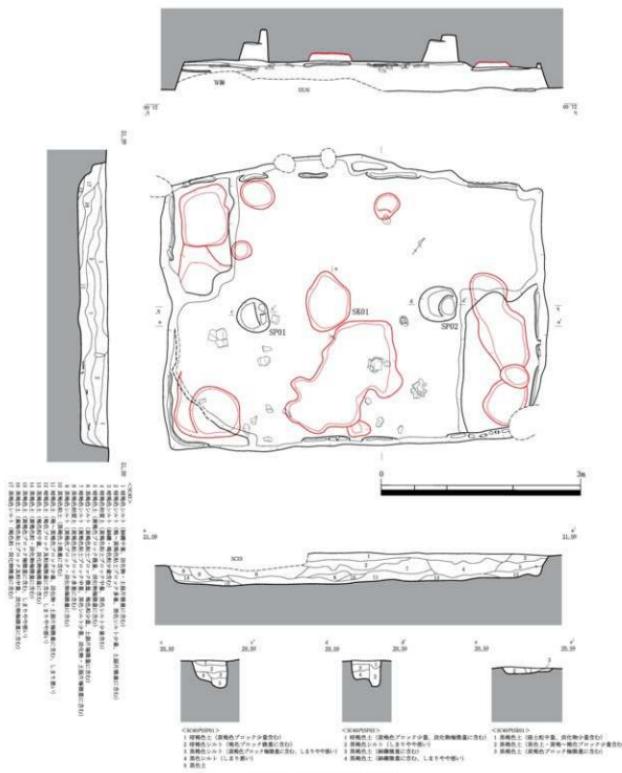
第74図 36号住居 (S=1/40)



第77図 39号住居 (S=1/40)



第78図 36・37・38・39号住居出土土製品・石器 (S=1/3, *付はS=1/2, **付はS=1/4)



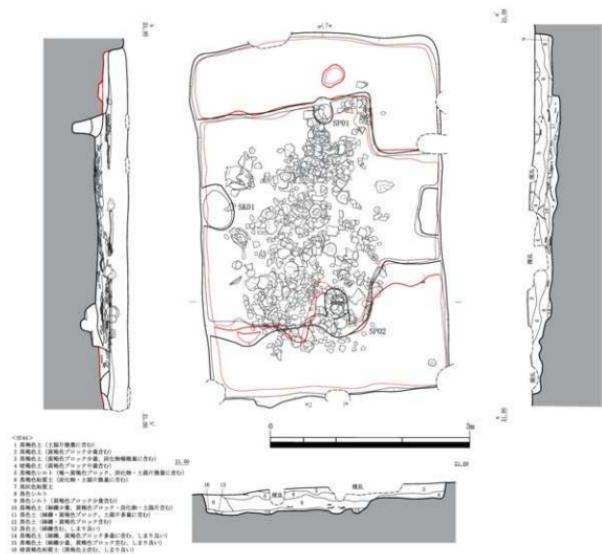
第80図 40号住居 (S=1/60)

出土遺物 (第81・82図/国版28・29・40・41・44)

遺構図に示したように、床面を中心に埋土からまとまった量の遺物が出土している。但し、原型を留めるものはほぼ床面直上で出土したものに限定される。甕類は口縁部が直立し、体部外面に平行タタキが残るものと、口縁部がくの字形に屈曲し制部が長削化してハケ調整のみを施すものが混在するが、後者が主体となっている。同時に底部が丸底の小型甕も見られることから、この住居の時期が転換期になると考えられる。小型の鉢類は外面に平行タタキを残す薄手のものと、工具ナデあるいは指ナデの残る肉厚のものとが混在している。

石器類は図示した石庖丁、楔状製品、砥石の他、多数の投弾が出土している。また用途不明であるが、鉄製品が1点確認されている。





第88図 44号住居 (S=1/60)

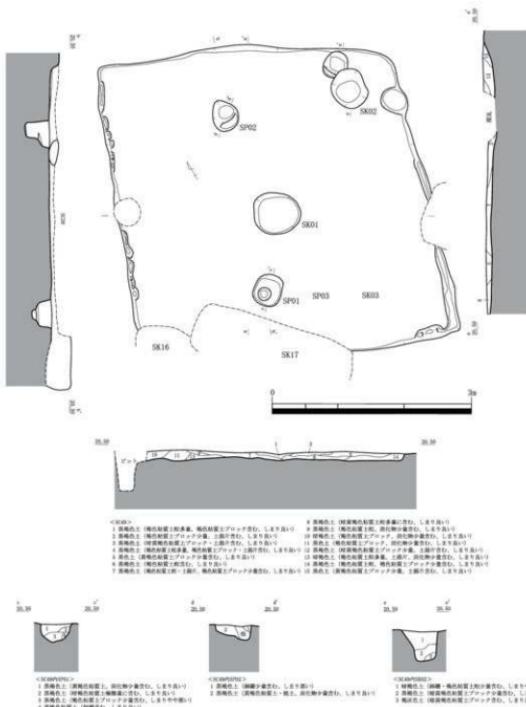
残す。

石器類は図示した石庖丁、石剣の刃部、砥石の他、花崗岩の台石が出土している。鉄製品は認められない。

44号住居 (第88図/図版13)

調査区南東側に位置し、59号住居を切る。上面は多数の搅乱で破壊されていたが、遺構の底面にまでは及んでいなかった。東西を主軸とし、2柱の構造を探る。平面プランは長方形を呈し、長軸5.4×短軸3.6m、横出面からの深さ最大0.35mを測る。東西・北辺に幅0.9~1.2m、高さ0.15mのベッド状遺構を持つ。ベッド状遺構は段塗りのうち、厚く黄褐色粘質土を貼り付けており、堅固な造りとなっている。北辺中央部のみベッド状遺構が途切れしており、この部分に黄褐色粘質土を盛り上げたテラス状の段差が認められることから、この部分を出入口として使用していたと考えられる。柱間に土坑は認められない。南辺中央に浅い不整円形の掘り込みがあり、この部分が印跡に相当すると考えられる。柱間に土坑は認められない。西側のピットを除き、貼床下に目立った掘り込み等は認められない。





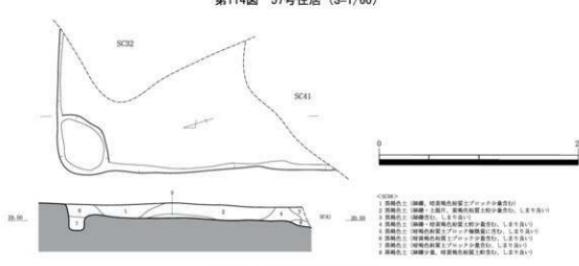
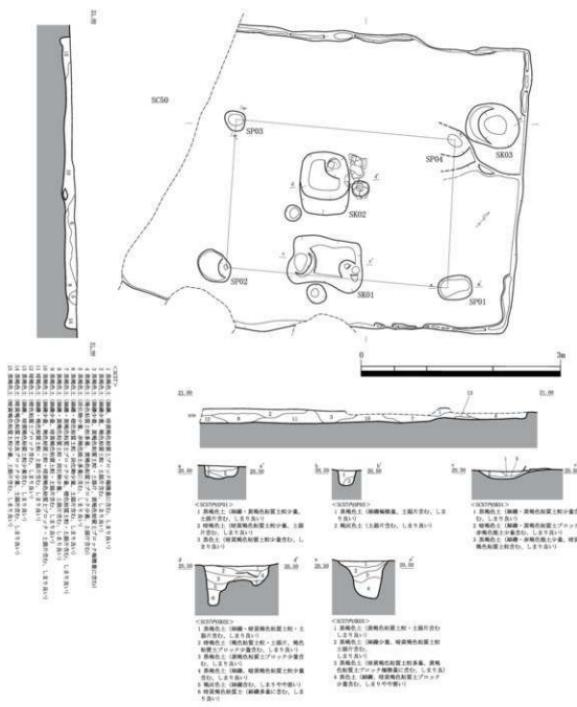
第100図 49号住居 (S=1/60)

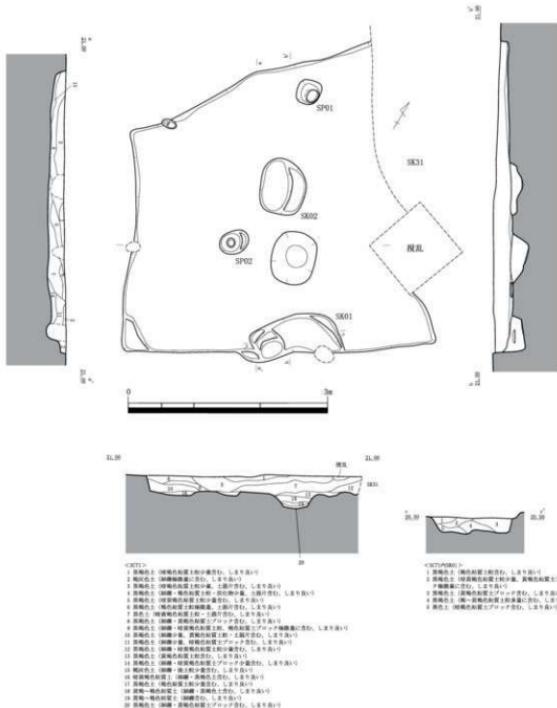
50号住居 (第103図/版図14)

調査区中央部南東寄りに位置し、35号住居に切られ、51・57・60・65号住居を切る。主軸は北東-南西方方向で、2柱の構造を探る。長軸6.9×短軸5.2m、検出面からの深さは最大0.35mを測る。柱穴はSP02とSP01に切られた下肩ピットを想定している。いずれも掘り込みは深く、しっかりととした構造である。東の柱穴周辺には小型のピットを3基検出しているが、柱の補助的役割を果たしていた可能性がある。

南辺を除く3面に幅0.8m、高さ0.2mのベッド状造構をめぐらせる。このベッド状造構は、北辺の全体と、西辺の北半分は段堀りで地山をこにして、西辺の南半分と東辺は黄褐色粘土質土を厚く積み重ねて構築している。粘土質積み重ねの体裁を探る部分は、下層に他造構が存在するため、やむなくその方法を採用したと思われる。南辺の一部は35号住居に削平されているが、ここにベッド状造構は延長しない。

ベッド状造構の上面を含め、全体に黄褐色粘土質土で貼床を施している。貼床下は南辺に湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが認められる他、北東には不整形の土坑状の掘り込みが、北西にはピット状の



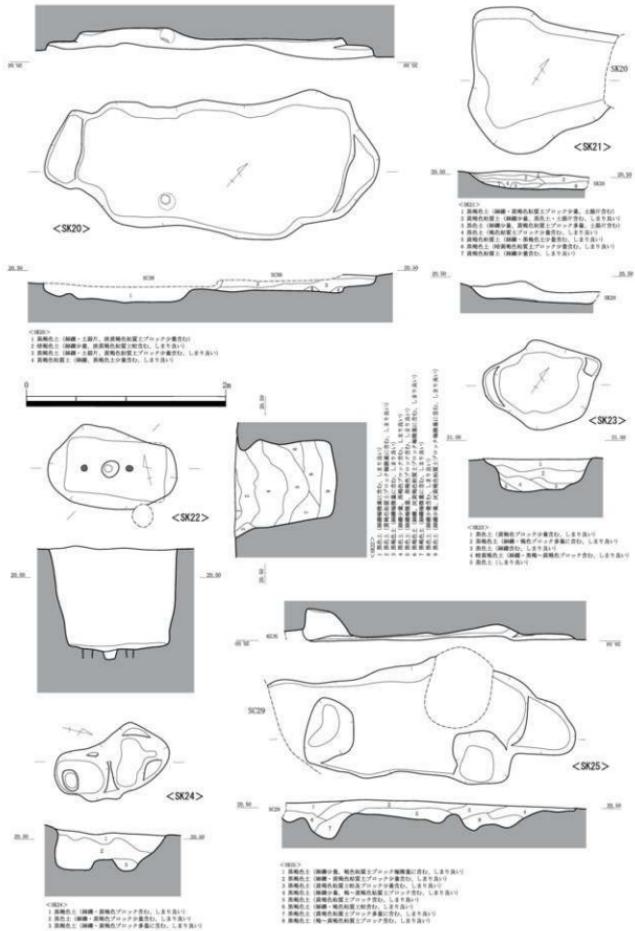


第134図 71号住居 (S=1/60)

ピットを伴う不整形の土坑が確認されている。位置と形状から、SK02が幼跡であったと思われる。その他、遺構に伴うと見られる施設は検出されていない。また、貼床状の痕跡も認められなかった。

出土遺物 (第135・138図/図版35・36・46)

遺物は細片が極少量出土するのみである。時期を示す土器を2点のみ図示している。脚部に穿孔を施す、薄手の器台。弥生時代後期の所産。その他、石鎌の半加工品、鐵鎌等が出土している。石器・鐵製品の出土はわずかだが、ほぼ同量である。



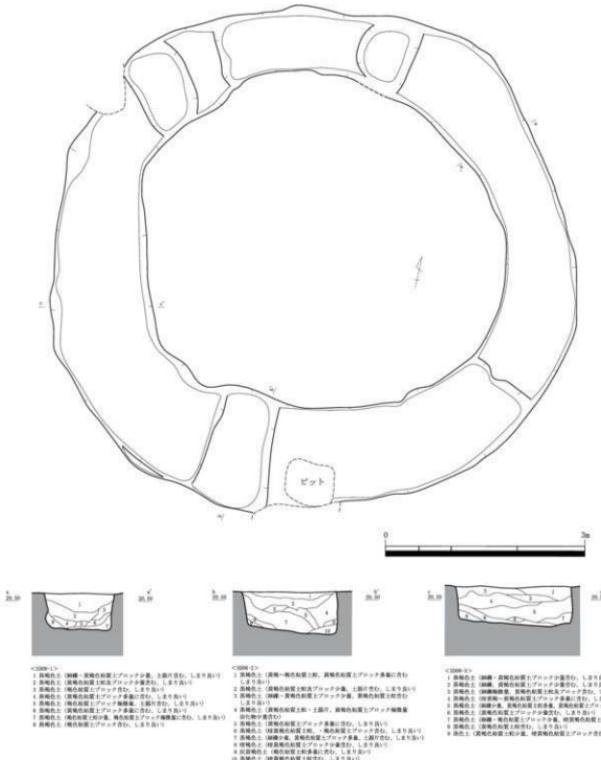
第144図 20~25号土坑 (S=1/40)



7号溝 (第48図/図版9)

調査区北東寄りに位置し、37・46・52・55号住居を切る。東西方向に流れ、東側は後世の造成により上部が削平されて消滅する。西側は擾乱に接するが、それ以上は連続しない。残存長3.6m、幅0.2m、深さ最大0.15mを測る。蛇行せず直線的に伸び、底面も平坦に整えられていることから、区画溝の一種と思われる。

埋土から微量の遺物が出土しているが、いずれも細片で時期を示すものではない。



第148図 8号溝 (S=1/60)



図版34



①出土土器（ミニチュア1）



②出土土器（ミニチュア2）